コロニア芸能史　1



コロニア芸能史編纂委員会

（1）第一部から　第八部まで収録

コロニア芸能史・目次

コロニア芸能史刊行によせて……小野　純男
芸能史の発刊を祝す……尾身　倍一
コロニア芸能史の刊行を祝う……竹中　正
発刊のことば　……水本　毅

第1部　民　謡

コロニアの日本民謡……松崎　松蔵　14
伯国日本民謡歴……猪狩　宗鳳　20
民謡は〃心のふるさと〃……佐々木重夫　51

第2部　演　劇

移民劇の真髄・伯光団の誕生……醍醐麻沙夫　53
演劇に〃半生〃捧げ悔なし……嵐　正太郎　85
歌舞伎芝居に生きた群像……山口　春海　89
芝居とシネマ屋に終始……岡村　正　123
戦後初の芝居？……広田　義秋　143
市川鍛吉郎を悼む……松家　英夫　173
名作「夕鶴」などを公演……八田　大八　178
「旅芝居」もまた楽し……小泉　照男　182
　　183
　　195

丹下セツ子劇団……田村　徹　２０６
戦後初の芸能祭……押田真佐男　２０８
慈善事業に協力を……及川也周平　２０９
ヴァルゼン・グランデ演劇団……及川也周平
迫真！？「松の廊下」……　２２４

第３部　日本舞踊　２２８

鍬を取った手に「舞扇」……京藤間勘輝　２３０
「順ちゃんにおヒゲが…」……京藤間勘君　２４１
京藤間流に二代目家元……京藤間勘君　２５６
勘輝さんと出合った頃……常磐津兼三喜２６１
日舞指導に今後も努力……倉岡　房枝　２６２
コロニア日舞界の先達……佐々木重夫　２６５
〃白い靴下〃で日本舞踊……下川八重子　２７０
藤間流日本舞踊学校……田村　徹　２７３
池芝流新舞踊に意欲……田村　徹　２７６
日本舞踊の普及に専心……花柳　金龍　２７８

第４部　バレエ　２８４

「農村にオアシスが…」……浜田　拓　２８８
ただ踊るだけでなく……弓場　勇　２９６
「私と弓場農場」……小原　明子　２９９

「弓場農場の舞台づくり」……小原しよお　３０２
バレエの道に４５年余……大谷　康夫　３０５
バレエに魅せられて……戸塚　マリ　３１３
サンバの指導などにも……若松　慶子　３１７

第５部　能楽・謡

「伯謡会の今昔」……鈴木　威　３２５

第６部　音　楽

クラシック音楽の流れ……山川　健一　３６３
脇山一郎と軽音楽界……生田目善助　３９２
古典にゆかしい音色……宮下　芳山　４１１
常磐津の響よ、いつまでも……隈下　順子　４１４

第７部　ラジオ・テレビ

華やかだった日語放送……内海　博　４２５
さながら〃雨後の筍〃……　４３７
ＴＶ界に確固たる地位……山口　春海　４４０

第８部　郷土芸能

神楽で文化交流と親善……井原　爾一　４６３
親善、友好の実を上げる……花笠協議会　４７２

住民の喜怒哀楽織込む……牧　政治　４７８
サンパウロ七夕まつり……大橋　鉄雄　４８４
勇壮、玄妙な「鬼剣舞」……及川也周平　４９３
沖縄の古典芸能……屋比久孟清　５００
野村流音楽協会ブラジル支部……　５２０

（Ｖｏｌ・１）はここまで収録

第９部　奇　術
魔術と奇術に打込んだが……大　魔　王
曲芸、奇術、落語で活躍……松旭斉天楽

第１０部　詩　吟
吟剣詩舞道の向上発展へ……西森　重喜
郷愁の償いに『詩吟』……浦田　光馬

第１１部　浪　曲
草分け移住者に活力……沢田　多策
私が出合った戦前の浪曲師……花中軒水月
浪曲を通じて人づくり……中川　芳月

第１２部　映　画
老舗、日伯シネマ社……平田　公泰
垣間見た興行界……江沢　晋二

東宝が業界に〝新風〟……押田真佐男
私の「邦画界変遷記」……押田真佐男
各地に次々と常設館……池田　重二
薄命だったシネ・日活……山元　貞義
巡業シネマ屋……醍醐麻沙夫
松竹が「楢山節考」で進出……水本　毅
南米劇場秘聞録……沖本　磯満
田中さんとシネ・ニテロイ……矢萩富士夫
ニテロイ〟街づくり〟に一役　……城島慶次郎
先輩の業績に敬意……水本　毅
「七人の侍」に挑む……赤嶺　尚由
千津薫と百合薫……三藤　悟人
邦画の〟上映事始め〟……
『移民史映画』成らず……

第１３部　レコード
歌謡曲、演歌などが大半……カーザ小野商会

第１４部　芸能関係者の来伯
三浦環と『蝶々夫人』……
「我らのテナー」、藤原義江……
アメリカ二世の長谷川敏子……

「あゆみの箱・ブラジル大会」の思い出　小畑　博昭
「あゆみの箱・ブラジル大会」に就いて　山本　紫朗
二万キロは夢のうち……奥村　静雄
第一回大会出演の人々……
第二回大会出演者のプロフィル……
川田三姉妹の参加をよろこぶ……屋比久孟清
心うつ『能』の美しさ……
「奇蹟の人」大島彰さん……
日毎が戦後初の芸能団……
矢島　貞　阿部　三郎……
松竹舞劇団が来伯……
宝塚歌劇団も来演……
異色の歌姫、田中路子……
北島三郎　特別公演……

装幀　田中慎二

（写真提供）　各部門の執筆者、光石竹乃、野村清博、キネマ旬報別刷、芸術生活、文芸春秋のデラックス増刊、コロニア芸能史編さん委員会。

コロニア芸能史刊行によせて

在サンパウロ日本国総領事
小野　純男



この度、コロニア芸能史が関係各位の御努力により上梓される運びとなりましたことは慶びに堪えません。

ブラジルへの移住が始まって以来、既に四分の三世紀を経ましたが、今日では当地日系社会は、その旺盛な活動を益々多才面に繰り広げ、優秀な人材を数多く生み出しております。

しかし、ここに至るまでの移住先駆者の方々の艱難辛苦には筆舌に尽し難いものがありますが、かゝる中で日々の生活の労苦をいやし、明日への英気を養うため、民謡、舞踊、演劇、詩吟等のあらゆる祖国の芸能が特ち込まれ、広く共感を得たことは、けだし当然のことと思われます。

移住者の皆様の生活の安定と日系社会の発展に伴い、芸能も益々多様化し、一層隆盛となってきましたが、今日では芸能活動は単に日系人の間の催しに止まるだけでなく、今後でも現地社会のあらゆる人々との友好親善を増進する媒体として新たな

意味を持ち得るかも知れません。

今般コロニア芸能史が刊行される運びとなりましたことは、日系人、日系人社会の今迄の歩みを芸能という観点から見つめ、その足跡をとりまとめて後世に残すという大きな意義を有するものであり、誠に喜ばしい限りであります。

ここに本史の編集刊行に為られた皆様の御努力に対し、改めて敬意を表します。

一九八六年三月

芸能史の発刊を祝す

ブラジル日本文化協会
会長　尾　身　倍　一



この度、コロニア芸能関係者の皆様により『コロニラ芸能史』の編さんが企画され、本年、立派に上梓され、江湖に贈られるようになったことを大きな喜びとするものです。

コロニア芸能界は近年、日本芸能界とのひんぱんな交流により、よい意味の刺戟を受けてその発展は素晴らしく、現在〝円熟〟とも云うべき境地に達しており、我々は居ながらにして、遠い母国日本の情緒を満喫することができます。

ブラジル（異国）と云う異なる環境にあって、今日の盛況をもたらしていただいた今は亡き先人をはじめ、現在のコロニア芸能界の皆様に対し、衷心より感謝の意を表するものです。

かって、まったく娯楽の乏しかったコロニア初期より、今日の隆盛に至るまでの足跡を残さねば、コロニア芸能界の先輩のご苦労は永久に忘却の彼方に没してしまうのではないか、と云う危惧が常々ありましたが、水本毅委員長はじめ委員各位の大変なるご努力により、茲に移民史の一端を彩る本書の発刊に至りコロニアとともに喜び、同時に、その労に対し深く感謝するものです。

本書の発刊により、コロニア芸能界がさらに一層の発展をみることを期待して祝辞と致します。

一九八六年一月吉日

コロニア芸能史の刊行を祝う

サンパウロ日伯援護協会
会長　竹中　正



私達の生活と、芸能活動には、切っても切れぬ関係がある。苦しい、孤独な開拓生活の中に、明日を信じて、活路を見出すための気分転換には歌があり、踊りがあり、浪曲、演劇、その他、心をほぐし、和らげる芸能が必ずついてまわる。数年前、ある高名な社会心理学者が来聖し、「日本移民は故郷を遠く離れ、開拓の極限の生活環境で、何をよりどころとして、生きてきたか」を調査していかれた。その結果は聞きもらしたが、盛況なコロニアの芸能活動をどう見て行かれたか、知りたいところである。

芸能活動は、何も苦しい時ばかりの所産ではない。豊かなコロニアの現況の中に、平和と繁栄を表するかのように、大変な活況を呈している。今や芸能活動は、「生き甲斐の発揚」である、とも云える。磨いた技を発表し、多くの人から賞讃され、拍手を受ける。芸能は自己表現の場であり、それを認められた時に、

生きがいが生まれる。

さらに、ここ数年、××チャリティ・ショウ、あるいは慈善公演と銘打つショウが殆んど毎月のように、大小にかかわらず開催されている。その純益が、私ども社会事業団体に贈られ、活動資金として、大変助けられている。本当に有難いことと厚くお礼申し上げる次第である。

勝手な解釈で恐れいるが、芸能活動の盛んな社会は、健全な発展が約束されていると云っても過言ではあるまい。

この度、『コロニア芸能史』が刊行される。喜びにつけ、悲しみにつけ、芸能を通じて過き越し幾山河を、日系コロニア史の「ひとこま」として振り返えってみることは、大いに意義深いことと思う。この刊行のためにご苦労された皆様方に、深く敬意を払らって、お祝の言葉といたします。

一九八六年一月吉日

発刊のことば

コロニア芸能史編さん委員会

委員長　水本　毅

コロニアで要望されていた一つ、芸能史の発刊を衷心よりよろこびたい。



日系移住がはじまって七十七年の歳月が過ぎ、現在の日系コロニアは日本に劣らぬお祭り、舞踊、歌、映画や珍らしい催しがあり娯楽には不自由しない時代となったが、戦前、戦後の頃はそうでなかった。奥地方は勿論、サンパウロ市内でも踊りや歌、映画をどんなに懐しく楽しみにしていた時代があった。

その娯楽がどんなように提供され、どんな人達が活躍してくれたか、そうした記録が皆無で、当時の方々も老齢化され亡くなられた方も多く、今、此の記録を残さなければと関係者が集い、芸能史発刊となりました。

此の芸能史に記録漏れのことも多くあることと思いますが、これは次の芸能史に記録することをお願いしたい。

なお、編集については元パウリスタ新聞社の前田正覚氏が協力下さって完成出来たことを一同に代り感謝申し上げます。

一九八六年一月吉日

第1部　民謡

〔民　謡〕　民謡という熟字は既に中国の六朝時代の詩にあるといわれるが、現在われわれの使用している民謡の称呼は明治の中期以後ドイツ語のＤＡＳ・ＶＯＬＫＡＬＩＥＤ若しくは英語のＦＯＬＫ・ＳＯＮＧの訳語として用いられたのであるから国民歌謡という意味であったらしい。然し何れの国においても、特に音楽の専門家以外の一般庶民の間に喜んで歌われているようを、自然発生的な歌謡と、専門音楽家が作曲した芸術的な歌謡とがあり、国外に紹介されるような歌謡は主として後者に属しており、前者のような自然発生的な歌は国外にまで伝わることはない。

従って日本の文学音楽の作家達は、民謡は芸術的歌曲の中で、最も簡易な庶民性を持った歌謡のように、広義に解釈するようになった。然しわが国にあっても、昔から平曲とか謡曲、浄瑠璃、長唄というが如き専門的音楽家の手になった芸術的な歌曲の外にも、地方民などが鎮守の祭りの余興や、冠婚葬祭の席上または農耕労作の場合などに唱和していた歌謡が、遠い昔から

口から耳へと伝承され、これをヒナウタ（鄙唄）とかクニブリ（国振り）と呼んでおり、その国振りの唄の中には万人の愛唱にたえるような佳曲も頗る多く、これらは作詞も作曲も、何処の誰とも不明なのが本則となっていたが、大正時代以後には有能な詩人・作曲家が好んで、昔の国振り風の作品を多く作るようになり、詩人音楽家仲間では寧ろこれが民謡の正嫡であるように考える人が多くなっている。

然るに一方明治の後期から柳田国男によって唱導された民間伝承の学問は、この先祖伝来の国振りを口承文芸の一部門として取上げた結果、民謡の最も重要な構成要素は、それが文字や楽譜によって伝わるのではなく、あくまで口から耳へと伝承されてゆくものでなくてはならず、それが即ち民謡であって他の勝手気ままに転用してゆく流行歌の類や、専門詩人音楽家の手になった創作楽曲は一応民謡から除外されるべきものとして、明確なる一線を画されている。

然るに他方にはまた高野辰之・藤沢衛彦の如き歌謡学者は往昔の「万葉集」の歌や「梁塵秘抄」掲載の歌謡「閑吟集」の歌、或は隆達、弄斉の歌謡より最近のさのさ節、ラッパ節の類をふくめて一切を民謡なりとする一派もある。

然しながらこれは「民謡」という用語が最初から極めて曖昧に使われていたためであって、学問的にはもう少し明確な定義を考慮する必要がある。それで民謡という用語を広義な称呼に

して民族学者の解釈している口承による歌謡を自然民謡若しくは口承民謡と呼び詩人作曲者が口承民謡の形態を真似て作ったものを創作民謡とする。

〔種類と分類〕

民謡にはいろいろの種類があるが、その分類も種々の立場からすることが可能である。

①先ず最も大まかな分け方をすれば信仰の唄と仕事の唄と娯楽の唄ということになろう。

信仰の唄は人間が万能の力を持たない限り、この世に生きてゆく上にはどうしても神の加護を得ねばならぬと考え、神を祀り祖先を祀って自分達の無事と幸福を祈る、この場合にうたわれるのが信仰の唄である。

次に神を祀るにも、その供物として酒や新穀を捧げるにも種々の行為が必要であり、神を媒介として他民族や一家の異分子と融和を計るためにも酒を飲み合うことが必要でありその酒を勧めるためにうたう酒造りの唄も一種の作業的行為に外ならぬ。また自分達が生きてゆくため、また神に捧げ物をするにも生産が必要であり、生産のためには労力を要し多勢で力を合せて行う徒事の統一を計るためにも唄が必要で、仕事の必要が生じる。

またそうした信仰によって安心し、仕事によって生活が安定すると、また心身を慰安すべき娯楽の唄が必要になってくる。

②次は民俗学的な立場からする分類で、民謡には必ず歌う目的と場所があったので、その歌われる場所または歌う人の身柄を中心とした分類で仕事の唄は家の中または屋敷の中でする仕事の唄を「庭唄」、また田や畑などを耕す仕事の唄が「野良唄」、野原や山で仕事する時の唄が「山唄」である。

庭というのは仕事場のこと、これに属する唄は稲の穂を扱ぐ稲扱唄・脱穀の時の籾摺唄や麦の芒を除く麦打唄・米や麦、蕎麦などを製粉する時の粉挽唄などが庭唄に属し、また養蚕・製糸・製織・製茶の茶もみ・箕上げ・製糸の楮打・紙漉など農民の片手間の仕事ととして家内工業的に行われた仕事に関する唄も当然場所からいえば庭唄に属すべきである。が別に家内工業唄と区別してもよい。

次に野良唄は田畑耕作の仕事唄の一切である。第三の山唄は山仕事の唄で、木下し・草刈・柴刈・木伐り・川狩などの唄。また別に業唄というのがあり、これは農民以外の専門職業者のうたう唄で、例えば大工・木挽・綿打・油絞・杜氏（酒造人）・漆掻き・屋根葺き職人などの種類がある。次に漁師などが海や湖沼などを舞台にして歌う労働唄は、「海唄」である。また馬子唄・牛追唄・筏流し唄・川船々頭唄のような交通運輸に関する唄は

「道唄」、また神仏の祭祀にうたわれるのは「祭唄」、婚礼・年祝い・出産などの喜び事にうたわれるのが「祝唄」、雨乞踊・神送踊・盆踊など団楽・風流系統の唄を「踊唄」、子供の歌う遊戯唄を一括して「童唄」とする。

③次は歌詞の形態からする分類で、七七七五調の近世詞以前と以後に分類する。七七七五調は室町時代の末期にその萌芽が認められ江戸時代に至って完成した格調であるから、これによってある程度民謡の時代性を知ることが出来る。また七七七五調の完成以後においても民謡の種類によってはその歌句の反復に相違があって、これを分類調査することが必要である。

④音楽的立場からする分類で、これを旋法音階から見ると陽旋音階と陰旋音階およびその混合したもの、さらに陽と陰との中間的な音階も存在しているから四つの種類に分れ、かつ陰、陽ともに三味線歌曲における音階とは必ずしも同一の動き方をしていない点が注目される。また形式は他の芸術的歌曲に見られるような複雑なものは殆んどなく、Ａだけの一句形式、ＡＡの一句反復形式、一句と二句とが多少変化しているＡ〃Ａ形式、一句と二句とが対立しているＡＢ形式のものが多い。

〔元唄と替唄〕　創作民謡ではある詩人の作詞に興味を感じて作曲家が節を付ける場合が多いから、歌詞と曲節との関係は密

接不可分のものとなっているが、自然民謡は歌詞と曲節とが同時に出来たと・いうことは殆んどなく、従ってある一つの節に対して、多勢に何時も口吟されるような代表的な歌詞は存在するが、元唄というものは実は存在しないのである。

また歌詞の内容も信仰でうたう唄には、神を讃仰する真面目なものが多く、かつ歌詞には呪力があるものと考えられた時代もあるが労作唄が盛んに歌われるようになると、その仕事に全く無関係のような替唄や、性に関係した卑猥な唄などが多く歌われたが、これは同一作業の反復で一同がその単調さに倦み果てたときとか、力にあまる重労働に疲れ果てた時などには、突如として起る爆笑また哄笑で、思わぬ元気を恢復することがしばしばあった。

（河竹繁俊監修、演劇博物館編の「芸能辞典」から抜粋。一九五三年度版）。

コロニアの日本民謡
草創期から現在までの歩み

松崎　松蔵
（ブラジル日本民謡同好会々主）

初の民謡研究会を創立

確か一九四二年だったと思う。パウリスタ線ポンペイアで友人から猪狩親一氏を紹介された。氏は日本で都山流尺八を学び、民謡尺八家として一家を成した人である。筆者も昭和五年（一九三〇）より三か年間、福島県福島市の民謡尺八家、佐藤暁風師に師事、曙風の号を贈られている。そうした関係から交際が始まり、一九五七年にほとんど時を同じくして氏がパラナから、筆者もサンパウロに移って再び親交を重ねるようになった。

これに先立ち、聖州義塾の創立者で教育家の小林美登利氏を猪狩氏から紹介された。小林氏も民謡尺八家で、氏の所望により正調追分を歌った。勿論、小林氏の尺八伴奏であった。このようを事情、さらに三人とも福島県出身でもあった関係から和やかに意気投合、サンパウロに民謡会を設立する件を協議、後日、改めて相談することを約した。

一九五二年、サンパウロに初の日本民謡研究会が創立された。小林美登利、桜井孝、千葉忠見（以上いずれも故人）、猪狩宗鳳、菊地啓、佐々木重夫、岩本芳道、藤山勉の諸氏に筆者を含めた九名が発起人である。この研究会には会長、役員はなく、桜井氏が会計面を担当した。練習所は主に岩本芳道氏宅だったが一定せず、会員の家がその時の都合によって使われた。



一九五三年ころ、日本民謡研究会主催の初の大会が、サンパウロ市内ルーズヴェルト駅近くのコロンボ劇場で開催された。浪曲会の後援であった。娯楽機関の乏しい当時だっただけ、大変な人気だった。上掲の写真はその時のもの。向って左から菊

地、千葉、梶敏夫、同春風、岩本、筆者、桜井、三浦銀蔵、佐々木、猪狩、藤山勉の諸氏である。伴奏は尺八が猪狩、桜井、バイオリンは岩本の諸氏であった。

一九五六年、シネ・ニテロイの田中義数氏（故人）から、ニテロイの開館三周年記念行事としての「お国自慢民謡歌かるた」への出演要請があり、七日間にわたる正午から夜の十一時までの〝映画と民謡・日舞・洋舞のショー〟に猪狩、桜井、岩本、梶春風、同敏夫、千葉の諸氏と筆者が舞台に立った。同ショーの出演者は他に広川八重子師（三味線）、花柳金竜師とその門下生（日舞）、上村氏夫妻（音楽と洋舞）、民謡研究会からさらに三浦、佐々木の両氏と多彩であった。

民謡研究会には、単なる親睦団体のため設立当初より役員は置かれていなかったが、民謡の歌い方、伴奏などについて佐々木、千葉両氏と猪狩氏、筆者との間で意見の相違という問題が起こり、一九五六年末、猪狩、阿部不二也、三浦の諸氏に筆者が発起人となって新たに日本民謡保存会を設けた。会の事業として①年一回の素人のど自慢大会の開催②民謡の普及発展と保存に勤める―などを決めた。保存会による第一回素人のど自慢大会は五七年十月（?）、当時、ジュリオ・メスキッタ広場にあったコロニア馴染のサンパウロ劇場であった。会員諸氏の努力で会場には賞品が山と積まれたほか、大入満員であった。

ブラジル日本移民五十年祭、市立工業会舘で猪狩、阿部両氏と筆者が「移民追分節」を歌う。舞台上の猪狩、杉山、阿部、米谷、松崎たち。



次いで翌五八年六月、ブラジル日本移民五十年祭を記念してイビラプエーラ公園内のサンパウロ市工業会館で開かれた記念祭に保存会から猪狩、阿部両氏に筆者の三名が出演し、江差追分を一名一節あて歌った。当日の観客は約五千名、盛大であった。伴奏は猪狩、杉山、唄は阿部、米谷両氏のほか筆者。

同志と日本民謡詩吟同好会

戦後の第一回全伯素人歌合戦は、カーザ水本主催で五三年一月三、四、五の三日間、オデオン劇場で開催された。審査委員長は丸山昌彦氏。筆者は五八年の全伯素人歌合戦から六三年の第十三回まで、民謡保存会代表理事として、これに協力した。なお、筆者が丸山氏、他二名のブラジル音楽家協会々員の推せんにより同協会々員として登録されたのは六一年八月二十二日付けで、外国人会員三八五号、民謡と尺八の教師免状を受けた。

六三年八月、保存会を退いた筆者は同年十月、同志とともに日本民謡詩吟同好会を創立。

おもな発起人は、米谷信一、山下量加、長野武由、根上吾一、三浦銀蔵、松崎梅吉、平田清太郎、内林重三郎、及川安平、橋本猛、佐々木嘉網、原田治の諸氏に筆者。役員は初代会長＝山下、副＝長野、筆者、会計・根上（以下略）であった。会の趣旨は①会員相互の親睦と民謡詩吟の普及発展と温存②年一回、コロニア民謡祭の開催などで、第一回コロニア日本民謡祭を六四年八月二十三日、マウア劇場で開催した。後援は民謡研究会、早苗会、サン・ジョゼー愛好会、浪曲会などで午前九時から午後八時に至る盛沢山のプログラムであった。なお、民謡祭は一世の郷愁を慰すとともに、純益金は福祉団体に寄付することを

前提として始められたものである。

当会は、民謡コンクールは日伯音楽協会主催に依存し、これに協力することを決めている。ただし、コロニア民謡祭は年中行事としての主催権を含め、民謡、詩吟、舞踊の普及発展などに対しては当会が存続する限り実施することを決議している。

第二回民謡祭は六五年八月十五日の終戦記念日。会場は昨年と同じくマウア劇場。後援団体は昨年同様の外、さらに恩村舞踊団、サント・アンドレーの花柳金晴師とその門下生一同、当会企画の大型提灯（高さ九〇センチ）二十個、同中型（高さ七〇センチ）七十個も昨年と同じく舞台、客席を花やかにいろどった（提灯の中には六〇ワットの電球）。

また、同祭から新機軸として幕開けにコロニア民謡祭音頭を披露した。作曲はサント・アマーロ放送局（奥原氏）が招聘した歌謡界の第一人者、若原一郎氏に懇請、作詞はコロニアに〝この人あり〟と知られる古沢典穂氏にお願いした。若原氏の作曲料は、当時の金額にしては破格の金百コントス也。一流歌手に作曲を依頼するなどは当会にとっても稀なことで、以後、同祭ごとに民謡祭音頭は幕開けに使用されている。

次いで第三回からは会場を文化協会に移して開催された。出演申込は回を経るに従って激増、これに伴って観客も増えていった。

なお、同年十二月十一日、当会発足以来初の総会を開催、役

員選挙の結果、次の諸氏が新役員に選ばれた。

会長＝米谷信一、副＝長野武由、松崎松蔵

米谷新会長は直ちに山下前会長を相談役に推せんしたが、同氏の承諾は得られず、さらに後日退会された。筆者とは七年余の親交だっただけ、誠に残念だった。山下氏退会の結果、詩吟指導員を失なった当会は、ブラジル日本民謡同好会と改名した。



一九五六年、シネ・ニテロイでの開館三周年記念の「お国自慢民謡歌かるた」ショーの出演者たち。前列右から五人目が館主の田中義数氏。

第四回民謡祭開催に当っては、毎年、同じようではマンネリ

化の恐れもあると懸念、ラジオ・サント・アマーロ、インヅスツリア・パウリスタ両放送局、サンパウロ、パウリスタ、日毎の各邦字紙を通じての宣伝・広告に万全を期した。結果は上乗、会場は早朝からファンの黒山、民謡祭音頭も邦楽伴奏に三味線ヴェテランの野沢佳加師を迎え、尺八は長野氏と筆者、全会員斉唱の幕開けで見事なものだった。この時の剰余金はカンポス・ド・ジョルドンの肺結核療養所に寄付、同時に会員による入所者への慰問費に当てたが、後日、同所の松の実クラブの責任者、春名宏文氏から丁重な礼状を頂いた。

ところで、文化協会主催のコロニア芸能祭について、私見を述べさせて貰いたい。この芸能祭開催の当初、われわれ同好会は放送、音響、録音機など機材一切持参で協力したがいつころからか、同好会々員は除外されるようになって来た。いろいろと事情もあることと考えられるが、残念でならない。

第五回民謡祭は一九六八年八月十、十一の両日。ことしは明治百年祭、ブラジル日本移民六十年の祭典、コロニア日本民謡祭の第五回目という三重の佳き年、会員一同張り切って出演、心からこの日を祝った。

全伯歌謡、民謡コンクール

第十七回全伯歌謡、民謡コンクールは日伯音楽協会主催で一

九六九年二月一、二の両日サント・アマーロのパリェイロス劇場で開催された。同コンクールはコロニアの歌謡、民謡界にとって最大の催し物であったが、各地区から選出された民謡部の出演者は同好会の会員のみという淋しさだった。当会では本年度のコロニア日本民謡祭をより以上に盛り上げるため、同年四月十二日の夕食会でこれを検討、実行に移すことを決めた。第六回民謡祭の開催は八月二十三、四の両日で、会場は文協講堂。同祭に錦上花を添えるため特に花柳静香衛師（現・池芝流家元）の出演を懇請し、予期以上の成果を上げた。

以後、第七回より第十五回まで毎年定期的に開かれて来た同祭は、八〇年度から全伯民謡名人コンクールと名を改め、各団体後援の下に毎年開催され、今日に至る（後述）。

一方、七六年四月十七、十八の両日、ナザレー文化協会々館で開かれる第二十四回全伯歌謡、民謡コンクールの優勝者と十位までの入賞者、さらに民謡部出演者の唄をレコードに吹込む、という案が関係者の間で決まり、直ちに実施した。同コンクールは日伯音楽協会とナザレー・パウリスタ文化協会の共催。レコード吹込みに必要な機材一切を会場に運んでの大仕事だった。吹込みは次のように決勝の順位により行なわれた。

優勝＝小野幸子（空手道）、二位＝浜田竜夫（さらば友よ）、三位＝松原かおる（春のおとずれ）、四位＝垣下芳和（霧の摩周湖）、五位＝村上ちず子（なげきの真珠）、六位＝浜砂正裕（冬

の旅）、七位＝奥山重義（忠次流転笠）、八位＝村上秋子（日本列島港町）、九位＝木村孝（ロザリオの島）、十位＝阿部久仁子（乙女のワルツ）。伴奏は日伯音楽協会（指揮・丸山昌彦氏）とモジのコスモス楽団（指揮・広田三郎氏）にお願いし、好成績を得ることができた。

これに反し、民謡部の出演者は歌謡部の人たちほどステージでのマイク操作に馴れていなかったためか不調に終わり、同年六月サンパウロの吹込み専門所で改めて行なった。

久保田操＝お博多節、山口包秀＝津軽山唄、柴田千恵子＝小諸馬子唄、松崎トモ子＝江差



第二回民謡祭は一九六九年八月十五日、マウア劇場で盛大に開かれた。同祭に出場した民謡詩吟同好会の三人。

追分、前唄、平田はる江＝南部木挽唄、松崎武＝夏の山唄、高本糸＝秋田おばこ、松崎梅吉＝南部牛追唄、古池孝＝刈干切唄、平井一市＝新相馬節。伴奏は尺八＝松崎尚憧、三味線＝平田はる江、久保田節子、太鼓およびお囃子＝茂木庄三郎の諸氏だった（順位不同）

このレコードはA面に歌謡曲、B面に民謡曲で五百枚を製作、民謡同志協会と日伯音楽協会がそれぞれ二百五十枚を引取った。多くの民謡、歌謡同好者たちにとって、後日これは貴重な参考資料になるものと思う。

残念だった日伯音楽協会への不義理

ちょっと横道にそれるが、話を七〇年代初頭に遡らせて頂きたい。月日は忘れたが、七〇年のある日、ブラジル民謡協会の開田五郎、第二副会長（当時）から、日本民謡詩吟同好会が同協会へ加入するよう勧められた。筆者はこれを同好会の役員諸氏に伝えるとともに、加入問題を検討、団体入会を決議して同協会の申入れを受諾した。これには、会員の平田郁夫氏が当会と協会側との折衝に努力されたことが大きな原動力ともなったことは忘れられない。民謡協会に加入と同時に筆者は協会の監査役に推せんされた。さらに筆者は民謡保存会で五年、民謡同好会で八年間にわたって役員を務めていた。

すでに記したとおり、民謡保存会は常に日伯音楽協会と提携、筆者も過去十三年間にわたり同協会の理事を務めていた関係上、同協会主催の第十九回全伯歌謡、民謡コンクール・に出場を申込んであった。ところが、開田第二副会長から「民謡協会の会員である以上、他の協会による催し物には出場を遠慮して貰いたい…」との要請があった。筆者は、いろいろと音楽協会との事情を説明、第十九回コンクールへの出演についての諒解を求めたが承諾を得ることができず、ついに出演を断念したことを、ここに記しておきたい。

その後、同好会と民謡協会の間でコロニア民謡祭の主催問題について意見の相違などがあったが、コロニア日本民謡祭は、同好会の主催行事であることは明らかであり、今後も引続き開催を継続するものである。

伯国日本民謡同志協会の誕生

一九七五年十月ころ、第二十四回全伯歌謡コンクールへの出場権要請と法人登録の件について丸山昌彦氏にお願いした。同年十二月中旬、日伯音楽協会代表と新たに出来る代表の懇親会を某食堂で開いた。出席者は丸山、伊藤、三浦、中田、阿部、榊原、菊地、松崎梅吉、茂木の諸氏に筆者、その他二名であった。出場権の件と法人登録の件について全員の快諾を得、さらに音

楽協会と同好会、友の会、保存会の一部と今後ますます親交を深めて行くことも申し合わせた。

一九七六年二月六日付けで諸官庁に提出してあった法人団体登録の件が認可され、同年四月十三日付けの官報にこれが掲載された。

伯国日本民謡同志協会が正式に発足した。初代会長＝松崎松蔵、第一副＝阿部不二也、第二副＝菊地啓で、発表は邦字三紙を通じ次のように行なった（原文のまま）。

「私達はブラジルに移住してから幾拾年の歳月を過して参りました。今日、御賢察の如く一世同胞も年と共に人員が減少しつつある現情を顧み、特に日本民謡に趣味を有する諸氏、私達は遠い祖先から日（・）本（・）民（・）謡（・）の（・）心（・）の（・）唄（・）として庶民的、伝統芸能として一般から親まれもし、また、日本文化の一端でもある日本民謡を我々一世の養国である墳墓の地と定めました当ブラジル国の日系二、三、四世諸君に普及、温存、伝承する責任のあることを自覚致し、二十数年以前から民謡に携って参りました。今度、この意を得、民謡の愛好者同志と共に、社団法人登録、名称、伯国日本民謡同志協会を設立、賢明な諸氏、上記我等の趣旨に御賛同の上何卒今後共、旧に倍し御声援、御支援を賜わりたく、偏に御願い申し上げます。一九七六年四月十五日、民謡同好会代表、松崎松蔵。民謡友の会代表、阿部不二也。民謡東会代表、菊地啓」。

これと同時に、いままで同好会が主催して来たコロニア民謡祭は、こんど新たに発足した伯国日本民謡同志協会がこの第十二回目から主催することを三邦字紙上で発表した。この第十二回民謡祭は、同年十月三日、同志協会と日伯音楽協会の共催により、文協講堂で開催され、時のサンパウロ総領事、平野文夫氏からお祝のメッセージを頂いた。

これに先立つ同年の四月、在伯秋田県人会の桜庭喜太郎副会長（当時）が訪日の際、民謡のカセット・テープを求めるため県庁を訪れたところ、おさらい教室テープ、フジオ企画（株）の藤尾隆造社長を紹介された。秋田県は日本民謡の宝庫、フジオ企画はこれら民謡をテープ録音し、日本全国に配布していた。桜庭、藤尾両氏の話合いにより、藤尾氏は日本民謡使節団のブラジル派遣についての考慮を約したうえ、後日来聖、桜庭氏とともに、その実現に奔走した。幸い、サンパウロ新聞社（水本光任社長）好意により、これは実現した。

第一回日本民謡使節団の来伯

日本民謡使節団のブラジル派遣について、藤尾氏の活動、協力は忘れることはできないものである。第一回日本民謡使節団（日本移民資料館建設協力公演）は、主催サンパウロ新聞社、協賛ブラジル日本文化協会、伯国日本民謡協会、フジオ企画によ

り七七年二月二十四日午後七時半、同二十五日午後二時、同七時半の三回、文協記念講堂で開催された。

団長は藤尾隆造（フジオ企画社長）、団員は伊藤一（指導者、北海道）、佐々木基暗（民謡日本一）、山本ナツ子（女性日本一）、尺八＝杉山昭琴、三味線＝全田隆王、歌＝浅利みき、高橋つや（青森）、佐々木常雄、長谷川久子、千葉美子（秋田）、秋田万才＝伊藤芳丸（秋田）、尺八＝藤丸貞蔵、藤丸重雄、三味線＝佐々木実、小田島徳実、民舞団五星会、佐野政子、守屋純子、下山みゆき、佐藤洋子、三保田千恵、柴田隆章、同隆幸次、佐藤運三、鈴木峰謡、石ケ森泰治（宮城）、遠藤幸一（福島）、尺八日斉藤参勇（山形）の諸氏であった。

本公演の純益金は八万六千五百六十クルゼイロス。うち移民資料建設委員会へ七万六千五百六十クルゼイロス、サンパウロ日伯援護協会へ一万クルゼイロスを寄付した。このほか、鈴木峰謡氏が沼津市で弟子たちの間でカンパした五万円が援協へ贈られた。

日本民謡使節団の公演について、筆者は第二十五回歌謡、民謡コンクールのプログラムに、およそ次のように感想文を記した。

「藤尾氏とサンパウロ新聞社の御尽力に依り、民謡使節団一行の本場の味、名人の至芸、実に千載一遇の好機に接し、空前絶後の豪華ショー、唯々心酔、感極りました。瞠目致しましたの

は、各出演者諸氏の歌い方と、尺八、三味線の名人芸、また、態度、実に飾り気もない純粋な土地から生まれた民謡の味、深い感銘を受けました。本来、民謡の歌い方は斯くあるべきと感じました。筆者も渡伯前、佐藤暁風師に師事しておりました当時、いつも節が第一義で声は第二義的であると教を受けておりました。それで現今の教え方について佐々木基晴師、遠藤玉水師にこの点について質問致しましたところ、現在の民謡指導方法も節が第一で、声は第二であること。さらにブラジルの民謡歌手などの歌い方を聞きましたが、実に声量もあり、美声で歌われているがメロディイを度外視した歌い方、また、節を飾りすぎて、かえって節を破しておるような歌い方、あまり感心致しません。民謡を勉強するには節を正確に習得致すことと、良師について習うこと、あまり飾って歌わないこと、飾り過ぎると土地の民謡の味を失うこと―なども感じる必要があると語られた。今後我々ブラジルの民謡研究の諸氏は、この点を感得すべきと思います。長い間の筆者の懸案は、正確な日本民謡をブラジルの日系人に継承するには如何にすべきかと諸問題があります。

新たに唱歌を加えたコンクール

恒例の第十三回コロニア民謡祭は七七年十月二日、文協講堂で。次いで翌七八年四月十五、十六の両日、第二十六回全伯歌

謡、民謡、唱歌コンクールは日伯音楽協会主催、サンパウロ新聞社、ウニベルツール旅行社、ロージャ岡本、ブラジル芸能協会の後援で会場は文協講堂。一九五二年、当時のサンパウロ劇場で開催された第一回全伯音楽コンクールから数えて四分の一世紀、関係者の双眸（そうぼう）には光るようなものが見えた。また、このコンクールで唱歌が新たに加えられた。出場者は二百余名、幼い参加者たちが祖父母、両親を通じて習い覚えた唱歌の数々が正しい発声法によって歌われたことに観客は心から感動していたようだ。

この年、サンパウロ新聞社による第二回民謡の祭典（チャリティー・ショー）が、ブラジル日本移民七十周年を記念し十月十三、十四の両日、文協記念講堂で開催された。後援は日本ブラジル民謡文化交流協会、フジオ企画、協賛は文協、援協、都道府県人会連合会、伯国日本民謡協会、伯国日本民謡同志協会、ブラジル芸能協会、モジ文化体育農事協会、北パラナ運動連盟、マリリア日伯文化協会などの諸団体。使節団の一行は次のとおり。

藤尾隆造（団長、フジオ企画社長）、佐々木基暗（歌、北海道）、名和津加子（歌、同）、藤田淳（三味線、同）、大滝義郎（歌、秋田）、成田謡鶴（歌、同）、佐藤カツ子（歌、同）、佐藤運三（歌、同）、柴田隆章（歌、同）、鈴木峰謡（歌、同）、浅利みき（歌、青森）、宮川廉一（歌、福岡）、円みどり（歌、同）、松尾万年（三

味線、同）、大石虚童（尺八、同）、出雲愛之助（安来節名人、島根）、出雲三代目（歌、鼓、同）、出雲正之助（歌、踊、同）、出雲雲加子（歌、踊、同）、三浦臣代（歌、踊、同）、佐々木小繋（歌、踊、同）、野坂亮利（絃、同）、坪井宝水（尺八、大阪）、坪井敏（三味線、同）、横内友一（尺八、東京）敬称略。

民謡の祭典は、サンパウロ公演に続いてモジ市コクエーラ会館（十五日）、シネ・マリンガ（マリンガ市、十七日）、シネ・マリリア（マリリア市、十六日）、最終日の十八日はロンドリーナ市のモリコン体育館で開催された。

公演純益金は山陰放送民謡使節団のカンパ（二万五千八百九十四クルゼイロス）を加えて二十五万五千八百九十四クルゼイロスで、文協、援協、都道府県入会連合会、子供の園、救済会、希望の家などの諸団体に贈られた。

第一回全伯民謡名人コンクール

私事で恐縮ですが、筆者は三十数年にわたりブラジルにおける日本民謡の普及発展を願って同好の友と研究会、保存会、同好会、伯国日本民謡同志協会をどを設立し、こんにちに及んでいる。同志協会は昨年までコロニア日本民謡祭に重点を置いて、これを主催して来た。然るに、民謡コンクールの部門は十六年間にわたって日伯音楽協会に、さらに伯国民謡協会に五年間依

存して来たが、当協会の法人団体としての発足以来五年目を迎えたので、いままでの民謡祭で体験した事柄を生かそうと考慮し、第一回全伯民謡名人コンクールの開催を全会員に計って決定した。

このコンクールの特色の第一は、当協会々員以外の出場権を認める。所属団体の云々を問わず、誰でも出場できることである。これは、広範な民謡愛好者の出演を促し、民謡の普及、発展、向上に貢献、さらに日本人の心の歌である民謡を二、三、四世の子々孫々に日本語とともに遺して置きたいーとの念願からである。以上を踏え、第一回全伯民謡名人コンクールを八〇年八月三十日、文協記念講堂で開催した。審査の結果、第一回名人は山口包秀、第二位は川合節子、第三位は久保田操さんたちであった。

第三回民謡文化交流使節団

サンパウロ新聞社主催、第三回民謡の祭典（チャリティ・ショー）出演の日本ブラジル民謡文化交流使節団の一行三十名（団長、藤尾隆造氏）は、八〇年九月二十五日午前九時半、コンゴニャス空港に到着した。一行は空港からイビラプエーラ公園に直行、同園内の開拓先没老慰霊碑前で、「地下に眠る先没者の皆様、本当にご苦労さまでした。私たちが感謝の念をこめてお

慰めできることはこれだけです」と、日本一の絶唱を次から次へと慰霊碑に向って歌い続けた。秋田おばこ、南部牛追唄、黒田節。春にしては肌寒い風が頬をなぶるなか、長途の疲れも見せずに、まるで本舞台にいるような真剣な眼差しで歌い舞い続けた。かたちばかりの参拝でない魂をこめた素朴な祈り。出迎えた県連関係者は胸を熱くして見守っている（九月二十六日付けサンパウロ新聞参照）。

また同日、慰霊碑前で鈴木善幸首相（当時）のメッセージが、藤尾団長によって披露された。

「皆様は気候風土の異なる南米の地でご活躍され、その勤労、勤勉なる姿は、歴史に残る日本人の誇りとするところであります。我が国は、皆様のご苦労の甲斐あって、ブラジル、アルゼンチン国とは遠くて近い友好国となりました。ここに、その御貢献に衷心より敬意を表します。はるか日本より、お一人、お一人の御健勝を祈念し、メッセージといたします。」

昭和五十五年九月二十四日

日本国内閣総理大臣　　鈴木　善幸

――――　◇　――――

第三回民謡の祭典は文協記念講堂（二十七、二十八日、昼夜四回）、モジ文化体育農事協会会館（二十九日、昼夜二回）、マリンガ文化協会々館（三十日、昼一回）で開催され、前回同様、純益金（八六三、二三〇クルゼイロス）は各福祉公共団体へ贈

られた。

なお、第三回日本民謡使節団々員は次のとおり。

団長＝藤尾隆造（フジオ企画社長）

団体役員＝菅原勇（事務長）、石井彪、関谷春男、小松正雄、荒川秀春、新谷五郎、松田美穂子（庶務）

秋田県＝藤井ケン子（唄）、佐藤昌月（三味・踊）、東栄子（踊）、佐藤清春（踊）

東京都＝南部麻美社中（石原麻美、三本木姓子、佐々木真美子（以上踊）、石原そめ（着付け）、夏坂菊雄（唄）

栃木県＝渡辺悦子（唄）、栗山清（三味）

千葉県＝伊藤栄治郎（尺八）、成田謡鶴（唄）

神奈川県＝照井洋三郎（三味）

愛知県＝中村佳北（唄）

大阪府＝坪井宝永（尺八）、坪井チズ子、小林甲蔵（唄）

福岡県＝宮川廉一（唄）、円みどり、（唄）、大石虚童（尺八）、松尾万年（三味）。

名人コンクール優勝者を日本へ

第二回全伯民謡名人コンクール（八一年八月十六日、文協記念講堂）の当日、日本ブラジル民謡文化交流協会と、フジオ企画株式会社の藤尾社長から祝辞を頂いたが、それと同時に「第

二回コンクールの優勝者を来たる十一月二十九日（日）、東京の日本武道館で開かれる日本郷土民謡協会主催の全国大会に出演いただきたく、ここにご招待申し上げるー」というまったく予期しなかった朗報がもたらされた。次いで、フジオ企画の藤尾社長から、「すでにご承知のことと思いますが、この大会には日本全国より美声の持主ばかりが参集し、日本一を競う大コンクールであります。一万人近くの大観衆の前でブラジルの民謡一が登場することになる訳です。主催者の日本郷土民謡協会側とは、すでにこの件に関して打合せ、了承済みです」、とのおよそ次のようなお知らせがあった。

それによると、民謡名人コンクールの優勝者に対して日本への往復旅費および一週間程度の滞在費全額を藤尾社長が負担する、というものである。このため、第二回民謡名人コンクールは、前回に比して格調の高い、熱気のこもった大会ともなった。

優勝者は寺部貞行、第二位＝北原民江、第三位＝松崎トモ子、第四位＝川合節子、第五位＝平井一市の諸氏。優勝者の寺部氏は、北パラナのマリンガ在住、日系二世である。同氏は十一月二十七日当地を出発、同二十九日日本郷土民謡協会主催の第二十二回全国大会（於・日本武道館）に特別出演、新作・新相馬節「はるか、かなたわ、日本の空かヨー、日本恋しや懐かしや」を数万の観衆の面前で絶唱、万雷の拍手を受けた。

次いでの第三回全伯民謡コンクールは八二年七月十七、十八

の両日、文協記念講堂で開かれた。両日とも大会に花を添えるため、歌手十数名による歌謡ショー歌のチャンピオンが催された。今回の優勝者は北原民江、第二位＝松崎トモ子、第三位＝山口包秀、第四位＝松崎梅吉、第五位＝久保田操の諸氏。北原氏は同二十日当地を出発、二十八日の全国大会では秋田長持唄を披露絶唱、大観衆に深い感銘を与えた。なお、この大会には日本の各レコード専属歌手、郷土民謡協会公認の民謡教師二百数十名と、同協会各支部の予選優勝者七百数十名が参加出演し熱唱した。

一方、第四回日本民謡使節団の一行が八二年八月二十五日コンゴニャス空港着で来聖した。メンバーは団長・藤尾隆造、副団長・田村三郎、団員・鎌田静、渡辺巌、中村佳北氏夫人。出演者は伊藤芳本（秋田、万才）、手塚富栄（同、唄）、東京都、日本郷土民謡協会事務長・高橋虚白（虚無僧尺八家）、佐野秀悦（東京、唄）、佐藤栄作（栃木、唄）、照井洋三郎（神奈川、三味）、老成参郷（同、尺八）、扇千仙（同、手踊り）、川崎英世（愛知、唄、三味）中村佳北（同、唄）、藤本春駒（大阪、唄、浪曲、三味）、大山みどり（熊本、唄）　―など十七名であった。同二十八、二十九の両日は文協記念講堂で昼夜四回、翌三十日はイビウナのイビウナ文化体育協会々館で昼夜二回の公演であった。純益金は二百五十万四千クルゼイロス、前回と同じく、各日系団体へ贈られた。

使節団一行は九月一日帰国の途についたがその前日の八月三十一日、伯国日本民謡同志協会主催の歓迎会に出席した藤尾団長、高橋事務長の両氏から帰国の際、コンゴニャス空港で、「貴協会が企画している来春の民謡研修訪日使節団の派遣実現のため協力させて貰いたい。研修場所の選定、各地方民謡大会に合わせてのプログラム作成、歓迎会の開催などについて、帰国後直ちに関係者らと話合ったうえ、その詳細を報告しよう」と、丁重な申入れがあり、筆者や桜庭氏を感激させた。



第四回日本民謡祭の出演者たち。

民謡研修に訪日使節団

これは、日本民謡研修の必要性を痛感した同志協会が、第三回民謡名人コンクールのため作製したプログラムの七三ページに、「来春に予定の日本民謡研修訪日使節団の団員募集」について掲載した記事が藤尾氏の目にとまったからであった。当協会では直ちに役員会を開いてこれを協議、訪日団員の募集を開始、翌八三年五月八日、一行十六名はヴィラコッポス国際空港発の日航機で訪日の途についた。

団長は桐生昭義氏、副は筆者。十日成田国際空港着、翌十一日午前、フジオ企画東京支店の田村氏の案内で日本郷土民謡協会本部を訪問、加藤理事長、高橋事務長と、こんごにおける本部対支部の問題、その他について懇談した（民謡同志協会は、一九八二年から日本郷土民謡協会の海外支部になっている）。

使節団一行七名は同日夕刻、空路秋田へ向う。フジオ企画の藤尾社長その他関係者の出迎を受け貝の沢温泉で一泊。十二日は秋田市を始め男鹿半島その他を観光、夜は市内ホテルの大広間で同市々長、秋田三味線の名人、浅野梅若師、民謡日本一人長谷川久子、千葉美子、佐々木常雄、同実、プロ歌手の小田島徳実諸氏その他と会食後、出席各氏の伝統芸術披露に心をうたれた。以後、七月上旬帰伯まで、各団員はそれぞれ民謡研修、各

地大会などに出席、いまさらながら日本民謡が持つ独得、そして素朴な美しさに感激、また感激の日々をおくった。団員が出席したおもな大会は次のとおり。

▽宝民謡会創立二十周年記念祭典（五月十四、五の両日、大阪市）

▽春駒会創立十五周年記念祭典（五月二十六日、大阪市、新歌舞伎座）、第六部＝８２年ブラジル文化使節団想い出コーナ）

▽日本郷土民謡協会主催、第二十二回春季全国大会（五月二十六、七、八、九の四日間東京都日本武道館。使節団代表として太田貞子＝南部木挽唄、中田加与子＝津軽山唄＝さんら二人が特別出演）。

――――◇――――

第四回全伯民謡名人コンクールは、八三年九月二十四、五の二日間にわたって文協記念講堂で開かれた。主催は伯国日本民謡同志協会、後援はサンパウロ新聞社、ウニベルツール旅行社、M・奥原プロダクション。当時の薮忠綱サンパウロ総領事、加藤辰司・日本郷土民謡協会理事長、日本・ブラジル民謡文化交流協会、日本民謡おさらい教室録音出版、藤尾隆造・フジオ企画社長、日本民謡春駒会その他から祝辞が贈られた。

同コンクールの優勝者は山口包秀、第二位＝梅北トミ、第三位＝松崎梅吉、第四位＝牛渡誠、第五位＝塚田佐市の諸氏であった。優勝者の山口氏は、十一月二十五、六、七、八の四日

間、東京都の日本武道館で開かれた全国大会の最終日（二十八日）、ブラジル代表として津軽山唄を絶唱、万雷の拍手を受け代表の真価を発揮した。



第十八回全伯歌謡大会は、パラナ州マリンガ市で開かれた。

当日の出演者たち

民謡指導の後継者
養成が緊急の問題

ブラジルにおける日本民謡の普及、発展について、筆者は一

九八三年五月から二か月間にわたり民謡の研修と見学に訪日しました。

民謡団体の在り方、研修の方法、民謡で一家を成した諸先生方と精力的に折衝、懇談して参りました。まず、民謡の宝庫秋田では、秋田民謡歌手育成の第一人者である秋田三味線名人の浅野梅若先生と諸先生方。東京の日本武道館で四日間にわたって開催された日本郷土民謡協会主催の第二十二回春季全国大会の見学。大阪の関西、宝民謡連合会創立二十周年記念大会を二日間見学。大阪新歌舞伎座で開催された藤本春駒会結成十五周年記念公演を見学、一般大会開催と趣の変った舞歌式公演であり感銘を深くしました。また、春駒師ともいろいろとブラジルの民謡界について説明、懇談しました。東京では民謡尺八界の第一人者である米谷威和男先生との懇親対談。

日本民謡歌謡学院長の藤本琇丈先生、現在は民謡三味線名人位になり、孫弟子も加えると三十万人の弟子を有する人格者で、筆者ごとき浅学の者と心良く対談して頂き感銘を深くしました(筆者は八年前に藤本先生の海外における弟子になっています)。勿論、先生にもブラジルの民謡事情に関して種々の説明をさせて頂きました。

筆者の見るところでは現在、民謡、三味線、尺八などの基礎指導の出来る教師はおりません。筆者の懸案、日本民謡をブラジルの日系人、二、三、四世の子孫に伝承して置くべきとの念

願―などを談合いたし、家元先生のご努力にすがる外なしなどを話しました。筆者の懇願により、なんらかの方法で協力しますと約束され、こんごは手紙をもって話しを煮つめることを約しました。大阪の吉川幸鷹先生宅に滞在中、先生より民謡や尺八の指導を受けるとともに、先生の教室（大阪、奈良）で研修、非常に参考になりました。

日本においては、すでに民謡の普及や発展の基礎は確立されています。この一例として「日本民謡の音楽基礎知識」米谷威和男著、初・中・後編各二十巻。初心者より玄人まで具体的に細かく説明、この説明書を読みながらカセット・テープで学ぶ方法であります。

初心者用呼吸の仕方、無声音と有声音、胸声、頭声、口腔などの共鳴方法、高低の声の出し方、声の音域の広げる方法、小ぶし、大ぶしの使いわける方法、子音と母音の関連性、民謡の歌声とはどのようなものか、民謡は楽音で歌わねばならないこと、絶対に躁音では歌わないこと。民謡を歌う時の躯の状態は、全身の力で歌い上げるようにすること。民謡上達の秘訣は、メロディイを正確に覚え歌うことーなどを説明書と対照しながら教えております。

尺八楽譜＝米谷威和男民謡選集第一～第五巻。民謡尺八講座＝解説・指導、米谷尺八学院長。米谷威和男カセット・テープによる三味線文化譜第一～第十二巻。三味線講座＝解説・指導、

日本民謡歌謡学院長、藤本琇丈、カセット・テープで、これは民謡指導者にとって必携のものです。また、全国各地民謡指導者の解説テープとして、本場民謡おさらい教室と伴奏用（フジオ企画株式会社々長、藤尾隆造著）。その他、各レコード会社発売のレコード及びテープ。各会主、公認教師、指導員などは上記の豊富な参考資料により教導しています。



一九八三年五月、民謡研修のため訪日した第一回使節団一行は、同五月末に東京の日本武道館で開かれた日本郷土民謡協会主催の第二十二回春季全国大会に出席し、同協会から記念メダルを授与された。

顧みるに、当ブラジルの指導層は如何?、旧態依然として、昔そのままの指導に固守しなんら新味も無い有様なり。極く僅かの人は日本でのように、豊富な教材による指導をしております。当ブラジル民謡界の現情は過渡期を迎えております。この秋に当り、かかる思慮なき考えでは、普及や発展は望むべくもない。各会指導員は一刻も早く、上記の教材を求め正確な指導研究なされんことを切望してやまない次第であります。

我々、民謡指導的立場にある者は、正当の日本民謡を当ブラジルの日系人子々孫々に伝承する考えは、日本語継承の問題とともに偉大なる日本文化の遺産であると確信する次第であります。なお、ことに緊急を要する問題は、民謡指導のための後継者養成の困雉なことがあります。現在の指導者も老令でこんご何年指導出来るか、心細い限りであります。継承者問題に取組むに当りましては、従来の各会、関連性云々など、排外思想のポリチコにこだわるようでは、遠大なる理想の実現は不可能であります。

真に日本民謡の普及、発展を考える方々はこの際一塊となって、この問題を善処しなければならぬことと筆者は考えます。この案は迷案か、名案か解りませんが、日本から唄、尺八、三味線の公認教師を一か年程度ブラジルに招聘して教授していただく案、企画は誠に最良の方法と存じ筆者が訪日の際、日本の各先生方と懇談しましたが、担任者がおりませんので、徒労に

終りました。筆者は結びにならない結びといたします。

一九八四年六日・記

（芸名・松崎尚憧。ブラジル音楽家協会々員、伯国日本民謡同志協会第一副会長兼教師）。

伯国日本民謡歴

猪狩　宗鳳

一九五二年、ブラジルにおける日本民謡研究会を創立。創立者は小林美登利、桜井孝、千葉忠見（以上三名とも故人）、猪狩宗鳳、松崎松蔵、菊地啓、佐々木重夫、岩本芳道、藤山勉ら九名で日本民謡の研究に専心、五七年、母国日本民謡保存会々長、渡辺松月師範と連絡して伯国日本民謡保存会を創立した（創立者代表は猪狩宗鳳）。

猪狩宗鳳の略歴＝福島県富岡町出身、一九〇四年一月二日生まれ。都山流尺八楽会へ入門、一九二〇年に同流奥伝免許。次いで二五年日本民謡師範、佐藤錦水師へ入門、二九年に師範免許。

三一年、農業家族移民として渡伯、義務農年終了後は独立農を営み、五七年サンパウロ市に移る。六六年、日本民謡保存会の渡辺松月師範より師範免許。七一年、伯国日本民謡保存会主

催による日伯親善訪日文化使節団三十六名を引卒して訪日、約三か月間にわたって日本民謡、日本舞踊、日本音楽を研鑽。

一九八三年、ブラジル日本移民七十五周年ならびに伯国日本民謡保存会創立二十七周年を記念し、歴代保存会ヴェテラン四十五名のうちから選抜された

師範　猪狩宗鳳、塚田竹鳳、寺部竜鳳、松崎梅鳳、松本緑鳳、小林輝鳳、松永清鳳、鍵山松鳳、牛渡秋鳳、今野玉鳳、榊原千鳥、土生鈴鳳、大内声鳳、猪狩松香、三岳昭鳳、福田洋鳳、田中好鳳、久保田節鳳、北原民枝、片平広鳳たち二十名により「歴代ヴェテランの唄」と命名して多年の宿願であった日本民謡レコード発行の実現を見、現在に至る。

民謡は〃心のふるさと〃
子孫へ残そう日本文化の灯

佐々木重夫
（伯国日本民謡協会指導員）

華やかにのど自慢大会

サンパウロ市コンソラン街のシネ・テアトロ・オデオン（以下「オデオン劇場」と略）前、時ならぬ日本人ラッシュに、道行くブラジル人たちは、凄いシネマでもかかっているのだろうよと、奇異の眼を見張りながら通り過ぎて行った。

一九五三年正月、カーザ水本主催、歌謡、民謡第一回素人のど自慢大会の開催であった。今から数えて、三十一年前のことである。

民謡部門が設けられるに及び、日本人宴会の席を賑やかにして歌われる〃チョイナチョイナ〃調から一皮脱いだ、初めての審査員付きコンクールとあって、全伯一は誰だろうと会場は満員の盛況であった。（写真次ページ）

審査員第一号は、三好良美（故）、古沢典穂の両先生であった。

また、時のコロニア・カツドウシヤシン弁士界の双璧、野村

愛北、松井春波の春波さん（いずれも故人）こと、民謡に大変な熱の入れようで、春波さんの関係していたラジオ・サンパウロからとして、優勝杯が寄贈されている。

爾来、民謡も年を追うに従って隆盛の途を辿ったが、民謡部門の入賞者で、今に活躍し続けているのは猪狩親一（尺八）、松崎松蔵の両氏と佐々木重夫の三人。さらに、コロニア民謡界に大きな功績を残し、昨一九八三年に故人となった千葉忠見氏も、この時の優勝者である。



なお、大会帰途に於ける「千葉忠見語録」なるものを、語り草までに紹介しておこう。

（イ）　佐々木氏の浪曲入り米山甚句は、純粋民謡でないとの審査員の申入れを正論として、決勝に浪曲を省いて歌ったのは良い。

（ロ）　第二位入賞の女性歌手（逸名）が詩吟入り鴨緑江節で通ったのはどうか。

（八）　第三位の柏木守氏が、今宵出船か、お名残り惜しや……と「出船」を歌ったが、歌謡と民謡の区別をどうするか。

（ニ）　松崎氏が、猪狩氏と組んで、尺八伴奏の追分節は、他に先駆（さきがけ）た第一号として、もっと評価されてよかった。

とにかく、眩しいまでのシャンデリア輝く下、のど自慢諸氏の競演は印象に深い。

聖州義塾と民謡

季節が来れば、紫の花を付ける街路樹ジャカランダの下を、首の鈴を鳴らして通る一連の山羊と、その乳売り少年が過ぎて行った後、モレーナのお下げ髪の少女が、一人物思いげに通る。昔のガルボン・ブエーノ街、そのガ・ブエーノ街の奥まった一室から、尺八の追分節が、哀調をこめて静かに流れて来るのに

ふと足を止めた人もあった。

コロニア日系子弟の教育に当っての先覚、これも私塾の第一号として、全伯に知られた小林美登利先生の経営になる聖州義塾で、メロディは、ここから流れて来たものである。

塾長の小林先生は夙に剣道参段の腕前をもって知られ、また、隠れたる琴古流尺八の名手でもあった。然かも、俗曲と言われる民謡「追分節」をこよなく愛し、むしろ追分一辺倒で、その奥儀を極めんとしているものの如くであった。

この小林先生の尺八に集るところの、所謂（いわゆる）追分節提供者（歌手）は、松崎、藤山両氏に佐々木と、今は亡き千葉、梶、三浦の諸氏であった。猪狩氏は尺八の良き協力者で、小林先生は眼を閉じて、ただ陶然と歌に合せて吹奏、歌手に対して一言も注文、指図がましいことのない、言うなれば求道者の姿であった。

小林先生の剣道行脚（伯国柔剣道連盟指導員として＝戦前＝）にお供した佐々木が、先生はトランクの中に一管をしのばせることを忘れなかった。地方の宿泊地で月でも昇るものなら一〇〇パーセント、附近の人たちと追分節で共に楽しんだと、当時を述懐する。

後年、先生の尺八、追分節は千葉忠見氏、掛の声は佐々木重夫で円盤（レコード）吹き込みを果した。これも第一号である。

この雰囲気といおうか、気運の高揚から、同好者の会といっ

た組織的なものへと進んで行ったのは、至極当然と言ってよい。

聖州義塾内の集（つど）いこそ、その後、諸々（もろもろ）の民謡会派生への濫觴（らんしょう）であったと言うべきだろう。

研究会誕生と第一回大会

「第一号」の筆法づくめではあるが、民謡研究会の誕生は一九五三年である。発起人は小林美登利、猪狩親一、千葉忠見、岩本芳道、桜井孝、梶敏夫、藤山勉、三浦銀蔵の諸氏に佐々木重夫である。

会長も会計も指道員も置かない、文字通りみんなで研究、という気楽な、ユニユークな会として発足した。

その第一回大会というのが、オデオン劇場に於けるのど自慢コンクール以来五年ぶり、一九五八年六月、ブラジル日本移民五十年祭並びに民謡研究会創立五周年を記念し、テアトロ・サンパウロに於て開催された。

この大会の一般の部優勝者は、伊予節の山口さん、二位は博多節の小野さんとなったが、注目の青年部では、線の太い、迫力感に溢るる太田好子さんの庄内タント節、母からの口伝だと言う工藤実君の発声、声量、そして郷土色豊かに歌い上げた津軽山唄、それから天性的絶妙の節廻しで江差追分の丹治富子さんの三人が僅少の差で如上（じょじょう）の紹介順一、二、三

位となり、女性陣が優位を占めた。

さて、民謡研究会と言う会の組織下による第一回全伯民謡コンクール開催の意義は深く、一般に与えた感銘も大きかったが、何故にか以後継続されることがなかった。

さあれ、かつての会場はいずこと、グロリア街の三重県橋に立てば、橋下、高速度道路を疾走する車群の騒音たいにかまびすくして、テアトロ・サンパウロの面影を偲ぶよすがもない。

時は流れているのだ―。

民謡伴奏の人たち

ここで、忘れてはならない当時の民謡伴奏の人たちを記しておこう。

前述のオデオン劇場でのコンクールで猪狩親一、松崎松蔵両氏組が第一号、申したとおり”チョイナチョイナ〃調からの民謡歌手がイキナリ尺八の前に立つと震えが来て歌えない、という草創期である。

小林美登利先生は教育者とあって、舞台に上がることを潔しとしなかったようだが、民謡研究会時代となって、その第一回大会には先生父子（紘一さん）ともども協力出演された。

猪狩、小林両先生に続け、と長野武由（渓竜）、桜井孝（孝童）、さらに六〇年代に至って相馬直次郎、阿部不二也氏等が加わっ

て尺八陣が頓（とみ）に充実されてはいったが、質量ともに備わった、若き世代の今日の伴奏陣を思い、今は亡き前記四氏の当時を偲び転（うた）た今昔の感に堪えない。

三味線の部も、当初至って振わなかった。

勿論、ここで言う三味線とは、民謡の曲を弾（ひ）く三味線を指すのであるが、「銀ナベのお八重姐さん」と岩本芳道氏が研究会の伴奏を担当していた。

六〇年代後半から堀田春三（故）、サン・ジョゼー・ドス・カンポスの高田政光（故）、同じく高松年明、七〇年代に入って、長野武由（尺八と両刀？使い）、和田春子、松田つたえ、本格派の野沢女史（故）、柴田光子、レヂストロの三宅利子、寺本徳一、山口包秀さんたちが加わって、ようやく見るべき伴奏陣が整えられたと言うべきだろう。

▽附記△

尺八界の異色に、二世の小林梅洸さんがいる。琴古流家元、石見梅旭（いわみ・ばいきょく）氏に師事、若冠四十代で梅洸の名を許された逸材である。同好の青年の基本指導に当り、現在の中堅尺八吹奏者、鈴木誠、山田旨朗、菊田隆治、佐藤洋一の諸君を育てた。

小林梅洸さんとは誰あろう前述のコロニア尺八界の先達、小林美登利先生の四男であり、血は争われぬと言うか、たまたま

吹奏される名曲追分節は、父子相伝とも言い得て、その妙なるメロディイは、蓋（けだ）し傾聴に値する。

民謡保存会の設立

民謡研究会から離れて、猪狩親一氏が別会を興し、日本民謡保存会と命名する。一九五八年のことと記憶する。

後年、全伯日本民謡協会が創立されるに当り、その母体となったと評価される保存会の活躍があるが、その指導者は猪狩氏であり、藤山勉、松崎松蔵氏等がこれを扶（たす）けた。この猪狩氏に対し、民謡協会は一九七四年、名誉会長に推戴してその功績に感謝するところあった。

三つの大会（六〇年代以前）

▽その一　一九五九年八月、当時コロニアシネマ興行界一方の旗頭、平田公泰氏が主催した日本民謡コンクールがある。ブラス区のテアトロ・コロンボが会場であった。この劇場も取り払われて今は無い。また、このコンクールも一回で終わった。

▽その二　一九六〇年一月二、三の両日、シネ・パラマウントで、全伯音楽連盟、カーザ水本の共催で第八回全伯歌合戦が開催された。すでにこの頃から歌謡歌手がパラナ州方面からも出場するという風に、内容、質量ともに全伯的であった。

民謡部門に出場の佐々木と土生、千葉両氏がそれぞれ一、二、

三位を占めた。

全伯歌合戦を主催して、その発展に尽して来たカーザ水本は、第十回を期に発展的に主催を全伯音楽連盟に委ねることになった。特に附記してその功績を讃えたい。

▽その三　全伯音楽連盟、カーザ水本共催の第八回歌合戦のあった同年の九月、民謡楽しむ会主催で「民謡祭り」と言うのがあった。

賞牌も一味違った優秀賞・敢闘賞で、山本鶴子さんがこの賞二つながらを手にした。

この、「民謡楽しむ会」の名付親となり、資金面をバック・アップしてくれたのが、コロニアの元老的存在の蜂谷専一氏（故）であった。

氏は長唄を趣味とし、同好の人たちを集めて楽しんでいた。その蜂谷さんに協力を願ったと言うのには訳があった。それは、日本から時の海外日本婦人協会の会長をしておられた本田トヨ先生が、一流歌手の渡辺はま子さんを伴って、歌の交流で来伯する旨が、民謡研究会宛に連絡があり、ソレ！という訳で蜂谷さんを担ぎ出しとなったものだ。この演出と企画は、日頃（ひごろ）日本民謡に理解を持ち、昔、蜂谷商会の番頭格で信任の厚かった瀬尾武右ヱ門さん（故）であった。

後日譚がある。閉会後、この一夜漬け的民謡祭りの不備を衝（つ）かれ、汗を流している世話人たちを見て、蜂谷さんの肩を

ポンと叩き、「蜂谷さん、楽しむ会ですよ」と貫録充分の本田トヨ先生の笑い顔に、ニッコリと応えて引き下がった一幕、どちらも堂々としていた。専一翁、あの世でニガ笑いをしているかも　ー。

ちなみに、渡辺はま子さんは、事情で来伯を取り止められた。



第一回全伯のど自慢大会の二日目、午後七時からの開会に先立ち欣然と舞台に登場、得意のアコオデオンを奏でるのは〝バイオンの王者〟ルイス・ゴンザガ。右端は松平晃）。

民謡早苗会について

一九六一年春の頃（九月か）、民謡早苗会と言う名の、響きのよい会が誕生して、民謡界に爽（さわ）やかな話題を提供した。早苗会と言う名の示すとおり、若々しい二十代の青年たちの集りで、石川諭、大槻弘・彦巳の兄弟、山浅不二夫、山崎明、伊那太一、菅原光義の諸君に、紅一点の梅田ともえ嬢というメンバーで、いずれも美声の持主であった。大槻彦巳、菅原光義両君の、自習自得になる三味線と、山浅不二夫君の尺八で、若者たちらしく楽しみ、研究し合っていた。この会を後援したのは、大槻重平、山崎福三郎（いずれも故人）に佐々木重夫であったが、惜しむべし、活動の中心的な弘、明の両君が早世し、他会員もヨメを貰い、オヨメに行くして、なかなかに家庭と趣味は年代（齢）的にも両立しなかったようだ。

そして、早苗会の「旗」は再び上がらなかった。然し、石川諭君ひとりその後ますます冴えて、かつての亡き僚友を偲ぶかのその絶唱は、全伯民謡界の第一人者としての貫録を備え、去る一九七九年、全伯音楽連盟主催コンクール民謡の部の優勝者として日本テレビ株式会社主催の第二回民謡大賞に招かれ、ゲストとして出演、歌った「北海盆唄」は好評さくさく、伯国日本民謡の水準の高さも評価されたと伝えられる。〃伯国から日

本へ〃　の民謡歌手第一号である。現在、全伯民謡コンクールの審査員を勤めているが、新進の尺八吹奏者の山田旨朗、練達の三味線伴奏者である古島末雄両氏の協力を得て、ユニークな「ブラジル少年民謡会（少女も含む）」の育成に当っているのは、その道を愛好する者として如何にも立派である。

葬送の曲は追分節だった

＝再び小林先生について＝

小林美登利先生急逝の計報に、弟子たちが驚き相集った。愛嬢ミワさんの琴、愛息紘一氏の尺八合奏になる「六段」の調べで、カーザ・ヴエルデ区の自宅出棺であった。そしてドットル・アルナルド大通のセミテリオ・レデントール（外人墓地）に於て柩の正に覆われようとする時、静かに流れて来た尺八の音―。

粋な舟子が追分唄う
つれて泣くかよ浜千鳥

長野武由氏の尺八に、千葉忠見氏、佐々木重夫が、声を抑え、哀詞を内にこめて歌う追分節は、先生の生前愛唱されたものであった。

終わって、古武士然と控えておられた多田栄一郎先生が〃ウム〃とうなずき、感に堪えたといった様子。

クリスチャンの小林先生を弔うに、追分節を以てするとは、異端とされるではあろうけれど、一人、この先生にして許され

てもよいのではなかろうか　―。

一九六一年、秋風爽やかに立つ三月。

行年　七十歳。

画期的な伯国日本民謡協会の設立

サンパウロ市近郊一円を傘下に置き、遠くパラナにはマリンガ支部あり、という風に保存会の活躍、一方に歴史と伝統を持つ研究会（代表・岩渕哲男）、阿部不二也氏率いる友の会、また、一方の旗頭として米谷、松崎両氏の同好会あり、サン・ジョゼー・ドス・カンポスには森野、高松両氏を中心とする民謡会と、それぞれ地域的に斯道の普及発展に努めていたが、これを打って一丸、相互の親睦交流を計るとともに、全伯大会をしてより権威あるものとなすべく、猪狩、千葉、松崎、藤山、山下、長野、荒木（宏）、高松年明の諸氏相計り、「伯国日本民謡協会」設立の運びに至った。

時は、一九六八年五月。今を去る十七年前である。

初代会長は弁護士の内山良文氏で、爾来十七年間の会長職は、記録的であろう。会員の信望を一身に集めている。これを補佐する開田五郎、猪狩武俊の両第一、二の副会長は、時に会長を代行して会務を総覧し、幾多の艱難を克服して、今日の協会の基礎を定めた功績は大きい。

協会創立記念第一回コンクール

伯国日本民謡協会の創立を記念しての第一回慈善協力全伯民謡コンクールは、一九六八年十一月、文協講堂に於て開催され、出場者百余名が、晴れの全伯一を目指し盛会だった。

壮年部優勝者の浦山光子さんは、今なお若若しい張りのある歌い方のヴェテラン歌手として活躍し、老年部の飯島スギさんは第一線から退いて久しいが、ヴェテラン部優勝の茂木庄三郎氏は、現在、後進の指導に当っている。

協会事務所と和気専任理事の功績

伯国日本民謡協会の十七年史を語る時、忘れてならないことに、協会事務所の設置がある。協会発展のためには、何にが何んでも事務所が要る。このことは勿論、正・副会長初め全役員の切望するところではあったが、当時の経済状態では、思うに任せなかった。

これに対し、時の専任理事、和気保氏の執念というか、その熱意は、場所（ポント）、広さ、家賃と、三つながらのバランサを考えて奔走の結果、一九七四年、現在のガルボン・ブエーノ街五七三番七号室に広々とした所を見つけ、一同これに賛成し、家賃は当分有志の出資ということで発足、開所した。

程なく一般会員の会費で賄（まかな）い、集会に、地方支部

との連絡に、会員の練習教室、舞踊教室ともなり、百パーセントにその価値を発揮している。

名専任理事、和気保氏今や亡し、一九七六年二月歿、享年六十七歳。

民謡協会十七年史を語るということでは、総元締の協会の台所を預って、その手腕と誠実を高く評価されている荒木宏政、水上弘（法定）の両氏と、十七年間の協会記録をまとめて来た及川也周平書記の根気。これに開田第一副会長を数え、猪狩親一、内山良文の両氏を別格に、協会勤続〝四人衆〟というにふさわしいと思うのだが　―。

伯国日本民謡同志協会

一九七五年七月、時の協会第二副会長であった松崎松蔵氏が、その任を辞し、協会を離れて、新に伯国日本民謡同志協会を設立し、同工異曲の名人大会と銘打って全伯大会を開催した。そして一九八一年度以降、優勝者を日本に送り、大会に出演（ゲストとして）させる、と言うことを続けて来ている。なかなか出来がたいことである。

第一回日本民謡使節団

伯国日本民謡協会も、順調に第九回全伯コンクールを迎え、出場歌手も、壮年、中年、高年、寿年、ヴェテランの五部別制

で覇を競い、その数も二百余名を数える盛大さであり、そして天下泰平を謳っている時であった。

日本民謡使節団来伯の報は、忽ちコロニア民謡界に大きな刺激を与えた。

一九七六年、サンパウロ新聞社招聘、日本側の藤尾龍造氏企画に成る第一回チャリティ・ショーがそれである。

佐々木基晴、佐々木常雄、石ケ森泰治、柴田隆章、浅利みき、山本なつ子、高橋つや等という顔ぶれは、いずれも日本一のプロ歌手揃い。ブラジルでも恰（あたか）も日本民謡ブームに乗っている時とあって、伯国歌手たちにも得るところ大であった。特にプロ歌手のマイクに向っての自然な、そして洗練された歌唱態度に打たれ、また、絶妙の津軽三味線合奏の旋律に陶酔したことであった。

なお、このショーは隔年ごと二、三回と続けられ、成功を収めている。



第一回全伯民謡コンクールの出演者一同



伯国日本民謡協会の発会、創立総会の出席者ら。前列左から二人目・藤山、藤井文協事務局長、猪狩、内山、延満文協会長、千葉、阿部。後列左から二人目・荒木（宏）、長野、六人目・山下、十人目・森野の各氏。

使節団のブラジル公演

一九八三年は、ブラジル日本移民七十五周年に当る。民謡協会ではその記念事業として母国日本民謡界の一流歌手を招致し、ブラジル公演を企画の上、大いに奔走の結果、同年七月、

団長　佐々木基晴（歌）文化庁芸術賞受賞
　　キング・レコード専属

団員　鈴木正夫（歌）ビクター・レコード
　　専属　　村松直則（歌）キング・レコード専属
　　田原繁蔵（歌）日本民謡協会昭和五十五年度大会運輸大臣賞

　　竹氏　修（歌）第十八回ＮＨＫ全国大会優勝
　　三浦一子（歌）日本民謡協会昭和五十五年度大会内閣総理大臣賞

　　吉田光代（歌）佐々木基暗民謡教室
　　小田島徳旺（三味線）日本民謡三味線最高師範
　　佐々木基祐（三味線）右に同じ
　　松本晁章（尺八）日本民謡尺八最高師範
　　品野干城（尺八）右に同じ
　　花柳光ひろみ（舞踊）花柳流名取、舞踊家
　　花柳光とき　（舞踊）右に同じ
　　石畑清美（ブラジル公演司会）

役員　小笠原勘一



〔団長〕
佐々木 基晴（唄）
文化庁芸術賞受賞、日本民謡一般と江差追分の大師範、キング・レコード専属、北海道函館市出身。



〔団員〕
鈴木 正夫（唄）
ビクター・レコード専属、「涙のお立酒」大ヒット、福島県相馬郡出身。



〔団員〕
村松 直則（唄）
キング・レコード専属、テレビで大活躍の若手歌手、連和市出身。



〔団員〕
田原 繁蔵（唄）
日本民謡協会（財）昭和五十五年度津輪大臣賞受賞、北海道函館市出身。



〔団員〕
吉田 光代（唄）
佐々木基晴団長の愛弟子



〔団員〕
三浦 一子（唄）
日本民謡協会（財）昭和五十五年度内閣総理大臣賞受賞、北海道函館市出身。



〔団員〕
竹氏 修（唄）
第十八回NHK全国大会優勝、富山県富山市出身。



〔団員〕
小田島 徳旺（三味線）
日本民謡三味線最高教授、秋田県秋田出身。



〔団員〕
佐々木 基祐（三味線）
日本民謡三味線最高教授、北海道函館市出身。



〔団員〕
松本 晃章（尺八）
日本民謡尺八最高師範、北海道札幌市出身。



〔団員〕
品野 千城（尺八）
日本民謡尺八最高師範、北海道上磯郡出身。



〔団員〕
花柳 光ひろみ（舞踊）
舞踊家、花柳流名取。



〔団員〕
花柳 光とき（舞踊）
舞踊家、花柳流名取。



〔団員〕
石畑 清美（明舎）
ブラジル公演司会、北海道函館市出身。

以上の豪華メンバーによる移民七十五周年慶祝民謡使節団来伯の実現となった。これには、使節団々長の佐々木基晴師と、全団員諸氏の物心両面に於ける協力があったればこそであった。

七月十六、十七日の両日にわたる文協講堂に於ける公演に続き、カンピーナス、バウルー、マリンガ、モジ・ダス・クルーゼスなどと四地方の公演は、その企画、聴衆動員数に於いても空前絶後と言えるだろうし、行程実に二千余キロ・メートルに及ぶ夜を日に次いでの強行軍は、団員各氏の燃ゆるような同胞愛なくしては、と一同を感激させた。

使節団の日本出発に当って、日本民謡界の総元締、財団法人日本民謡協会理事長の春日由三氏が、日本移民渡伯七十五周年に敬意と祝意を表し、ブラジルに於ける日本民謡の発展を祈る旨の、達意の名文に綴るメッセージを団長に託し激励されている。

民協、ジャカレイ支部の快挙

民謡使節団来伯公演の熱気の後を燃えての第十六回全伯コンクールも盛大であった。その壮年部に於けるジャカレイ支部の三年連続優勝は、快挙と言うべきだろう。近年、実力伯仲の出場歌手の各部門別競演は激甚を極めている。恐らく、この記録を破る支部の出現はこんご難しかろう。

同支部創設以来、十年間にわたっての名支部長、渡辺亨氏の熱意、会員相互の結束と親睦の結実とも言えよう。なお、同大会に於ける優勝者は次のとおり。

◇一九八一年　江口　政江
◇一九八二年　永野　悦子
◇一九八三年　田中　武美

なお、この壮年部トリオのほかに、一九七九年度の第十二回コンクールでは渡辺亨（高年部）、太田和昭（中年部）の両君が優勝して、ジャカレイ支部の黄金時代を築いた。



第十六回全伯コンクールに優勝したジャカレイ支部の出演者ら。前列右から江口政江、永野悦子、後列右から田中武美、渡辺亨、太田和照さん。

民謡使節団を迎えたブラジル少年民謡会



高松宮さま、民謡にご関心

一九七六年のことであった。佐々木重夫作詞、歌の「移民節」（日本民謡北洋節の編曲で、日本移民渡伯六十周年記念に作る）、同じく土生文吉歌う「移民追分節」（猪狩親一作詞、江差追分節の替歌で、日本移民渡伯五十周年記念に作る）の録音テープが、皇太子さまへ献上され、ご嘉納になった。その経緯を次に記そう。

宮城県鳴子町の素封家で、日本で勉強する日系留学生を、年末のナタールに招待して面倒をみて来たことから、「パパイ」の愛称で親しまれている高橋祐幸さんがブラジル開拓の夢を託して、愛息幸衛さんを移住させた（現、スザノに在住）。このため、高橋さんは訪伯すること度々、偶（たまたま）県人会の席上で歌われた前述の「移民節」と「移民追分節」が、移民の心を伝えていると同氏の感動を誘い、後日、その録音テープを送付して貰いたいと所望された。

高橋さんは、高松宮さまがご趣味とされる鳴子スキー場に於けるお宿を承って、長年ご親交をいただいている由で、これをご縁に宮さまへ件（くだん）のテープをお聴かせし、皇太子さまへ献上のお取次ぎを願ったところ、快よくお引受け下されたというのである。

二年後の一九七八年、宮城県人会の訪日団（団長・大橋鉄雄会長）に加わり、佐々木、土生相携え、高橋、大橋さんらに伴われて高松宮邸に伺候、お礼言上、そして宮さまご夫妻のご前で一節ずつ謹唱に及び、茶菓のご供応たいいただいて引下がった。

名誉なことではある。



高松宮、同妃殿下に「移民節」を披露する土生文吉、佐々木重夫の両氏（右から高松宮両殿下、一人おいて土生、佐々木）。

移民節

一、ドラよ露笛よ　移民船
風に落葉の　行方とや
なれど燃ゆるか　胸に火の
海の彼方に　幸ありと

二、鉄道敷設の　枕木で
結ぶ故郷の　母の夢
さめりや備（かた）えの　ピカレッタ
露に濡れては　手に重い

三、友は他州に　移り行き
南十字の　星影を
妻と仰いで　語りつつ
古里遠く　憶うのよ

四、植民地（むら）で育った　子や孫が
語るイッペの　花の色
移民老いつつ　うたかたの
消えてこの地の　土となる。

移民追分節

母国離れて　ブラジル国に
　　ヤンサノエ
幾夜重ねた　波枕
老いも若きも　希望に満ちてネ
船は名に負う　笠戸丸
七転び八起きしてこそ浮世じゃないか
沈まにや浮かべぬ　世のならい
礎き上げたよ　第二の故郷をネ
孫子（まごこ）栄えて　五十年

結び

〃日本民謡を二、三世層へ〃と言う民謡協会の念願達成への道は、たしかに険わしい、といって投げてはなるまい。前に記した一九八二年度壮年部優勝者に二世の永野悦子さんがいる。他にも幾人かの優秀歌手がいるはずだ。

協会の現行規定によれば、壮年部は四十五歳までとなっている。

先細りという悲観的材料とはならないまでも、壮年部出場歌手が年毎に減少して行くことに対し、打つ手はないものか。指導者の考え方、二、三世層に入って行くアイデア、といったものの研究、いろいろとあろう。

壮年部を他に、中年部、高年部、寿年部別の出場者は総体的に増えて行ってるとも減ってはいないのだから　―。

物故著名

一九五二年末、故人となった民謡界功労者の名を列記する。没年月日、年齢などは省く。

また、逸名もあろう。お赦しを願い、みんなの冥福を祈る。（敬称略、順不同）。

三好良実、小林美登利、河合貞一郎、千葉忠見、桜井孝、阿部不二也、梶敏夫、山崎福三郎、大槻重平、堀田春三、長野武由、三浦銀蔵、相馬直次郎、和気保、長谷川源、岩渕哲男、松田つたえ、古沢和子、森野留蔵（サ・ジョゼー）、高田政光（同上）、岡部貴（モジ）、伊藤タリノ（同上）、黒田秋男（レヂストロ）、尾崎春治（同上）、阿部実（マリンガ）、門間明（レジストロ）

合掌

後書き

日本人ブラジル移住七十六年の歴史から見れば、半分にもならない五分の二の三十一か年、コロニア芸能史の民謡篇なるものの記述は、いと簡単にも思われる。

民謡協会設立されて十七年、この間の行事、議事録は明瞭に記されているのだが、問題はそれ以前のことなのである。

メモ、あるいは日記に収めるなどの同好の士は稀で、また、散逸の憂目にもあっているし、年々歳々、所謂（いわゆる）〃語り部〃的な人も尠くなって行く。

菲才も省みず、その纏め役を回されて、そっちによろく、こっちに打ち当るして資料の収集につとめた。

歴史問題で言うところの、誰が、何時（いつ）、何処で、何をしたのか〃誰が〃と言う人脈の点では、それほど複雑なものではなかったが、何時（いつ）となると瞬昧模糊（あいまいもこ）としている点が多い。

そこで、列記ということの他に、〃読みもの〃風にと考えたが、ペン、これに及ばざる、かくは杜撰（ずさん）なものとなって、汗顔の至りだ。乞判読。　一九八四年・四月記

伯国日本民謡協会（調）

（文責・筆者）

―――◇―――

伯国日本民謡協会傘下の各地支部は次のとおり（順不同）。

サンパウロ民謡会　　日本民謡好友会
ジャカレイ民謡愛好会　　協会中央支部
聖北好友会　　中央好友全
協会レジストロ支部　　日本民謡大和全
日本民謡愛好会　　日本民謡保存会
サン・ジョゼ・ドス・カンポス支部
クリチーバ南パラナ民謡保存会
ペレイラ・バレット支部
モジ・ダス・クルーゼス民謡会
サン・ベルナルド日本民謡会
カンピーナス日本民謡会
ビラ・カロン日本民謡会
S・C・P・T・民謡親睦会
レジストロ好友会

尺八は中国から伝来

縦吹の管楽器の一種。大きく四種類に分ける。

（1）古代尺八　雅楽で使用したこともあるので雅楽尺八ともいわれる。奈良時代に中国から伝来した。長さは種々異なるが、その標準と思われるものは、現在の曲尺の一尺四寸四分五厘のもので、指孔は前方五、後方一で七声音階が出せる。歌口（吹口）には角（つの）をはめてない。真直な管で、節が三個ある。この古代尺八は平安朝の初期までは雅楽の楽器と使用され、「源氏物語」にもその名が見えるが、平安朝の中期に滅びた。

（2）一節切（ひとよぎり）尺八　尺八と同じく、前面に四孔、背面に一孔の指孔を持つ縦笛。竹製で一個の節しか持たないので一節切という。

（3）普化（ふけ）尺八　普化宗で使用するから普化尺八という。主として虚無僧が吹奏するので虚無僧尺八とも呼ぶ。普化宗から出た琴古流尺八や都山流尺八などすべて同様の楽器を使用している。長さは現在の曲尺の一尺八寸が標準で、一尺二、三寸も多く用い、長いものでは三尺位のものも稀れに使われている。普化宗の結社は、実は豊臣家の浪人達によって結成された擬似宗教団体で、尺八は一種の武器としての必要から、竹の根

元の強い所を使用することになったらしい。後には次第に宗教化し、尺八は楽器でなく、法器であると主張された。指孔は前方四個、後方一個で、五声音階を奏するように出来ている。但し、指の開閉の技巧によって、洋楽の七声音階を吹奏することも不可能ではないが、非常に不自由であり、困難である。

（4）新尺八　前記の普化尺八の不自由さを脱脚すべく改革されたのが、明治の末年から試みられ、川本晴朗によって実用化された七孔尺八と、尺八とフリュートの折衷楽器オークラロである。七孔尺八は前方に指孔六、後方に一を有し、七声音階を完全且つ自由に奏することが出来、運指次第で、D音を基準に、十二律の長短両音階を三オクターヴの音域において演奏することが出来る。オークラロは大倉喜七郎の考案になるもので、歌口だけは尺八に似ているが、材料が金属製で、多数の鍵を付けたもので、フルートに近い。半首階の吹奏も自由で、便利であるが、音色がやや金属的であることが、一般の普及を妨げている原因であろう。

財団法人国劇向上会編著（代表・河竹繁俊）発行の「芸能辞典」より転載。

民謡分布図

流布せる民謡の主なるもの54種

1 江差追分
2 松前追分
3 津軽よされ節
4 山　唄
5 秋田追分
6 秋田甚句
7 南部追分
8 秋田おばこ
9 秀子節
10 麥つき唄
11 本庄追分
12 酒田追分
13 遠島甚句
14 さんさ時雨
15 山形おばこ
16 越後甚句
17 越後追分
18 佐渡音頭
19 佐渡おけさ
20 佐渡甚句
21 おけさ
22 相馬甚句
23 相馬流れ山
24 玄女節
25 会津磐梯山
26 米山甚句
27 三階節
28 磯　節
29 草津節
30 八木節
31 信濃追分
32 小原節
33 横櫛音頭
34 山中節
35 潮来出島
36 大漁節
37 木曽節
38 伊那節
39 木遣節
40 安来節
41 出雲追分
42 名古屋甚句
43 田植唄
44 兵庫音頭
45 大島節
46 伊勢音頭
47 串本節
48 土佐節
49 黒田節
50 まだら節
51 はんや節
52 しよめ節
53 おてもやん
54 鹿児島小原



第2部

演劇

日本では歌舞による象徴

〔演　劇〕　演劇。それは東西ともに神の霊力を得ようとした呪術から発しています。その底流に息づく変身、模倣の精神は、長い歳日をかけて技を生み、人の喜怒哀楽を虚構の空間に映し出してきました。

演劇の起源は祭政一致…

天岩戸に隠れた天照大神が舞いで誘い出されたという逸話は、日本の演劇の起源を暗示しています。神々の前で天鈿女命（あめのうずめのみこと）が演じた舞こそ、〝神を招く技〟＝オギワザ（後の俳優＝オギワザ＝の語源）だったからです。これに対しギリシアでは豊作や戦勝を神に祈る行事＝ＤＲＯＭＥＮＯ

Nからドラマが生まれました。

因みに紀元前六世紀頃、葡萄と酒の神＝デイオソニスを讃える祭りは、市民が〝山羊の歌〟（ＴＲＡＧＯＩＤＩＡ＝悲劇の語源）を舞唱する国家的行事でした。ここには神を軸に人々が結ばれた祭政一致の典型がみられます。

さらに中国のそれは漢代初期の『礼記』の〝楽論〟にみられます。つまり儒教的倫理観により楽と礼を結び、楽舞にも善政の精神を求めました。こうした儀礼とは別にギリシアでは祭りの賑やかな〝行列の歌〟＝ＫＯＭＯＩＤＩＡ（ＣＯＭＥＤＹの語源）から喜劇が誕生…これ以前、物偽（ものまね）芸人による娯楽劇＝ＭＩＭＯＳも盛んになり、劇空間は神の領域から大衆のそれへと拡大されました。同様に日本でも祝言を述べる〝ほかいびと〟が生まれ、演劇が一般化しました。

西洋では台詞による写実

西洋の文学性、東洋の娯楽性…

西洋演劇は戯曲にもとづいた台詞劇です。

この流れはギリシアのソホクレスから今日まで一貫しています。

これは神や英雄を讃える叙事詩を主題に、合唱団と指揮者（俳優の起源）との対話が基本型だったからです。

この文学性に対し、東洋では歌舞です。中国の京劇、韓国の唱劇などはその代表です。

因みに西洋の台詞に対比されるのが、日本の語りもの＝能、浄瑠璃、歌舞伎なのです。ここには言語を主体にする演劇空間の創造よりも、歌舞音曲を重視する傾向が濃厚です。この遠因はすでに奈良期にあり、当時、貴族は大陸伝来の舞楽を、後に庶民にも渡来物の伎楽や田楽から分派した猿楽などに親しみました。

一方、演劇の上演方法は東西で異なり、西洋では戯曲は同一でも演出方法は各時代で変化しました。逆に日本では各流派が世襲で伝統を築いてきたので、公演形式はいつの時代でも不変でした。この背景には枕詞や季語と同様、日本独特の〝様式美〟尊重の心があったからではをいでしょうか。

舞台の二つのタイプ＝写実と象徴…

舞台は劇の内容でタイプが異なります。ギリシア史劇は野外で行ない、客席＝ＴＨＥＡＴＲＯＮは丘の斜面に半円形に造られ、俳優は円形スペース＝ＯＲＣＨＥＳＴＲＡ上の舞台で演技しました。この三方から観劇できる形式が日本の能舞台に似ているのは興味深い点です。

シェークスピアの舞台も当初は半野外でしたが、後に屋内劇

場で上演しました。さらにルネッサンス期のイタリアから透視法の背景装置の移入後、写実性ゆたかな散文劇が盛んになり、演技もリアルになりました。

一方、日本の舞台の特徴は、歌舞伎の〝花道〟にみられます。また、背景、書き割、引き幕、音曲の高低や相子木一つで時間推移を表現しています。と同時に演技も象徴的になります。このように奥行きのある空間を一つの平面に演出する方法は日本独特です。これは一幕ごとに場面を固定している西洋のそれと対照的です。しかし〝花道〟がもつ俳優との親近感や艶やかな音曲に酔いつつ、一方では近代的なリアルな台詞の妙味も楽しんでいるのが現代の私たち日本人ではないでしょうか。

（日本アイ・ビー・エム㈱発行「心とかたち・東西南北」から。監修・早稲田大学　教授　河竹登志夫）。

移民芸の真髄

伯光団の誕生

醍醐麻沙夫
（作　家）

（　1　）

昭和九年（一九三四）十一月。ブラジル国サンパウロ州……。

世界的な需要増大の波に乗って、綿作が景気を呼んでいた。点在する珈琲園を埋めつくすように綿畑がどこまでも拡がっている。ここは十年前までは原始林だった。森の中に鉄道が敷かれ、イタリア人、シリア人、ポーランド人、ポルトガル人たちの移民が森を拓いていった。日本人移民も多かった。手頃な面積を僅かの入金で入手できる原始林は、資本の少ない移民たちにとって独立の近道であった。入植した各国移民たちはそれぞれの集団地を形成していた。それは、コロニア（植民地）と呼ばれていた。

サンパウロ州奥地の地形は全体としてはあくまで平坦だが、かなりの起伏があった。二・三キロの幅を持った波のようだった。波の頂点に立って眺めると、珈琲園と綿畑と原始林がはてしなくうねりながら続いている風景は、緑色の大海原のようであった。赤土の細い道がコロニアからコロニアへと続いている。その道をもっと先へ辿っていけばいつかは鉄道の駅に着く筈であった。しかし現実には駅どころか集落すら見えない風景がこの先どこまでも続いているように見えた。

一人の母親と三人の子供が真昼盛りの道を歩いていた。みんな、薄汚れた小麦袋につめ込んだ荷物をかつぎ、母親はその上に細長い箱を持っていた。その箱には三味線が入っていた。光石たけの（三五才）、忠（十三才）教継（十才）、和子（七才）の四人だった。「疲れた……母ちゃん」、和子が言った。「一休みして行こうね」、たけのは答えたが、腰をおろせそうな日蔭の場所はなかった。一キロほど先の右手にまだ開拓されていない原始林があって、道はその横を通っていた。

「あそこまで行って休もう。こんな処では暑いばかりだからねえ」。

そう言って振向くと、ムギワラ帽子の下から和子は母を見上げてうなずいた。汗に赤土の埃がついてドーランを塗ったようなひどい顔をしていた。目だけがキラキラと光っている。

休もうと思ってしまうと、たった一キロの道がひどく長かった。雲一つないサンパウロ州奥地特有の濃い青空の中心に、白熱した太陽がはめ込まれている。陽炎で赤土の道の行手はゆらゆらと揺れていた。今きた方を振り返っても、道はやはり揺れているのだった。

ようやく森の端について母子たちは身を投げだすように木蔭にへたり込んだ。森の奥からヒンヤリした風が吹いてほてった体を冷してくれる。

たけのは出掛けに貰ったラランジャ（オレンヂ）を袋からだして子供たちに分け与えた。

「おいしいかい？」

「うん」

頷いただけで子供たちはラランジャの汁をむさぼり吸った。暑い太陽にはぐくまれて、ブラジルのラランジャは日本の柑橘類からは想像できない甘さを持っていた。甘い汁の一滴一滴が疲れた体にしみわたるようである。

様様の昆虫……特にブヨとチョウ……が汗の臭いをかいで森の中から出現し、四人にまとわりついた。ペッタリと皮膚にとまり塩分を吸うのだ。疲れ切っているときは気にもならなかったが、疲れが少しとれてくるとうるさくて落着いて休めなかった。温帯とちがって、この国の自然は何から何まで極端だった。ラランジャの甘さもチョウの激しさも温帯の国では想像できない

ことだった。チョウの群が人の顔にたかって塩を貪欲になめるなどかって思ったこともなかった。こんな森の端で弁当を食べていると、煮物にアブやチョウがたかるので一口食べてはあわてて蓋をしなければならなかった。まるでチョウたちと弁当を取りっこしている様だった。

「そろそろ行こう」

まだ休みたそうな子達に声をかけてたけのは立ち上った。日本人のコロニア（植民地）からコロニアへと母子は旅をしている。今日の目的地は遠かった。土地の男たちは馬で往き来するからさほどでもないが、荷物を持っての子供連れに道ははかどらなかった。

森の端の道を歩くあいだ、チョウの群は四人の周りを飛び交っていた。黄色の小さなチョウが多かった。モルフォ蝶も紫色の金属的な光沢を太陽に反射されながら飛んでいたが人にはさほど近ずかなかった。モルフォ蝶の本当の美しさは、森の中で強い熱帯の太陽の光を反射させながら飛ぶ姿を見ないと分らない。緑を背景にしてキラッと紫色がきらめき一瞬消え、数メートル先で再び光るのだった。

それを目で追っていると、寄生木の赤い花が目にとまり、ふっとそれに気をとられるともう蝶はどこへ行ったか分らなくなるのだった。

いま蝶を見ていたのがあやかしであったように、森はシンと静

まっている。

「風流なもんだねえ……風流すぎるかな」

まとわりつくチョウの群をはらいのけ歩く子供たちを眺めて、たけのはそんな事を呟いた。ふっと、チョウをあしらった踊りをやってみようか、と思った。竹の先につけたチョウを操作するのはむずかしいから自分がやるとして、子供たちには何を踊らせようか。獅子なら良いが、作るのが大変だ……。思い切って作ってみようか？　寺小屋へ手習いに行った娘が帰りにチョウとたわむれる踊りなら、チョウと習字帳さえ作ればすぐできる。それがいいかもしれない。

しかし……と彼女はすぐ心配になるのだった。こんな激しいチョウの群の棲む国で、たった二羽のチョウが長閑にヒラヒラ舞う踊りを踊って、果して見る人が喜んでくれるだろうか？あまりにも現実とかけ離れた絵空事のような気がしないだろうか。いや、それだから良いのだ、と彼女は思い直した。長閑なチョウなど現実には存在しないからこそ、見る人は祖国の春をしのんで喜んでくれるにちがいない。

彼女がそんな風に演し物のことを一心に考えながら歩み続けていた。いつの間にかチョウの群もいなくなった。

馬車の音が後でした。母子が道をよけると馬車は停った。シャロッテと呼ぶ一頭立ての小型馬車だった。黒人の男が一人

で乗っていた。男はしきりに何か言いかけたが、たけののポルトガル語はまだ幼稚だった。

「こわい！」

と和子が言って、母の手にしがみついた。まだ黒人に馴染んでいないのだった。

男は「どこへ行くのか？」と訊ねているようだった。たけのは行手を指して「コロニア・ジャポネーザ」（日本人植民地）と言った。

「遠い！」（ロンジ）と男は驚いたようだった。乗れ、乗れと手真似ですすめた。

狭い馬車に四人は乗せて貰った。御者台にたけのと和子が黒人と並んで坐り、後の狭い荷台に男の子が二人ちぢこまって乗った。「チョッ、チョッ」と男が舌を鳴らすと馬は走りだした。

凸凹の土道で馬車はガタガタ振動し、馬車に乗るのも眺めているほどは楽でないことをたけのは知った。暫らくすると三又路にでた。

男は馬車を停めた。男は右へ行くのだった。

左を指し、彼は、「コロニア・ジャポネーザ」と言った。馬車の男は、日本人殖民地への道と母子四人の姿を替るがわるみやった。「トッダ・ビーダ・パラ・フレンチ」とも彼は言った。

それは田舎風の言いまわしで、その通りに訳せば「一生、前へ進め」となる。「ずっとまっすぐに行け」という意味だった。

「オブリガード」（有難う）、「オブリガード」。四人は口々に礼を言った。黒人は白い歯をだして手を振った。

いままで何となく恐しく感じていた黒人だったが、その男が柔和な目をしていることに彼女は初めて気付いたのだった。黒人の男と口を利いたり笑いあったりしたのは初めての経験だった。

馬車が去ったあと、「一生、前へ進め」と言った黒人の言葉が何かの暗示のように彼女は胸に反復していた。「これで良いのだ。私たちにはこの道しかないのだ」と彼女は思った。

夫、清次郎の希望で新天地を求めて移住してきたが、病弱な夫には炎暑の珈琲園労働は無理だった。一年とは続かなかった。しかし夫が働かないと七人家族は翌日から飢えなければならない。しかし、これ以上夫を働かせれば死んでしまう。言葉の分らない新移民には肉体労働しか仕事はなかった。たけのは娘時代に覚えた芸を生かして金を得ようと思った。一人ではどうにもならないので幼い二人を夫に託し、上の三人を連れてささやかな一座をつくったのだった。自分はいいとしても子供まで苦しい旅をさせるのを気がとがめていた。しかし、今の男の言葉で何かがふっきれた。「これでいいのだ。これがお前たち家族の進む道なのだ」となにか大きな存在が語りかけてくれたように思えた。

（2）

「お母さん……ボクくたびれた」、忠が言った。忠は母のつぎに大荷物を持っている。

忠は前妻の子だった。自分の子と差別はしていないが、それでもおたがいにどこか遠慮しあうことがある。その忠が疲れたと言う。

「もう少しだからね。男の子がそんな弱音を吐いてはいけません」、彼女はきつく言った。

空が茜に染まった。熱帯の、埃のない澄んだ大気の夕焼けはひどく短かかった。巨大な紙が燃えるように西の空が赫々と染まり、たちまち灰色に変色して一番星が強く輝いていた。

自分も疲れていた。一体、いつになったら同胞の集落につけるのだろう。赤土の道は歩きにくかった。柔らかくて、足をとられるのである。雨が降れば沼のようになるし、天気が続けば火山灰のようになる。もっとも、コーヒーや綿などの作物には最高の豊饒をもたらす土壌なのだ。十年以上無肥料でも地力が衰えない、と言われていた。

「お腹空いたよ、母ちゃん」、教嗣が言った。「もうすぐさ」、彼女は言ったが、初めての道だから自分でもいつ着くか見当がつかないのだった。そこにどんな人が住んでいるのかも知らない。

門前払いを喰わされたら、食事どころか泊る処もないのだった。一番心細いのは子供たちでなく、彼女自身だった。不覚にも涙がこぼれた。気丈なふりをしても三十五才の平凡な女にすぎないのだった。

日がとっぷり暮れた頃、やっと目指すコロニア・ジャポネーザに着いた。一家族が五～十アルケール（一アルケールは約二・五町歩）ずつの原始林を拓いて住んでいた。ポツリポツリと家がある。煉瓦建ての家もあれば、まだ入殖当時の小屋掛けの家もあった。

三軒ほど、開拓間もないらしい小屋をやり過して、一キロほど歩いて母子は一軒の家の戸を叩いた。「どなたかね？」、野太い声がして、無精ヒゲで埋った、陽に焼けた主人が顔をだした。空かんに芯を差しただけのカンテラの乏しい光に母子四人が照らしだされた。

主人が母子が背負っている袋を怪訝そうに眺めたが、「物売りの人かね。うちは何も要らないんだが」と困ったように言った。「いいえ、物売りではありません。私たちは踊りや、芝居をして廻っている者です」。「踊り？」「はい。この村でも踊らさせていただこうと思ってやって参りました」。「どこから来なさったかね」、彼女は今朝出発した土地名を言った。

「歩いて、かね」、「ええ」。「なんとまあ……」、「それで、ここ

の日本人会長さんの家を教えていただこうと思って寄ったのです」、「これから行きなさるか」、「ええ」「いやあ、山田さんの処までではまだ五キロもある。子連れの夜道はとても無理だ。ぜひにというなら送ってもやるが、まあ今夜は家に泊りなさい」。

親切な主人は「まだ、夕食もしとらんのだろう。可哀想に、子供たちは腹をへらしとるでしょう。さ、中へ入りなさい」と手招いた。

「はい、ありがとうございます」。やれ助かったと思い、深々と頭を下げながら、たけのの目頭はわけもなく熱くなった。

（3）

……昭和八年（一九三三）の末に始まり今日まで続いている旅廻りの小劇団「伯光団」は、このようにしてその活動を開始したのだった。伯光団という名は伯剌西爾（ぶらじる）と光石から一字ずつとって名付けた。

光石たけのは少女時代に娘歌舞伎の一座で育った。珍古座という旅廻りの劇団であったが、継母としっくりいかなかった彼女は巡業してきた一座について家出のような形だったらしい。珍古座は阿波や土佐を主として廻っていたが、「音羽屋の筋を引いた」劇団だということだ。だから伯光団の人々は、自分たちの芸は尾上菊五郎の系統だと考えている。

そのことは私を少し驚かせたが、以前に何かの本で娘歌舞伎と歌舞伎役者の芸の上での関係を読んだ記憶があるから、珍古座と尾上菊五郎のつながりは本当かもしれない。

彼女の芸名は尾上菊昇といい、悪役専門だった。若い頃の写真をみるとちょっと美人ではあるが、目がギョロリとしているから、メーキャップ次第では憎まれ役にうってつけだったろう。

そのころの四国のドサ廻りは宿屋へ泊ることも滅多になく、村の各家へ分宿したようだが、お姫様役や腰元役の娘たちを村人が奪い合うようにして自分の家に連れて行くのに、菊昇だけは、「あんな性根の悪い娘は……」と言って誰も引きうけ手がいなかった。独り残されて宿がなくメソメソ泣いている菊昇に親方が言ったことがある。

「それでいいんだ。お前の芸が真に迫っているからこそ、皆に憎まれる。憎まれれば憎まれるほどお前の芸にみがきがかかるんだ」。

そう教えられ、娘心にも何か悟って、それからは観客に憎まれるのが楽しくさえなった。

演技中にミカンの皮や紙ツブテが菊昇めがけて飛んでくる。それが彼女にとって観客の拍手だった。

やがて彼女は結婚して、娘歌舞伎から引退する。相手は光石清次郎と言い、岡山の住人だった。再婚だが彼女を可愛いがってくれ、彼女は芸事の世界からまったく遠ざかった。

結婚後のたけのは、太棹の三味線だけは想い出にとっておい

たが手にとることはなかった。次男の教継（芸名・菊若）は、「お母さんが踊りをやったり三味線を弾くことを知ったのはブラジルに来てからです」と語っている。

（４）

夫の清次郎は岡山分教会長も勤めた熱心な天理教信者だったが、当時の教会のやり方に疑問を持った。そのことが直接の動機で「新天地」と騒がれていたブラジルへ移住して自由な生活と信心の日常を築こうと思いたった。

昭和七年から十年にかけては戦前のブラジル移民のピークで、日本の社会機構に不満を持った多くの中産階級の人々がブラジルに移住したのだった。移民会社の巧妙な宣伝もあった。ブラジルにさえ行けば日本で得られない自由で豊かな生活が数年で手に入れられると人々は思い込んでいた。

昭和七年に一家七人は移住し、サンパウロ州リンス近くのコーヒー園に就労した。しかし、朝暗いうちに監督が鳴らす鐘の音で叩き起され、炎暑の中を夕暮れまで働く過酷なコロノ（労働者）生活は、元来が病弱だった清次郎には無理だった。

十一才を頭に五人の幼ない子供たちという当時の光石家の家族構成では、仮に清次郎が頑健であったとしてもコーヒー園労働者の家族としてはそもそも不適格だった。コーヒー園では一

人が約一千本の樹を義務的に受け持つ。その手入れの歩合が収入となる。五人家族全員が働き手なら五千本の収入があるから病気さえしなければいくらかの利益を年に積み立てられる。しかし、一千本の歩合収入で五人を養うのは最初から無理である。仮に妻も働いたとしても、まだ無理である。農場の売店からツケで食料と日用品を買い、決算をすれば赤字になり借金だけが残る。

渡航義務の一農年を配耕先で働き、多額の借金は日本から持って来た金で払い、光石一家はそのコーヒー園を出た。それから日本人のコーヒー園にメイア（五分五分）の歩合作として入ったが、そこでも事情は同じようなものだった。いや、前よりも悪かった。歩合だから収穫の半分は貰えるが、その代り、仕事が遅れている分は自己負担で他の労働者を使わなければならない。半年もすると、年末は去年よりももっと酷い借金になることがハッキリした。そして、それだけの手持ちの金はもう残っていなかったのだ。

何とか一家が食べていかなければ、とたけのは考え、上の二人の子供に即席の芝居を仕込み、三味線を持って日系人の集団するコロニアを母子三人で廻りはじめたのだった。

母子三人の伯光団一座が、こうして誕生した。これが昭和八年の末である。翌年からは七才になった長女の和子も一座に加わった。

長男の芸名は菊二郎。次男は菊若。和子は菊江と名付けた。衣裳は自分の着物に花や御所車の型に切った端布を縫いつけた。カツラはアルミの古鍋を頭の型につぶして、綿をかぶせ、麻縄をほぐして黒く染めて植えつけた。（少したってからはブリキ屋に型を作って貰い、それに綿をかぶせ麻を植えた。ブラジルの旅廻りの一座としては、結局、これが最良のカツラだった。後に日本から人毛のカツラをとりよせたが、取り扱いが面倒で弱くて、使いものにならなかった。現在もブリキに麻縄のカツラを使っている。私も手にとってみたが、頑丈な出来で、まちがって腰を下してもビクともしない感じだった。そのかわり、かなり重いのは仕方がない）。

最初の出発点だけ決めて、そこまで汽車で行く。そこからは徒歩でコロニアからコロニアへと歩いた。一回の旅が四十日くらいで、家へ帰って新しい衣裳や幕を作ってはまた出発した。



尾上菊昇師

ブラジルの日本移民は、明治四十一年（一九〇八）に始まったが、初期はコーヒー園労働者だけであって、原始林を開拓しコロニアを形成したのは大正中期以後である。つまり伯光団一

中央が尾上菊昇



演し物のひとつ、題名不明

座が廻り始めたコロニアは原始林を開拓して五～十年たった頃である。

日本人の集団地には必ず日本人会があり、日本語学校があった。開拓者たちにとって日本人会は道路開削、自衛、教育などのためにどうしても必要なものだった。菊昇ことたけのは行く先々で日本人会長を訪ね、公演させてくれるように頼んだ。断わられることは一度もなかった。会館、車庫、倉庫などに青年たちが急造の舞台を作ってくれた。夜、その舞台の前にカンテラを六つほど並べ、芝居や踊りをした。噂を聞きつけてどこでも沢山の人が集まってくれた。菊昇の踊りを見て、「ああ、有難や。生きて再び日本の踊りを見られるとは思わなかった。これで成仏ができます」と、彼女に手を合わせて拝んだ老婆がいる。

演し物は芝居が二つ。その前中後に踊りをつけた。子供三人、大人一人の変則的な少人数のために演目は全てオリジナルか、従来の歌舞伎狂言を荒筋だけとって大幅に変えたものばかりだった。

「三吉子別れ」とか「楠公の別離」などが初期の当り狂言だった。舞台に穴をあけないように子供二人は出ず張りで、菊昇が早変りして筋に変化をつけた。悪者が出たと思うとすぐ引っ込んで家老がでる、腰元がでる、というありさまで、全部一人で演る。子供が二人のときは、十三回も早変りした。菊江（和子）が加わってからは少し楽になって、七回程度で済んだ。さぞせ

わしない芝居だったと思うが、その早変りがまた人気を呼んだのだった。薄暗いカンテラの灯だから、観客の中には早変りとは気付かず「随分と役者の多い一座だ」と思った人もいた。決った入場料はなく、収入は全て「花」だった。紙にひねった金が舞台に飛ぶと、悪家老が若殿をいびる台辞を中止して「ありがとうございます」と言ってチョロッと拾うのである。

「伯光団」の名は段々と移民たちに知られるようになった。一度興行した処は心待ちにしてくれた。昭和十五年（一九四〇）にサンパウロ州内の日本人会は四百八十あったと江見清鷹氏が報告しているが、伯光団が廻っていた地方はその半分をやや上廻った三百ケ処ほどだった。つまり、一年で丁度一巡する。一年ごとに演し物を変えて巡業する、というパターンが自然にでき上った。「伯光団」は第二次大戦が激しくなり、日本語の使用、および日本人の集会が禁止された昭和十七年（一九四二）に中断された。

（　6　）

尾上菊昇（光石たけの）は現在七十九才で健在である。私はサンパウロ州バストス町へ彼女を訪ねて行った。

「十年前に引退しました。でも去年も地元の演芸会で踊ったんですよ。今年も踊ってくれと言われたけど、途中で足がもつれ

たりしたらみっともないので出なかった。三十年前に主人を見送り、それからは一人の気侭な老後です。子供たちには苦労をさせたけど、みんな親思いの子に育ってくれてね。大事にされて、私は言うことはないのですよ」。

落着いた物腰の、やや貫禄のあるおばあちゃんだった。舞台での動きが身について、ゆったりとした大きな動作をする。

「現在の座長は息子さんの菊若さんですね。四十五年も続いたのは大変なことだったと思います」と私は言った。

「家族ばかりでやっていたから続いたのでしょうね」、と彼女は答えた。

菊昇に刻まれたシワは深い。「長い間には色々と変ったことや面白いことがあったんでしょうね」、「ええ、それはありました。でも、人様を喜ばせる仕事ですから、辛いことや苦しいことの方がずっと多かった。でも、皆様には親切にされて、……娯楽のない時代だったでしょ。だから本当に喜ばれました。それが私たち家族の生きる張合いになりました。踊りをして拝まれたのは私だけではないかと自慢してるんですよ」。「収入はどれくらいでした？」、「花だったから幾らと決っていなくて……。少なかったですよ。でも今とちがって物価の安い時代だったからそれで私たちはやって行けました」。

物置きには今までの舞台衣裳や大・小道具が納ってあった。私はその幾つかを見せて貰った。陣太鼓などもまわりを太いボ

ルトで締めてあって、持つとよろけるほど重い。開拓民相手の鍛治屋や大工に頼んで作らせたものだから、全てが頑丈である。衣裳も化繊に馴れた私には一昔前の布はひどく重い。それに様々の意匠を縫いつけてあるので、着物一枚が二キロ五〇〇から三キロ平均の重さだった。

この暑いブラジルでこれを着て芝居をしたら、さぞ暑かろうと思った。藤娘の衣裳をちょっと羽織ってみると、身体を包んだだけで汗が噴きだした。大道具、小道具、衣裳、カツラの一切合財を背負って日中の道を歩き、夜芝居をするのは大変な重労働だったにちがいない。私がそう言うと、彼女は、「ええ、そりゃもう暑くてね。どのくらい汗をかいたか分りませんよ。夏の芝居なんかで浴衣で出て来て尻まくりをしてタンカを切ったりする役なんかだと楽なんだけど、そればかりやる訳にはいかない。……でも、病弱の主人をかかえて一家が食べていくことに必死だったから、当時は。私たちだけでなく、開拓者の人はみなそれぞれ大変だったんですよ」と微笑した。

（ 7 ）

伯光団は興行主に仲介を頼まず、町の劇場で興行することもなく、始めから今日まで徹頭徹尾コロニア相手のドサ廻りに終始したから、新聞に広告が載ることもなく地味な存在として続

いてきた。しかし、それだけに入植者たちには根強い人気を保っていた。

私が訊ねた幾人もの人々は全員が伯光団の舞台を観たことがあって、どんな演目であったかは忘れてしまったというが、「伯光団が来るという噂が伝わると、それはもうコロニアはお祭り騒ぎでみんな喜んだものですよ」と語ってくれた。

原始林の中に孤立したコロニアに外部の人が訪れることは滅多になく、当時一番モテたのは邦字新聞の集金人だったそうである。外から変った話題を持ってやって来る人間だったからである。そんな頃に、華やかな一座を組んで一年に一回やって来る伯光団がどれほど歓迎されたかは想像できる。

そして、ドサ廻りの娘歌舞伎で芸をたたき上げた菊昇は、どんなひどい場所であっても観客サービスを第一とした熱演を繰り広げたにちがいない。「お母さんは、舞台ではとても怖かった。ちょっとトチッたり、気を抜いたりするとスゴクしかられた」、と菊江（和子）は言っている。

どんなに疲れていでも、舞台が始まると母がこわくて夢中で踊ったという。それにしても十二月から二月にかけての雨期の巡業はさぞ酷かったと思う。毎日のように激しい雨が降る。コーヒーや綿をはぐむテーラ・ロッシャ（赤土）の道は膝まで埋まりそうな泥土と化すのだ。蒔付けを終って農家はホッと一息ついている時期だが、旅芸人にとっては年末・年始の書き入

れどきだった。ぬかるみにうまりながら、一座はどうやって歩いていたのだろう。

昭和十五年頃、一座は六名になった。両親を失った二人の子を菊昇が引きとって一座に加えたのだった。その一人はさち子といい、菊次という芸名を名乗った。座長の菊昇は女盛り、菊江も十三才になり、伯光団の舞台は華やかになっていった。

伯光団が辿ってきた道は、今日の私たちの視点からは酷い苦難の道であったとしか見えない。しかし、「伯光団が来るとお祭り騒ぎでした」という証言でもわかるように、迎える者と迎えられる者のよろこびがいつもあったことも忘れることはできない。人々は心から楽しみ、一座もそれに応えて熱演して廻ったのだ。

「移民」というとその苦労だけがクローズアップされ語られがちであるが、苦しく貧しい日々を送りながらもそれなりに楽しみを求めて生きた側面は案外と語られていない。森を拓き、飢えや病気に襲われながらも、人々はけっこう楽しく日々を送る工夫をこらしていたのである。

（1）

小さな町で

第二次大戦のために伯光団の活動は中絶した。ブラジルは連合国側であり、日本とはまず国交断絶し、後に宣戦布告をしたのだった　当時、光石家はリンスにあったが、「バストスは日本人が多いから戦争が激しくなっても日本人はいぢめられないだろう」。という噂にすがってバストスに移った。

バストスはブラジル拓殖組合がコロニア（入植地）として売りだした敷地の中心に発生した町で、夕方となると浴衣がけで下駄をはいた邦人が散歩する日本人の町だった。



演し物の名は不明

長男の菊二郎は洗濯屋の店員になった。次男の菊若は菓子屋職人の見習いになった。長女の菊江はブラ拓の製糸工場の女工に採用された。

そうやって二年半たち、戦争は終った。

戦争は終ったが、日本が勝ったのか負けたのかハッキリしなかった。ブラジルの新聞は負けたと書いているが、敵側の言うことを信じるなと祖国の大本営の海外邦人向け放送では繰り返していた。その大本営は「本土決戦」と唱えていたが、本土決戦は行われなかった。

モヤモヤとした終り方で、何かウラがあるような気が誰でもした。勝ったという側と負けたという側で日本人社会は大変な騒ぎだった。

昭和二十一年（一九四六）三月七日の夜、光石家の家族が住むバストスの有力者、バストス産業組合理事・溝部幾太は来客を送りだし、裏庭の便所に入った。出て、扉をしめていると洗い場の闇から人影がすべりだし、「天誅！」、とかすれた声で叫ぶなり、背中にピストルを射ち込んだ。弾は右肺動脈に命中して、溝部は声もたてず倒れた。

家の中から弟が飛びだしたが、犯人の影は一メートル三〇の門を飛び越え、田舎町の暗い夜にたちまちまぎれてしまった。やや離れた処で馬のひづめの音が起り、すぐに遠ざかっていった。

……これが、それから約一年に亘って邦人社会に吹き荒れた、勝ち組の特攻隊による負け組要人へのテロの嵐の始まりだった。バストスでも五月には爆弾が小包みでくばられたり、七月に山中弘が襲撃され重傷を負ったり血なまぐさい事件が続いた。芝居どころか、日本人が集まることさえ当局は神経をとがらせた。

血まで流した日本人社会に、平和は仲々訪れなかった。伯光団は再開の旗をあげ巡業を開始するのは終戦後三年半もたってからである。

（２）

伯光団が巡業を再開。初めは勝ち負けの争いにまき込まれないだけでも大変な気をつかった。しかし、戦前の熱心なファンは伯光団を忘れないでいた。次女みちえ（菊子）三女すみ子（菊丸）四女美佐子（菊助）と成人し伯光団は第二期の黄金時代を迎えた。

これは昭和四十三年（一九六八）まで続いた。その間に移民社会は少しずつ変質していった。日本の敗戦によって祖国へ帰ることもあきらめた移民たちは、この国に骨を埋める決心をしたのだった。新しく生れた子たちには、この国で通用する教育を与えた。

芸居をやっていて観客の反応が少しずつ変化していった。ブ

ラジル人として育った日系青年には歌舞伎狂言の「義理と人情のしがらみ」が理解できない。何で主君のために自分の子を殺したりするのか、ぜったいに理解できない。理解できないだけではなく、そういうメンタリティに強い反感と嫌悪を感じるのだった。

中・高年層の一世移民は分ってくれる。しかし、車を運転して会場まで老人を連れて来てくれるのは青年たちだった。青年たちに理解される処までいかずとも、少くとも反撥されてはやっていけないのだった。

昭和四十三年に伯光団は遂に芝居をやめて映画と踊りの興行に切り換えた。「映画ショー」と名付けて今日まで続いている。今では日本舞踊もへらし、奇術をメインにしている。

座長は尾上菊若（たけのの次男）、座員は尾上菊千代（たけのの女弟子）と尾上菊二郎（これは二代目で、菊若の息子）の二人、計三人のささやかな一座である。四十六年たって、一座は振りだしと同じ人数に戻ったのである。一座は今日も旅廻りを続けている。私はバストスで聞いたスケジュールのあとを追って、小さな町で公演中の伯光団を訪ねていった。

（３）

小さな町だからすぐ分ると軽く考えていたが、会場はなかな

か分らなかった。ポスターは出ていないし、誰も知っている人はいない。

一時間ほど探してようやく会場の「生長の家」会館を探し当てた。(それなのに夜に開演すると満員になった。口コミの固定ファンが多いと実感した)。私が行ったのは午後三時頃だった。一座は前日の公演地より正午にここに着き、道具をトラックからおろしセッテングの最中だった。その荷物の多さに私はまず呆れた。

三五ミリの映写機はポータブルでなく、一般映画館のものと同じ大掛りな機械である。五百キロぐらいの重量だろう。舞台の照明も両側に八つずつのライト、正面に六個と小劇場並みだった。それに映写幕、バックの幕、奇術の大道具、小道具、太い電線の山……ざっと計算すると二千五百キロになった。それを誰の手も借りず、女を混えた三人で運び、セットするのだ。大変な重労働である。伯光団の長い歴史で少しも変っていない点があるとすれば、それは「重労働」の一点だろう。

私は菊若といろいろを話をしたが、物を運んだり天井に登ったりする彼と一緒に動きながらの会話であった。夕食をした一時間だけが、三人が動かないでいた唯一の時間だった。

七時開演だったが、始まったのは七時半だった。松竹映画「泣いてたまるか」が上映された。菊若が映写機についている。その間に裏の楽屋では菊千代と菊二郎が顔を作っていた。

顔ができると菊千代は客席を通って映写機の処へ行き、菊若と交替する。初めの映画は九時に終った。

楽屋裏で菊二郎が綱を引くと映写幕がおりる。それから照明スイッチを押す。座長が舞台に登場しフアンへのご挨拶を述べる。その間にフイルムの処理をした菊千代は楽屋へ戻り、日本舞踊の衣裳をつける。退場してテープレコーダのスイッチを押すと、番組の紹介が日本語とポルトガル語で流れる。その夜のプログラムは次のようであった。

映画　「泣いてたまるか」
ショー　恋慕かんざし＝尾上菊千代
私のビートルズ＝尾上菊若
南海の美少年＝菊二郎
唐獅子牡丹＝菊若
海鳥の鳴く日に＝菊二郎
手品＝奇術＝菊若
花の踊り＝全員。
映画　「夜の訪問者」。

舞台が暗くなると「恋慕かんざし」のメロディが流れ、芸者姿の菊千代が踊る。仲々に魅力があるし、何よりあの麻のカツラが良く見えるので驚かされた。照明は青から黄、赤と三回変

わった。楽屋の横で次の出番の菊若がスイッチを操作しているのである。

（４）

次は「私のビートルズ」。

ロックのリズムと共に舞台に飛びだした菊若を見て、私は呆然とした。これが、あの菊若とは・・。彼は五十六才のはずである。そして実際以上に老けている。それがサングラスをかけ、コウモリのような羽をヒラヒラさせて「翔んでる」感じで踊りまくるのだ。パッと照明が消えるとブラックライトの背中のガイコツの縫いとりが不気味に浮び上りユラユラ揺れる。ドラムのソロで再びライト！　。菊若はドスンドスンと飛び上る。客席はキャーキャー騒いで大喜びだ。

何たるサービス精神、これぞドサ廻りの真髄……。

次は菊二郎。彼は二十三才で、十五のときから舞台にでている。橋幸夫の唄に合わせて「南海の美少年」を踊る。ここまで観て、三人の踊りのアクが共通していることに気付いた。それは多分、菊昇ゆずりのものだろう。体をひねるような所作に特長がある。それと足を踏むときパシッと強く踏む。遠くたどってゆけば土佐の娘歌舞伎の「振り」なのかもしれない。それ以上遠く、尾上菊五郎まで辿れるかどうかは、私には分らない。

「夜更けのささやき」は、題名からは想像しにくい動きの激しいバレエだった。ピンクのタイツをはいた菊千代が凄いグラマーなので私は驚いた。彼女が足をおろすたびにカブリッキの私の体まで振動するのだった。

「唐獅子牡丹」は長ドスのヤクザものだがウルトラ・リズムの踊りだった。満員の客席に座っているだけで暑いのだから、踊っている菊若の顔面からは汗がしたたり落ちている。それで長ドスを抜いて激しい殺陣をやり、顔をしかめたり肩をふるわせたりして、ヤクザの苦しい立場を全身で表現するのだから大変だろう。最後に刀を抜いて相手を斬る。そのとき菊若はレコードより大きい声で「ウワーッ」と絶叫した。気合いなのか、斬られた方の断末魔の悲鳴を表現したのか分らないでいるうちに、早くも菊二郎が出てバレエを踊っていた。

次の手品はかなり長い。芝居をやっていたから観客の気を持たせたり、セリフを言うのは上手だった。助手の菊千代を箱に入れてノコギリで切る大仕掛けであった。楽屋ではパンツ一つになった菊二郎が照明や音響の効果を担当しているのだが、一生懸命マンガを読みながら右手で無意識にスイッチを操作しているので感心した。

ショーのあと、第二回目の映画が終ったのが夜中の十二時半だった。三人ともぐったりしていた。

「疲れるので、週五日しか仕事はできません」。と菊若は言っていたが、日本の真夏より暑いブラジルの気候では週五日さえ大変なハードワークである。

客はすぐいなくなり、深夜の田舎町はシーンと静まっていた。三人は水道の水で体を洗い、庭先にとめてあるトラックの中へ這入っていった。キャンピングカーのように改造してあるトラックだった。明日の夜は他のコロニアで公演をする。

「お休みなさい。今日はわざわざ見に来ていただいて有難うございました」。

トラックに入る前に菊若は丁寧に言って頭を下げた。

来年は映画だけをやると彼は言っていた。

もしかしたら、私は四十六年の伯光団の歴史のギリギリに間に合ったのかもしれない。町の街灯に吊されたサンタ・クロースの似顔を眺めながらそう思った。

深夜のリオ街道をサンパウロ市へ向って車を駆りながら、菊若との会話の幾つかを私は想い出していた。

「私は芝居で育ちましたから、芝居をとてもやりたい。歌舞伎狂言が受けなくなって、判りやすい勧善懲悪の新物を出したん

ですがそれさえ判ってくれない時代になりました。第一、日本語そのものが消えて行くんですから……私どもの力ではどうにもならないのです。手品なら言葉は要りませんからねえ」

義理と人情だけでない芝居だってあるんですよ、と私はあの時、言いたかったのだった。しかし、十才のとき以来、菊若として育った人に、短かい時間で何を説得できるだろうか。第一、日本語が消えて行く運命の前には私とても菊若と同じように無力だった。

第二次大戦後、それまでの反動として、ブラジル社会に一日も早く同化することだけを至上命令として生きてきた。その結果、移民の子たちは大学を卒業し、日系人は短期間のうちに中流階級にまで社会上昇をとげた。

しかし、そのひずみもある。個々の家庭に目を向けると、顔そそむけたくなるような世代の断絶がある。親と子の間だけではない。戦争中に育った長男と、ブラジル大学卒の次男ではまるで考え方、感じ方が違うのだ。家具一つの選択でさえ、どちらかの気まずさなしには、家の中に存在できないのだ。私たちは口を開けば日本文化というが、日本人には二世には日本文化など何一つとして引き渡さなかったのだった。

（ 6 ）

ドイツ移民は百五十年に亘って「テオト・ブラジレイラ」と

呼ばれる独特の、ブラジル化したドイツ文化を継承してきた……などと比較しても始まらない。気の短い日本人は、希望どおり、アッという間にブラジル人になりおせた、というだけの話である。

いくらここがブラジルでも、いくら私たちが移民でも、菊昇、菊若、菊二郎とせめて三代くらいは芸を継承させてやりたかった。……しかし、どうにもならないのだ。

私は一度でいいから伯光団の本格的な芝居を観たい、と思った。映画ショーになるまでの三十六年の旅廻りの間に、移民芸の直髄と呼んでも良い何かを彼等は表現したに違いない。他に競争者もなく、菊昇からだけ教わって純粋培養され、重労働の毎日に堪え、あれほど人々を喜ばした劇団が空虚な表現をするはずがないように思える。

車を運転しながら、私はラジオをかけた。

何曲目かに「イエスタデー」のメロディが鳴った。これはビートルズの曲だ。

ヘッドライトの光芒の彼方で、サングラスをかけて翔んでいる菊若の姿が浮かんだような気がした。夜明けまでにはサンパウロへ戻りたいと思って私はアクセルを踏み込んだ。（了）

（注＝以上は、醍醐麻沙夫氏が一九七九年十一月上旬から同十二月中旬にかけサンパウロ新聞に連載された「移民芸の真髄」のうち伯光団誕生に関する全文を転載したものです）。

光石竹乃さん　（芸名・尾上菊昇）の芸能略歴

愛知県の叔父が歌舞伎俳優であったため、竹乃が幼い時に踊を教えたが、覚えもよく、叔父は竹乃の芸才を見て十才の竹乃を同僚の歌舞伎俳優、音羽屋尾上菊二郎に入門させた。

十才の竹乃は、昼間は踊、三味線、太鼓、衣裳の和裁から金糸銀糸の高ぬいのけいこを厳しくやらされ、尚かつらの髪結まで仕込まれた。十四、五才になると、子供でなく、一人前の男役を振り当てられて修業した。

師匠の仲介で、一座の俳優、二代目尾上菊二郎と結婚して一児を得たが、夫の菊二郎の健康がすぐれず、遂に病にたおれた。病夫を抱えて旅興行もならず、一座を去り習い覚えた裁縫で生計を図かり夫を看病した。

天理教に入信すると、病気が良くなると人にすすめられて天理教に入信して、天理教の教師となったが、夫の病気は益々悪化して若くして世を去った。一児を抱えて苦労していると、人のすすめで、同じ宗教の、光石教会へ後妻として嫁した。

光石家には姑と、先妻の子供が四人あった。

光石家に嫁してからは、和裁と暇を見ては、近所の娘さんに日本舞踊を教えたが、昭和初期の大不況に見舞はれて、一家はブラジルへの渡航を決心した。

先妻の子供達三人は、縁つかせて、長男の光石忠と、自分の

先夫の子供は叔父に託して光石で生れた法嗣（のりつぐ）と幼い和子、夫、姑で移住することになった。

それまでに教えた踊の弟子たちの希望で温習会として岡山劇場で娘歌舞伎を開幕した。

大入満員の大成績で数日も延べ興行となった。

尾上菊昇の日本での芸能生活の最後であった。

（一九八四年六月三十日記）

尾上菊昇（光石竹乃さん）が引退挨拶

伯光団創立五十周年記念、尾上菊昇（光石竹乃さん）の引退（写真）と、故・尾上菊若（光石教嗣さん）の三周忌追善舞踊大会がバストス日伯文化協会後援のもとに、一九八三年九月四日、同協会会館で盛大に催された。

長女の和子さん（芸名・菊江）によると、教嗣さんの死により伯光団は後継者を失なった結果、八四年六月から、当時八十六歳の竹乃さんは四女の美佐子さん（芸名・菊助）と生活を共にするようになった。

なお、竹乃さんは八五年三月一日、四女の美佐子さん宅で亡くなった。

演劇に〃半生〃捧げて悔なし
舞台と取組んだ日々を思う

嵐　正太郎
（元新星劇団創立者）

一九三三年十二月末、サントス入港の移民船ありぞな丸で農業移民の一人として着伯した私は、早くもその翌年三月、まったく予想もしていなかった演劇の世界に再び身を投じた。以来、四十余年、第二次世界大戦のために〃空白〃の時代も数年間あったが、芸能人として生活して来たことに対し、いまさら回顧の念を禁じ得ない。

芸能界に入ったのは一九二八年、松竹の大幹部で新派俳優の関貴代美の門下生としてで、芸名は山本邦雄、当時十八歳。初舞台は大阪の角座劇場であった。二年後に師の劇団を去り嵐富三郎劇団に移った。芸名は嵐正太郎。

その後、劇団革新座をつくり、当時は盛んであった剣戟、レビューなどを取入れて大阪や神戸で公演した。当時の有名な劇団は、新国劇（沢田正二郎が創立）を始め、新生新派の花柳章太郎、山田九州男、関貴代美の属していた劇団のほか、近江三郎、酒井愛之助、山崎勇らが座長の数々であった。

植民地の青年らに演技指導

一九三一年、兵役で九州の熊本六師団野砲六連隊に入隊し、三三年三月の除隊後は再び大阪の芸能界に戻ったが、二か年間の空白はいろいろと面白くなく、ちょうどブラジル行きを考えていた義兄夫妻の話しに応じた。配耕されたのはサンパウロ州ノロエステ線ペナポリス駅のコンバニア耕地。駅前から大森林の連続、勿論、電燈などはまったく無く、大阪や神戸の大都会暮しが長かっただけ、覚悟はしていたのだが、これには驚いた。

三四年三月、ペナポリスの古老である、梅田伴蔵氏から、この地方のコロニアは娯楽に飢えており、このため植民地の青年らが〝農村演劇〟を始めようとしているが指導者がいない。幸い君は日本でその方面に関係していたという。相談にのって貰いたい……との話しがあった。義務農年のことで耕主との話合いもつき、また、義兄夫妻の諒解も得て同線のプロミッソンに移り、各植民地の青年らを相手に演劇の指導を始めた。演劇のいろいろな〝しきたり（しぐさ）〟から、芝居の小道具やカツラの作り方、舞台化粧の仕方などを教えた。そのうち町の有志から、ぜひ君の舞台を見たい…と望まれ、カフェランジアに住んでいた松本氏が九州で舞台役者だったというので同氏とともにリンスに素人劇団・弥生劇団をつくり、第一回公演をプロミッソンの飯田商会の大倉庫で催した。

芸題は、時代劇「坂本竜馬」全三場、現代劇「燈台守」全二場―という、いささか淋しいものではあったが、娯楽の少なかった当時だけに各地から大勢の人々が集まり、皆なに喜んで貰うことが出来た。この公演はリンスの有志らによる後援で初めて成功したもので、芝居用の小道具類一切は竹熊氏（のち竹映社を創立）から譲り受けた。その後も各地で公演を続けたが、目的がコロニアの慰安であったため、入場料はすべて無料。しかし、義理堅い当時の人々に非常に喜ばれ〃お花〃を予想以上に戴いた。各耕主は一〇〇ミル・レイス、コロノの人々からは二〇ミル・レイスなど。白米一袋（六〇㌔）が三八ミル・レイス。カマラーダ（日雇い）の日当が一ミル・五〇〇レイスの時代であったから、いま思い出しても大金の〃お花〃だったことに間違はない。

リンスでは、町からもっとも遠いサンタ・アメリカ植民地で小学校建築基金カンパに公演会を催した。雨天にもかかわらず二日間の公演は大成功で、隣接の大和植民地からの観客も多かった。この公演には関西出身の京山円駒浪曲師夫妻が参加、幕間（まくあい）に口演、舞台に花を添えていただいた。こうして弥生劇団は発足してから約半年目を迎えたが、自ら感ずるところがあって同劇団を解散してバウル郊外で約三年間棉作に従事、次いでマリリアで化粧品の製造販売に乗出したが太平洋戦争勃発（一九四一年十二月八日）のため、新事業は無に帰し、

友人らとソロカバナ線アグードス近郊に移って玉糸操業を手掛け、終戦後に備えた。洋舞家の大谷康夫君と知合いになったのは同地で、同君の依頼でマリリアに住む陸軍戸山音楽学校出身の小林勝喜知氏を紹介したことがある。



「論の母」の嵐正太郎（左）

マリリアに新星劇団生まる

太平洋戦争終結（一九四五年八月十五日）から約一年後、マリリアの藤川進氏から、勝組、負組のことで頭が痛い。コロニア間の融和を計るには、なにか娯楽が必要だ。君、もう一度演劇活動を始めては……というような話しがあった。有志による応援もあったところから劇団のことを決め、直ちに在伯各地の芸能人に書信で参加を求め、その快諾を得てマリリアに新星劇

団を創立した。中村琴二郎（本名・長谷川滝松）、浪曲師の京山円駒、潮時二郎（本名・久保？）、日本丸一興行の曲芸師であった昇旭斉天楽、大谷康夫、浪曲師の花中軒水月、バストスから石橋満夫、河合美子（本名・本田富士子）らが、おもな人々であった。

同劇団の第一回公演は四七年八月三日、会場はブラスコットの倉庫。舞台掛けも盛大に初公演の幕開きとなった。

時代任侠「赤城の子守唄」全四場。おもな配役は、国定忠治＝中村琴二郎、板割の浅太師＝嵐正太郎、日光の円蔵＝石橋満夫、御室の勘助＝京山円駒、高崎重吉＝花中軒水月、勘助の娘＝河合美子。

ほかに時代劇「金盃の行衛」全四場、洋舞の大谷康夫など。当時としては珍らしかったのか、この初公演はサンパウロ新聞社会面でトップ五段抜きで報道された。マリリアを中心とした各地から多数の観客が押し掛け、さしものブラスコットの大倉庫も手狭を感じるほどであった。この公演後、ある事情―名入り個人幕のこと―から中村琴二郎は退団したが、松井春風（本名・岩根友一）の映画興行社と手を組み、ノロエステ線各地を巡業、好評を得た。



新星劇団旗揚げ公演の記念撮影（一九四七年八月三日、マリリア市で）。前列右から潮時三郎、石橋満夫、中村琴二郎、河合美子、嵐正太郎、花中軒水月、大谷康夫。後列二段目右から三人目藤川進、京山円駒。



中野かほる

たが、松井春風（本名・岩根友一）の映画興行社と手を組み、ノロエステ線各地を巡業、好評を得た。

サンパウロ初公演成らず

これに先立ち、サンパウロでの初公演交渉のため同地に先乗り中の藤川氏から吉報が届いた。初公演はノルテ駅（現ルーズベルト）近くのコロンボ劇場。劇団側ではパラナからの公演申込みを一時中止、一行、おおいに張切ってサンパウロ入りしたが、見事（？）これは失敗に終った。四七から四八年にかけサンパウロでは未だ外国人による〝催し物〟は一切禁じられていた。にもかかわらず市内中央メルカード近くに法律事務所を持つ岸本某が、事情にうとい藤川氏を甘言でだまし、運動資本を懐にしたまま、必要な手続きをやらなかったからである。いよいよ初公演当日、こんなことはなに一つ知らぬ劇団員一行はコロンボ劇場前の大広場に押寄せた観客の大群に胸をおどらしたがどうにもならず、劇団側は、当局筋から公演は禁止された。こちらも事情を話したが、どうにもならない…と云われ、せっかく、久し振りの演劇を楽しみにしていた人々に頭を下げて、ようやく引取って貰った。このため劇団の二十数人は立往生、途方に暮たが、〝捨てる神あれば、助ける神も…〟よろしく近郊サント・アンドレ有志らの協力を得ることが出来、同地の日本荘広場での公演が実現した。会場までサンパウロから約三

〇キロという遠距離が心配のタネだったが予想に反し多くの人々が集まった。

演題は、「赤城の子守唄」全四場、「金盃の行衛」全四場であった。団員一同、心から感激して舞台を勤めたことは、いうまでもない。

劇団は次いでサンパウロ市内ジャバクアラ区の小笠原氏（化粧品製造）のシャカラで公演の幕を開けた。新たに歌手の難波勝美、奇術の加納一郎、名古屋天一、河合美子が参加した。さらに幕間に日本舞踊の京藤間勘輝師が「越後獅子」を披露した。勘輝師は日舞のブラジルに於ける先駆者ともいうべき人で、こんにちに見る日舞の発展・普及に多大に貢献されたことは一般のよく知るところである。

劇団はその後、サンパウロ市内、イタケイラ、モジ各地で公演したが、演題に暮末史「近藤勇」全三場、任侠悲劇「心中火取虫」全五場、時代劇「丹下左膳」全四場、初狂言として「安立ケ原」など、バラエティに富んだものを加えた。

ピニエイロスに青春座

一九四八年、私はマリリアの劇団を引退して出聖、ピニエイロス区有志ら後援の下に劇団青春座を創立した。サンパウロでの常打ち劇団…という長年の念願がようやく実を結んだわけである。青春座の第一回公演は救済会（渡辺マルガリーダ女史）の

資金カンパ。渡辺さんを始め石原桂造氏、ジョゼー・ボニファシオ神父らの斡せんで場所はサン・フランシスコ劇場。座員は気心の知っている昔からの仲間ら　―　。中村琴二郎夫妻、尾上米丸・茂三郎親子、市川正二郎　―　で、時代劇「瞼の母」全五場であった。演劇上演には、出演者にはすべて俳優の鑑札、上演脚本は事前にポルトガル語に翻訳した上で検閲当局の許可を必要としたが、これら事務手続き一切はボニファシオ神父のご好意により解決した。劇場の定員は約千三百人だったが、立見も多く大成功を収めた。思い起こすと、青春庭も創立以来、数多くの人々による善意、後援があってこそ十分に活動出来たわけである。そのお礼の一端としボニファシオ神父の関係していたタイパス修道院、同孤児院に公演の都度、多少の寄付をさせてもらっている。

その頃のある日、サンパウロ市立劇場（テアトロ・ムニシパル）の舞台監督から、同劇場での日本演劇公演を希望された。同時にブラジル俳優学校出身の日系二世、平田イヴォネさんを座員として出演させることという申込みを受けた。最初は、いささか冒険ではあるが、話しに乗ってもよいと先方といろいろ話合いも進めたのだが、演し物、その他の点で結局のところ折合いがつかず、青春座による市立劇場公演は、〃一場の夢〃と化した。



「丹下左膳」の中村琴二郎



「心中火取虫」の嵐正太郎と河合美子

映画「島原天草の反乱」

一方、ボニファシオ神父から、映画製作の話しが持ち込まれた。劇団による地方巡業を映画に代えることにより、より多くのコロニアに見て貰らえるだろう…というのが、その理由。いわゆる劇団の〝おはこ〟（十八番、得意の芸）を映画にするわけ。資金は家具類の製造をやっていた「カーザ・チエテ」の杉本芳之助氏の提供。この方はとんとん拍子に話しも進み、カメラ、その他必要機材一切を購入してクランク・インに備えた。ただし１６ミリ、白黒というものだが、嬉しかった。

ボニファシオ神父の要望に応え、題材は徳川幕府の初期、幕府から厳しい迫害を受けて悲惨を最後を遂げた島原天草のカトリック信者に求めた。題名は「島原天草の反乱」。大作（？）だったため衣裳、ヨロイ、カブト、鉄砲、槍、刀剣などの小道具類はすべて座員による手作り。これに約二か月かかり、次はロケエションの場所探しで、最終的には日本荘とサントス近くの海浜に決めてのクランク・イン。題材が日本でのことだけ、いろいろと苦労もしたが、約三か月後にはわれわれの〝血と汗の結晶〟は遂に完成した。

サンパウロでの封切では、日本でも一時流行した〝実演と映画の組合せ〟という方式を採用した。これは連鎖劇（れんさげき）の一種。演劇の中のいくつかの場面を映画で現わし、舞

台と画面の人物を一致させ、実演と映画を接続して連絡のあるものとしたもの。映画場面は、同じ俳優がスクリーン裏でセリフをいうのを常とした。サン・フランシスコ劇場は、この珍らしい方法が評判となって連日大入り満員。早速コピアを取り、州内各線の代理人に巡回映写を委せ喜ばれた。勿論、各地コロニアで大好評を受けた。

映画作りから再び演劇界に

「島原天草の反乱」に次ぐ第二回作品は任侠股旅もの「荒神山の血煙」（吉良の仁吉）で、第三回作品は「森の石松」。この作品の完成後、次回作品その他のことで杉本氏との間で話合いが付かず〃後髪を引かれる〃ような気持でいっぱいだったが、映画の仕事を打切って、また、演劇の世界に戻った。そして五一年、劇団・演技座を発足させ独立した。座員は嵐正太郎、中村かほる、尾上米丸、同茂、天中軒満月、中村登雀、潮時二郎、神保敏夫、難波勝美、市川正之助ら。第一回旗上げ公演はサン・フランシスコ劇場での歌舞伎「佐倉義民伝」全四場。当時リンスにいた義太夫・豊竹広太夫（太三昧線引語り、中村登雀老の知人）の特別出演を得ることが出来、ブラジルでは初めての本格的歌舞伎を披露することに成功した。

第二回は「父帰る」全二場、第三回は時代幕末劇「祇園の時雨」全二場と現代劇「母」全二場。当時はこんにちに比べて演

劇フアンも多く、座員も張切っていた。六三年には南米劇場で長年にわたって温めていた「大岡政談」全四場、次いで浪曲劇「大忠臣蔵」全七場を舞台に掛けた。配役は、浅野内匠守＝嵐正太郎、吉良上野介＝中村琴二郎、大石内蔵助＝同二役、容泉院＝中村かほる、片岡源五郎・寺坂吉右衛門＝潮時二郎。浪曲劇のため天中軒満月、宮原敏夫、寿々喜一声、神保敏夫、土井公男の各浪曲師がそれぞれの場面を担当、名調子の口演で浪曲フアンにも満足を与えることが出来たようだった。この公演は連続四日間、稀れに見る盛況さだった。

同年、演劇フアンであるとともに後援者でもあった河合、坂野、薬師神、内村各氏が発起人となってコロニア初の「全伯演劇コンクール」が南米劇場で開かれた。パラナ、リンス、中央線（セントラル）、ジュンジアイ、マウア、スザノ（女子青年会）、地元サンパウロからと出演劇団も多く、大競演、大熱演となって観客を喜ばせた。

コンクールの結果は第一位サンパウロ、二位リンス、三位スザノ。

個人の部で演技賞はリンスの山口春海が獲得した。この催しで驚くと同時に感心したのはスザノ劇団の二世ら。セリフ回しも立派で、時代劇をほぼ完全に演じたことである。なお、審査員は嵐正太郎、中村琴二郎ほか有志らであった。



「島原天草の反乱」の中村琴二郎

伏見直江一行〝ご難の巻〟

六九年、ビリグイ出身の山本貞悦氏の招きで元日活時代劇の大スター、伏見直江と同信子、工藤偵助の一行が来伯、嵐正太郎の演技座協演でサンパウロ劇場で初公演。時代劇「女河内山」全五場、同じく「明治十三年」全三場。元大スターの舞台に往年のファンが数多く押掛け、日本では見られなかった直江の実演に賞讃の声と拍手を惜しまなかった。

一行は演技座とともにサンパウロ、パラナ各地で巡業、帰聖後、オデオン劇場で再公演と、ここまでは、いずれも順調に好成績をあげていた。ところが帰国を目の前にし、直江がもう一度だけ奥地を回りたいと言い出し、山本貞悦氏を責任者として再び巡業の旅に出た。奥地コロニアの〝熱烈大歓迎〟を忘れかねた…のだろう。演技座は嵐正太郎を除いて全員が参加した。

ところが、これが大失敗。

責任者の山本氏が神戸の劇場主で直江とも旧知の間柄、という小山某の〝甘言〟を頭から信じ、直江一行に渡す出演料全額を小山某に、ダマシ取られたからである。小山某は数か目前に来伯、実演の「人間ポンプ」と映画「小判鮫」（長谷川一夫主演）の抱き合せで各地を巡業中、人の良い山本氏と知り合ってうまい話しを持ちかけ、金を懐にすると「近いうちにまた来る…」と帰国したきり。困った山本氏は金策に走り回ったが心痛のあまり病死した。残された直江一行は三度び巡業の旅へ。旅費だけようやく稼いで帰国した。



サンパウロでの伏見姉妹。右から吉田輝夫、伏見信子、伏見直江、工藤俱介、嵐正太郎。

その後、約五年間にわたって日活映画の輸入・公開・配給に従事したが、かたわら演劇活動も続けた。七三年六月、日本移民六十五周年を記念した奥原プロ提供のＮＨＫ紅白歌合戦のアトラクションとして、時代劇「鞍馬天狗」全二場をブリガデイロ劇場で。また、同年九月十五日から一週間、同劇場で時代任侠股旅もの「赤城の子守唄」全五場、義士外伝「天野屋利平」全一場などである。



映画「荒神山の血煙」、中央が仁吉の嵐正太郎

追悼　中村琴二郎丈、京藤間勘輝師（初代家元）の二人は、ブリガデイロ劇場での九月公演を最後に同年内に相次いで亡くなった。

また、終戦後マリリアで劇団創立に参加した中村かほる、尾上米丸、潮時二郎、天中軒満月、神保敏夫、市川正之助、京山円駒、藤川進、難波勝美さんらもすでに亡い。実に感慨無量、芸友らの霊の永遠に安らかしことを祈るのみである。

「島原天草の乱」余話

映画「島原天草の乱」の海浜での戦いをスアロンでロケ中、まったく予想もしていなかった〃椿事（ちんじ）〃が突発、コトがコトだけ、一時はどういうことになるのか？、と頭を抱え込んでしまった。

スアロンは、サントスから有名な海浜都市イタニャエンへ向って約六五㌔のところ。いまでこそ舗装された道路もあるが、当時はサン・ビセンテから現地までデコボコ、それに数多くの小川を横切って車を走らせるような悪路の連続。そのうえ、現地で建物らしきものは唯一の教会だけで、あとはカイサーラが住んでいる小屋が片手の指で教えられる…といったような寒村。

ある日、ロケ隊の一行が張り切って仕事をしている真最中、サントスから押取り刀よろしく約二十人の警官がやって来た。「変な格好で、いったいなにをやっているのか。いま直ぐ解散だ…」というのだから、こちらも目を白黒させて驚ろいた。

天草軍の軍師・森宗意（嵐正太郎）が鐙（よろい）兜（かぶと）の馬上姿もりりしく、頭上に大太刀を振りかぶり敵陣に切込むシーンの撮影を、ちょうど車でサントスからドライブのブラジル人一行が見てびっくり仰天「これはただごとではない…」とばかり、直ちにサントスまで引返えし、警察に訴え出たからだった。ブラジル人にしてみれば、多勢の日本人が〝ファッコン〟らしきものを手にした奇異な様相？と思ったのも無理からぬことではある。

幸いスアロン教会の神父さんが警官の一行に「事実はこれこれ…」と、昔々、その昔、日本のある所で信仰の自由を守るためにカトリック教徒と、これを禁じようとしたサムライらが、手に手に刀をとって戦った。これを撮影しているだけで、貴方たちが考えているような〝大騒ぎ〟ではありません―と、ながながと話しをしてくれたので、相手側もようやく納得、ロケを無事に終わらさせることができたのである。いまにして思い起こせば、まったく〝バカバカしい〟ともいえる失敗談の一つだが、同時になんとなく懐かしい思い出の一コマでもある。

（本名・山元貞義、一九一〇年鹿児島県能毛郡屋久島生まれ。

二八年芸能界に入り、松竹大幹部新派俳優、関貴代美門下生、芸名・山本邦雄、初舞台は大阪市角座劇場だった。

三〇年、師の劇団を去って嵐富三郎劇団に移り、芸名を嵐正太郎と改める。後日、劇団革新庭を創立、当時盛んであった剣戟レビューで大阪、神戸両市で公演。当時、有名な劇団として新国劇、新生劇新派の花柳章太郎、山田九州男、関貴代美、地方劇団に近江二郎、酒井愛之助、山崎勇らがあった。

三一年、九州熊本六師団野砲六騎隊に入隊し、三三年三月除隊、再び大阪芸能界へ復帰したが、同年八月義兄夫妻の要請により農業移民として渡伯、現在に至る)。



嵐正太郎の「赤城の子守唄」(右)と「天野屋利平」



映画「島原天草の乱」に次ぐ第二回作品は任侠股旅ものの「荒神山の血煙」であった。

写真は右より尾上茂、難波勝美、青山百合子

歌舞伎芝居に生きた群像

芸道一筋、先達らの偉業を偲ぶ

山口　春海

（ブラジル演劇協会理事）

慰労行事に相撲と演芸会

初代の移民当時から植民者の慰労行事として、相撲と演芸会などがよく行なわれたものらしい。そうした演芸会には寸劇、流行歌、浪花節、手踊り、ハーモニカ、ヴァイオリン、マンドリンなどによる合奏が織りまぜて行なわれた。それも、日本人集団地の大小によって規模は違うが、植民者が定着して経済的にも恵まれるに従って凝（こ）ったものになって行ったのは云うまでもない。例えば演劇の場合、初めは背景幕や小道具も使わない寸劇だったものが、工夫して作った張りぼてのカツラや、竹光の刀で股旅物の人情劇や恋物語の演題ものを演（や）るようになり、浄瑠璃（じょるり）の語る者のいる地方では三味線（太棹）なしで扇子で机を叩いて合（あい）の手として歌舞伎芸居らしきものに凝（こ）ったものである。

私が子供の時から青年時代まで十六、七年間にわたって住み馴れ育ったサン・ジョオン植民地は、ノロエステ線リンス市から約二〇キロメートル。多羅間耕地、屋比久植民地、イデアール植民地に隣接して、ドゥラード川をはさんでパライーゾ植民地、フィゲイラ、カンポネーザ、パウダーリョ、リッケーザと各日系植民地があり、かなり大きな集団地であった。

一九三一年、ファゼンダ（コーヒー耕地）でのコロノ契約も終えた私の父は、同郷の入谷常吉氏を頼ってサン・ジョオン植民地に入谷氏のコロノとして入植した。同植民地開拓の先駆者であった入谷氏は、人格温厚篤実の士で、長く日本人会長を務め、その後パラナ州へ移るまでの十数年間、日本入会顧問として元老の役を果たした人である。

この入谷氏は兵庫県淡路島の出身、青年時代から郷里で浄瑠璃を数段習い上げた芸事の好きな人であった関係からか、私たちの一家が入植するまでにも毎年六月二十四日のサン・ジョオン祭には、相撲か演劇会が催されていた。その前年には「忠臣蔵七段目」を演じて好評だったとか。その時の〝お軽〟役は入谷氏の後任として日会々長になった中野隆義氏が演じたが、大きな身体を持てあましてか、もう女形（おんながた）は絶対にやらぬ…と述懐していた。この時の寺岡平右衛門に水竹某さん。この人は福島県の出身で、日本でもその道の水を呑んだことのある人、と云われて芸も達者であったらしく、夫婦と娘の

親子三人で農閑期に隣接の植民地に出かけて芝居や手品をやって喜ばれたらしい。私たち一家が入植してから三年目に、よそに移って行ったため、その後サン・ジョオン植民地で歌舞伎芝居が盛んになった時に不在だったのが惜しまれる。



サン・ジョオン植民地の奉祝二千六百年歌舞伎大芝居での記念撮影（１９４０年）

歌舞伎芝居が盛んに…

一九三二年六月二十四日はサン・ジョオン祭の日。サン・ジョオン青年会主催で演芸会が行なわれた。出し物は歌舞伎芝居「傾城阿波の鳴門」八段目「巡礼唄」、新劇「ピストル強盗清水定吉」、新派人情喜劇「八百屋の娘」、演出振付けは私の父・山口今吉、浄瑠璃・入谷常吉氏。青年会員の総出演で、そのころは未だ土壁の小学校の校舎が会場。ガスランプも無く、天井の無い屋根の梁（はり）から吊るした石油ランプの赤茶気た明りが作る各自の影を踏んで熱心に練習した。この時の「阿波の鳴門」が他の植民地から見物に来られた人々に非常な好評を受けて、後日、カンポネーザ植民地の演芸会に請われて特別出演し、丁重にもてなされたのを覚えている。この時の〃お弓〃の役は稽古熱心な古賀つぎ夫さん、〃おつる〃に私（当時十歳）。その古賀さんも翌年パウリスタ方面へ移転した。移った地にも演芸同好の士があって楽しまれたら良かったと思うが、その後の消息は聞いていない。

とにかく、その後のサン・ジョオン植民地の演劇部門で歌舞伎芝居が盛んになったのは三五年に樋口長一氏（芸名・豊竹春生）が、リンス市菅山商店支店長として雑貨商を経営するようになってからである。同氏と私が後年、婿舅（むこ・しゅうと）の縁に結ばれるのであるが、当時は夢にも思わなかったことで

ある。また、樋口氏と前後して入植して来られたのが、春名直平氏（芸名・竹本越路太夫）であった。同氏は、当時すでに七十二、三だったと思うが壮者を凌ぐ健康の持主であり、日本で長く上方（かみがた）芝居のた（・）な（・）を語って居られたとか、本場仕込みの呼吸と末だ衰えぬ声量は驚くばかりであった。このようにして入谷氏を始め樋口、春名両氏と三人の浄瑠璃語りが揃ったところへ、川向うのフィゲイラ植民地の重鎮、豊田氏の後妻として呼寄せられた夫人が、これまた日本で浄瑠璃の合方（あいかた、三味線（太棹））を四十年間も務めた方で、その撥（ばち）の冴えには皆が惚れぼれしたものだ。それで、この四人の方々が、それぞれの家でしばしば豊田夫人の撥で語っていられたようだ。樋口氏はこのため、春名氏や豊田夫人との出合いにより浄瑠璃の〃ちょぼ語り〃（丸本歌舞伎及び特に出演させるように書かれた脚本において、舞台の上手の床、もしくは簾の内にいて義太夫を語る人及び、その義太夫をいう）の呼吸と三味線を弾くことも会得し、数年後には自ら作った三味線太棹で弾き語りをするようになった。

本格的な歌舞伎芝居

一九三六年六月二十四日、サン・ジョヨオン植民地日本人会の主催で歌舞伎芝居。振付けは春名直平翁、その頃の立役者（？）中野隆義、宮井鹿造、小泉清一、松下宇治郎諸氏など。こ

の年、中野氏は日本人会々長、淡路島の出身でコーヒー園とピンガ製造の実業家、以前に忠臣蔵の〝お軽〟役をやってこりごりした……という本人である。宮井氏は福島県出身で民謡、端唄、小唄も上手に歌うなど、日本では相当に遊んだ（？）人と聞いていたとおり、芝居の台詞（せりふ）はなかなか調子は良いのだが、お国なまりの取れないのが〝玉の瑕（きず）〟。小泉氏は兵庫県淡路島出身、大阪から徳島市に移って小料理屋を経営した粋な人。現在、聖市演劇研究会の座長である小泉照男氏の亡父。一方、松下氏は徳島県出身、大阪で川仲仕や大工の下働きをしながら暇をみては芝居見物に通ったという。

さて、当日の出し物は、

「太功記十段目尼ケ崎の段」。（原題名は絵本太功記）。読本（よみほん）の「絵本太功記」に拠っている。十段目は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれ、謀叛人光秀を持った一家の人々、母皐月、妻操、子十次郎、その許婚初菊の悲劇を描いている。

義太夫・入谷常吉

配役　武智光秀　袈田　某

十次郎　中島　啓造

初菊　浜崎　徳夫

操　港　みさお

皐月　松下　字治郎

その他

「安達原（あだちがはら）」三段目「袖萩祭文（そではぎさいもん）」

義太夫・樋口長一（豊竹春生）

配役　安部貞任　中野　隆義
　　安部宗任　山口　春海
　　袖萩　中島　啓造
　　娘お君　栗木もみ子
　　謙杖直方　松下宇治郎
　　妻浜夕　浜崎　徳夫
　　その他

「恋娘お駒丈八白木屋の段」

義太夫　春名直平（竹本越路）

配役　番頭丈八　小泉　清一
　　お駒　山口　春海
　　髪結吉三　袈田　某
　　白木屋主人　松下宇治郎

などと、本格的（？）な歌舞伎芝居。盛沢山のプログラムで拙（つたな）い芸ながら精いっぱい演じたのが、植民者の方々に伝わったと見え、予想以上の好評を得た。

一九四七年六月二十四日、植民地での「歌舞伎大芝居」の記念撮影。



サン・ジョオン植民地では、一年おきに相撲と演芸会を催すのであるが、歌舞伎芝居の時には会館（１０×２０メートル）では非常に狭いので、会館前の広場に幅一五、奥行八メートルの舞台、義太夫の棚も特設、さらに四方をエンセラードで囲った広い客席も加えた。

この大きな会場を作るにもまして、それぞれ出演者（役者）のカツラや衣裳の準備にも苦労した。一方、それ以上だったのが振付師と舞踊の素地がまったく無い、ともいえる青年たちとの

関係だった。それぞれの役柄に必要な所作（しょさ＝しわざ、ふるまい）をしなければならないことである。振付師は一々手とり、足とり、それはそれは大変な労作である。半年も前から役割りをして週に二、三回、最後の一か月間は毎晩で熱心に稽古したものである。あの頃の青年たちは日本で生まれた者が多く、二世でも当時の青年たちは日本語が可成り上手であったのが幸いであった。

飽くまで芸道に徹した登雀師

翌三七年、春名直平翁は他の植民地に移られたが、隣接の屋比久植民地在住の倉地藤太氏（芸名・中村登雀）が樋口氏と親しく交際するようになり、その後、倉地氏が日本からの歌舞伎役者であることを知るにおよび、同氏を振付師としてお願いするとともにお招きして催したのが一九四〇年、皇紀二千六百年を祝しての演芸会である。勿論、歌舞伎芝居であった。出し物は、

「仮名手本忠臣蔵」七段目、一力茶屋

配役　大星由良之助　松下宇治郎
　　その子力弥　中島　啓造
　　寺岡平右衛門　宮井　鹿造
　　おかる　山口　春海
　　斧　九太夫　浜崎　徳夫

鷺坂伴内　福重　辰夫
その他多勢

「傾城阿波の鳴門」八段目、巡礼唄
配役　お弓　山口　春海
おつる　栗木みえ子
十郎兵衛　松下字治郎
町飛脚　小泉　照男
その他

「御所桜堀河夜討」三段目、弁慶上使
配役　弁慶　宮井　鹿造
おわさ　山口　春海
娘信夫　小泉　照男
花ノ井　浜崎　徳夫
その他

義太夫は三演題とも樋口長一氏（芸名・豊竹春生）で、その素晴しかったことは、未だに覚えている。

一九四二年六月、世界の風雲急を告げるころ、日本人会、青年会共催の演芸大会を挙行した。出し物は、

幕末動皇秘聞　「日の丸飴屋」
大江戸任侠伝　「野狐三次と両国」



「弁慶上使の段」の山口春海（左）と立花恵子

歌舞伎狂言　「毛屋村六助」

振付け　中村登雀（倉地藤太氏）

この時も二か月半の稽古で、最後の二週間は樋口氏宅に泊り込みの倉地氏に毎夜猛稽古をしていただいた。だいたいが女形の登雀師ではあるが、六助の荒所作まで熱心に指導された。お陰で出演者一同は教わったとおり（？）を、あす舞台にかけるという前日、そして衣裳付けの日、早朝から準備を整え午後から出演者のメエキアップにかかった。倉地氏の面差しに思いなしか憂いの影があるように見えたが、連日の指導による疲労のせいとお気の毒に思ったところ、同氏の次男・二平さんが

祖父の訃報を告げて来た。この時、倉地氏は日会、青年会の幹部を前に、実にもの静かに「おやじは、すでに一か月前から床に就いていた。としもとしだし、いずれ長くはないと思っていましたのじゃ。まあ、芝居する若い人たちを動揺させぬよう静かにしていて下さい。私しや私の役目は果さして貰いますから…」と云った。一方、子息の二平さんには「役者はどんなことがあっても舞台が終わるまでは穴をあけることは出来ぬ。葬儀の仕度はお前たちでやっておいて呉れ、明日の野辺送りには帰えるから…」と、厳然たる態度で出演者の顔に白粉刷毛を走らせておられた。私は同氏にメエキアップしてもらいながら不覚にも涙をこぼしたところ、「おいおい、折角の白粉が流れるじゃないか、君が流してくれる涙は有難いが、長い間稽古した役を立派に演って貰わにゃ私しの苦労が無になるからのう…」と、飽くまでも芸道に徹した師の言葉に心から敬服した。翌日、リンス墓地で父親の埋葬を終えた倉地氏は隣接植民地の自宅へは帰えらず、墓地から直接に舞台・楽屋に駆付けて平然と出演者の顔を作りながら、それぞれの役者に助言を与えておられた。その態度は誠にご立派であった。

リンスに演劇研究会

一九四二年十二月八日（日本時間）、日米戦争の火蓋が切られた。ブラジル連邦政府も連合国側に付いて参戦するに至り、

我々日系人は敵性国人となり、日系人の集合は禁じられた。

悪夢のような在伯同胞の蔦藤。

このような時期にもかかわらず、サン・ジョオン青年会員は夜間に限り児童への日語教育を四区に分けて続行した。将来、日本人の心を解する二世、三世が育つようにと願いつつ。

四八年、私の一家は住み馴れた植民地をあとにリンス市へ移転した。そのころ、先にリンス市に移っていた春名翁と再会、中野光臣、吉田秀樹、松下宇治郎、佐藤進、小泉照男、植村、池泉、津田、尾形、西田諸氏のほか多勢の同志が集い、リンス演劇研究会が発足した。浄瑠璃は春名（竹本越路太夫）、樋口長一（豊竹春生太夫）の両氏で、樋口氏は自作手製の太棹で弾き語り。

第一回発表会は四九年の某月（失念）、出し物は、

「奥州安達原」三段目「袖萩祭文」

配役　安部貞任　山口　春海
　　安部宗任　吉田　秀樹
　　袖萩　中野　光臣
　　娘お君　西田（娘）
　　謙杖直方　松下宇治郎
　　妻浜夕　尾形　義信
　　義太夫　竹本　越路

「太功記」十段目「尼ケ崎」

配役　武智光秀　植村

妻操　吉田　秀樹
子十次郎　山口　春波
母皐月　松下宇治郎
初菊　中野　光臣
真柴久吉　西田

その他多勢

このメンバーで、毎年リンスの演芸会に花を添えた。その後に出した歌舞伎芝居では、「宇治川の先陣」、「阿波の鳴門」などで、大好評を博したものである。

そのころ、サンパウロ市では池田歌舞伎研究会が発足し、「勧進帳」や「だんまり」（歌舞伎の演出法の一種。暗闇の中で人々が互いにさぐりあう動作を様式的に誇示する演出方法）を発表して活発な動きを見せていたと聞く。この「勧進帳」を上演するに就いて池田純太郎会長はわざわざ日本へ赴き、本格的な指導を受けたとか。衣裳も出演者一同の物を一揃を調達して来られたので立派なものである。語りの長唄も三好社中の皆さんで、一層演技が引立つというもの。後年、私もサンパウロへ来てから二、三度招かれてご一緒に芝居をさせて頂き、大いに啓蒙された。いまでも有難く思っている。

全伯芸能競演大会

一九五四年九月、伯国芸能文化連盟主催の下に全伯芸能競演

大会が七日間にわたって南米劇場で催された。後援はサンパウロ市四百年祭典協力会。当時、伯国芸能文化連盟の役員は次のとおり。（敬称略）

顧問＝山本喜誉司、加藤好之、熊谷武男、
吉原千苗、蜂谷専一、杉本芳之助、
中久保益太郎、武田俊男

理事長＝池田純太郎　副＝三好良実

常任理事＝内村末男、河合貞一郎、坂野熊太郎、薬師神真一郎、田村傳次郎、山元貞義、桜田虎之助、千葉武男

書記＝沢田多策。

当日のプログラムは、演劇、日舞、洋舞、日本音楽、浄瑠璃、浪曲、歌謡曲、琵琶歌、民謡などと多彩を極めた。このうち演劇の部はコンクール形式で行なわれ、等級が審査された。

◇サンパウロからは神保俊男、倉地一郎、宮原義夫諸氏を主とするサクラ・クラブ青年会演劇部が時代劇「鉄火悟道」

◇ジュンジアイ演劇団＝「祇園しぐれ」

◇スザノ大和植民地女子青年会（二世女子たち）＝時代劇「子別れ笠」

◇ジャカレイ劇団＝時代劇「肥後の駒下駄」

◇バレットス演劇団＝浪曲入り時代劇、義士外伝「天野屋利兵衛」、浪曲・天中軒満月

◇スザノ鶴亀演劇団＝現代劇「召集令」

◇マリリア演劇団＝現代劇「瞼の母」四幕
◇ヴアルゼン・グランデ演劇団＝時代劇「新篇忠臣蔵絵図面取の場」
◇リンス演劇研究会＝歌舞伎「傾城阿波の鳴門」八段目、巡礼唄。義太夫・豊作春生、三味線・宮武源司。

コンクールは以上九団体で行なわれ、団体一位にサクラ・クラブ青年会演劇部の「鉄火悟道」、二位にはリンスの歌舞伎「阿波の鳴門」三位にスザノ女子青年会の「子別れ笠」。個人優勝はリンスの「阿波の鳴門」で〝お弓〟を演じた山口春海であった。

なお、演劇部特別出演では、日舞連の歌舞伎「太功誌」十段目「尼ケ崎」で、名手が揃っての出演で見事であった。

演出振付＝中村登雀、義太夫＝石川芳園、三味線＝高岡夫人

配役

武智光秀	藤間　国枝
母皐月	中村　登雀
妻操	京藤間勘輝
子十次郎	田中千恵子
初菊	田中　后子
真柴秀吉	大坪　愛子
加藤虎之助	坂野マリ子
福島正則	岩本　京子
郎党＝中津川	美智子、峯松　小春、豊川。

同じく特別出演、池田歌舞伎研究会の歌舞伎「勧進帳」の配

役、その他は次のとおり。

配役　武茂坊弁慶　池田純太郎
源義経　花柳　金竜
関守富樫　遠藤　五郎
常陸坊　平沢　吉蔵
駿河次郎　尾上　松助
片岡八郎　西川　光男
亀井六郎　遠藤平八郎
太刀持　池田　純子
士卒軍内　坂東光三郎
同　平内　富田　孝二
同　源内　奥村　雨月

地方、唄、三味線＝三好美和、池田喜世、田中愛子、宮下喜美、藤間国枝、松本佳子、岡上浜子、土屋千代子、三好寿美江
小鼓太鼓、笛＝京藤間勘輝、田中千恵子、田中后子、坂野マリ子、三好良実と豪華絢爛な舞台で、池田歌舞伎研究会の真価を発揮したものであった。他にマリリアから京山円駒一座の時代劇「江戸の花牛若三次」も芸達者が揃っていて特別出演にふさわしかった。

この時の後日談に、演劇コンクールの順位を決めるに当ってリンス演劇研究会の「傾城阿波の鳴門」が最もまとまった芝居をしたのであるが、決勝戦の舞台で十郎兵衛が結婚指輪を取ら

ずにはめていたのが大減点となって優勝を逸したというので、十郎兵衛役の佐藤進氏は大いに恐縮しながらも、家に帰って奥さんに、「こうこう云う訳で団体優勝を逃したが、指輪をしっかり指にはめていたというのも、わが夫婦愛の証（あかし）だ」と自ら慰めたとか。この時の出演者は次のとおり。

阿波の十郎兵衛＝佐藤進、妻お弓＝山口春海、娘おつる＝樋口笑美子、町飛脚＝小泉照男。

ともあれ、落成間もない南米劇場の舞台は我々出演者にとって素適な後味を残した。この劇場は音響反応が良く、役者にとって最も好ましい条件が揃っていた。ただ、惜しむらくは楽屋が少々狭まいのと装備が整なわぬまま後日債権者のブラジル人の手に渡り、日活映画社の経営となって演劇、日舞などの催し物が遠ざかり、そのうちブラジル日本文化協会の建物が落成、皇太子殿下記念講堂が出来るに及んでコロニアの催し物はおよそすべて文協ホールに流れるようになったが、それでも何年間か南米劇場の舞台はコロニアの芸能人の心に、足の裏に懐かしい思い出を残させるに充分の役割を果たしたものである。

聖市演劇研究会を設立

さて、サンパウロ市四百年祭典参加の芸能競演会のあった同年十一月、私の一家は〝第二の故郷〟リンスをあとに出聖し

た。同じころ、同大会にマリリアから参加した土井公男氏と菅原虎之助氏（天中軒満月）も出望して来た。同好者の誼（よしみ）から私も土井、菅原両氏と一緒に聖市サクラ・クラブ演劇部の人たちと親しくなった。私の出聖を最も喜び迎えてくれたのは倉地翁（中村登雀師）であった。師が日本舞踊の温習会の顔師で出張する時にも私を伴い、顔作りの技法を修練する便宜を与えて下さった。

翌一九五五年、サクラ・クラブ演劇部の幹部数人と聖市演芸研究会を設立、発足する。



「御所桜堀川夜討弁慶上使の段

その第一回発表会は同年九月、中村登雀師の古稀（七十歳）を祝って、「祝古稀　中村登雀演劇歌舞伎の夕」と銘打って慈善公演、後援は聖母婦人会、シネ東京（南劇）で二十八、九、三十日の三日間にわたった催した。

出し物は、「仮名手本忠臣蔵」五段目＝山崎街道、六段目＝勘平うち、七段目＝一力茶屋と三幕五場。

浄瑠璃・豊竹春生（三味線連弾き）

五段目配役　斧定九郎　山口　春海
早野勘平　神保　俊夫
与一兵衛　倉地一郎
先崎弥五郎　菅原虎之助

六段目配役　早野勘平　神保　俊夫
おかる　山口　春海
母ちか　藤本　政夫
原郷右衛門　土井　公男
先崎弥五郎　菅原虎之助
一文字屋女将　立花　恵子
女衒善六　倉地　一郎
角兵衛　小泉　照男
弥八　郡司　成人

七段目配役　大星由良之助　土井　公男
寺岡平右衛門　倉地　一郎

おかる　山口　春海
斧九太夫　藤本　政夫
鷺坂伴内　小泉　照男
大星力弥　坂野マリ子
一文字屋女将　立花　恵子
同亭主　家安　一郎
間十次郎　神保　俊夫
先崎弥五郎　菅原虎之助
竹森喜多八　郡司　成人
小女　中村日出子
芸妓数名　立花舞踊団員

などで、大いに好評を博した。

聖市演劇研究会は翌五六年六月二、三日、第二発表会を催した。（この年、義太夫、豊竹春生太夫はリンスからサンパウロに移る）。

出し物は、歌舞伎狂言「義民佐倉の曙」

振付け・中村登雀　義太夫・豊竹春生

三味線・直美

配役　佐倉宗五郎　神保　俊夫
妻お三　山口　春海
息宗太郎　倉地日出子
同宗吉　立花とみ子

渡守甚兵衛　倉地一郎
嘉右衛門　菅原虎之助
八太夫　家安　弘
太十　小泉　照男
権助　郡司　成人

浪曲劇「江戸殉教哀史」
脚色・光沢亨夫　演出振付け・山口春海
浪曲口演・土井公男
配役　長二郎＝郡司成人、おつる＝立花恵子、長助＝山口春海、柳沢＝神保俊夫、井上活兵衛＝菅原虎之助、お春＝倉地日出子。


全伯芸能競演大会に「阿波の鳴門」を披露し、団体の部で二位に入賞したリンス演劇研究会々員ら

この年、私の顧客先のサント・アマーロ区バーロ・ヴェリョの皆さんが私の振付けで、歌舞伎「太功記」十段目と「奥州安達原」三段目、袖萩祭文を植民地の演芸会で上演した。

このバーロ・ヴェリョには高知県の人々が多く、芸事の好きな中島重義老、西村豊馬、土居喜三雄諸氏夫妻などが拝に熱心で、中島老は日本で歌舞伎芝居の一座に加わって女形が専門であったとか、芝居の話になると目が無かった。週三回、私が仕事（カフェー粉末の卸）で廻って行く日を稽古日にして、夕方から夜更けまで稽古に励んだものである。稽古の初のうちは私の語りで振付けをして、終わりの二週間のうち七、八日間は豊竹春生太夫を同道して仕上げに入るという段取りで行なわれた。

同地では、その翌々年にも歌舞伎「毛谷村六助家の段」と「阿波の鳴門」を前記の要領で稽古して上演している。その間、一年おきに催されていた汎サント・アマーロ演劇コンクールにバーロ・ヴェリョからは歌舞伎で出演して連続二回優勝した。このため、その後も競わぬ先にバーロ・ヴェリョが勝つことが分かっているのでコンクールは取り止めになったと聞いたが、それ程にここの人たちは熱心で筋の良い役者であった。土居夫妻に息女の清子さん、中島普氏、森岡節子さんなど、特に土居夫人の「阿波の鳴門」の〝お弓〟はなかなか堂に入ったものであった。

倉地藤太（中村登雀師）夫妻



倉地藤太（中村登雀師）夫妻



竹本越路（左）と豊竹春生



全伯芸能競演大会の入賞者と関係者ら

初代・京藤間勘輝師が古典舞踊と歌舞伎

初代・京藤間勘輝師により日本古典舞踊と歌舞伎「先代萩御殿場」が上演された。「名木先代萩御殿場正岡忠義の段」ともいう。

振付け・中村登雀　義太夫・港竜、源昇、三味線・豊竹栄

配役　乳母正岡＝京藤間勘輝、鶴喜代君＝鈴木キヨミ、千松＝石井幸枝、沖ノ井＝田中千恵子、八汐＝石坂美重子、栄御前＝岩崎柳、小巻＝一色友子、中老松島＝内木レイカ、松前鉄之助＝田中きみ子、その他腰元多勢、皆さんの熱演で見事な舞台だった。

聖市演劇研究会は、第三回発表会を五七年四月二十七、八の両日、シネ東京で開催。出し物は浪曲入り時代劇「やくざ仏心」と歌舞伎「御所桜堀河夜討」の二芸題。（配役その他は略す）翌五八年六月二十八、九の両日、ブラジル日本移民五十年祭を祝して第四回発表会。場所はシネ・パラマウント、出し物は

歌舞伎「義経千本桜」椎っ木茶屋ノ段

義太夫・豊作春生　三味線・連弾　振付け　＝中村登雀

配役　いがみの権太＝山口春海、妻おせん＝中村愛子、息善太＝立花ふみえ、若葉ノ内、侍＝立花幸子、三代君＝立花とみえ、主馬ノ小金吾＝神保俊夫、猪熊大之進＝郡司成人

同「木の実から鮓屋」　三段目

配役は、いがみの権太、妻おせん、息善太、若葉の内侍などは「椎ノ木茶屋ノ段」と同人で、他にお里＝立花恵子、父弥左工門＝吉沢久、妻＝小泉照男、維盛＝天中軒満月、梶原平三景時＝土井公男、六代君＝立花とみえ、梶原の従卒多勢など。

なお、「義経千本桜」三段目「木の実から鮓屋」は、義経を扱った浄瑠璃中の傑作。同時に操芝居全盛期の名作で、歌舞伎化は寛延元年伊勢の芝居と云われるだけ、出演者一同は熱心に稽古に打込んだ甲斐あって、公演は非常な好評を受けた。同日、浪曲入り「岡野金右衛門絵図面取り」も上演した。

六〇年、倉地藤太翁（中村登雀）金婚式

倉地翁の金婚式記念演芸会を西本願寺で催した。聖市演劇研究会からは「仮名手本忠臣蔵」五段目の山崎街道と「阿波の鳴門」、池田歌舞伎研究会から「だんまり」と「連獅子」京藤間勘輝一門と立花舞踊団の日舞などで盛大だった。倉地翁（中村登雀）の人徳の然らしめるところであろう。

伯国歌舞伎研究会が発足

一九六三年、伯国歌舞伎研究会が発足、その第一回発表会が五月二十五、六、七の三日間にわたってシネ日活（元南米劇場）で開催された。後援は池田歌舞伎研究会と聖市演劇研究会。出

し物は

「義経千本桜」三段目、木の実から鮓屋

義太夫・豊竹春生（三味線連弾）

振付け・中村登雀　山口春海

配役　いがみの権太　山口　春海

お里　立花　恵子

弥左衛門　片岡九十郎

妻　江越　俊平

維盛　川越　憲夫

権太の妻　鈴木あぐり

その子　立花ひとみ

若葉の内侍　大石　粋子

六代君　立花めぐみ

主馬の小金吾　坂東　正一

猪熊大之進　佐藤　義人

梶原平三景時　中村琴二郎

作兵衛　市川燕三郎

梶原の従卒　尾上　三郎

その他多勢

「弁慶上使」原題名は御所桜堀河夜討

配役　武蔵坊弁慶　中村琴二郎

おわさ　山口　春海
しのぶ　立花　恵子
侍従太郎　片岡九十郎
花ノ井　鈴木あぐり
郷の君　小井出あけみ
その他腰元多勢

などと、懐かしい顔ぶれであった。

その後、第二回発表に意欲を燃やしていた矢先、一九六四年十二月、中村登雀師が急逝という悲運を迎えた。嗚呼！、中村登雀師は芝居の振付けや日舞の顔師のほかカツラ作りも上手で、年中、暇にあかして男女用カツラを製作しておられた。昔、植民地の田舎（いなか）芝居の振付け中に尊父を亡くした折にも顔色ひとつ変えずに、役者根性を説いておられた。一生通じて清く質素に、花道で見栄も切らずに、七十八歳を一期に他界された。

その後、私は職業が変わり、新しい芸題に取り組む暇も無いまま既成の芸題と新派劇を上記の同志と機に応じて演じていたが、一九七二年十二月八日、父・山口今吉が死に、七五年十一月に舅・豊竹春生が他界するに及んで、私の心にともっていた歌舞伎の灯も消えた。殊にコロニアでは、義太夫、歌舞伎を愛し解する一世移民も僅少になり、時代は変わったのだ。

追記＝ブラジルの歌舞伎芝居と云っても広範囲になると、資料を集める時間も無い。それに、ブラジルでは歌舞伎芝居は稀であったと思われるので、私の携わった歌舞伎芝居の思い出の糸を手操って見た。

（一九八四年六月・記）



伯国演劇研究会が発足（前列中央が小泉照男）

芝居とシネマ屋に終始

岡村　正



惨めな五人の旅役者

コロニアの劇団といえば、有名な弓場バレエ団や伯光団が、現在でも健在だそうですが、昔は地方、地方に無名な劇団がドサ回りをしては消え、新手が生まれるという時代がありました。

私が書く劇団は、まことに惨めな五人の旅役者の集団です。部落、部落の顔役の綿小屋や、天気が良ければ露天でもやるという便利なものですが、収入はその時の入りでお花ですから、いくらにもならないこともあったのです。

座長は私の友人で中学中退で芸能好きで、打つ、買うは付きものの道楽者でした。まずコロノ生活で、世の中に嫌気がさした。男女の生活ですから性生活の方も、恐らく乱脈そのもののようでした。日本でのカフェーの女給上がりと、元中国の二女性を交えての五人ですから、出し物も如何では一人二役をやらねばならないこともたまたまあります。

四つ車の幌馬車が高価な財産で、あとはカツラも衣裳もみんな手作り。アセチレン燈の照明がまた懐かしい。周囲に米やフェイジョン叩き用のパンノを張りめぐらせ、背幕は毛布などをブラ下げ、引幕だけは、一応手描きだった。浪曲から落語、講談、芝居などで結構夜半までこなすのであるから、娯楽に渇れている村人たちには、こよなき慰めであったようです。

座長の浪曲に、「父帰る」の芝居に、涙をふき夜半まで一人も立たず真面目に観るのであった。半月がほとんど地平線に落ちようとするころ、フクローはゴロッゴロッと、クリアンゴもう遅いから早く帰れという、淋しい警告をするのであるが、明日の仕事に差支えあるし、だいたい役者は汗みどろの活躍で、それ以上はもたないという状態だったのです。

「父帰る」なんていうのは、だいたい道具が要らないので一番モテたが、石童丸の琵琶は、本当の琵琶を知らない人たちには、それなりに涙を流して喜んだものでした。講談にいたっては、それこそ、準二世の、一人二役をやる実に器用な男が結構猿飛佐助だの、水戸黄門漫遊記を、楽しくこなし、忠臣蔵で泣かせる、と、なかなか、コッた計画で、役者は実に真剣に取組んでおったことは確かでした。

劇団座長からシネマ屋

私は、ホレ、座長の旧友ですから、楽屋をのぞいても別にウ

タガワれないから時々のぞきましたが、それはやはり、元カフェーの女給をやったというベテランの、友人の愛人のユーワクに乗ったことは間違いありません。

この劇団も三年も続かず、解散になり、次回には旧友はシネマ屋になって再び来るようになりました。

シネマといっても、昔のことですから、白黒で弁士（活弁）つきという代物で、サンパウロあたりでは××銀声とか金声とかいった人もおりましたが、私の旧友も結構弁士のようなこともこなしていました。

あの当時のことですから、シネマは恐らく１６ミリと思います。もちろん白黒で音楽も何も付きませんから、弁士と一緒にそれに適したようなレコードをかけて、フンイキをつくり、自分は汗ダクダクで解説するのでした。

今ごろは発電機なんて実に小型で性能の良い物が開発されておりますので、別段苦労も要りませんが、あのころはカミニョンの尻をマカコで揚げ、それにベルトをかけ発電機を回し、シッカリ、回転が安定したところで、点灯するというシクミ。シボレーのオンポロのカミニョンのケツを揚げて、発電するなんて今ごろの人たちには笑われますネ。仕方ない。

その当時は、それで結構に間に合って、今でもその当時に活躍した道楽者が、まだ何人か健在なのです。カアちゃんに頭が上がらないので、実に静かにはしておりますが、恐らくはこの

記事を読んでいることでしょう。

私は七十になります。昔ふうにいったら、もう七十なのです。が、その道楽者も恐らく六十を過ぎてはおらんかと思います。お互い単独で渡伯、ずいぶん苦労もしたが、とにかく〝もうどうでもいい〟という捨鉢（すてばち）になった時、それでは生きて行けない、何とかしようと、本当はそんな、心情から立直ったのが、その当時の捨鉢なヤブレカブレの青年の気持じゃなかったろうか―。

〝幻の劇団〟は消滅…

私は、そんなツマラナイ劇団には不向きの人間だったから、ある地主の一カマラーダ（日雇い）として、雇われました。桑名といって、バウルー近郊では相当名の知れた方であり、私の仲介人でもある人です。土佐人で非常に短気な人ではあったが、私は、その人に救われた、恩人でもあります。私は、俸給が何程になるのか、いったい何程いただいていいのかも知らないまま、その桑名という人の所にカマラーダに雇われたわけですネ。人間の幸福とか、不幸福な人かはそんなところに決まると思いますが―。桑名という人のような移民も珍らしいと思います。

話は、少し横道にそれました。とにかく、

〝幻の劇団〟は消滅し、美しい女優は全部サンパウロの「青柳」や「梅の家」か、そんな所で活躍しておったということは

聞いておりますが、私の関知するところではありません。

旧友の話では、とにかく儲かる商売ではない、どうせオレのような半端（はんぱ）者は、どこにも勤まらないし、雇ってくれる所もなかろう。それで思いついたのが好きな劇団というこになるが、そう割に合ったものではない。まあ、そんな同好者がおったからやったようなもので、ヤブレカブレ、気晴しのつもりだった。ということでした。

シネマ屋を始めてから社長兼弁士兼運転手と、一人何役もやる。社長の名刺を誰にも彼にも配り、一応、北パラナでは有名人の一人になった。旧友は、モグリながらも結構入場料を取ったから、採算はとれたらしいが、そのうち、同業者が続々と出て来て、しかも最新式の映写機や自家発電装置を備えているので、あの、尻を持ち揚げ後車輪にベルトをかけて発電する、野蛮極まる仕掛けでは、競争は出来なく、これもあえなく断念せざるを、得なかった。もっともその後、トーキー映画が入り、弁士つきの無声白黒映画はスタレたので、いずれ倒産する憂き目に会ったことと思うが、当時としては、芸術の先端を歩んだということができましょう。

今は、ガソリン・ポストの付属レストランのオヤジとして、極く静かに老後を楽しんでいるが、決して妻君には頭が上がらない。レストランの元締めは妻君であって、彼ではない。六十の坂を越えた彼は、昔の敢闘心はもうないのであろう。やはり、老

人にはなりたくないということ。

（南マット・グロッソ州クイアバ市老人会睦クラブ会長）。

戦後初の芝居？

ツクルビー青年団の〝快挙〟

広田　義秋

私は、昭和十三年（一九三八）四月にブラジルに来た。日本では、父や祖母は大変に芝居好きで、各地の町村より招かれて振付けをはじめ、いろいろ道具を用意して指導に行っていた。私も小学生時代の夏休みなど、父のカバン持ちをやりながら、各地の芝居を見て歩き、芝居は心から実に好きだった。

ブラジルに来る船中、赤道祭の行事として船長より、芝居をやって楽しく賑やかなお祭りをやって呉れとのことであった。日本では一度も舞台を踏んだことはなかったが、有志八人で出演することを決め、直ちに僅かな日数の練習にもかかわらず、二幕物をやった。その際、同船者から好評を受けたのが、私の最初の芝居出演であった。

四月五日サントス港に着き、ノロエステ線リンス駅のウニオン植民地に配耕された。同地方には邦人コロニアが多く、近隣

の青年同志とも親しくなり、各地の植民地で芝居をやった。それから間もなく第二次世界大戦。各植民地でのいろいろな行事も出来なくなり、サンパウロへ出て来て、家業一筋に頑張る毎日だった。そのうちに戦争も終わった。結果は、祖国日本の敗戦という、最大の悲惨な時代であった。

それから約三年後、ツクルビーに行き、その年、最初の日本人会と青年団が同地に創立されたことを知った。その年の青年会々長は須崎さん、副会長は馬郡さんだった。芝居好きの堀井さんがいて、広田さん、君は芝居が上手と聞いたが是非ともやろうではないか、と相談があった。その当時は、各地で邦人コロニアが戦争に勝った、負けた…のいちばん騒々しい時で、ツクルビーにも〝勝ち組〟と〝負け組〟がいた。〝勝ち組〟は、日本の軍艦がブラジルにいる移民総引揚げのため近くサントス港に迎えに来るとか、サンパウロ市リベルダーデ街に日本より宮様が来ているとか、また、同街の邦人経営の旅館は引揚げのため奥地農家の客で満員の賑やかさである…といっていた。一方、敗戦ニュースは、満洲、朝鮮、台湾などはそれぞれ返還され、北方領土もソ連の支配下に置かれた…という、聞くだけに悲しいものばかりだった。

その際、私たち青年同志は、毎日のように悲しい思いをするよりは、勇気をだして活気付けに、ひとつ芝居をやろうではないかと相談、直ちにやることを決めた。ところが、当時は警察

より日本人の集会は禁じられていたので、馬郡さんがツクルビーのデレガード（警察署長）と話しをして許可を貰う…とのことだった。直ちに上田さんの紙箱製造工場でやることを決めた。しかし、開演三日前にサンパウロのオルデン・ポリチカ・ソシアール（社会・政治警察）の刑事二人が私の働いている所に来て、君たちは芝居をやると聞いたが、とんでもないことだ…と怒られた。私も日本人の集会が禁じられていることは知っていたが、「今、われわれ日本人は敗戦により祖国を失なったも同然。これからは養国ブラジルのため一生懸命に働いて、ブラジル政府のために尽す努力をしなければならない。そのために僅かな金額でもブラジル政府へ援助しよう…という目的からの芝居公演である」。と長時間にわたって説明、いろいろといきさつはあったが、ようやく開演の許可を得た。

演題は「忠治子守唄」で、私が三室の勘助に扮し、堀井さんが浅太郎、皆川さんが忠治役を勤め、観衆より大好評を受けた。一九四七年七月十二日のことだった。

追想　このツクルビー青年団による芝居公演が、終戦後第一番目のコロニア社会における芝居ではないか、と思う。いまから約四十数年前で、私の二十九歳の時であった。その後も芝居は毎年二、三回、いまだに続けてやっている。おかげで映画「ガイジン」、また、日本より来伯された渡辺監督作品の「逃亡の果」

にも出演することができた。

（在サンパウロ市シダーデ・A・Eカルバーリョ）。



「忠治子守唄」



戦後初？の公演に協力した人々

市川鰕吉郎を悼む

松家　英夫

市川鰕吉郎（本名・中川正雄）は、天性の芸事に秀で、幼時から田舎素人芝居の子役、だんじり芝居（歌舞伎役柄の一種）に出演、芸風の優れていることは、衆人の認めるところであった。

明治三十六年（一九〇三）十二月十二日の香川県生まれ、中川品吉の長男。尋常高等小学校卒業後、県立農林学校に入学。三年生の時、素人芝居に出演したため校則を破ったカドで、その年の成績は最下位に落された。校長、村長、親たちの忠告を聞かずに中途で退学、好きな芝居の世界に入った。

当時、父親の知人の紹介で中村鴈治郎の内弟子として入門（同じ内弟子として林長二郎＝のち長谷川一夫＝がいた）したが、我がまま育ちだったので辛抱できず半年でやめ、当時のマキノ・プロダクションに入った。人気スターの一人、高木新平と共演したこともあったが一年余りで退社した。二十歳の頃は芝居に戻り、京都の南座に二年間ほどいた。女方（おんながた）歌舞伎や新派で女に扮するのを専門とする男優が得意で、義士外伝の岡野金右衛門のお花を演じたら〝日本一〟の折紙がついたほどだった、という。その後、市川鰕太郎の門に入り鰕吉郎を襲名、一座を組んで関西、鳥取、北九州地方を巡業した。

ある事情のため、昭和八年一月に弟の弘とともに渡伯。農業に従事するかたわらグアイサーラやプロミッソンの栄拓植民地など各地で芝居の振付け、自らも舞台を踏み観衆から大好評を受けた、といわれる。

鰕吉郎が他の演劇人と異なっていた点は、どんな芝居でも脚本無しで振付ける、三味線や浄瑠璃（じょうるり）などがすべて頭にあり、この道の天才でなければ誰も真似のできないことであった。浪曲師の京山円駒とは、義兄弟の間柄であった。

惜しくも世界第二次大戦勃発のため、その演劇活動は中断の止むなきにいたり、さらに終戦の年の六月に病死した。内弟子を一人も残さず、戦後にその本領の発揮できることを目の前にし、自分の不運を嘆きつつ七人の子供たちを残し他界した。四十四歳の若さであった。

（筆者は、市川鰕吉郎の実弟）。

名作「夕鶴」などを公演

タンガラ青年演劇１４年間の歩み

八田　大八

（元タンガラ植民地日語学校教師）

指導者に恵まれる

ノロエステ線リンス市管内のタンガラ植民地で一九六九年から七二年までの十四年間、青年会活動の一環として毎年公演された青年演劇は、村芝居の域を脱した本格的なものであった。これは、少壮気鋭の小山国松という演劇指導者に恵まれたことと、植民地あげての協力と理解、青年たちの真摯な演技、すぐれた舞台装置、照明技術などにより日本での公演舞台を如実に再現したからである。

最盛時六六年から六八年にかけてはハイクラスの劇作家・木下順二の三作を公演した。特に六八年の「夕鶴」は山本安英公演の舞台装置をそのまま模しての公演で、演技、効果照明の総てにおいて圧巻といえた。

その陰には、青年たちの演劇活動は最も日本語と人格形成に顕著な教育効果のあることを認識し、その頃、長年の掠奪農による土地の荒廃化によって、当植民地は衰退の辿路にあった。一世たちは村づくりの一環として総力をあげて青年演劇のために結束した。従来の狭きにすぎる日本人会館を拡張し、広い舞台と演劇のための諸設備を完備した会館に改築するなど、その熾烈な熱意があって、ああした舞台で公演できたと考えられるのである。

コロニア演劇史上でも破天荒な公演記録であり、青年演劇によって村づくりの一環を十分以上に果したことは、現在の当植

民地を詳さに観察すると明瞭なことである。ブラジル生まれの日系子弟の日語能力の衰退が叫ばれている現在、貴重に値する記録であり、顧みて考察すべき資料となり得ると思われる。

タンガラ植民地は一九三三年（昭八）に高名な平野植民地の役員らの奔走により、カーザ東山より売出され、旧植民地に隣接した原始林を第二平野タンガラ植民地として、第一回入植者を迎えて誕生したのは翌三四年だった。しかし、この誕生年は恵まれた年ではなかった。日本移民の願望だったカフェー栽培は一九三二年の大統領令によって新規植付けを禁止されていた。原始林を拓いた肥沃の耕地に綿花を主体とする雑作の栽培だった。旺盛な活力をふるう入植者たちは綿花による黄金時代を到来させた。タンガラ植民地のみならず、同時代に発祥した植民地はカフェー禁止令のため同様だった。一九四〇年当時はタンガラ植民地に百三十、四十世帯が〝オウロ・ブランコ〟に蝟集した。所詮、それも農業の本道を踏みはずした掠奪農時代にすぎなかった。耕地は荒廃化していった。一九五〇年代にかけて襲撃蟻のように蝟集した入植者たちは、次の処女地を求めてパラナ州へと移動していった。同植民地周辺の同年代の各植民地はすでに離散してパスト化していた。

タンガラ植民地も廃村の岐路にたたされていた。当時の日本人会々長は富山県人の斉藤伝四郎だった。斉藤は短身ながら筋骨たくましく豪毅果断の人だった。斉藤は明日の日を案じ、沈

滞低迷の残された植民者たちに愛村愛農を訴え、土壌改良と永年作物の選定へと強力な指導力を発揮した。植民者たちは悪夢から目覚めたごとく、一斉にたち上った。

ややそれと時を同じくして青年会が村づくりの一環として演劇活動を初めるのである。

一九五四年だった。同植民地の青年会には強靭な筋金が通っていた。それは、青年会草創時代から人格者とし、また覇気あふれる準二世の中村薫が万年会長を勤め、聖進青年会の名称とまったく合致する軌道を作り上げていたことだった。この聖進青年会でまたひとつ恵まれていたことは、ほぼ二アルケール（約四万八千四百平方㍍）の耕地が日本人会から無償貸与されていたことだった。青年会の男女は貸与された耕地に綿花、あるいはトウモロコシ、落花生と年ごとに植付け、共同作業ですべてを賄ない、収穫代金はそっくり青年会の会活動の資金にすることができた。会活動の主なるものは毎年一回の遠距離見学旅行に野球大会、陸上競技大会への出場、弁論大会などであった。

テント式劇場を仕立てる

それに演劇活動が初まったのは、日本人会の役員で、当時会計委員の役を果していた若手の横田太郎がいた。横田は戦前のコチア産組の産業組合青年連盟に加盟し、産青連運動に参加するをど意欲的な人材で、後年はコチア産組の中央会理事を長年

にわたって勤めるなどの俊英だった。聖進青年会の会活動の際の言語は、植民地の日語校で習った日本語に統一されていた。横田が青年会での青年たちの日本語を耳にしているうちに、これだけの日語力があるなら、青年会活動のなかに演劇を加え、それによって日語力をより洗練させ日本人としての情操教育にも効果のあることを感じていた。

このタンガラ植民地では、創設当時の初代日本入会々長は久我素一だった。久我は当時の移民には珍らしい良識人で、原始林に挑む日本移民特有のガムシャラな死闘に似た苛酷な労働のあけくれを憂慮して、久我の同村出身の村芝居のベテランとはかって、娯楽としての村芝居を初めたのである。その村芝居のベテランは完全主義者的な男で、植民者の有志を募っての芝居の稽古にしても、その指導は厳しく、股旅ものか、人情ものか好みでよく演題にのせるが、日本刀は竹光では承知せず真剣の日本刀をいく振りも都合つけてくるといった男なので、劇そのものは真にせまる迫力があった。エンセラードを張り合わせて大きなテント式劇場を仕立て、二年に一回、天長節になると村芝居を公演していた。

横田は入植したのは十代の少年期だった。

植民地の一世が演ずる村芝居をテント仕立ての小屋でみて感動したその印象は深く、青年たちに演劇を通しての人間的成長によって、村づくりの一環にしようと、日本人会に提案した。村

づくりに頭がいっぱいの日本人会の役員は速答で賛成を得た。一部に青年男女が夜おそくまで芝居ごっこは、という冒険説の反論もあったが全くの少数派だった。

横田は早速、四五〇キロ離れたサンパウロ市に出かけ、日本人街の古書店をあさって日本の青年演劇脚本集を数冊購入してきた。横田は準二世であり、日会の中に演劇を指導できる者もおらず、横田がこれをすることになった。横田にしても、演劇指導の参考書を手にしての暗中模索だった。しかし脚本集の中でも一幕物の安易なものを公演していた。それが一九五九年から六一年までだった。

植民者たちが総出で協力

一九六〇年、若い小山国松夫妻が日本人の耕地に雇用者として入った。小山は天理教の布教師で、日本では高校では名門の天理高校を卒業していた。高校では演劇部に属し、卒業の頃は演劇部の主将になっていた。人柄は真面目でなみでない凝り性をところがあった。当然のように青年の演劇を通じて横田と肝胆相照らす仲となった。

六二年によき先生と慕われていた溝口誠教師が事情でサンパウロ市に転居した。その空席に小山が日語学校教師となった。当然の人事だった。小山はその六二年から本格的に青年演劇の指導を始めた。その当時は日本人会館兼用の日語学校は狭く、

舞台といえるものもない情況だった。小山の頭の中に本格的な広い舞台と舞台装置と照明が欲しかった。それを知った日本人会々長の斉藤伝四郎は日本人会をリードして、会館の改築にかかるのである。植民者たちは、村づくりの一環ならと総出で協力した。日語学校兼用の会館には演劇のための広い舞台、楽屋と舞台装置の出入れに便なフトコロが舞台の両側につくられ、照明もハイライト、フットライトが備えられ舞台の両側正面にスポットライトの機具を据え、照明係のかまえられる場が天井から中吊りに配置された。会場は土間だが五、六百人は観劇できる広さがあった。サンパウロ市の文協センターの記念講堂の舞台も広いが、これ程の設備はない。

斉藤は舞台装置に興味を持ち、彼の考案した日本間のセットは絶品といえた。青年会の演劇は日本の脚本集なので、毎年、日本間の芝居が登場する。斉藤は障子から襖、柱、敷居、鴨居を本格的につくり、それをセットして毎年紙の張替えや色の塗替えで装置できるようにした。そのため日本間の戸の開け閉めはできたのである。

そうなると青年演劇の観劇客は植民地内だけにとどまらず、周辺の植民地、リンス市、カフェーランジア、プロミッソンからと来るのが恒例となった。

次々と意欲作を発表

演劇は阿木翁助、北条秀司、菊池寛、八木隆一郎、知切光歳、榊原政常、横山健など著名劇作家の戯曲、列記すると切りが無い。小山は四年ほど、こうした劇作家の一幕物戯曲を本格的な舞台に仕上げてきたが、六六年に初めて彼の目指していた木下順二のものを手掛ける。いままでで、地盤は固ったとみたのである。六六年は「あかい陣羽織」だった。

日本から取寄せた舞台装置の図を組んだ。この舞台は従来のものに比べて数段階も至難なものだったが、好評裏に公演できた。この「あかい陣羽織」は乞われて同年八月にリンスのコチア産組倉庫、その九月にはバストスのコチア産組鶏肉冷凍施設竣工のイナグウラソンを記念して公演している。

六七年六月、小山は同じ木下順二の「二十二夜待ち」、六八年七月にも木下の特に名作といわれる「夕鶴」が、山本安英が演じた舞台をそのまま再現して公演した。この「夕鶴」では開幕で幕が除かれ、照明に浮ぶ舞台を目の前にした観客は一斉にその美しさにどよめくような嘆声をあげたといわれる。意欲的な小山は六八年の七月二十日に、これも世界的に有名なシェイクスピアの「ヴェニスの商人」（四幕一場）を公演している。

青年会の男女が農作の仕事を終え、夜は会館に集って、芝居の役作り、セリフ回しと稽古に励むとともに一方では舞台装置の大小道具を作る。その労力は想像に絶するものがある。当時の青年会長は中村平八、女子会長は中島和子、両人ともに傑出

した人材だったことも幸いしたといえる。

小山はこの二作を最後に家庭の事情で、千葉県の実家に夫妻ともども引揚げた。その小山のあとに就任した日語教師は渡伯間もなくだが、渡伯以前は映画、演劇に関係していたこともあって、小山のあと四年間にわたって演劇指導するが菊池寛作「時の氏神」、新生新派劇団が好演した北村小松作「青い靴」（二幕）、北条秀司作「麦ふみ」など代表的な舞台を公演するが、時の流れというか、聖進青年会が同じ植民地内に二年前に誕生していた別派青年クラブ、その青年クラブはクラブ活動にポ語を使用している上級学校への通学者の多い青年クラブとの合併の段階で、前青年会長の信念に生きる剛直の好漢中野自省が聖進青年会の伝統の崩壊を予感して、合併に徹底反対するが時の流れに抗し得ず合併は成立、とともに青年演劇は廃止され、十四年続いた演劇活動も一九七二年に幕を閉じるのである。

愛村愛農の村づくりが成功

それより十二年後の一九八四年、同植民地は創設五十周年記念を先亡者慰霊法要を軸に祭典を盛大に挙行するが、創設当時、雨後の筍のように創設された植民地は、荒廃地と化してパスト化しているものが殆んどである。

タンガラ植民地は八四年現在で日系三十五家族と僅かに感じるが、一戸当りの内容、質ともに飛躍的伸展の上にあり、植民

地に定住するブラジル人家族百二十世帯は総て日系人耕地に従属するものであり、ノロエステ地方では充実した力に富んだ農村活動を展開している。日本入会経営の日語校に常時五十余人の三世児童が学び、世帯主は一世から二世に継承されているが、植民地の行事は総て、この地で学んだ洗練された日本語で行なわれ、裕福で平和な植民地といえる。

これは斉藤伝四郎の愛村愛農の村づくりの成功が勿論主体となるものであるが、横田太郎の青年演劇による精神面での村づくりも側面の援助になったことは考えられる。また、こうした植民地であったからこそ、真摯に演劇指導に情熱を燃やす小山国松を擁して、文化不毛の地に村をあげて、木下順二演劇の舞台づくりの執念が、名作「夕鶴」をみのらせたことは偉業というべきであらう。

終わりに「夕鶴」公演のスタッフと、配役を記す。

舞台装置＝栗野不二男、演出・装置＝小山国松、装置制作＝斉藤伝四郎（指導）、衣裳＝佐々木みのる、照明＝江口亨、中村博道、杉谷一己、杉谷武夫、奥野茂治、効果＝中島英樹、伊藤親治。

配役　与ヘう＝中村平八、つう＝中島和子、惣ど＝伊藤憲昭、運づ＝井上和幸、子供たち＝伊藤久代、井上道子、宮野ひとみ、江口とみ子、佐々木忠雄、佐々木夏美。

「夕鶴」　戯曲一幕。木下順二作。昭和二十四年（一九四九）一

月「婦人公論」に発表、同年秋大阪で「ぶとうの会」が初演。雪深い村。愚かだが無欲で善良な与へうは、彼の美しい妻が、助けてやった鶴とは知らない。彼女が恩返しに自分の羽根で作る千羽織の布に眼をつけた欲張りの惣どと運づは、与へをそそのかして布を沢山作らせ金もうけを企む。都見物に行けるといわれて与へうは金に眼がくらみ、無理やり妻に布を織らせた上約束を破って織る姿を覗いてしまう。鶴は最後の布を彼に残して空に帰って行く。佐渡の民話「鶴女房」の劇化で同作者の「彦市ばなし」と同じく「素朴で倭小で穏和な日本的テーマの中にたたえられる美しさと楽しさ」を表わして、民衆に根をおろした真の国民演劇創造を試みようとする野心作。昭和二十五年（一九五〇）一月東京毎日ホールで上演、以後ぶどうの会による公演百余回、第二、第三毎日演劇賞には脚本・演出を始め各部門に入賞、主演の山本安英は文部大臣賞を得た。清純なファンタジイと統一ある舞台により戦後最も注目された画期的作品で、作者もこの作により地位を確立した。オペラにもなり昭和二十七年（一九五四）二月、日比谷公会堂で藤原歌劇団が上演、英訳もある。

（文中敬称略、一九八五年四月記）



小山国松先生（右）



菊池寛作「時の氏神」（1967年）

「旅芝居」もまた楽し

演劇研究会、二世スターに期待

小泉　照男
〔聖市演劇研究会会長〕

横田　太郎氏



横田　太郎氏



福田首相（右）と斉藤伝四郎氏･於、首相官邸

初舞台はリンスの植民地

思い出は遠い昔、日本は徳島県小松島町の港町に父が経営する食堂があった。店内には町内の映画館二つと芝居劇場よりの三つの〝宣伝ビラ〟が飾られ、その代償として映画館と芝居劇場の無料入場券が配られてきたので芝居好きの母親は毎週欠かさずの芝居見物。

ところが、この母親の連れが毎週決まったように私で、回を重ねるごとに母親より私の方が芝居好きになった。当時、私は十三歳、十四歳で家族とともに渡伯、ノロエステ線リンス管内のサン・ジョン植民地に入植した。

間もなく六月二十四日のサン・ジョンのお祭り。同地日本人会のきもいりで、当時としては大仕掛な舞台に歌舞伎芝居というのが演芸会の最大の呼物、それに私の父（清一）も出演したが、なんとその相手役の女形（おやま）は、現在ブラジル演劇協会の理事で技術部長も兼ねる山口春海さんであった。出し物は確か「八百屋お七」、山口さんは当時まだ十六歳ぐらいの若者だったが、その舞台は素晴しく立派なもので観客の人気を〝ひとりじめ〟といったような有様。一九三八年ころのことで、そのうち私もサン・ジョン祭の演芸会で舞台を踏むようになったが、初舞台以来いつも相手役は山口さんであった。

芝居好きの私に、月給を払って使ってやろう……という夢の

ような話しがあったのは一九四七年のことだった。相手はマリリアの新星劇団で、山元貞義（芸名・嵐正太郎）、浪曲師の京山円駒さんらによって創立されたもの。入団してから間もなく、劇団の〝サンパウロ初公演〟という話しがあり、舞台ではただ単に〝斬られ役〟に過ぎない私も一同とともに張り切って上聖したが、この公演は手続き上の不備からか実現しなかった。劇団はその後、有志らの計らいにより、サント・アンドレーの日本荘、市内ジャバクアラ区の小笠原太陽堂、スザノ、モジなどにおける公演で新星劇団のサンパウロ地方公演は幕を閉じたのであった。出し物は「国定忠治」であったように思う。当時の団員のひとりで、今も忘れられない人に現在大谷舞踊学校の校主として活躍している大谷康夫さんがいる。なお、私はこのあと、サン・ジョオン植民地出身者の多いリンス演劇研究会に入り、歌舞伎芝居でパウリスタ延長線のガルサに行ったことがある。

聖市演劇研究会生まれる

一九五五年三月十二日、サンパウロ市のサクラ・クラブに〝芝居キチー〟が集まって、聖市演劇研究会が生まれた。初代座長は神保俊雄さんで、旗上げ公演は三月二十七日の「赤城の子守唄」、会場はサクラ・クラブであった。さらに研究会は同年の七月二十五、二十六日の両日、シネ・東京の舞台で華々しく「阿

波の鳴門」を上演、次いで五八年六月二十八日にはブラジル日本移民五〇年祭を祝いパラマウント劇場で「義経千本桜」三幕を昼夜二回にわたって上演した。



新星劇団の全員、前列左から三人目が小泉照男



阿波の鳴門 、山口春海 右 と小泉照男



サクラ・クラブでの「赤城の子守唄」。神保座長（右）と小泉

一九六一年七月二十三日、アルツール・アゼヴェード劇場における東部男女青年会主催の演芸会で、私の初の演出作品「楢山節考」三幕を発表した。配役の殆んどは二世の芸達者揃いで、楢山の山作りを三段構えでやり、立派な舞台だ、と多くの人にほめられたことを覚えている。

その後の聖市演劇研究会の上演活動は次のとおりであった。

公認五周年記念発表会　六二年十一月二十四（一回）、二十五日（二回）、アルツール・アゼヴェード劇場。「雪の渡り鳥」全六場であった。出演者は、神保俊雄、宮原義美、菅原虎之助、小泉照男（私にとって初めての女形＝おやま＝）、下山利之、本田照子、土井公男、下山円雀、古沢久、野沢トヨ子、津田鹿之助、芳賀秀夫、山本政男、村重将、小泉信幸、富永政喜、奥村未人、田中鈴子、野沢藤子、若塩春美、木川利子などであった。

公認七周年記念発表会　六三年八月九日、パラシオ・マウア劇場。「曽我兄弟」五幕、（七十歳以上の老人を無料招待）。

創立十周年記念発表会　六六年七月十六日昼夜二回、パラシオ・マウア劇場、後援＝日本浪曲協会支部、ブラジル浪曲協会。義理人情　時代股旅「鯉名の銀平」五暮、おもな出演者は、神保俊雄、宮原義美、津田鹿之助、本田富士子、古沢久、土井公男、小泉照男、野沢トヨ子、古賀秀男、倉地仁平などに、時代悲劇　浪曲入り「湯の町情話」三暮、おもな出演者は、倉地一郎、小泉照男、宮原義美、野沢トヨ子、村田汰田詞、津田鹿之

助、島田正子などであった。

〃旅芝居〃への第一歩踏出す

一九七〇年、私はこの年、座長になる。同年七月二十六日にはノロエステ線ミランドポリスの第二アリアンサ移住地へ〃旅芝居〃の第一歩を踏み出す。出し物は「母」「湯の町情話」「母の湖」などであった。

七二年七月、約二週間の日程で北伯パラ州の州都ベレン市およびピメンタ・ド・レイノの里トメ・アスー移住地を慰問公演。内野領事、江村汎アマゾニア日伯文化協会長、トメ・アスー移住地関係者から大歓迎を受け、公演も大盛況であった。出し物は、「神崎与五郎東下り」「湯の町情話」（子別れの場）に「瞼の母」などであった。当時の出演者は、松島すみれ、田中すづ子、小泉照男、津田鹿之助、村重将、古沢久のほか舞台係二名の計八名で、公演回数は四回であった。

七五年二月二十八日、三月一日の両日はパラグアイ国アマンバイア州ペードロ・ファン・カヴアレイロ市の汎アマンバイア日本人会（原木栄会長）の招きにより、団員十名とともに公演会。同地のコロニアは、戦後の移住者約二百家族によって形成されている。サンパウロからの劇団は私たちが初めてのためコロニアの日会々館では狭ますぎるため市内の大サロンを借りての公演となった。出し物は今回で六十回もの公演記録を持つ

「瞼の母」二幕を皮切りに、「神崎与五郎東下り」一幕「滝の白糸」四幕を初日に、二日目はコロニア浪曲界の花形、三岳とみ子師による「原爆の母」口演、「岡野金右ェ門」「父帰る」、歌舞伎狂言「お富与三郎」などで大盛況裡に上演を終えた。



パラグアイ公演の一行


「楢山節考」

八一年十月二十五日にはサンパウロ日伯援護協会、徳島県人会の後援により文協大講堂で「小泉照男丈、芸能生活三十周年記念慈善公演」を催した。正午、午後六時からとの二回公演で日舞、阿波踊、歌謡曲などのほか、「やくざ仏心」三幕、「忠太郎月夜」二幕、「湯の町情話」三幕など盛沢山のプログラムで大盛況だった。

八二年七月四日、首都ブラジリア近郊に日系農家が入植（一九五七年に二十六家族）してから二十五周年の記念祭が行なわれ、待望の祝賀演芸大会に私たちの演劇研究会もこれに参加し



「義経千本桜」の立花恵子と小泉照男

た。プログラムは、松田プロダクション八二年度の新人賞を獲得した穎娃義弘君を皮切りにカラオケが始まった。渡辺ミシェル、栃沢政瑠、高橋静雄、井上久弘、栃沢藤男、同オルガ、福永ミルトン君ら歌手が登場さらにチビッコ歌手の栄アレシャンドル（七才）、栃沢デイゼ（六才）には割れるような拍手。舞踊では、ベテランの坂東英子さんの黒田節が好評だった。

次いで待望の芝居―現代悲劇浪曲入り「父帰る」の一幕は真名子雲声師口演、土井公男曲師で行なわれた。配役は、父＝津田鹿之助、母＝本田譜二子、兄＝高橋静雄、弟＝井上久弘（二世）、娘＝前川光子など。さらに時代喜劇「若殿恋日記」、真名子雲声師の「乃木将軍と孝行兵士」が続き、最後の私（小泉）の出演で時代劇「忠太郎月夜」二幕で記念祭に花を添えた。

なお、私たちの演劇研究会では毎年、日系福祉団体での慰問公演を適時に行ない、また、新人（主に二世）の活躍に期待している。



右から高橋静男、栃沢政瑠、前川光子、井上久弘



「雪の渡り鳥」の右から小泉、神保、野沢、天中軒満月



「お富与三郎」の小泉照男と松島すみれ

こんごも飛躍期

丹下セツ子劇団　　田村徹

芸　歴

師匠名　女剣劇　不二洋子（故人）、弟子入りは昭和二十八年、当時十三歳、約十か年にわたって修業。

日本において主として出演した劇場は、浅草常盤座、明治座、日劇。不二洋子一座当時の配役は、「忠臣蔵」＝小林平八郎、「国定忠次」＝板割浅太郎、「瞼の母」＝金物の半次、「近藤勇」＝勇の長男、「森の石松」＝小政など。

第一回援協主催チャリティショー、「世話情浮名の横櫛」玉川勝太郎の切られ与三、伴淳三郎の蝙幅安に特別出演としてお富を演じた。

一九八四年、藤間芳之亟劇団第一回に文化協会において「残菊物語」のおとくに賛助出演。その他丹下劇団として三回公演、特に一九八四年一〇月六、七日の両日は、丹下セツ子渡伯二十周年記念公演を開催。時代劇「美女妖婦伝」より「あばずれ」五幕六場を上演し、中村梅之助、二葉百合子、沢竜二、小月冴子、浪越徳治郎、嵯峨美智子、宮路おさむ、清川虹子、梅沢武生、同富美男（下町の玉三郎）、島田正雄、浅利香津代、佳山明生、花柳秀美（サンフランシスコ）、片岡長次郎、藤間芳之丞、花柳金

龍、星照子の皆様より番組に丁重な御挨拶を頂いた。

日本舞踊　昭和三十三年四月十八歳の時、上野松坂屋ホールにおいて花柳流名取披露として「藤娘」を踊った。その他、藤間芝之亟師、花柳金龍師の踊の会に何回も出演した。

藤間流　「供奴」「夕月」「梅川」芳鰹師と共演。

花柳流　「お祭」龍千多師、「梅川」龍千多師と共演、「伊那節マンボ」龍伯師と共演、その他数多くあるが省略。

丹下セツ子劇団員、土井公男、山口春海、及川也周平、滝野清一、小泉照男、池田信雄、宮原繁夫、樋口保則、広田義秋、村井ミチ、石井美和子、滝野正子、金沢文子、高桑文恵、前川美津子、金沢実、高橋静男、木村強、野田茂来、井上久弘、津田虎之助。

丹下劇団太鼓部　松井ミカ、浜崎侑一、福垣内みゆき、藤田一好、浜崎公充、浜崎芳一

司会　藤瀬圭子　ナレータ　畑勝喜。

スタッフ　脚本　醍醐麻沙夫　広瀬秀雄。

構成演出　畑勝喜、書き物　沢田多策、床山

安田祐規柄、着付、三島いし、矢野かほる。

大道具　土井公男、熊谷文雄、樋口幸雄。

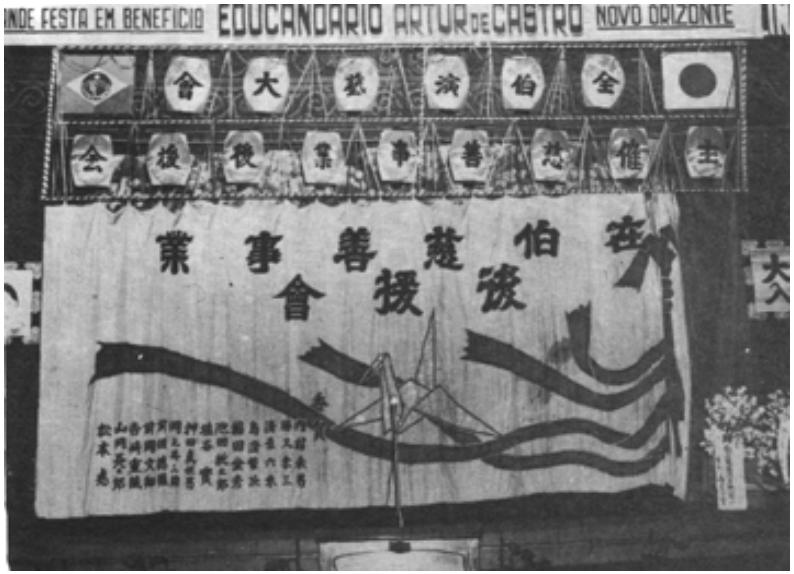
美術協力　若林和夫、弓場バレエ団の小原久雄と同明子。照明、音響　グラバソン映画社。

企画製作　丹下セツ子。顔師　丹下セツ子。

次の公演に是非上演したいもの「弁天小僧」

座長　丹下セツ子（本名、原種子）、昭和十五年（一九四〇）二月十八日生まれ、母　丹下キヨ子。本籍地東京都港区芝田村町五丁目十六番地。

（文中敬称略、一九八五年三月、田村徹＝元都道府県事務局長―記す）



戦後初の芸能祭

戦後初の芸能祭＝写真右＝は、在伯慈善事業後援会の主催により一九四九年八月二十八日午後二時（昼の部）と同七時（夜の部）の二回にわたってサンパウロ市ルーズヴエルト駅近くのコロンボ劇場で幕をあけた。

詳しいことは忘れたが、出演者はすべて一般から募り、また、出し物も出演者にすべて任せた。流行歌、民謡、日本舞踊その他とプログラムもバラエティに富み、昼夜とも客席は満員だった。

なお、後援会の委員は内村末男、勝又幸三、清原六米、島登繁次、福田金彦、池田純太郎その他八人の諸氏であった。（押田真佐男）

慈善事業に協力を…

大和芸能団　共鳴者を得て発足

及川也周平

（大和芸能団代表）

私たちの大和芸能団は、一九七〇年に発足しました。及川也周平、沢田多策の二人を中心に、民謡、日本舞踊、奇術、喜劇、浪曲、芝居、その他の芸能愛好者などが集まり、それぞれが自身の職業に従事するかたわら、休日や祭日を利用しては各地コロニア団体の要請に応じて〝得意の芸〟を披露し、その純益のすべてを慈善関係の団体に寄付する、というモットーに共鳴したメンバーによって構成されています。

発足当時、失礼な言い方と思われるかも知れませんが、私たちの芸を通じて慈善事業へ協力しよう、との真心一つで不幸な人たちに愛の手を差し延ばし、少しでもお役にたてていただければと思い微力ながら舞台で頑張りました。この意志は現在もメンバーの全員が持ち続けています。

顧みますと、一九七〇年より七四年十一月十日までの間における慈善団体へのための出演は十六回余（以下省略）に達し、日本移住者援護協会（以下、援協と略す）と救済金に寄付をさせていただきました。また、この寄付に際しては邦字新聞社に委託、あるいは直接に援協、救済会に出向きました。これは不肖（及川）と沢田が当り、その度毎に中沢源一郎・援協会長、渡辺マルガリーダ・救済金会長より鄭重な御礼状を賜わり、感謝の念を持ち現在まで、その都度都度の新聞記事とともに貴重なものとして保存しています。

一九七二年五月十三日付き新聞には、「気骨ある明治生れ、芸披露、懸命に社会奉仕」という見出しで、

「同芸能団は、団員十人それぞれ職業を持っているが、休日を利用して得意の芸を各地の要請で披露、その純益のすべてを慈善団体に寄付している。その芸も日本舞踊、奇術、浪曲、お笑い、劇などでバラエティに富んでおり好評。しかも団員のほとんどが明治生れの老年期に入った人たち。一般的には慰められる立場にもかかわらず、各自の趣味を大いに生かし、積極的に

社会のために善意の活動を続けている。コロニアの老人福祉が何かと叫ばれている時、沈滞しがちな老人たちに活を入れる意味からも高く評価されている」。

と、私たちにとって過分なおほめの言葉をいただきました。

現在のメンバーは、及川、沢田のほか、香川天竜、中村琴二郎、地球斉富士夫、古沢千鳥（京藤間勘千鳥）、奥田朝子、島田邦子、富永政子、吉田芳子、小林敏子、松下奈美子（花柳竜升）の以上十二名で、及川が代表となっています。



各地の催しに積極的に参加

私たちの大和芸能団が一九七〇年より同七四年十一月十日までの間に招待に応じて参加した各地における慈善公演とおもな出し物は、およそ次のようなものです。

◇七〇年十一月二十二日（日）エンブー部落の日伯文化羽衣会（阿部育夫会長）。メシバー＝及川也周平、寿々喜一声（沢田多策）香川天竜、藤野静江、古沢千鳥、奥田朝子、島田邦子、吉

田芳子、富永政子、松下奈美子、小林敏子。出し物＝舞踊、浪曲、手品、寸劇など（三時間半）。

◇七一年五月二十二日（土）前記と同じエンブー部落の日伯文化羽衣会。メンバー＝及川、寿々喜、香川、長野渓竜、和田春子、松田ツタエ、茂木庄三郎、高橋雄、古沢、奥田、浦山光子。出し物＝民謡、舞踊、浪曲、奇術、寸劇など（四時間）。

◇七一年九月五日（日）ブラガンサ・パウリスタ連合日本人会（西川蔚会長）。メンバー＝及川、寿々喜、香川、岩本芳道、古沢、奥田、島田。出し物＝舞踊、浪曲、奇術など（三時間半）。

◇七一年十二月四日（土）ボア・エスペランサ日本入会（菅原照男会長）。メンバー＝及川、寿々喜、香川、中村琴二郎、奥田、島田、吉田、松下、小林。出し物＝舞踊、浪曲、奇術（四時間）。

◇七一年十二月十九日（日）イタペセリカ・ダ・セーラ日本人会（田畑稔会長）。メンバー＝及川、寿々喜、香川、中村、奥田、島田、松下、小林。出し物＝舞踊、浪曲、奇術など（三時間半）。

◇七二年四月二十三日（日）イタペセリカ・ダ・セーラ日本人会（田畑稔会長）。メンバー＝及川、寿々喜、中村、香川、白井光枝、赤星なつえ、吉田、富永、松下、小林。出し物＝舞踊、浪曲、奇術、芝居など（四時間）。

◇七二年四月三十日（日）サント・アマーロ高砂会（深津増

太郎会長)。メンバー＝及川、寿々喜、香川、中村、吉田、松下、小林、須永敏子。出し物＝舞踊、浪曲、奇術など（三時間半）。


古沢千鳥（京藤間勘千鳥）


及川也周平の「紀伊の国」



寿々喜一声

◇七二年五月七日（日）ブラガンサ・パウリスタ連合日本人会（石元壮宜会長)。メンバー＝及川、寿々喜、香川、中村、吉田、富永、松下、小林、田中美保、島田、和田、本場美代子、田中（着付方)。出し物＝舞踊、浪曲、奇術など（四時間)。

◇七二年七月三十日（日）　パラナ州クリチーバ日本人会々長、クリチーバ第四回芸能祭に出演。メンバー＝及川、寿々喜、中村、香川、奥田、島田（三時間）。

◇七二年九月十七日（日）　聖南西地区農産品評会・アルカショーフラ祭り委員会。メンバー＝及川、寿々喜、中村、地球斉富士夫、古沢、奥田、島田、吉田、富永、松下、小林、田中（着付方）。出し物＝舞踊、浪曲、奇術など（四時間）。

◇七二年九月二十四日（日）　聖南西地区農産品評会委員会。メンバー＝及川、寿々喜、香川、中村、古沢、奥田、島田、吉田、富永、松下、小林、今村（着付方）。出し物＝舞踊、浪曲、奇術など（四時間）。

◇七三年十一月二十六日（日）　タクアリチンガ日本人会創立十周年記念祭（三浦西松座長）。メンバー＝及川、地球斉、長野、茂木、奥田、島田、吉田、富永、松下、小林、今村（着付方）。出し物＝民謡、舞踊、奇術など（四時間）。

◇七二年十二月十七日（日）　ボン・スセッソ日本人会（上田会長）。メンバー＝及川、寿々喜、地球斉、長野、茂木、奥田、島田、高尾敏子、田中美保、田中ナカ。出し物＝民謡、舞踊、浪曲、奇術など（三時間半）。

◇七三年一月二十八日（日）　生長の家サンカエターノ・ド・スール誌友会（岩田隆蔵会長）、於・チジュカス・クラブ。メンバー＝及川、寿々喜、香川、地球斉、奥田、島田、吉田、富永、

小林、今村。出し物＝舞踊、浪曲、寸劇、安来節、奇術など（四時間）。



「古城」の吉田芳子



「明治一代女」の島田邦子・右と奥田朝子



「八木節踊」の右から松下奈美子、吉田芳子、小林敏子、富永政子。

◇七四年十一月十日（日）　サン・ジョゼー・ドス・カンボス日本人会創立二十五周年記念（松村孝一会長）。メンバー＝及川、寿々喜、札軒手品手、吉田、富永、松下、高尾、沢田節子、池崎さかの。出し物＝舞踊、浪曲奇術など（三時間半）。なお、憩の園慰問、その他の奥地公演などは省略します。

また、八一年四月十二日（日）には聖市慈善芸能協会（小野寿会長）主催の第五回聖市慈善祭に演劇「名月赤城山、瀧沢不動之場」（一幕）で応援出演しました。

〔解説〕　国定忠治は百姓達の難儀を救わんとして、悪代官を懲した。その為に役人に追われる事になり、子分を連れて赤城山に隠れる。或る日、用事があり町に出た時役人に見付かり、遂に子分の浅太郎と共に刀を抜いて捕り手と戦う。その時、捕手頭御室の勘助が昔受けたる恩義を感じ、それとなく十手を振りながら逃げ道を教えるが、夢中の忠治には勘助の意中を知る事が出来得なかった。漸くにして山に戻った忠治は、浅太郎に勘助は（浅太郎の伯父）勘助の不義を責め彼を討ってこいという。是非なく浅太郎は山を下り勘助の宅に行き涙ながらに伯父を討ち、その子勘太郎を背負い子守唄をうたいながら山に引返し、勘助の本当の心中を語る。忠治は初めて知る勘助の本心、並びいる子分も遊び人の義理の辛さに忍び泣く、義理と人情の物語。

スタッフ、おもな配役は次のとおり。

脚本、企画、演出、舞台監督＝及川也周平

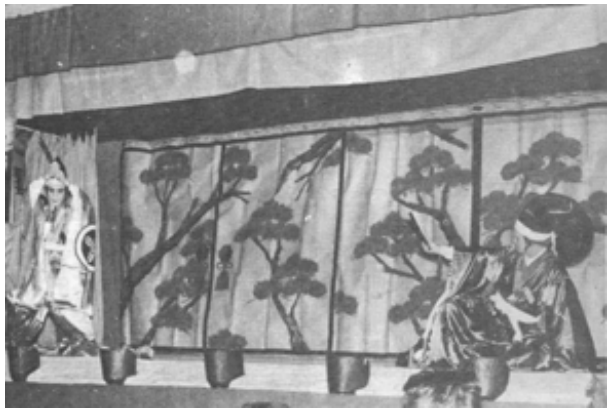
音楽＝大谷康夫、化粧係＝山口春海、着付係＝及川也周平。
配役　国定忠治＝中川芳明、板割浅太郎＝山口春海、日光円蔵＝内海博、清水岩鉄＝茂木庄三郎、松井田喜蔵＝秀島朝一、勘太郎＝滝野美子、捕手頭＝大谷康夫、捕手＝他数名。

ヴアルゼン・グランデ演劇団　　及川也周平

ヴァルゼン・グランデ。サンパウロから約四六キロ、ラポーゾ・タヴァレス街道沿いの同地に日系農家が入植したのは一九二九年、今から数えて五十五年前である。当時の日系農家数は明らかでないが、三四年十一月四日（当時の明治節）には日本語学校の落成式を盛大に催すとともに、同校内に特別舞台を設け演芸会をやったという。当日の出し物については残念ながら記録に残されていないが、この演芸会は戦前のコロニアにとって〝初〟のものではないかと思われる。

次いで三五年一月二、三の両日、聖西連合青年会主催で、コチアを中心とした日系農家集団地約二十の参加により、演芸会が催された。会場は市内ピニエイロスのコチア産組本部の二階サロン。同会の会長はコチア産組創立者のひとり下元健吉、副は内海義雄、ピニエイロス青年会長の坂本が記録係りで、大久保憲男がモルンビー部落より出演している。

第二回演芸会は翌三六年、ヴァルゼン・グランデ部落は大久保の指導により、芸題「捕物帖七化おしん」三幕三場を披露した。三七年の演芸会にもヴァルゼン・グランデ部落は出し物として「ひきやく桜」五幕七場で好評を博したが、同部落の演劇活動はこの演芸会参加が戦前最後のものとなり、その再開は一九四八年に持ち越された。



「松の廊下刃傷の場」右・及川の吉良上野介と鶴田政幸の浅野内匠頭

演劇活動、戦後再び復活

一九四八年、ヴァルゼン・グランデ部落の演劇活動は再び息を盛り返えした。部落の演芸会での出し物は「忠臣蔵三段目、松の廊下刃傷の場」で吉良上野介、同じく「五段目、山崎街道の場」で斧定九郎を及川也周平が演じた。

その後の活動を年代順に記させてもらう。

一九五〇年、部落演芸会。出し物は「赤城山、国定忠治」三幕、配役は国定忠治＝鶴田政喜、板割浅太郎＝及川也周平、御室の勘助＝友岡弥吉、その他数名。

五三年一月、部落運動場美化資金募集、部落慰安舞踊大会。芸題「加茂川夜曲、京都五条の橋の場」配役は、近藤勇＝鶴田政喜、芸者お浜＝大久保憲男、桂小五郎＝及川也周平、その他。

五四年七月、時代劇「忠臣蔵、絵図面取の場」配役は、小間物屋善兵衛（実は神崎与五郎）＝田村精郎、清水一学＝鶴田政喜、矢頭右衛門七＝三上弘文、大工の吉五郎＝友岡弥吉、親見弥一郎＝奥山栄、米屋五兵衛、実は前原伊助＝及川也周平、侠客＝古川繁、その子分＝古川英雄、町の娘＝竹田義行、お条＝大久保憲男など。

同年九月六日（土）から十二日までの一週間にわたって伯国芸能文化連盟主催、サンパウロ市四百年祭典協力会後援の「全伯芸能競演大会」が、南米劇場（当時）で盛大に催された。同大会に参加の劇団数は九、われわれの部落からもヴァルゼン・グランデ演劇団という名のもとに初日の六日に出演した。出し物は時代劇「忠臣蔵、絵図面取の場」で、配役は七月の部落演芸会（侠客“鶴田政喜、清水一学＝古川繁に代る）の時と同じだった。

各自とも精一杯に演じたにもかかわらず惜しくも入賞は逸した

が、中央の〝桧舞台〟を踏めたことに、心から満足したものである。



「高野山石童丸親子別れ之場」及川也周平〔右〕と岡秀義





写真上「忠臣蔵絵図面取」右から清水一学（鶴田政喜）、米屋五兵衛（及川也周平）、お粂（竹田義行）。同下「弥次喜多道中」大久保憲男（右）と及川也周平。

五六年六日二日の部落演芸大会を最後に、われわれの演劇活動はその幕を閉じた。当日の出し物は歌舞伎芝居「高野山、石童丸親子別れの場」であった。企画演出は及川也周平浄瑠璃は浅野タカ子、配役は、苅萱道心＝及川也周平、石童丸＝及川秀義、福連坊＝大久保憲男、萬年坊＝友岡弥吉、天才坊＝鶴田政喜、麻生坊＝児玉秀男などであった。

なお、ヴァルゼン・グランデの演劇活動は太平洋戦争勃発のため停滞の日々を余儀なくされたが、現在では戦前に劣らぬ盛況さを呈し、同地が聖南西地域で文化部落と称されているのは誠に喜ばしいことである。敬称略。

（一九八四年十二月・記）

おもな協力参加出演

大和芸能団は前記の応援出演のほか、「移民の日」を記念してのコロニア芸能祭、援協による日本病院建設のためのチャリティー・ショー、その他の催しにも積極的に参加出演させていただきました。次にそのおもをものを列挙します。（カッコ内は出演者）

◇コロニア芸能祭

一九七八年六月二十四、二十五日。演劇「高野山石童丸親子別れ之場」、企画・脚本・演出＝及川也周平、浄瑠璃代り浪曲入り＝土井公男、曲師＝本田譜土子。（及川也周平、田中むつ子、寿々

喜一声、山本政雄、茂木庄三郎）。

一九八二年六月十九、二十日。演劇「加茂川夜曲京都五条橋の場」、企画・脚本・演出＝及川也周平。（宗像国十郎、及川也周平、尾形千恵子、樋口公若、広田義秋、池田信雄、樋口保則、その他）。

◇ジャバクアラＰＬ教会主催、教会建設資金協力と年末助け合い慈善協力＝七六年十一月二十八日。歌舞伎狂言「番町皿屋敷」二幕企画・振付け・音楽＝及川也周平、浄瑠璃代り浪曲入り＝真名子雲声、曲師＝土屋久吉。（藤本政雄、及川也周平、池田信雄、山本政雄）。

◇コロニア・チャリティー・ショー

一九八一年十一月十四・十五日。演劇「明治女捕物帖」四幕（ブラジル演劇協会、及川也周平会長）。脚本・音楽・演出＝及川也周平、企画＝中川芳月。（土井公男、山本政雄、池田信雄、中川芳月、及川也周平、山口春海、広田義秋、鍬柄三郎、尾形千恵子、前川光子、岡松毅、大井一夫）。

◇国際高令老年記念、演劇と舞踊の夕

一九八二年七月二十五日。歌舞伎狂言「番町皿屋敷」二幕、企画・音楽・演出＝及川也周平、浄瑠璃代り浪曲入り＝真名子雲声、曲師＝本田譜土子。（中川芳月、及川也周平、樋口保則、広田義秋）。

◇初代家元・京藤間遊楽師七回忌追善舞踊会（友情出演）。

一九八三年十一月六日。歌舞伎「仮名手本忠臣蔵三代目足利館松の廊下刃傷之場」、企画音楽・演出＝及川也周平。（及川也周平、山口春海、滝野精一、池田信雄＝以上、松の廊下の場。京藤間勘輝、門下生＝以上、忠臣蔵五段目山崎街道の場）。

◇丹下セツ子旗上げ公演

一九七六年十一月六、七日。時代人情剣劇「兄弟鴉」三幕四場。（山口春海、佐藤義雄、高桑ふみえ、及川也周平、宮原敏雄、中川芳月、藤本政雄、畑勝喜、土井公男、岩崎清子、池田信雄、川内秀夫、石川論、丹下セツ子、長野愛竜）。

丹下セツ子劇団第二回公演　七七年十一月五、六、七日。時代人情剣劇「三日月小僧正吉物語」四幕五場。（丹下セツ子、山口春海、樋口幸雄、佐藤義雄、高桑ふみえ、中川芳月、土井公男、岩崎清子、藤本政雄、及川也周平、畑勝喜、池田信雄、吉田興房、石川論、尾形千恵子、吉田よし子、高桑幸恵、松下奈美子、村井ミチ）。

丹下セツ子渡伯二十周年記念公演　八四年十月六、七日。時代劇「美女妖婦伝」より五幕六場、「あばずれ」。（丹下セツ子、滝野精一、山口春海、宮原、高原静男、小泉照男、高桑文恵、樋口保則、星照子（在日本）、及川也周平、村井ミチ、滝野正子、石村美和子、前川美津子、金沢文子、広田義秋、井上久弘、野田茂来、木村強、金沢実、津田鹿之介、その他）。敬称略。

（一九八四年十一月・記）

ブラジル日本都道府県人会　創立十周年記念演芸会
期日　１９７６年５月３０日
場所ブラジル日本文化センター記念講堂



迫真！？「松の廊下」
県連劇団が大熱演

一九七六年五月三十日午後六時半、ブラジル日本文化センター記念講堂は、千五百人の観客を集めて時ならぬ大にぎわいを呈した。

ブラジル日本都道府県人会連合会創立十周年記念演芸会の華やかな幕開きである。

この県連演芸会は二部構成で、午後二時より各在伯県人会〝出し物〟の郷土民謡、午後六時半より前評判が高かった「仮名手本忠臣蔵」と長時間にわたる熱演だった。この熱っぽさは観覧席にも伝わって、あちらこちらから声援が飛び交い会場は沸騰するばかり。当日の舞台について日伯毎日新聞（第六、八〇三号）は、社会面トップ五段抜きで次のように報じている。

ドタバタぶりも拍手の嵐、笑いの渦

〈〝三枚目〟売り出す／迫真！？、「松の廊下」／県連劇団が大演熟、　とりわけ午後六時半開幕になった仮名手本忠臣蔵でそのムードは最高潮。前半の「足利舘松の廊下」と、「舐園町一力茶屋の場」で〝本格的な芝居〟を見せ、後半の「吉良邸討入」でドタバタぶりを見せるというアイデアが好評だった。特に高武蔵守師直こと徳尾恒寿さん、仲居の及川也周平さん、大石内蔵助の屋比久孟清さんのなかなかの演技に声援の拍手の嵐。

無事、忠臣蔵を終えて県連関係者もホッとひと息。「やるまではどうなることやらと心配だったが、よくやったワイ」と自画

自讃の〝迷優〟さんばかり。とにかく二週間の猛ケイコに加えて全員で東宝映画『忠臣蔵』を観賞するというようなやる気の企画が功を奏したようだ)。

なお「仮名手本忠臣蔵」の出演者は次のとおりであった。

芸題　三段目、足利館松の廊下

高武蔵守師直　徳尾恒寿　島根
塩治判官高定　高野芳久　山梨
桃井若狭之介　渋川正吉　青森
加古川本蔵　広田良策　群馬
鷺坂伴内　小野　豊　岡山
茶道　河野忠重　徳島
特別出演　義太夫　後藤源三郎師
三味線　鈴木　せつ師

芸題　三段目返し、道行旅路の花聟（落人）清元浄瑠璃

特別出演　藤間芳之丞師指導
腰元おかる　藤間芳嘉師
早野　勘平　藤間芳鯉師

芸題　七段目、祇園町一力茶屋の場

大星良之助　屋比久孟清
大星　力弥　坂野　博志
間　重次郎　草野　朝光
神崎与五郎　山本　善蔵

武林　唯七　　土井　公男

仲　　居　　及川也周平

特別出演　花柳金龍師指導

元禄花見踊　花柳金龍門下生

芸題　十一段目、吉良邸討入

四十七都道府県の会長始め特別出演

土井公男、及川也周平、池田信雄

舞台装置＝土井公男、殺陣指導＝池田信雄、及川也周平

プロデューサー＝田村徹。



写真上から「仮名手本忠臣蔵七段目祇園一力茶屋の場」仲居（及川也周平）、大星良之助（屋比久孟清）、同下「吉良の討入れ」、間重次郎（宜野朝光）、神崎与五郎（山本善蔵）、武林唯七（渋川正吉＝人物はいずれも右から）

写真上から「仮名手本忠臣蔵七段目祇園一力茶屋の場」、鷺坂伴内（小野豊）、高武蔵守師直（徳屋恒寿）、茶道（河野忠重）、塩冶判官高定（高野芳久）、同中「一力茶屋の場」仲居（及川也周平）、大星良之助（屋比久孟清）、同下「吉良の討入れ」、間重次郎（宜野朝光）、神崎与五郎（山本善蔵）、武林唯七（渋川正吉＝人物はいずれも右から）

第3部

日本舞踊

〔日本舞踊〕　略して日舞または邦舞という。歌舞伎のなかで発達した歌舞伎舞踊が中心であるが、関西で発達した上方舞や新舞踊を含んだ名称として使われている。

日本舞踊は踊、舞、振の三つの要素から成り立つが、それらは格、意気、間（ま）、移りなどがさまざまに按配されて美しくできあがる。

日本舞踊では腰を入れ、姿勢を低くして大地から離れないしぐさが数多く見られるが、バレエは両手を高くさしあげ、爪立ちし、跳躍する。邦舞は跳躍のかわりに摺り足をし、力強く足拍子を踏む。バレエが天上的であるのに対し、日本舞踊は地上的であり、外向的なバレエに対し、日本舞踊は内包的な動きを特徴としている。

現代の日本舞踊家の多くは日本舞踊協会に属し、家元制度に

よってがっちりと各流派を守っている。最も古いのは、元禄期の志賀山流であるが、次いで藤間、西川がこれに続く。

一つの家元からはいくつかの流派が発生したが、今日最も隆盛をきわめているのは西川流から出た花柳流で、それにつぐのが藤間流（二派ある）である。昭和五十三年（一九七八年）現在家元の数は一五〇を越すといわれている。

〔新舞踊〕　坪内消遥以後、大正から昭和にかけて従来の古典舞踊に対して発達した新作も本舞踊をさす名称である。第二次世界大戦後の新作は創作舞踊と呼ばれている。

初めて新舞踊の名を冠したのは大正八年（一九一九）、花柳徳次（のちの五条珠美）の「惜しむ春」であるが、それより以前、藤間静枝（のちに藤蔭静樹）は家元以外は絶対に許されなかった振付けのしごとをなし「藤蔭会」（とういんかい）を大正六年（一九一七年）に起こし、新舞踊運動の先駆者となった。その代表作には「思凡」「蛇身厭離」「歯車一九五〇」「巴里戦士のパイプ」などがある。

楳茂都陸平は宝塚少女歌劇で大正九年（一九二〇）「春から秋へ」をつくり、市川猿之助（のちの猿翁）は春秋座による「虫」（一九二〇年）をはじめ当時の青年歌舞伎俳優たちが新舞踊をつくり出している。

アンナ・パヴロヴアの来日公演の影響もあって、二世花柳寿

輔（のちの寿翁）は「花柳舞踊研究会」を大正十三年（一九二四）にはじめたが、さらに昭和五年（一九三〇）には新舞踊が一斉に開花したといわれ、花柳珠実（五条珠実）、花柳寿美、藤間春枝（吾妻徳穂）、西崎緑、藤間勘素蛾（観素蛾）らがそれぞれの会をつくって活動を行ない、新舞踊運動の全盛期を迎えた。（自由国民社版「現代用語の基礎知識一九七九」より転載）。

鍬を取った手に「舞扇」

初代勘輝　困苦いとわず指導に専念

京藤間　勘輝

（京藤間流二代目家元）

十八才で藤間流の名取に

初代家元、京藤間勘輝（のち遊楽、本名は田中照）は、明治三十九年（一九〇六）一月八日、東京中央区日本橋で生まれました。六才の時に関西を本拠とする山村流に入門、十三才で名取となりました。同年、お師匠さまの斡せんで藤間流に入り、十八才の時に同流から名取免状を与えられました。その頃は山村照と名乗っていたようです。

昭和十六年（一九四一）、どういう理由からか知りませんが一

家をあげて渡伯、モジアナ線クラビンニョス駅のサンタ・フランシスカ耕地に配耕されました。私は僅か九才の時でした。同耕地で約五年間にわたってコロノ生活を続けましたが、その間、父親（初代勘輝の夫）の健康がすぐれず同耕地で他界、初代は私たち子供の将来と教育を考えた結果、サンパウロに移り住みました。

その後間もなく知合いの方々の勧めにより身に覚えのある日本舞踊で生きることを決意し、〝お母さま師匠〟藤間勘輝として、コロニアにおける日本舞踊の普及と発展を願って子弟の指導に当たるようになりました。

当時の日系コロニアの経済状態は、きようこの頃に比べると非常に悪かったためか、日本舞踊そのものに興味を抱き、子供さんたちに日本舞踊の一つでも…という人々は誠に少なかったようです。

しかし、初代は太平洋戦争を境とした戦前戦中、戦後の索漠（さくばく）とした空白の時代を長く体験なさった旧移民の方々の生活に、いくらかでも潤（うるお）いをおあげしたいと心掛け、この道に専念しました。

初代勘輝のサンパウロにおける第一回発表会は一九四七年で、場所はサン・フランシスコ劇場でした。十数人の弟子たちの協力による藤間勘輝独演会です。会を前にして非常に張り切っていた母親を忘れることはできません。



初代家元の常磐津「釣り女」



初代家元の長唄「菖蒲浴衣」

舞扇一本からすべてが手作り

出演曲目は長唄の浦島、藤娘、越後獅子、鶴亀、松の緑、下田のお吉、元禄花見踊などのほか、小唄舞踊数曲でした。この発表会はその後も毎年続けられ、ことし（八四年）で二十八回目を迎えました。

初代勘輝は第一回の発表会に先立ち、忙しい毎日を送っていました。当時は舞扇一本から小道具類一切に至るまで自ら作らなければならず、さらに考案企画、照明などを含んでの舞台装置のことがあったからです。また日本舞踊の伴奏にとって欠くことのできない邦楽レコードが、まったくといっていいほど無かったのでしたから――。



初代家元の「元禄花見踊」



三味線のお師匠さまがた＝左から常磐津兼三喜師、石坂美枝子師、田中節子師、広川八重子師

幸いにもこの間題は、三味線常磐津の兼三喜師匠、長唄の石坂美枝子師、広川八重子師、田中節子師たち四人の方々と巡り合い、そのご協力をいただくことにより解決しました。

石坂、広川、田中の三師匠はすでに亡くなられ、いまもご健在なのは常磐津の兼三善師匠ひとりだけです。当時を顧えりみて非常に淋しい思いにかられます。

ところで、この三味線のご師匠方もブラジルに農業移民として渡伯、いやおう無しに三味を鍬（くわ）に持ち変えて長年に

わたりご苦労なさっていたので、曲の多くを忘れておいでした。しかし、若い頃に習って身に付けたものは有難いことで、徐々にせよ思いだせてご協力くださった　―　とのことでした。

そのうちに、日本舞踊用のレコードも数多く手に入れることができるようになり、初代はこのことを非常に喜んでいました。三味線演奏の長唄、常磐津、清元などのほか小唄、歌謡舞踊、民謡舞踊を含め、百曲以上がありました。



歌舞伎「伽羅先代萩」

初代勘輝はまた、作詞、作曲を自ら手掛けて発表会ごとに新作舞踊劇を披露し、さらに演出面にも心を配っていました。顔師をしていただいていた歌舞伎役者の中村登雀丈（本名・倉地

藤太）のご指導で歌舞伎「伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）」、「絵本太功記（えほんたいこうき）」などの演出を担当したこともあります。

なお、初代勘輝の新作舞踊劇には、雪之丞変化、お滝七之助、葛の葉、お吉七三、名月狸御殿、江戸桜揚巻助六、江戸祭り、うかれ狂女、花暦姿写絵、容艶花娘道成寺その他があります。

伏見、丹下さんらと共演

元日活映画時代劇の大スター、伏見直江さん一行のサンパウロ公演（一九六九年）に当っては「白浪五人男河岸の場」で共演、さらに丹下清子さんとは「三人吉三日浪」で共演しています。伏見、丹下さんらと共演したのはオデオン劇場のサーラ・アズールだったようです。また、初代勘輝の発表会は第一回目のサン・フランシスコ劇場を皮切りにサクラ・クラブ、コロンボ、オデオン、クルツーラ、サンパウロ、南米劇場（シネ東京）、ムニシパール（市立劇場）などでしたが、これらのうちの多くが〝時代の波〟に押し流されて取り壊しにあったのは、その当時を知る者にとって淋しい限りであります。

初代勘輝は一九六二年、山本喜誉司、蜂谷専一の両氏（ともに故人）のご後援を受けて家元京藤間勘輝として京藤間流を創立、四人の愛弟子に名取免状を伝授しました。披露宴はパルケ・イビラプエーラ内の日本館で、また披露舞踊会はテアトロ・ム

ニシパールで催しました。

初代勘輝は一九六四年、さらに日本舞踊の真髄を研究するために訪日しました。これに先立ち六三年に日舞に対して随一の理解者であった山本喜誉司氏が亡くなられ、初代の落胆は非常なものでした。しかし、六五年に帰聖して間もなくブラジル地理学協会より「ブラジルにおける日本舞踊の普及・発展に貢献した」との理由により、ブリガデイロ・ジョゼー・ヴィエイラ・コウト・デ・マガリャンエス章を授与されたことから、さらに斯界の発展にさらに尽し、山本喜誉司氏から受けた厚意にいくらかでも報いよう……と、心に決めたようでした。



第二回免状式および名取襲名披露宴。

右から四人目が京藤間勘君（一九六五年、文協サロンで）。



京藤間流創立記念、初の名取襲名披露四名
中央が初代勘耀（一九六二年）。

二代目を娘の勘秀に譲る

一九六五年、七人の愛弟子に名取免状を伝授した初代勘輝は文協サロンで披露宴、テアトロ・ムニシパールで披露発表会を催しました。さらに、七四年四月二十七、八日、ブラジルにおける日本舞踊指導二十八年を記念して発表会を催すとともに、二代目家元勘輝を長女の勘秀に譲って京藤間遊楽と改名、京藤間流の後見となり、それまでと変わらず日舞の指導に当っていましたが、七七年十月二十一日、皆さまに惜しまれながら永眠

しました。

七十一歳でした。後事を託された二代目は、初代の遺志を継ぎ、こんにちに至っています。

なお私事ながら、遊楽の死後、二代目勘輝による、その後の〝催し〟を次に列記させていただきます。

◇七八年＝初代家元追悼の二代目第二回発表会（文協記念講堂）。新名取三人を披露。

◇七九年＝初代家元遊楽師三回忌追善舞踊会（在伯沖縄県人会々館）。

◇八二年＝二代目勘輝第三回発表会（文協記念講堂）。

◇八三年＝二人の新名取に免状を伝授、名取披露宴（文協貴賓室）。

このほか、五四年にサンパウロ市創立四百年記念祭典、五八年にブラジル日本移民五十年祭々典、六五年に海上自衛隊練習艦隊歓迎会、六七年には皇太子、同妃殿下ご夫妻来伯歓迎山車（パルケ・アニャンガバウー）、六八年の移民六十年祭々典（市立劇場）、七八年の移民七十年祭々典（パカエンブー）、八〇年には文協創立二十五周年記念祭典、六六年の第一回コロニア芸能祭などに連続参加させていただいております。

追記　以上は生前の母親（初代勘輝）から聞かされていた数々のことがら、さらに母親の知人だった方々からの又聞きなどのほか、発表会のプログラムをもとに、つたない筆でどうに

かまとめたものです。ご判読くだされば幸いと存じます。

（なお、二代目家元の京藤間勘輝さんは一九六五年十月六日、ブラジル地理学協会よりプリマベーラ・ドトール・アジェノール・コウト・デ・マガリャンエス章を受章している）。



京藤間流創立を記念して、イビラプエーラの日本館で名取披露宴。右から山本喜誉司、蜂谷専一、後藤武夫、後宮、二人おいて松下手前左が初代家元、京藤間勘輝。



新作舞踊劇「花暦姿写絵」、左が初代家元

「順ちゃんにおヒゲが…」

初代勘輝〃愉快なお母さん〃との日々

京藤間勘君
（京藤間流名取）

三つ足らずで〃晴の入門〃

私と初代家元勘輝師匠とのめぐりあいは、今から、かれこれ二十九年も前にさかのぼります。サンパウロでは唯一の、日本舞踊のお師匠さまだ……と聞いた祖母や母のたっての願いで、阻父の許しを得、入門させていただいたそうです。その時分のことは、齢（よわい）三つ足らずの私には、かすかに走馬燈のようにぼんやりとしか記憶に残っておりません。その頃のお稽古場が、かつてのテアトロ・サンパウロの裏（うら）でしたので確かに遠い昔のことではあります。とにかく、ややもすれば、まだ〃おもらし〃してしまう頃でしたので、母がよく替えの下着を私のふろしきの中に忍ばせてくれておりました。

私のお稽古の順番がやってきますと、どうしていいのか分かる筈のない私の両手を、やさしい大きな手が後からささえ、上げたり、下げたりしてくださったので、何とか踊ることができたのでしょう。その時の大きな手が紛（まぎれ）もない、私のお師匠さまである勘輝先生の手だ、ということを自覚するには

やはり、かなりの時間を必要としたようでした。

けれどもお稽古が終り、母がむかえに来たおり、先生が笑（えみ）をただえながら、

「今日はまだ〝おもらし〟ありませんよ。」

とおっしゃった言葉が、たいへん嬉しかったせいか、その言葉が子供心にことのほか印象深く、私の胸に焼きついてしまったのです。

私が意識した、勘輝先生の、おそらく最初の言葉が、こんなにも夢のない、現実的なものとしてしか思い浮かべることのできないことは、どうにも先生には申しわけのないような気がしてなりません。

私の初舞台は、一九五六年七月、テアトロ・ムニシパールで催された、初代勘輝先生の第十回発表会で、私が三つに五か月でした。

『なぜ泣くの』を踊らせていただきましたけど、舞台が大きすぎるのか、私が小さすぎるのか、望遠鏡で見なきゃ見えなかったと、後で皆がよく語り草にしました。

私の昔のアルバムをひもといてみますと、その時、発表会で先生は『助六』の揚巻太夫に扮していらっしゃり、私がその横に、禿（かむろ）の姿でチョコンとすわっているのがアルバムの第一ページをはなやかに飾っております。

三十年近くも以前のことですが、先生は常磐津兼三喜先生や

石坂美枝子先生の三味線にのせて、日本古典舞踊や歌舞伎など、すばらしいものを次から次へと上演されていました。



京藤間勘君の「手古舞木遣り」



初代家元・京藤間勘輝



京藤間勘君の初舞台（一九五六年七月二十日、二十一日、テアトロ・ムニシパールで）「なぜ泣くの」（三歳五か月の時、まだ〝順ちゃん〟と呼ばれていた）。

私は別に大したことも出来ませんでしたので、先生の後ろに禿の姿ですわっていたり、『うつぼ猿』の猿の役で、先生におぶっていただいたりでしたけれど、（泣いたら困る）と、猿の顔の私に鏡を見せまいと、先生はとても気をつかってくださっていたようです。

先生は子供達に踊りを教えるのがとてもお上手で、皆キチンと覚えていたと、よく母が云います。

私が四つの時、第十一回発表会で、『吾妻八景』をテアトロ・サンパウロで踊ったのですが、私の出番が間近にせまり、内心心配する母をよそに、先生はご自分の支度をなさるため、さっさと楽屋の方へ行かれてしまったのだそうです。

そのうち幕が開き、三味線が鳴り出し、かなり長い合の手の間、普段踊りを見ていない母は、私がどこで出るのか見当もつかず、

「順子、だいじょうぶなの。わかるの。」

先生を呼ぼうかとまで思いつめた頃、すました顔で首をふりながらシャナリシャナリと舞台に出ていった私に、母はホッと胸をなでおろし、またそれと同時に、先生に対する感謝と感激に胸がつまり、心の中でおもわず、

（先生、ありがとうございます。）と、合掌したそうです。

第十四回発表会の時には、『お夏狂乱』を踊られた先生のお夏をからかったり、いじめたりする男の子でした。先生が笠で追

いかけてきますので、ワーイワーイとはやしたてて逃げるのが楽しくてしょうがなかったのと、また先生が踊られた、舞踊劇の『容艶花娘道成寺』の小坊主に出るため、先生や池田のおじちゃんに、つるんとした坊主頭のかつらを作っていただき、大喜びしたのを覚えています。

厳しい反面、いたずらぽさも

勘輝先生は、私がめぐりあうことのできた数多い魅力のある人々の中でも、特にぬきんですばらしい方でした。公私ともに幅の広さを感じる勝（すぐ）れた人格の持主で、芸の上ではそれこそ近よりがたい、孤高の人のような感を受ける反面、いかにも『自然で日常的な、雑草の如き母親』とさえ云える横顔（プロフィル）を覗かせることも、ままある方でした。

昔、舞台化粧をしていただく時、先生は、

「逃げてはダメよ。」と、ばかり、私の両手を先生の両膝の上に乗せて、顔を突き出すような格好をさせていらっしゃいました。ら、指の先で私の鼻の下をつつき、

「アラッ、順ちゃんにはおヒゲがあるね。男になっちゃダメよ。」と、おっしゃいました。

私どもの、先生に対する信頼には絶大なるものがあり、身支度がすむと、どうしても、一応は先生に見ていただかなくては気がすまなかったくらいでした。先生は、簪（かんざし）一本

にでも触（さわ）りながら、

「とってもきれい。」と、必ず云ってくださり、それだけで私どもは大満足でした。

発表会の時は、お自分の出番の合間に、かけつけてはよく、私どもの踊りを、幕の裾から見守ってくださっていました。お稽古は非常にきびしい先生でしたが、一度舞台にあがってしまえば、どのような失敗を私たちがしようとも、一言（ひとこと）も文句を云われなかった先生でした。しかし、それだけに、しくじった時は申しわけなさに、身の縮むような思いをしたものでした。

いつの時か、『屋敷娘』を踊った時、袖を持ち、ひさまずいてそったとたん、後に尻餅をついてしまったことがありました。私は先生の顔がまともに見られなくて、蚊の鳴くような声で告白しますと、先生はやはり見ていらっしゃったのか、ニコニコと。

「ああいう時はね。こうやるのよ。」と、いかにも奥女中らしい、優雅な（尻餅のつき方）なるものを、教えてくださいました。私は、（なる程。奥女中といえども、生身の女。尻餅のつくこともある筈。」と、つくずく感心した。



京藤間流創立記念発表会および第一回名取披露会での
京藤間勘輝による「うかれ狂女」
（一九六二年三月三十一日、テアトロ・ムニシパールで）

生きること自体がすでに舞踊

踊る先生の手足は実に生き生きとのびのびとしていて、驕（おご）ることすら気取ることすら、すべて忘れてしまったかのようで、まるで次元の違う世界の人とでもいったような錯覚を起こさせました。傍らで観察する私の目を心底から魅了させずにはおかない程の、先生の不思議を踊りは、いったいどこから生まれてくるのか。と、私はよく思いました。

おそらくそれは、うわべばかりの型の美しさにとらわれることなく、自己自身の精神的内面から自然と滲（し）み出て来る自我の本質を、それこそ無意識のうちに、〈舞〉という空間の

次元に限りなく浸透（しんとう）させ、なおかつ高めてゆく、不断の努力の所以かと思われるのでした。

芸者に扮する先生の芸者姿には、芸者以外の何も見ることができず、船頭姿には、船頭以外の何ものも見えないところに、まるで自我を無に帰した先生の、魔法の見どころがあったようでした。

先生にとっては、おそらく舞踊が生活の一部というのではなく、生きること自体がすでに舞踊であり、また、舞踊それ自体が、同時に生きることに繋（つな）がっていたようでした。

物が不足していた時代、舞台に必要なものはすべてが手作りでした。先生は、二代目家元勘輝先生や池田さん、東岡さん、鈴木さん、石井さん、そして先輩名取の方々やご自分のご子息なども含めて、実に多勢の人々を先導なされ、ご自分も針、筆などを使いこなされていました。また、製作の過程で、先生にどんなにこっぴどく叱られようとも、素直についていく多くの人々の様子を見ていて、何とはなしに、先生にはそうさせるだけの気高さが備わっていて、それ自体至極純粋、かつ自然という感さえ受ける程でした。

子供でしたけれど、私もご多分に漏れず、慣れない指先を動かして、紅葉や桜作りに励みました。発表会が近ずくにつれて、お稽古の時間ももちろん長くなり、お弁当箱二つ持っての週末の舞台稽古通いでした。

衣装あわせもかなり厳しく行なわれ、小道具、大道具の点検なども非常にていねいに行なわれていました。

休息の時、衣装のままコーヒーでも飲もうものなら、それこそ大目玉だったものです。

愛情の限りを尽して物を制作し、そしてそれを大切に扱い、保存することの尊さを、身をもって教えた方でした。扇子一本の取扱い方、着物一枚のしまい方、何一つをとっても〈動く〉ということをともなわない仕草などあるわけがなく、日頃の何げないおぎょうぎほどやかましい先生で、毎日の挨拶なども厳しくしっけられました。



第二回名取免状授与式。左から初代家元・京藤間勘輝、蜂谷専一、京藤間勘君（一九六五年、文協で）

「踊りなさいね、順ちゃん」

一九六二年三月、テアトロ・ムニシパールでの第十五回発表会の時、先生は京藤間流を創立なさり、京藤間勘輝を名のられ、四人の名取＝勘寿（故人）、勘秀（二代目の勘輝先生）、勘富三、勘穂＝の方々が誕生いたしました。

私はこの時、先生より奥伝をいただき、先生と二代目家元勘輝先生がお二人でやられた『花暦姿写絵』に、「ちょっと待ってくださんせ。」の禿で、出させていただきました。

一九六四年頃、先生は日本舞踊を研究のため、約一年訪日なされ、その間、私たちは二代目勘輝先生にお稽古を見ていただいておりました。

帰伯なされて、久しぶりにお会いした時、一年の空白期間をまるで一瞬のうちにでも埋めつくすかのように、先生はしっかりと私を抱いてくださいました。私はお土産に、習っていた三味線のための稽古用撥と、化粧用鏡をいただきました。それらは今ではもうくすんで黒くなってしまっていますが、私の大切な思い出の品々です。

一九六五年のその年、私は思いがけず、先生より名取のお話があり、勘君の名を許されることになりました。まだ十二歳の子供でしたので、あまりよく本当の意味が飲みこめませんでしたけど、とてもきれいな振り袖を着せられ、先生といっしょに

いろいろな所に挨拶して回り、私の写真が生まれて初めて新聞にのったので、（ワア、すごい。）と、とても嬉しく思いました。その帰り道、しな料理店に入り、先生は私たちに、おいしいお料理をご馳走してくださいました。

その年の六月二十七日、ブラジル日本文化協会サロンで名取披露をしていただき、蜂谷専一様もご夫婦でおこしになり、お免状を七人の名取＝勘宏、勘鈴、勘里、勘君、勘孝、勘良、勘静＝に、お渡しになりました。

私はその時、『釣女』の姫君役をやらせていただきました。いただいた名が勘君ですので、私は子供心にまるで姫君の名前みたいにすてきだと思い、それ以来大好きになったのを覚えています。

同年七月十一日の第十六回発表会は、テアトロ・ムニシパールにて行なわれました。私は披露舞踊として、『汐くみ』を踊らせていただきました。

名取披露ご挨拶のおりには、七人がお揃いの水色の袴に身を包み、舞台の上にならんで正座し、両手をついておじぎをしました。私が自分の名を呼ばれて顔を少し上げますと、先生は私のことを、

「このお嬢ちゃんは皆さまがよくご存じの、バール・カリオッカを経営していらっしゃる隈下さんのおまごさんで…。」と、このようにざっくばらんに紹介してくださいました。

私の祖父は、

「わしのことを云われたぞ。」と、それはそれは大変な喜びようでした。

芸を教える時と普段との、先生の何げない態度に相当な落差を感じとっていた私は、あまえたいのはやまやまだけれども、どのようにしてあまえたら良いのか解らない、ある種のとまどいを覚えていました。それだけにミーナス・ジェライス州に興行に行った時の思い出は、深く印象に残るものでした。

ミーナス州のカトリック修道院に一泊し、親と離れて初めての一人旅の私を、先生は石井のおばちゃんとの間にはさんで寝てくださいました。私は、それこそ天にものぼる気持ちでした。

勘輝先生は何でもなさいました。鳴り物にも相当の通で、二代目家元や先輩名取の方々とともに、鼓、太鼓、大鼓などいろいろ習いました。私は太鼓の係りでした。『雨の五郎』の太鼓が一番好きだったことを、特に記憶しております。

私は、ミーナス・ジェライス州興行のおり、習ったはいいけれど、曲のどの部分に入れて良いのか解らない太鼓に多少のとまどいを感じていました。するとそのうち、

「はい、かまえて。」低いけど、リンと響く、先生の声が私の後ろより聞こえてきました。私は先生のおもいがけない助太刀がことのほか面白く、たいそう神聖なことにも思え、私と先生二人きりの秘密として、胸の奥深くにしまっておこうと決心し

ていました。ところが、出来上がってきたその時の写真に、ちゃんと後ろの先生まで写ってしまい、心なしかいまいましい気がして、アルバムをひもとくたびに、なるべくその写真は見ないようにと、長い間、実にばかばかしい努力を繰り返してきたものでした。

私の十の頃の思い出ですが、今ではその写真を見るにつけ、無性に懐かしく、どうしても涙と苦笑をおさえられない私です。

名取を許されて後、私は徐々に後見も勤めなければならなくなってきました。

初めての後見の時、踊り手が『越後獅子』の布晒（さらし）の振の部分をいきなりめちゃめちゃに踊りだしました。あがってしまったのでしょう。私は、なすすべも解らずに、ポカンと見ていました。すると、幕の裾で見守っていた先生がとんできて、後幕の反対側から、幕にへばりついていた私の耳もとで、

「順ちゃん、教えてあげなさいよ。本当に頼りない後見だねえ。」と、おっしゃいました。

後で、後見にも後見が必要だと、笑い種になりました。

先生は、一九七四年四月二十七日、二十八日の二日間、ブラジル日本文化協会記念講堂において二代目家元勘輝先生の襲名披露舞踊会を催され、ご自分は京藤間遊楽と名のられることになりました。

当日、私は揚げ幕の所で、先生の舞台姿を見られるのもこれ

が最後かと、息をのんで先生の『鷺娘』を見ました。

先生は白い衣装に身を包み、まるで鷺の精と見紛うほどの、幽玄で神秘な、先生独特の舞踊を踊られていらっしゃいました。

私は、先生がこの日まで歩まれた、いままでの芸道の日々をいろいろと思い浮かべると、感慨無量でした。

心の底に残る、先生のなつかしい多くの思い出と言葉の中でも、特に心に残ったのが、先生の最後の言葉でした。その思い出の日がまた、先生に見ていただいた、最後のお稽古の日となってしまったのでした。

その日私は、『都鳥』のおさらいをしていただいていたのを覚えています。たばこを取りに行かれて、お台所の方から歩いていらっしゃった先生が、私がお稽古を見ていただいていた二代目勘輝先生の後ろから、目を細めて嬉しそうに、

「いい形をするねえ。」と、ポツンとおっしゃいました。私はとっさに自分の耳を疑いました。（先生が私の踊りを褒めてくださる筈がない。）二十何年もの間、それこそ何百遍のお稽古だって一度だって褒めてくださらなかった先生でした。

私は鬼の首でも取ったように有頂天になって、帰宅してから食事の時、家の人たちに、

「順子、一生踊る。死んでも踊る。」などと、重大宣言をしてしまいました。叱られた時などは、（死んでしまいたい。）と、思うくせに、調子のいい自分だと、つくづくおかしくなってしま

いました。

ところが、それから二日後、心臓発作で先生が亡くなられたという悲しい知らせを受けました。

「順ちゃんが今度の舞台で踊ってくれるって、とても喜んでいたわよ。」と、通夜の晩、二代目勘輝先生が目にいっぱい涙を浮かべながら、しんみりと私におっしゃいました。

あれから八年。二代目家元勘輝先生の、すばらしい振り付けと指導のもとに、今でもお稽古に励んでいる私です。

胸に残る、先生の懐かしい思い出の数々は、私の心の宝であり、踊りとともに私に残してくださった、今は亡き先生の精神的遺産でもあります。

無心になって踊ることそのままが、先生の冥福を願う、私のささやかな祈りに変っていけばと、私は思うのです。

「踊りなさいね、順ちゃん。」

仏壇の先生は、今日もそう微笑みかけては、どうにかするとくじけそうになる、弱くて頼りない私を励ましてくださっているような気がしてなりません。

一九八四年十月・記

京藤間流に二代目家元

芸道、実生活で初代の片腕

一九七四年四月二十七、二十八日、ブラジル日本文化記念講堂において、二代目勘輝先生は、お母さまである初代家元京藤間勘輝師匠の名を襲名され、京藤間流はここに新しい時代を迎えることになりました。



二代目家元・京藤間勘輝

初代家元は名を遊楽とあらため、一応ご自分の華やかな時代に終止符をうたれた形になり、私ども門下生一同にとっては、一抹の不安と寂しさと、そして新しい家元への大いなる希望と期待の入りまじった複雑なものを胸に感じる、記念すべき日となったのでありました。

二代目家元勘輝先生は、初代家元が渡伯（一九四一年）されてより四十年あまりの歳月、芸道においても、また実生活においても、初代家元の右腕となられ、その輝やかしい実績の陰で地味（じみ）な活動を続けてこられた方です。

初代家元の目に立つ鮮やかな活躍の幕内での、真の主役とも表現したい、おそらく先代にとっては、物心両面において、ご自分の片腕以上に、なくてはならぬ存在の人だったに違いありません。実生活での日々の雑用はもちろんのこと、舞台衣装や小道具の細かい細工、あるいは来客の接待など、目に見えぬ箇所の切り回しに従事されていましたが、先代が芸の上であれほどの輝やかしい実績を上げることができたのも、二代目家元勘輝先生の陰の力によるところが大きいものと思われるのです。

襲名披露舞踊会より四年過ぎた第二回発表会の前年、先代は急逝され、深い悲しみと、名取三名＝勘千鳥、勘粋、勘茂＝誕生の喜びの中、初代家元追悼舞踊会の運びとなり、一九七八年七月二十三日、ブラジル日本文化協会記念講堂において、二代目家元は、初代追悼舞踊に『京鹿子娘道成寺』を選ばれ、そして踊られました。

翌年の一九七九年十月十四日には、初代家元三回忌追善舞踊会を在伯沖縄県人会々館大ホールにて催し、『山姥』、『保名狂乱』、『東山』などを踊られました。

また同年三月三十日には、京藤間流初の試みとして旧シネ・ニッポンにおき、『京藤間流舞踊と映画の夕』を催し、翌一九八〇年九月二十六日には、引続き第二回目を行ないました。

二代目家元勘輝先生は、どんな小品にも心をこめて振り付けなされ、またそれを発表して公の意見をまとめ、なお熱心にい

ろいろと研究され、『舞踊と映画の夕』においても、おそらくコロニア舞踊会では前代未聞の意見書を会場のお客さまにお願いした後、それを基に、なおいっそうの研鑽をつまれて、常日頃の地味な努力を惜しむことのされない方であります。

その努力が見事に実を結び、一九八一年四月十一日には、文協記念講堂において、第三回発表会を盛大に開催いたしました。その時踊られた『夕立』の、ほのぼのとした幽雅な振りがとても好評でした。



二代目家元、京藤間勘輝による清元「鞍馬獅子」の喜三大



二代目家元、京藤間勘輝の歌謡舞踊「明治一代女」



弟子たちによる鳴物の長唄演奏

楽しい踊りの幸せの輪が無限に

二代目勘輝先生は指導の面において、先代とは対照的を面がおありになり、お化粧なども早くから生徒自身の手でやるようにしむけられ、私なども妙なことに、ほったらかされたお陰により、次第と舞台化粧の腕があがってきたくらいです。

初代家元が逝かれてから早くも七年近くが経過し、昨一九八三年十一月六日には、文協記念講堂にて初代家元七回忌追善、並びに名取＝勘秀、輝佳＝披露舞踊会を催す運びとなりました。先生は『鷺娘』を踊られ、初めてのビデオの録画どりなどがあいまって、京藤間流にとっては記念すべき一大行事となったのです。

また、一九八四年一月十四日には、二代目家元勘輝先生の襲名十周年を記念して、『新舞初め』を、愛知県人会ホールにおいて盛大に開催いたし、先生ご自身のご意見によるビンゴゲームを会場にてくりひろげ、各商社団体より絶大なる後援をいただいて、その収入の一部を、援護協会へ寄付させていただきました。

京藤間流は、二代目家元勘輝先生の地道な努力によって、ますますその活動の場を広げてゆくことと思います。

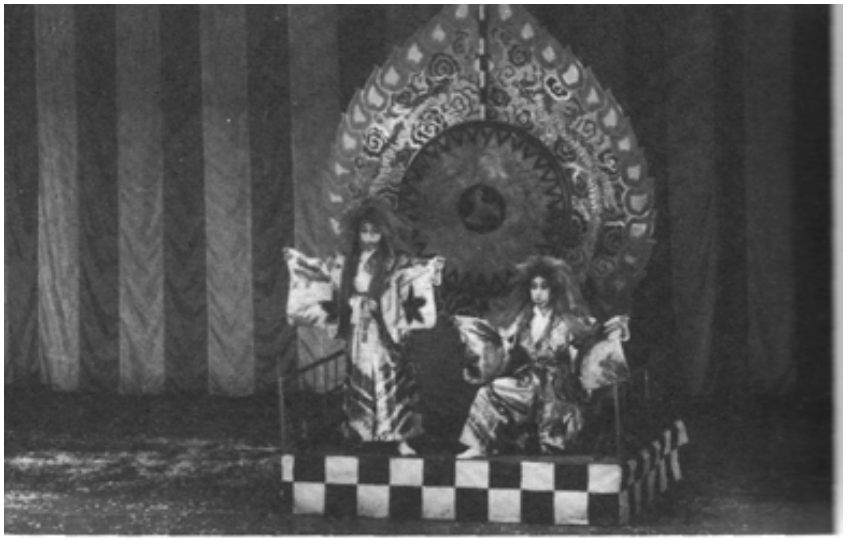
「芸の道は厳しくて苦しい。」などと、たいそうなことを云いますと、

「なに、えらそうなことを云ってるの。踊りはとても楽しいわよ。」と、おっしゃいます。

楽しい踊りの幸せの輪が無限に広がっていって、ひいてはコロニア全体の人々の平和の輪となってゆけば、どんなに嬉しいことでしょうか。

『コロニア芸能史』の誕生が、各方面における芸能人に、そのような確かな自覚を呼びおこし、芸能各方面に記してきた、コロニアの足跡が、また明日を作る、すばらしい発想と創造の道しるべとならんことを、私は心の底より希望してやまないのです。

（本名・隈下順子、一九八四年十月・記）



初代家元（右）の舞楽

勘輝さんと出合った頃

常磐津兼三善

私が初めて京藤間流初代家元の勘輝さんに合ったのは、サンパウロ市内のジャバクアラ区よりタバチンゲーラ街の方に移転して常磐津の師匠を始めた頃で、ある日、勘輝さんが拙宅に見えられ、同じ芸の者同志で話が合い、交際が始まった。そして、確か一九四九年にテアトロ・オデオンで温習会をしたが、それは「コロニアで初めて」と云っても過言ではない充実したものであった。

その頃は今のように日本からの衣装や小道具はなくて、全部ブラジルのものを手作りしたり、戦前の物で間に合わせていたが、何よりもその踊りは本格的で、私はブラジルにこんな人が居たのか、と驚いたのであった。

その時の『戻橋浦島』などを初めとして、その後『供奴』、『釣女』など、よい出来映えのものを次々に発表してコロニア舞踊界に新風を吹き込んだ先達であった。

その勘輝さんも七十五ぐらいで亡くなられ、今は千重子さんが二代目を継いで先年、七周忌の追悼温習会をしたが、良い成績であった。

私はもう年で何もさし上げられないが、どうぞ精進して先代にまさる舞踊家になってほしいものと願っている。

一九八四年十月・記

なお、筆者は明治二十六年（一八九三）東京生まれ。同四十二年（一九〇九）常磐津名取となり、京橋八丁堀にて教授する。大正六年（一九一七）頃より舞台出演、昭和十年（一九三五）に渡伯、現在に至る。

（本名・岩崎　柳＝りゅう＝）

日舞指導に今後も努力

倉岡房枝

キンターナで舞踊教室

私は昭和九年（一九三四）四月二十九日、神戸出港の大阪商船あらびあ丸で渡伯の途に就き、同六月末、ノロエステ線ミランドポリス管内の叔母の家に移り住みました。約一年間コーヒー園で働き、その後、現在の夫・倉岡に嫁ぎました。夫は町に出て洋服仕立業を始めましたが一年余で店を閉めて私ともどもパウリスタ延長線のイビチンガに移り、ここで終戦を迎えました。

その後再びポンペイア近くのキンターナに居を構え、夫は洋服店を、私は八歳の時から渡伯直前まで郷里の熊本で習ってい

た日本舞踊（藤間流）の教室を開き、舞踊指導を始めました。

キンターナに約二十年、私の舞踊教室は始めの頃は二十人そこそこ、それも日系の子女ばかりでしたが二年後には四十人以上に増えるとともに、ブラジル人の子女数人にも教えるようになりました。これは、キンターナ学校当局の懇請を容れ、同校の学芸会、あるいは町役所主催のお祭りの余興などに私と教室の子供などが特別出場し、町の人々から好感を持って迎えられたからです。

踊りは少女の頃から〃三度のご飯より〃好きだった私は、さらに舞踊の道を究めるためにサンパウロに移ることを決め、六四年、ビラ・エスペランサ区に舞踊教室を設けました。



倉岡房枝



念願の倉岡舞踊団を組織

サンパウロではビラ・エスペランサ婦人会で舞踊研究に専念するとともに、同会の方々に指導教授、生徒も次第に増えてきましたので同年、夫の協力を得て念願の倉岡舞踊団を組織、近隣の日本人会の家族慰安演芸会、各催しなどに積極的に出場さ

せていただくようになりました。

また出聖後は白鳩会に入会、副会長を八年間にわたって務めるかたわら同会各支部の方方への日舞指導、ビラ・エスペランサ婦人会婦人部会々長（七一～八〇年）の時には地方支部八十人余の指導にも当たりました。このような関係から倉岡舞踊団も各地に支部を持つようになり、特に乞われてルージェ・ラーモス文化協会主催の紅白舞踊大会の副総裁と審査員を約十年間にわたって務めさせていただき、一九八〇年には、同文協の方々の斡せんで野村下議を通じブラジル政府からカブラール章（文化章）をいただく光栄に浴しました。これも偏（ひとえ）に皆さまのご後援の賜物と深く感謝しております。

倉岡舞踊団を組織してすでに二十年、私のブラジルにおける舞踊生活も四十年の歳月を重ねるようになりました。この間、在伯熊本県人会主催の舞踊人気コンクールでは連続三回一位を獲得、また、ブラジル日本文化協会のコロニア芸能祭にもことし（八四年）で十五回も出演させていただきました。

幸い娘も私の助手を務めるようになりました。いま地方支部は四か所、こんごとも皆さまのご協力のもと、ブラジルにおける日本舞踊の普及発展におよばずながら尽力したいと考えているきようこのごろです。

（倉岡舞踊団・師範）

コロニア日舞界の先達

藤間国枝師の絢爛たる業績

佐々木重夫
（伯国日本民謡協会指導員）

耕地の人々に日舞で慰安

藤間国枝師（本名・土生千代子さん）は、宮城県白石市の出身（明治四十五年＝一九一二＝三月七日生まれ）。仙台市において藤間国さよ師に就いて日本舞踊を修業、後年、名跡を継いでいた姉弟子、藤間かずえ師より国枝の名を許されてからブラジル国に渡る。

時恰（ときあたか）も軍国日本は、日支事変へ、そして太平洋戦争への道をまっしぐらといった様相の厳しい一九三八年（昭和十三年）、夫君の文吉氏とともに、農業移民として渡伯、パウリスタ線テーラ・ロッシャ駅、クルゼイロ耕地に配耕された。

ブラジル日本移住史も、困難苦闘の初期移民時代を過ぎて、中期の時代に入ったというべくして、初期移民よりは環境、その他の諸点において遥かに恵まれているとはいえ、耕地生活は新移民にとって索漠（さくばく）としていたし、なによりも慰安面に乏しかった。

年に一回、活動写真（シネマ屋さんがカツベンを兼任）、それ

と運動会、村芝居があったら上等の方で、もっともそんな催しもののある時、そこには若者たちの恋も芽生えたろうし、のちのちの語り草、楽しい思い出となった、こともないではなかったが――。

クルゼイロ耕地生活も索漠たること例外ではなかった。そこで土生夫妻は考えた。即ち己が芸を生かして、耕地の人々に日本舞踊をもって慰安しよう、と。

一九三九年八月、国枝師にとっては、ブラジルに渡って第一回目の「敬老と家族慰安演芸会」における日本舞踊のお披露目となったのである。人々は喜んだ。「先生、アタシにも教えて！」と、移民板小屋の門前？、ムスメたちが列をなし、国枝先生こと昼はエンシャダー、夜は舞扇の大奉仕とは相成った、と伝えられている。

クルゼイロ耕地での二年契約農を終えて、中央線スザノ市に移転したのが一九四〇年。

中央線におけるモジ・ダス・クルーゼス、スザノ両市の管轄区域は、日系農業者の大きな集団地であった。リオ・デ・ジャネイロ市に、サンパウロ市という二大消費市場のほぼ、中間に位置して、蔬菜に果樹に養鶏にと、その活躍は目覚しかった。

そして、この両地域日系人間には尚武の気風が旺（さかん）であった。というのは一九三三年、伯国柔剣道併盟が創立されるのにおよび、直ちに地方支部第一号として、中央線柔剣道併盟

支部の名乗りとともに、全伯大会に毎会優秀な戦績を収めていた。


藤間国技師

子女に日舞で情操教育

男子には柔剣道、子女には日本舞踊をもってその情操教育に、といった流れもまた自然にしてふさわしいものがあろうという筆法で敢えて「尚武の中央線」を語ったのであるが柔剣道にしろ、日舞にしろ、良い指導者が居ってという前提のあったこと勿論である。

士生夫妻はこの武道に深い理解を持ち、子息二人を幼少年時より剣道に打ち込み、長じて有段者となり、優秀な青年剣士に育て上げたのであるが、ここに国枝師の、剣士の立居振舞、その「姿」に日本舞踊家としての「眼」がそそがれていたに違いない。やがてスザノ市に「藤間国枝日本舞踊教室」の開設となり、今日、各流派が妍（けん）を競う隆盛時代招来の濫觴（らんしょお、ものごとのはじまり）となった、というも過言ではなかろう。

協力者に恵まれ中央進出へ

先ず河合貞一郎氏（故）という立派な協力者を得て、一九四八年、その第一回発表会をスザノ市にて開催、好評を得てさらに中央進出となり、同年聖市テアトロ・コロンボにて大々的な発表会となった。そしてさらに、日本茶園経営の祖人、岡本寅蔵氏（故）の好遇を得て、ガルボン・ブエノ街の同氏邸内に教室を提供され聖市内の教授普及に当った。

国枝師の業績にて特筆に値いするものに、サンパウロ市創立四百年祭（一九五四）におけるパカエンブー特設大劇場の出演がある。

都山流尺八師範の三好良実氏、同夫人琴の師範みわ女史とともに、華々しく、かつ重厚に踊る「日本音楽の夕」の協力出演がそれである。後日、時の聖市々長より丁重な感謝状が授与されている。

なお、三好氏夫妻との名コンビで、「温習会」、「日本音楽の夕」が、サン・フランシスコ劇場その他で、殆んど毎年のように催されたことは周知のことである。

さて、国枝師の日本舞踊歴を語るとき、時代を同じくした初代・京藤間勘輝師（現在二代目）の活躍があり、「東に国枝師、西に勘輝師」と、当時の日本舞踊界を両分して絢爛（けんらん）たるものがあり、しかも国枝師に尾崎桐枝、勘輝師にマリちゃ

ん（愛称）という両天才少女が妍を舞台に競い、観衆を沸（わ）かしたものである。初代・勘輝師の業績については、他に適任者がこれを語って下さるであろう。

尾崎桐枝嬢こと嫁して秀島桐枝、国枝師没後は藤間芳之丞師に学び、日本留学もして大いにその才能を磨き、現在、藤間芳琴の名取として斯界の中堅舞踊家として活躍している。

コロニア芸能史における日本舞踊界の先達、藤間国枝師の昇天五十七才（一九六九年の二月）は、早世にして惜しみて余りあるが、次のことを記してその冥福を祈ることとしよう。

スザノ市国枝会

創立一九五四年、河合貞一郎氏を中心とした国枝師後援会であり、爾来三十年、今も師の遺志を継いで会員一同日舞の練磨に精進しているが、名取もと子（藤間芳寿）、横田せつ子（池芝緑峯）の両師が、地元の人として陰に陽に「国枝会」への協力指導を惜まない。

――――　◇　――――

「あとがき」　コロニア芸能史の編纂者、Mさんと、ふとした折に日本舞踊界の先達、京藤間勘輝師の話があり、「昔のことなら藤間国枝師という草分けが居られるが、その記述があったでしょうか」と伺い立て、「いやない、それをお願いする」という仕儀とは相成った。

知ったかぶりの言い出しっぺで、引くも退くもならず、頭を抱えての纏の役に回ってしまった。「語り部」河合翁すでに亡く、もっぱら国枝師夫君、土生文吉氏の資料提供に拠った。土生氏とは年来の知己、とはいっても二人とも昔は剣道、今は民謡で、日本舞踊は僕にとってはいわば〃お隣りの畑〃で、十分を尽し得なかった。おゆるしを願う。

（文責・筆者。伯国日本民謡協会、指導員）

〃白い靴下〃で日本舞踊

下川　八重子

（下川舞踊学校師範）

私は数年前まで約八年間にわたってグアルーリョスに住み、自宅でのほか、イタケーラおよびサン・ミゲールで日本舞踊を教えていました。その際、昨年（一九八三）に亡くなられた恩村マツ先生のお世話で第一回コロニア芸能祭に出演、昨年の同祭まで引続き出演させていただいています。

第一回同祭では私個人で「黒田の盃」を踊りました。その頃の刀は木に銀紙を張付けただけのものでしたが、私の主人はサンパウロで踊るのに木の刀ではどうもオカシイ…と云って知合いの鉄工場から鉄の切端しを貰い、これを叩いたり磨いたりして槍と刀に似た物を作ってくれました。また、足袋も無かっ

たので、白い靴下をはいて踊ったものです。

第二回の時には「名槍伝」でしたが、踊り終った後、数人の男の方が楽屋に見え槍と刀にびっくりしていました。また、主人の同県人（大分県）の方に日本より男用のカツラを買っていただき、常用しています。

その後サンパウロに移り住み、サン・ミゲール、イタケーラ、グアルーリョス、エンジェニェイロ・ゴラール、サン・マテウス、ＡＥカルバーリョなど各日本人全の団体踊りの指導に当りました。

一九六六年七月二十六日の第三回福島県盆踊競演大会が文協サロンで開かれ、翌六七年の同大会にも私たちの幼年部が優勝。七八年八月二十八日の第十一回温習会の時、野村下議のお世話によりブラジル教育・文化省より「カブラル章」（文化功労章）をいただくことができました。私にとって一生忘れることのできない喜びで、これも芸の道に一生懸命努力、精励した賜物と深く感謝しています。

これもひとえに皆さま方のご支援と、門下生一同の協力によるものです。私事ながら、この目を待ち切れず、主人はその二か月前に病気で亡くなり、誠に残念でした。

一九七八年六月のブラジル日本移民七十年祭のパカエンブー競技場における皇太子ご夫妻歓迎式で私たち門下生一同が出演できたことも、永遠に忘れることのできない思い出になりまし

た。また、同ご夫妻の来聖を記念して文協内に記念講堂が新設されたことは、コロニアの皆さまを始め、私たち芸能人にとって非常な喜ばしいことです。

なお、私たちの下川舞踊学校では毎年温習会後の十月末か十一月初めに門下生一同と憩の園で慰安舞踊会を催しております。初めの頃は同園に舞台が無く平座（ひらざ）で踊ったものでしたが、その後、同園の方々から高さ三〇センチほどの舞台を作っていただきました。確か今から十三、四年前のことです。

なおまた、私たちが憩の園を訪ねるようになったのは、亡夫がその昔に働いていたパトロンの柳さまの奥さんが同園でお世話になっていることを亡夫の友人から聞き知ったからでした。これで老人の方々に喜んで貰らえることができ、感激している次第です。

昨八三年十月二目には、グアルーリョスの中学校で第十七回温習会を催しました。これも地元の方々、さらに門下生一同の協力の賜物によって実現したものです。いま一度、感謝させていただきます。

（一九八四年六月記）



下川八重子

藤間流日本舞踊学校

田村　徹
（元都道府県人会連合会事務長）

校長　藤間芳之亟（本名・中村都、一九三四年一月八日、大阪市西淀川区生まれ）。

流派師匠名　藤間藤子（人間国宝）。

弟子入り　三歳、九年修業ののち十二歳にて名取を許さる。師籍は日本で十三年、ブラジルで二十六年（一九八五年四月現在）。

芸　歴

３７年　坂東三津加寿師に入門

４２年　藤間金之亟師に入門

４６年　先々代家元藤間勘修師より名取を許され、以後、毎年春と秋の二回有名劇場で定期的に発表会

４９年　先代家元（尾上松緑）の紹介で藤間藤子師に入門

５４年　大阪歌舞伎座で初の女流舞踊家として発表会。新作「箏曲水鳥の生態」で同年のベスト・テンに入賞

５５年　仲座で新作「長唄蚊座禅」を発表

５６年　仲座で新作「長唄玉藻前」を発表、歌舞伎俳優実川延若丈と共演

５９年　日本舞踊紹介のため関西から初めての世界一周旅行。

アメリカではワシントンのホワイト・ハウスで当時のアイゼン・ハワー大統領、政府高官に日本舞踊を披露。ブラジルでは伊勢湾台風被害者救援のための舞踊会に協力出演、長唄「新浦島」と「さくら変奏曲」を踊る。



藤間芳之亟の義太夫「乱菊」

６０年　家元の後援を得、藤間流日本舞踊啓発のため渡伯

６１年　藤間流日本舞踊学校をサンパウロ市に創立。以後、毎年踊り始め会を一月二日に催す（現在も継続中）。文化・芸術功労者へのアナ・ネリ章を受く

６２年　市立劇場で第一回発表会。その後定期的に発表会および創立記念発表会

７０年　大阪で長唄「鷺娘」を踊る、７２年＝大阪で「清元雨の権八」「長唄松」、７４年＝東京新橋演舞場で「長唄富士の

雪」、７５年＝東京歌舞伎座で義太夫「乱菊」、大阪で長唄「雪女郎」、７７年＝東京新橋演舞場で清元「流星」を踊る、日本伝統芸能賞選考委員会の推選により「伝統芸能功労章」を受章、７８年＝東京国立大劇場で常磐津「蜘蛛の糸」、８０年＝東京国立大劇場で長唄「浅妻船」、８２年＝東京国立大劇場で清元「お祭」、大阪で長唄「たぬき」、８５年＝東京国立大劇場で義太夫「蝶の道行」を踊る。

七六年の藤間流日本舞踊学校創立十周年記念発表会には日本から芳之亟高弟の芳助、芳香、芳龍、七八年のブラジル日本移民七十年祭記念発表会には藤間藤勝、芳重の二名が来聖賛助出演。八一年の創立二十周年記念発表会にはブラジルで初めての歌舞伎伎俳優・尾上扇五郎、市川左三郎、邦楽人・唄・皆川健一（立唄第一人者と外二名）、三味線・家元杵屋正次郎外二名、鳴物・仙波清彦（仙波流家元後継者外三名）、顔師、かつら師、着付師一行を招聘、三日間にわたって文協大講堂で開催。

八三年に「芳之亟の会」を結成、文協大講堂で日本舞踊の外、演劇「残菊物語」と「男の花道」で旗上げ公演を行ない、現在に至る。

（年号は「一九」を省き西歴）

好きな踊は、清元「保名」、長唄「うかれ坊主」、同「新曲浦島」など。

なお、芳之亟の斡せんによりブラジルで家元から名取を許さ

れた弟子は十七名（うち一名は在アルゼンチン）、また同じく日本で名取を許された弟子は二十四名。ブラジルでの直門弟子は五百名、孫弟子は五百名である。

（一九八五年四月記）

▼追記＝藤間流日本舞踊学校はサンパウロ市内に本校稽古場と分校（各一）と、プロミッソン、ミランドポリス、マリンガ、ノーヴア・エスペランサ、ロンドリーナ、ドウラードス各市に稽古場を所有している。

池芝流、新舞踊に意欲

田村徹



芸名　池芝緑（家元、写真右）、本名・木田洋子、一九四一年二月二十八日東京都新宿区牛込十八番地生まれ、一九六六年十二月十四日渡伯。流派師匠名は、花柳流花柳徳兵衛で、十三歳の時に弟子として入門、修業は三歳の時からで十九歳で花柳静

香衛となり、現在も引続き修業中。師匠としての年数は日本で三年、ブラジルで十七年。

池芝流名取は十七名、直弟子三十名、孫弟子百五十名（一九八五年四月現在）。

私の好きな踊　女舞、地唄「雪」、男舞清元「北州」。

今後の方針　お弟子さんが殆んど二・三世のため、長唄、清元、その他邦楽の意味を解説しても仲々理解させることが困難な時代になった。そのため今後は古典の基本をあくまでも守りながら、新曲の振付をして行きたい。

殊に花柳徳兵衛師は群舞を得意とされていたので、私もこの方面で新舞踊を展開して行きたい。なお、スタッフとして着付に安田わきえ、三島いちの二人がいる。

（文中敬称略、一九八五年三月記）



池芝緑

日本舞踊の普及に専心

花柳金龍会　創立以来の日々を回顧

花柳　金龍
（花柳流舞踊教授）


花柳金龍

踊りの美しさに心ひかれる

福岡県福岡市で生まれ育った私が日本舞踊を習い始めたのは、県立筑紫高等女学校に在学中の十四歳の春でした。たまたま級友のひとりが小学校に入る前から日本舞踊を習っており、下校後のある日、誘われるまま級友のお供をして教習所を訪れ、皆さんの練習に打込んでいるその真剣さ、そして日本舞踊そのものの美しさの虜（とりこ）となったためでした。当時（一九三七年）、父は警察に勤めており、家庭は経済的にはある程度にせよ余裕があったのでしょうか、私の生意気ともいえる「たとえ

女であっても、近い将来に自立できるようなことを今から身につけたいと思う…」と、日本舞踊のことをお願いしたところ、心よく許してくれました。その日からの私は、さながら〝天にものぼる〟ような嬉しさに包まれ、いつの日か必ず〝踊りの先生〟になると小さな胸に描きながら、教習所へ通い始めました。

当時、そして今でもよくいわれることですが、もし日本舞踊の道に入るならば、「できるだけ幼ないころから…」、が一般の常識でした。それにもかかわらず、十四歳という思春期を控えた私が飛び込んだ教習所の生徒の殆んどは、十歳前後の人々でした。としだけは〝一人前〟の私にとって、その日々は思っていたような明かるいものではありませんでしたが、先生がいつもいわれる「まず基本から習いましょう」を念頭に毎日、踊りの稽古に励みました。

私が踊を習い始めてから間もなくの七月に蘆溝橋事件が起こり、これを契機に日中戦争が始まりました。そして、その四年後の一九四一年十二月には日米戦争を迎えました。有名な〝欲しがりません勝つまでは〟が日本全土で叫ばれ、戦争へ向けての協力が強制されました。戦局の悪化につれて私たち女子も勤労に狩り出される毎日でしたが、余暇を見つけ、あるいはお勤め後の夜など踊りの稽古だけは忘れるようなことはありませんでした。

「いつの日か戦争は必ず終わる、その暁に備えよう……」と、

ただ、それだけを心から祈っていた毎日でした。



金龍会、初の名取り誕生。後列左から花柳龍香、花柳金純子、花柳龍梨、花柳金晴、花柳龍珠。南米劇場（一九五七年九月）

日舞にブラジル人も関心

一九四七年、私の踊りはつたなかったが、それまでの努力の一端が認められたのでしょうか、初代・花柳金太郎師の取立に

より、花柳流二世宗家で家元の花柳寿輔師より名取を許され、花柳金龍と名乗るようになり、さらに教授許可の専門部を経て、舞踊教授としての第一歩を踏みだしました。

一九五二年、亡夫の松井安次郎と渡伯、翌五三年の二月、市内ヴィトリア街に教習所を開設、こんにちまで日本舞踊の普及に明暮れています。その頃の私にとって最も嬉しかったことの一つに、市内サン・フランシスコ劇場での『日本音楽と舞踊の夕』（五二年十二月十四日）で長唄「岸の柳」と「蓬来」を踊らさせていただき、これを機会にサンパウロの日本舞踊界の一員としてお仲間に加えられたことでした。ブラジルに来て、まったく〝東も西も分からなかった〟私にとって、ただただ感謝の念でいっぱいでした。

月日がたつのはまったく早いもので、私がヴィトリア街に初めて教習所を開いてから一昨年（八三）には花柳流金龍会の創立三十周年を迎えました。この間、多くの方々に日本舞踊の手ほどきをさせていただきましたが、矢張り日本とは事情が異なるせいか、ようやく基本を身につけ、これから……という時にやめられるお嬢さん方も少なくありませんでした。家庭の事情、あるいは本人自身に続ける意思が無くなったのかも知れませんが、教える身にとっては非常に残念なことでした。

一方、ヴィトリア街の教習所時代からもう三十年以上も私のところで踊りに励んでいる女性の方もいます。ただし現在は孫

娘さんと一緒に教習所にお出でになっていますが…。

また、変ったところでは、バレエの専門家（ブラジル人男女）が少数ながら時たま教習所へ顔を見せます。彼、彼女らはプロの舞踊家で、日本舞踊のなかから〃なにか〃を引出して、バレエの振付けに再現させるためでしょうか、実に熱心に勉強しております。

なお、花柳金龍会では創立三十周年を記念し、八三年十月二日文化協会記念講堂で昼夜二回の舞踊会を開きました。これには日本から花柳流三世宗家家元の花柳寿輔、花柳流家元後見人、五世の花柳芳次郎、二代目花柳金太郎の三人がお出でになり、舞踊会に花を添えていただきました。

また、花柳金龍会の直弟子は三十名、孫弟子は百五十名です。さらに花柳流宗家家元から金龍の取立により名取を許されたお弟子さんは十名（八五年四月現在）を数えました。



花柳金龍会の第一回温習会は五四年六月、その後現在まで新名取の披露（二回）も兼ねて八〇年十一月には第十回を催しました。この他、花柳金龍会では、サンパウロ創設四百年祭典、日本音楽研究会公演、ブラジル日本移民祭、ブラジリア遷都三周年記念「日本舞踊の夕」、救済会と憩の園の記念祭、第二回あゆみの箱チャリティ・ショー、サンパウロ市観光局主催「みどりの週間」などに全員が賛助参加させていただきました。

さらに各地日系団体主催の各種催しにも全員が招かれて参加するなど、コロニア皆さまのご好意に預りました。特に一九六〇年十一月十二、十三の両日、市立劇場での親王殿下ご誕生奉祝会を兼ねた第五回温習会で私の演出による民謡劇「ひえつき幻想」発表に当っては作曲を小野寺七郎、編曲を丸山昌彦が担当、日本音楽協会から三好美和に特に賛助出演していただくなど、誠に感謝に堪えませんことでした。

なお、私は一九八四年六月七日、ブラジル教育相互協会から「日本舞踊を通じ、ブラジル文化界の向上に貢献した」と、コウト・デ・マガリャンエス章をいただきました。誠に身にあまる光栄と、喜びをかみしめている日日です。

（文中敬称略、一九八五年四月記）

第４部

バレエ

〔バレエ〕（ＢＡＬＬＥＴ）　イタリアの宮廷から発生し、フランスに移り、さらにロシアで発達した舞踊をいう。一八世紀のフランスの舞踊家ノヴェールの出現によってそこに劇的な形式がはじめて与えられ、二〇世紀になり、西欧より移植されたバレエはロシアにおいて見事に開花した。クラシック・バレエ（正しくはバレエ・ロマンティック時代の作品）として今日も盛んに各国で上演されているチャイコフスキーの「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」などいずれもロシアで初演された。一九〇九年、ディアギレフの「バレエ・リュッス」が登場、ストラヴィンスキーをはじめ数々の作曲家、ブノワ、バクストなどの美術家を動員、舞踊家としてはニジンスキー、フォーキン、カルサビーナ、マシーン、リファールなどの参加をえて数多くの近代バレエを確立した。

　日本におけるバレエは、明治の末に帝国劇場歌劇部の教師としてＧ・Ｖ・ローシーがダンス・クラシックの基本を教えたこ

とにはじまる。高田雅夫・せい子、小林敏などを生んだ。一九二二年、アンナ・パブロヴァが来日して日本の舞踊界に大きな刺激を与えたが、バレエの基礎は昭和の初めにロンアから亡命して来ていたユリアナ・パブロヴァによりうえつけられ、その門下から東勇作、橘秋子、服部智恵子、島田広、大滝愛子、貝谷八重子らが出た。さらに日劇ダンシング・チームを教えたオリガ・サファイア門下から今日も活躍している松山樹子や松尾明美らが育ち、第二次大戦後、はじめて全曲上演された東京バレエ団の「白鳥の湖」（小牧正英演出・振付け）につながっていく。その後のバレエの発展は目ざましく、各バレエ団の発達をみたが、バレリーナとしては一時代を画した谷桃子を生んだ。現代はさらにバレエ界の地図は一変し、文化庁などの助成の力もあるが、全国的に良いバレエがみられる仕組が出来つつある。日本バレエ協会は社団法人に発展、各バレエ団や舞踊家がそれに加わっている。

その他チャイコフスキー記念東京バレエ団はプロデューサー制をとった最初のものとして、フォンティーン、アロンソ、プリセツカヤなど世界的なバレリーナを一堂に集めたバレエ・フェスティバルを開き、数多くの成果を日本および海外でもみせた。同じ頃スタートした太刀川瑠璃子プロデュースのスターダンサーズ・バレエは創作バレエ中心に活動して来たが、昭和五二年（七七）秋に本格的なクルト・ヨースの「緑のテーブル」

を日本初演して話題をまいた。橘秋子の一人娘秋帆は母の死後、橘秋子記念財団を創設、橘秋子賞や日本児童バレエに力をそそぎ、牧阿佐美バレエ団を主宰、有馬五郎、石田種生、石井清子らの東京シティ・バレエ団とともにこの四団体は日本バレエ協会とは別に東京バレエ協議会を結成している。また井上博文はバレエ劇場として独自の活動を展開している。

すでに二回にわたり東京で日本・世界バレエ・コンクールが開かれ、大阪の法村友井バレエ団、名古屋の越智実、京都の有馬龍子など地方のバレエ活動も活発になった。さらに松山バレエ団の森下洋子はバルナ（ブルガリア）の世界バレエ・コンクールで金賞を得、その後ニューヨーク他でしばしば踊り、世界のバレリーナとして評価を与えられるところまで日本のバレエは著して向上している。

〔モダンバレエ〕（ＭＯＤＥＲＮ・ＢＡＬＬＥＴ）　クラシック・バレエに対して、デイアギレフの「バレエ・リュッス」以後、新作が創られているが、それらを総称してモダン・バレエという。現代の振付者としてはアメリカのジョージ・バランシン、アントニー・チュダード、ジエローム・ロビンス、フランスのローラン・プチ、ベルギーのモリース・ベジャール、ドイツの故ジョン・クランコ、オランダのルディ・ヴアン・ダンツイッヒ、イギリスのフレデリック・アシュトン、ケネス・マッ

クミラン、ソ連のクリガロヴィッチなどをあげることが出来る。クラシック・バレエにはマイムやグラン・パ・ド・ドゥの扱いなどいろいろな約束ごとがあるが、モダン・バレエでは、それらは無視して行われる。

日本の振付者では、横井茂がシェイクスピアを土台にした数多くの名作を創っているが彼にはモダン・ダンサーを登場させての名作もいくつかあり、昭和五一年（一九七六）に芸術選奨を受けた「沈黙」などそのアイデアと秀れた演出能力は抜群である。高橋彪もバレエ・ド・ブルゥ時代から数多くのモダン・バレエを創り、作品数は横井に比べて少ないが実力のある振付者である。堀内実は自らユニーク・バレエ・シアターという小劇場をつくったが、小劇場でやった彼の「春の祭典」は傑作の一つであり、音楽に対しても新しいセンスを示している。

関直人も小牧バレエ団以来本格的な振付者として成長した人で、昭和四九年（七四）にみせた「かまきり」は新しいセンスのバレエであった。その他、小川亜矢子、添原宏樹、江川明などが活躍中である。

（自由国民社版「現代用語の基礎知識一九七九」より転載）。

「農村にオアシスが…」

ユバ・バレエ　州農務長官が絶賛

浜田　拓
（在日本、作家）

作家の湯浅氏が〝橋渡し〟

一九六〇年は、ブラジル政府が首都ブラジリアを建設した年で、その年に、国際ペン・クラブ大会がブラジル、リオ・デ・ジャネイロで催され、川端康成氏をはじめとする日本の代表団六人が参加し、作家、湯浅克衛氏もいた。

その後、サンパウロ市で、コロニア（日系人社会）で、日本代表団の講演会が催された。

その講演会に行った弓場さんは、湯浅克衛氏の話が気に入り、湯浅氏と会って、「弓場勇という者だ」と言えば、「名前は大宅壮一さんから聞いて知っている。」となり、湯浅氏を弓場農場へ招待した。

その時の事を、湯浅克衛氏は、

「サンパウロの講演会は、奥地から三日も泊まりこみで聞きにくる人が多く、超満員であった。『赤坂』という畳敷の、東京並みの料亭で御馳走になっているうちに、川端さんに袖をひかれて、トップの私がラストということになり、酒が回って、ついいい気なことをしゃべってしまった。すると、それが気に入っ

たということで、二日後には、八百キロの奥地に、飛行機で招待されることになった。

迎えに来たのは、東京で家に相談に来たこともある画家の楠野君で、偶然その弓場勇さんの農場に絵を教えに行っていたのだ。これも案内の日伯毎日新聞社の人が、ＹＵＢＡとサインすると三人、南十字星機に乗れるのである。

（「南米の旅より」）

その頃、楠野さんは弓場農場では、養鶏を営みながら、ピアノを弾いたり、絵をかいたりしていた。

そして、弓場さんが、湯浅氏に、

「個人がばらばらだと力にならないが、結集すると大きな資本を動かし、余裕ある生計ができる。創造の仕事が生まれる。というわけで三十人ほど、日本の芸術家に来てもらえたら」

と話せば、湯浅氏は、

「居る居る。小原久男という男が居る。」

と言って、日本へ帰り、さっそく小原久男（通称・庄さん）に連絡し、話が具体化されてきた。

小原夫妻の来伯で本決り

庄さんは、東京芸術大学彫刻科を卒業後、どこかに自分が住む場所があるはずだと思い、五年間、それに夢を見ていて、そ

の五年目に、湯浅氏より

「庄さんの捜していた場所があったよ、ブラジルの弓場農場だ」

と連絡があり、庄さんと弓場さんの手紙のやりとりが始まった。

庄さんが弓場農場へ行く事が決まり出した頃、それまで付き合っていた女性、図師明子さんが居た。

明子さんは、バレリーナ。全日本芸術舞踊協会々員で、安藤三子に師事、昭和三十年度（一九五五）全国舞踊コンクールに出場し、創作部門で作品「アーチスト・イン・パーカション」が入賞、安藤哲子バレエ団付属研究所研究科教師及び図師明子バレエ研究所主宰、〃ユニーク・バレエ団〃の同人となり、東京産経ホール、ＮＨＫテレビ等の出演、振付を担当したりしていた。

庄さんは、弓場農場へ行くのなら、一緒に生活できるのではと思い、また、明子さんも弓場農場の事を聞き、ブラジルへ行きたいと思い結婚し、一九六一年、クリスマスの一週間前に、二人は弓場農場に着いた。

自由な人間の姿が自然な素朴な形で…

弓場農場へ着いた時の印象を明子さんは、

「日本で劇場という限られた場所で、特定の観客を前に、ただ

踊るだけのためにあるような踊りを、踊り続けて行くことに疑問を持ち、失望し、踊りを止めてしまおうとまで思った私が、ブラジルの弓場農場に着いた時、真黒に日焼けしたしわだらけの顔、優しく、そして鋭く光る眼、白い髪、たくましくふしくれだった手、寡黙の中に抜けた歯を大きくあけて底抜けに明るく笑う人々の顔をみた時私は、とてつもない大きな感動を受けました。いつの間にか見失いかけ、失望し、また求めていた自由な人間の姿が自然な素朴な形でそこにあったからです。それは優れた作品を前にした時のような感動でした。」

（第四回ユバ・バレエ団サンパウロ公演のパンフレットより）

農場の生活の中に、新しくバレエが

踊りを止めてしまおうとまで思った明子さんが、弓場農場に着いたのはクリスマスの一週間前で、農場では、クリスマスの集いのため、劇の練習などをしていた。明子さんが、子供達に劇の振付けをすると、うしろで見ていた弓場さんが、振付けされた子供の中に、別人の如く新しい個性が生かされた感じを覚え、明子さんに、

「農場の子供達にバレエを教しえてやってくれないか。」と話し、バレエが始まった。

弓場農場の生活の中に、新しくバレエが、加わったのである。

そして四年後（一九六五）、弓場農場に、サンパウロ州農務長

官が訪れたので、歓迎の意で、練習しているバレエを見せた。

長官は、農村にオアシスが湧き出るのを見た思いだと絶讃し、直ちに州農村文化振興局に〝ユバ・バレエ〟に援助金を下付するよう命じた。

その後、〝ユバ・バレエ〟の地方公演が始まった。





農場での共同作業

首都の国立劇場で公演も

〝ユバ・バレエ〟は、現在（七六年一〇月当時）までに、ブラジル各地で約二百回の地方公演をかさね、七一年には大統領夫人の招待で、首都ブラジリアの国立劇場で上演し、観衆から大きな拍手で迎えられた。

モダン・バレエで、そのレパートリも広くジャズ、クラッシック、タンゴ、ブラジルのフォーク・ローレ（民謡）、日本の民謡などとり入れ踊られている。また、開拓者をテーマにした〝輝かしき開拓者〟、移民をテーマにした〝よろこびの歌〟などがある。



農場の全員が文化活動に

弓場農場は、現在（七六年一〇月）、老若男女百余名の文化活動に絶えず、動員する事のできる共同体制でそこには、規則も分配も必要としない。

日々の生活様式は他の農場とあまり変らない。

―― 弓場農場略史 ――

1906　弓場勇生れる（西宮市塩瀬町名塩）
1925　弓場勇（19歳）を筆頭に　両親　祖母　7人の兄弟がアリアンサに移民する
1925―35　弓場勇は野球をコロニアに広め　青年が弓場家に出入し　合宿の様な形で自然と共同生活が始まる
1935　アリアンサのホルモーゾ区　約100haの土地に入植　仲間・家族合わせ20人ほどの本格的な共同生活となる
1939―41　略奪農から施肥農に転換する為　養鶏を一早く取り入れ　また　産業青年連盟を結成し　全ブラジルに養鶏を広める運動をする
1941―45　太平洋戦争
1945―56　弓場農場　22万羽の南米一の養鶏場となる
1956　南米一の養鶏場破産する　無一文から仲間と共に農場を再建して行く
1960　作家　湯浅克衛氏来農
1961　12月　湯浅氏の紹介により日本より小原夫妻が農場で生活する事となる　バレエが始まる
1971　ブラジル大統領夫人の招待により首都ブラジリアで　バレエ公演
1976　10―11月　弓場勇　50年ぶりに祖国訪問
12月　弓場勇（70歳）交通事故で死去

朝起きて、カフェを飲み、七時頃、畑へ行く者は畑へ行き、鶏舎へ行く者は鶏舎へ行く、十時頃になるとアルモッサ（朝食）をし、昼の二時頃になれば、カフェをし、日が沈めばジャンタ（夕食）をする。

二万羽位の養鶏場（岩谷鶏）で、畑では、トウモロコシやマモン（パパイヤ）などを植え、米、野菜、カフェなどは自給自足している。

子供達は、第二アリアンサにある学校へ通い、学校から帰ってくれば、野菜畑や鶏舎などで仕事を手伝っていて、農場の中にある勉強小屋兼幼稚園で、日本語の勉強をしたり、学校での勉強をしたりしている。今年（七六年）には、約一万冊の日本語の本のある図書館も農場の中に建った。

百余名全員が食事の時、食堂に集り一緒に食事をし、各自の家は、家族が一緒に居る家から、青年ばかり集まって居る家があり、その食堂のまわりに建ち並らんでいる。

ただ、農場の中に、劇場がある。バレエがある。コーラスがある。演劇もある。

ジャンタ（夕食）が終り、しばらくするとコーラスが聞え、バレエの練習をしている音が聞える。

月に二、三回、ブラジル各地で巡回している邦画があり、弓場農場へもやってくる。その夜は、皆、食堂に集まり映画を楽しむ。

注　以上は浜田拓著「ＹＵＢＡ―　日々の感動に生きる／人間集団・弓場農場」（サンパウロ人文科学研究所・所蔵）から、〝ユバ・バレエ〟に関する部分のみを転載したものである。

なお、〝ユバ・バレエ〟は、一九七四年七月十三、十四の両日、サンパウロの文協記念講堂で、日本移民六十六周年記念公演を行なった。次は、同公演のパンフレットに掲載された弓場勇氏（故）の所感である。





ただ踊るだけでなく

弓場　勇



移民の日のお祭りの催し物の中に招待されたことを光栄に思う。

六百キロの山奥から、ナベ、カマ持参で、百姓娘の参加である。その百姓娘が踊るわけで正気の沙汰ではない。百姓仕事を放っぱらかして朝から晩まで踊っているのではないのか、でないと、あのように踊れるはずがない。

とんでもない　―　我々は百姓である。しかも、貧乏百姓である、なぜ、百姓が踊らねばならないのか　―　。

百姓は、朝から晩まで仕事に追いまくられている。そんな暇があるはずがない。その通りだ。晩、夕食のあとの時間を利用する。ちょっと、はずかしいが、開き直って理屈を言わしてもらうと、次のようになる。

我々は、見せるために踊るのではない。

踊ること、歌うこと、劇することによって毎日の生活を豊か

にしたいためにである。

そのことは、同時に、毎日の生活が、お互の個性のぶつかり合いによって新鮮に保たれたいと、念願することになる。これを観念としてでなく、実際に、生活の中に生かすためには　―。毎日の練習の積み重ねが、百姓の生活と溶け合っている必要がある。

自由に、明るく、しかも、きびしく　―　。



だから、我々のバレエは上手、下手を比較する必要がない。選手が選ばれるのではない。

生活するもの全員が踊る。練習が生活から遊離しないために、個々の人間関係が生きた関係を保つのである。そのためには！！

毎日の生活は自然の中で躍動し、大地との対話の中に毎日の新しい人間関係が育つようでなければならない。そうした人間関係の流れがないと我々の生活は死んでしまう。

だから、先生と生徒の関係が生れない―

だから、生活と舞台が密着するのである。東京で生れ育った小原夫妻と原始林で生れ育った人間とが、自然の中で、農場の生活の中で育った人間関係が、有機体になって創ったのが、ユバ・バレエである。

再び言うが、見てくれの踊りになったら、農場全体の人間関係は死んでしまうし、バレエも死んでしまうだろう。

こんなような生活の雰囲気が舞台に現われたらうれしいのだが―。

「弓場農場と私」

小原明子



（舞踊家（旧姓　図師さん）安藤哲子に師事。
ユニーク・バレエ団にて活躍。１９６１年　小原しよおと結婚　渡伯）

一九六一年（今から二十年前）、ブラジルの弓場農場に着いた時、真黒に日焼けしたしわだらけの顔、優しく、そして鋭く光る眼、白い髪、白い髭、たくましくふしくれだった手、寡黙の中に抜けた歯を大きくあけて底抜けに明るく笑う人々の顔を見た時、私はとてつもない大きな感動を受けました。

子供たちはパンツひとつになって、土の上をころげ廻り、夢中になって砂地に穴を掘り続けていました。

裸馬に乗って元気よく馳けていく男の子、高い木の上で、歌を歌いながらマンゴーにむしゃぶりついている女の子。

娘たちは一日中やけつくような太陽のもとでの野良仕事にも、疲れを知らない野性の持主であり、日暮れには、トラクターに揺られながら明るい唱声と共に帰って来る元気な娘たちです。

またトラックの下にもぐり込み、油で身体中真黒になって修

理に取組んでいる青年たちの日焼けした顔の、ニッコリ笑った時の歯の白さは、なんとさわやかなこと。そこには無垢に取出された人間の自然な姿での、生命の躍動がありました。

本来、歌う、踊るということは、人間の自然の欲求であり叫びではありますが、これを単に本能的なものに終わらせずに、生命が充実し、エネルギーが燃えている時、歌い踊ることを通して、一人一人が生きることに勇気と自信を持ち、更に誇りを持ち、自分たちの生命がキラキラと輝いていることを自覚できる所まで、昇華できたら……。

私は皆と一緒に毎日を生活することによって、本当の創作とは何であるかということを、改めて考えさせられました。彼らと生活を共にすることによって、私の中で創作意欲はいやが上にもかきたてられ、また、生きることの尊さを教えられました。

私が農場へ着いたとき、半ズボンをはいて、小学校に通っていた少年少女たちは、今や二十歳過ぎた青年に育ち、開拓者としての親の愛情を肌で感じ、受け止め、自分たちの生き方を真剣に見つめ、考え、また、その若さ故に苦悩する若さあふれるたくましい青年に育っています。

彼ら青年の姿は、私にひたむきに生きるということへの感動と勇気をあたえてくれています。そしてこれは新しい創作への原動力にもなっています。

この新たな感動は、作品を昇華させ、その作品が彼らに生き

ることへの勇気と自信をもたらし、さらに、たくましい青年を育て上げるものではなくてならないと思います。

お互い裸になって、ぶつかり合い、いかり、悩み、涙を流し、声を上げて笑いあえる農場の生活は、いつも私に新しい生命をあたえてくれています。

注　本文および「弓場農組の舞台づくり」は、ユバ・バレエ団日本公演（一九七六年十～十一月）に当って発行されたパンフレットに拠る。



「弓場農場の舞台づくり」

小原しよお



彫刻家　東京芸術大学工芸科鍛金卒

１９６１年　ブラジル・弓場農場へ

ブラジル彫刻界で活躍

我々が弓場農場へ着いたのは、一九六一年暮のクリスマス一週間前でした。その一週間の間にコーヒー畑が整地され、柱が立ち、瓦は子供達が総動員で葺き、あっという間に千人近く収容出来る劇場が建ちました。都会のそれに比べ〝劇場〟というには余りにも貧弱かも知れませんが、ここでは可能な限り舞台の条件を充分に満たした舞台が出来ました。

スポットライトが欲しいな……とつぶやいていたら翌日電気係の青年が、レンズこそないが円筒形のブリキ製で、絞り調節のきく、試作品をもって来ました。暗がりから段々明るくなって行く光を出したいのだけど、抵抗器も欲しいな……と相談したら翌日、木の箱に塩水、それに数片の金属板で充分にこちら

の要求を満たすだけの試作品を作り上げました。ドン帳はコーヒー袋をつぎ合わせて重量感のあるドッシリしたものが出来ました。その手廻しの巻き上げ装置は、かつて彼らが井戸を自分達で掘った時の方法を応用したものです。

電気器具は電気屋で、生地は生地問屋で買うという僕のこれまでの常識はここで覆えされてしまいました。

彼らの厳しかった生活の一端を覗いたようなおもいで、僕はひそかに感動しました。



五十年前、原始林を伐り拓いていた彼らは自分達の家を自分で建て、井戸を掘り、道を開き、病に倒れた仲間を自分達の手で埋葬しなければならなかったのです。

僕は学生時代、職業劇団の大道具、バレエ団の舞台美術に関係していた一時期がありました。舞台装置という職業のための仕事であるから、既成の制作過程のものが優先し、新しい試みというものは仲々通用しませんでした。

しかし、ここ弓場農場では、やったことがないからとか、そんなことは無理だからということは理由にはなりません。皆、やりゃあいいんだなと自分達で工夫して何とか創り上げています。舞台衣裳も最初はエサ袋をさらして、染めて作りました。それはこちらが想像していた以上にデザインのイメージ通りものでした。

衣裳製作は舞台で踊る娘達、またそのお母さん達です。大道具方、照明その他一切の舞台裏は踊り手達の父であり、兄弟であるのです。舞台に立つ者と裏方の関係は現在の都会の劇場では分業化され、仕事の面でだけの付き合いしか出来なくなっているようです。

弓場農場のバレエ団の、素朴であるが舞台の表と裏とが、いや農場ぐるみ混然一体となって調和を保ち、躍動し、更に前進を目指していること、そしてその生活が創作する態度で支えられているということはすばらしい世界だと思います。

バレエの道に４５年余

大谷　康夫
（大谷舞踊学校々長）

九年ぶり舞台に復帰

私が移民船でサントスに着いたのは昭和十二年（一九三七）の十月、当時、二十四歳の元気の良い青年であった。ところが西も東も分からず言葉はチンプンカン、しかし、若さがそうさせたのであろう手真似、足まねでブラジル人の社会に飛び込みました。

ところが運悪く第二次世界大戦の突発。やむなく戦時中はノロエステ線バウルー市近くのアグードスに行き、三年間のコーヒー耕地生活、次いで綿作りを三年、さらに三年間にわたって養鶏に従事するなど、それまでは考えてもいなかった仕事をやり遂げざるをえなかった。これは舞踊家として実につらい仕事であった。舞踊家は常に身体をやわらかく、そして高く飛び上がる……、こうしたやわらかな身体に九年間もエンシャーダを持ったことは、私にとって実に致命傷だった。

ようやく戦争も終わった。このへんで百姓の足を洗う時だと考えて日本人の多く住んでいるマリリア行きを決心した。これ

が、私にとってブラジル舞踊界への第一歩となったわけである。

　このマリリアでの舞台は、いまでも忘れることの出来ない懐しい、大きな思い出の一つである。当時のマリリアには日本での演劇関係者が多く、この人たちによって劇団が組織された。その名は新星劇団。浪曲師から旅役者、活動の弁士（活弁）、奇術師などと多士済済（たしせいせい）。なんとか頼み込んでこれに仲間入りさせてもらい、専門は踊りだったが、時には芝居にも出た。だが、根っからの役者ではないので、その役は台詞（せりふ）の少ない〝お殿さま〟か、御用！御用！と大声で叫ぶだけの〝取り手〟だった。



大谷康夫の「インデヤン」

　その間、時は流れたが期は熟し、新星劇団のサンパウロ公演が正式に決定した。一行十五人は大喜こび、心から張切ってコンデ・デ・サルゼーダス街にあった下宿屋、中島さんの家に、旅の草鞋（わらじ）、ではない革靴（かわぐつ）をぬいだ。そして、いよいよ待望のサンパウロ市第一回旗上げ公演の初日、ノルテ区ルーズヴエルト駅近くの会場、コロンボ劇場に行った。劇場

の周囲を二廻りするほどの人、また人の群れ。これなら〃大入り満員〃は間違いなし…と、一行十五人の面上には思わず喜こびの笑（えみ）が浮かんのだが、観客の入場時間直前、急に市の監督官により劇場の表戸は閉ざされた。理由は手続きの不備。結局、サンパウロ市公演は惜しくも〃お流れ〃となり、団員一同は涙を飲まされた。まったく残念だった。

サンパウロに舞踊教室

このため、折角（せっかく）の新星劇団サンパウロ公演は失敗に帰し、団員はマリリアに帰える組、飽くまでもサンパウロにとどまる…という二組に別れた。無理もない。新星劇団の解散が表面化したからである。私はサンパウロ組に身を置いた。しかし、懐中は無一文、やむなく救済会の会長、渡辺マルガリーダ女史にお願いし、サン・フランシスコ教会の大サロンを借りることが出来、舞踊教習所を開くに至った。私の、ブラジル舞踊界における第二の人生が始まったのである。

ところが、貸主の教会側はカトリック教の団体。そのため、いろいろと規則がやかましく、現在のように水着姿でのレッスンが出来ず黒の長袖で、そして長いサイア。ちょうど尼さんと同じでオイチニ、オイチニいう有様だった。だが、こうしたことで、現在でも渡辺マルガリーダ女史に心から感謝している。

その後、レッスン場をタバチンゲーラ街に移して午後はバレ

エ、夜間は社交ダンスの教授に当てた。また、夜の十時から日本語によるラジオ放送を担当するようになった。





戦後、サンパウロにおける日本語のラジオ放送はパンアメリカーナ放送局によった奥原氏（奥原マリオ氏の実兄）が第一人者で、私は二番目でラジオ・サンパウロからである。

当時、日本では菊田一夫原作のラジオ・ドラマ「君の名は」がもの凄い評判で、その影響もあり、コロニア初のナマのラジオ・ドラマを放送した。その当時の出演者の一人が、リベルダーデ商工会の水本毅氏の現夫人であったことは、あまり知られていないと思う。

一方、一九五〇年三月に遊佐正憲監督以下村山修一、古橋広之進、橋詰四郎、浜口喜博の水泳競技選手団が来望し、その歓迎会がルイス・ゴーエス街の村上氏（歯科医）のシャカラで開かれた時、余興のショーに私たちのモダン・バレエを披露した。これには舞台作り、音楽装置、背景、引幕など独力でやったが、これに対して古橋選手から自筆のサイン入り写真を一枚貰ったこともあった。



その後、サン・ジョアキン街に完成した南米劇場の柿（こけら）落し出演。サンパウロ新聞社の講読者慰安大会で映画「湯の町エレジイ」と舞踊でパラナ、ノロエステ、パウリスタ、モジアナ、セントラル各地の日系集団地での公演。松旭斉天勝一堕の各地巡演には司会を担当した。さらに、リオのブラジル人興業主の招きで、同地の舞台に約六か月間出演した。この時の出し物は、ブラジル、アメリカ、スペイン、アルゼンチン、キューバ、日本各国のバレエで、私たちの舞踊団もこれに加えられたもの。ブラジル側の出演者は、ビビ・フェレイラを初め、マラ・ルビア、コレー、オスカリットなどの一流スター揃いだった。このリオでの公演は私たち舞踊団員にとって良い勉強となったうえ、楽しい仕事でもあった。

楽団組織、映画初出演も

リオから帰聖して間もなく、気の合った友達らと話合い、彗星楽団を組織した。メンバーは前田、木下、古谷、難波勝美らの諸君で私の担当はバテリアだった。しかし、あまり活動らしいことも出来ないまま、半年後にはその名のとおり、彗星のごとく消えてしまった。これを〝名前負け〟？というのだろう。

時日は忘れたが、これと前後して（一九五三年一月）オデオン劇場でカーザ水本主催の第一回歌謡、民謡、素人のど自慢大会が開かれ、司会者として舞台に立った。その後、こんどは

映画初出演の話しが舞込んで来た。戦後のコロニアにおける臣道連盟と闇円（やみえん）の売買を扱った物で、製作・監督は当時のアジア映画社（？）に関係していた佐藤吉典氏。同氏は戦時中、東宝の監督だったといわれ、題名は「南米の眩野に叫ぶ」。共演者は東宝の元俳優、大日方伝、その他多数であった。この映画は無事完成したのだが、どういう理由からかブラジル国内では上映されず、後日、東京のＮＨＫテレビから全国向け放映された…ということを耳にした。

父から勘当された芸能界入り

話は戦前の日本にさかのぼる。私は十七歳の時に某舞踊学校に入った。その当時（一九三〇年ころ）、日本ではまだ芸能界に身を置く人たちを〝河原乞食〟とか〝河原者〟（注・士農工商の四階級に人らぬ賤民階級）と笑い飛ばしていたため、村会議員だった父は真赤になって怒り、次男でもあったところからついに勘当された。当時、舞踊教師として名が知られていたのは石井漠と高田せい子の二人ぐらいであり、その活動も限られていた。

石井漠の踊はロシア系で踊の線が非常に強かった。これに反し、高田せい子はフランス系で非常に柔らかいので、私は石井漠の学校を選んだ。

父から勘当されたため、その後の約三年間は金銭的に苦労を

なめされたが、松竹少女歌劇（ＳＫＤ）にいた荒木陽氏の計らいで榎本健一のエノケン一座の文芸部に入り、振付けの助手となった。つまり、踊子たちの舞踊教師で、その二年後には有名な歌劇である「カルメン」に男性舞踊手の一人として舞台に立つことが出来た。当時の一座のメンバーは、座長が榎本隆一、幹部として二村定一、中村是好、水島道太郎、淡谷のり子、ジャズピアノの和田肇などであった。エノケン一座は松竹座、金竜館で清水金一、古川緑波、三益愛子、大辻司郎などと共演したが、これが浅草のオペレッタ全盛時代で、丸の内の宝塚劇場で公演中には、あの有名な二・二六事件（三六年二月二十六日）があったことを今でも覚えている。

そのころ、中川三郎氏がタップ・ダンスを習得して、アメリカから日本に帰って来た。

それに刺激されて私も外国に行き、なにか新しい踊りをと思いついたのがアルゼンチンのタンゴでした。ブラジルからは近い国なのでやって来たのだが、運悪くも第二次世界大戦にあい、アルゼンチン行きはパーになってしまった。

さながら〃国際バレエ学校〃

一九六〇年、約一年間の予定で訪日、滞在中はいろいろと見聞を広めることに努めて帰伯、サンパウロの芸能界に帰り咲いた。先ずマリオ・オクハラ・プロのイマージエン・ド・ジャポ

ンに約一年間、その後、ＴＶ・カナール７（レコード）の特別番組に一年契約で出演した。こうした努力が認められたのかブラジル人の文化関係団体からアンナ・ネリー章と、コメンダドール章を授与された。実に感激の至りだった。

こうして、踊りの道を歩き続けて、すでに四十五年。モダン・バレエと社交ダンス教習所としては日系唯一のものとして、日伯間の親善、文化の交流に微力ながら務めて来たわけである。

現在、私の所には台湾、韓国、ブラジル、そして日系の生徒が多く、さながら〝国際バレエ学校〟の観を呈している。なお、大谷康夫は芸名で、本名は大谷貞治であることを記しておきたい。（注＝掲載写真はすべて大谷舞踊学校初期のもの）。

バレエに魅せられて…

戸塚　マリ（バレエ教師）一九三一年、中華民国北京生まれ



小松原よ一子（左）と筆者（1971年）

両親ともに芸事好きで、母は琴、三味線をよくし、琴、三味線、他にピアノをやらされ日本舞踊は六歳の六月より藤間勘八郎師に師事、八年の後、戦争たけなわとなり、その後東京に引揚げました。

十四の年、始めて、東京バレエ団の「白鳥の湖」を見てすぐに、小牧バレエ団に入り、十七歳で試験を通り、正団員として学園の生徒の指導に当り、バレエ団の全公演に参加しました。

「白鳥の湖」「ジゼル」「コッペリア」「くるみ割り人形」「シエヘラザード」「ペトルウシュカ」「ねむれる森の美女」など。他にオペラや映画のバレエ場面に出演、「ファウスト」「アイーダ」「カルメン」などでした。

バレエでは、主にカラクテル・ダンサーのソリストとして日本各地での公演に参加しました。北海道から九州まで、全国を回りました。

一方、小牧バレエ団で教えるとともに、各地の教室へも出掛け、大阪、東北および宝塚のバレエ場面の客員として出演したり、また自分の教室を東京の大森に開き生徒の指導にも力を入れ、児童バレエ団をつくり、「白雪姫」「親指姫」「みつばちマーヤ」などを公演しました。

十年ぐらい後、他の踊りをやりたくバレエ団を退団、ジャズ、タップ・ダンス、ラテン舞踊、ソシアル・ダンスなどあらゆる踊りを習い、また、踊り手として必要な体のための制体術、指

圧、各体操も研究、習得し、舞踊手としては、スペイン舞踊を来日した専門家カルロス・モントヤ夫人、マノロ・ヒル、ピラール・パラ、アントニオ・ウトレラス各氏に師事、後、日本で初めてのスペイン舞踊団を結成しました。生徒の指導と舞台、テレビショーの公演で日本全国を回り、その間、見砂直照とキューバンボーイズの客員として、二年間ぐらい、労音の舞台、レコードの（カスタネット）録音などをしました。



スペイン・バレエ「血と砂」中央が筆者

その後、結婚のため北海道～東京を往復、舞台活動は少なくなり、スペイン舞踊とバレエの出張教授は続けてましたが、一九七三年にブラジル移住、次の年よりバレエを教え始め、現在

はスペイン舞踊、バレエ、ジャズ、体操などを教えています。

その他、年に四、五回、芸能祭、文化祭、慈善ショーなどに生徒とともに舞台を勤めて現在に至ります。「白鳥の湖」「白雪姫」「ビットリアヘヂア」「血と砂」など、バレエクラシック、スペイン・バレエ、ジャズなどを舞台にのせています。



ギタリストのアントニオ・ウトレラスと筆者（1972年、ＴＶ・ＮＨＫで）

サンバの指導などにも

若松　慶子　（バレエ教師）



若松慶子（右）

私が芸能界に第一歩を踏み出したのは、昭和九年（一九三四）、東京の青山女学院を卒業してから間もない頃でした。当時の喜劇俳優、榎本隆一のボオドビリャン一座に入り、モダン・バレエを踊っていました。

その後、中南米各国の踊りに興味を抱くようになり、その研究のためブラジルに来たのですが運悪くも第二次世界大戦のため、約九年間はバレエをまったく忘れ、農業に従事しました。

しかし、第二次大戦が終わり、世情が落着いて来るとともにサンパウロ市に移り、市立劇場付属のバレエ教室に入り、約四年間にわたってロシア系のアンナ・パプロバ先生について、再び初歩からの教えを身に付けさせていただきました。また、同教室の卒業コンクールでは思いがけもなく〝パプロバ賞〟を授けられるなど、私にとっては終生忘れることのできない恩人で

もあります。

その後、市内アルト・ダ・ピニエイロスにバレエ研究所を開きましたが、たまたま知合った舞踊家のM氏と訪日、ロス・インジオス楽団とともに日本の各地で公演、東京では新宿のコマ劇場の舞台を踏むなどの幸運に恵まれました。

〝歌の女王〟といわれた美空ひばりと顔見知りとなり、彼女のブラジル公演についての話をするようになったのは、コマ劇場での公演が終わる頃でした。同公演について彼女といろいろ話合い、いったんサンパウロに帰ってから関係者らと相談、再び訪日して公演実現に向けて努力しましたが、彼女の日本における公演スケジュール、その他の事情から話はまとまらず、空しく帰聖しました。

現在は再びピニエイロスでクラシック・バレエの指導に当るとともに、毎年新作の発表会を開いています。また、ブラジルの国民性にマッチしたサンバの指導などにも当っています。

（本名、大巻儀子。一九八五年三月）

洋　舞（バレエ）

一九四〇年に長谷川敏子、川上（女性）が日本から来て公演したという。第二次大戦後すぐ一九四五年に大谷舞踊団が旗上

げした。

四七年に浅倉洋子、鈴木英子などの名が知られるようになった。一世では若松慶子が活躍している。一九五三年には宝塚バレエ団が来て八月十二日にサンパウロで公演した。五三年には益田隆舞踊団も来ている。

日系人社会ではバレエはさほど定着しなかったが、例外的に特筆すべきはアリアンサの弓場農場に働く人々で作られた「弓場バレエ団」である。農場指導者弓場勇と六一年に移住したバレリーナ小原明子の理想が一致して、昼は農業に従事している娘たちが夜はモダン・バレエを練習し、技術的にも高度なバレエ団に成長した。今日までの公演はブラジル全土で、二〇〇回に及び、支援者たちの協力によって、七八年には日本公演も果した。州農村文化振興局も高く評価して後援に力を入れている。演目は小原明子の振りつけによるモダン・ジャズをバックにしたものが主だが、最近はブラジル音楽もかなりとり入れているモダンな感覚と素朴な土の匂いが自然に調和しているところに特色がある。

注＝以上はブラジル日本文化協会発行（一九八〇年八月）の「ブラジル日本移民７０年史」の趣味と行事欄の「洋舞（バレエ）」から全文転載したものです。

第5部

能楽

〔能・能楽〕　能は能舞台という簡素な特殊舞台で演ぜられる一種の仮面楽劇で、世界に残されている唯一の洗錬された荘重な仮面劇である。

能という称呼は仏語に基くものという説もあるが、それほど面倒なものでなく、芸能・才能・能力などという「能」と同義であって古くは猿楽の能・田楽の能・狂言の能などと用いられているが、後には猿楽の能だけを単に「能」と呼び、「猿楽」という称呼と共に用いられ、江戸以後は「能」の方が専ら行なわれるようになったのである。また現在では「能」の外に「能楽」という詞も一般に用いられているが、それは明治十四年（一八八一年）能楽社設立の際、重野安繹・久米邦彦が「日本歌舞源流考」に遣ってからのことである。

能楽は、色々の雑芸を包有していた平安時代の猿楽から、時

代の経過と共に展開したのであるが、鎌倉時代の初期には、原始的な猿楽の能、次いで田楽の能が既に発生していたらしく、降って、同末期から南北朝時代になると、かなり進歩した劇的な能が演ぜられていたようである。この頃の猿楽や田楽が、大体同じようなことを演っていたのは、能楽の大成者観阿弥が、田楽の名人一忠の芸に傾倒していたことから察知し得られるのである。

当時の猿楽や田楽は、何れも芸団を組織し、畿内を中心とした各地に座即ち同業組合を作っていたが、その中では、春日神社に奉仕した大和四座と日吉神社に奉仕した近江三味とが最も有力であった。

明治以後の能楽人には、シテ方に三名人といわれている宝生九郎・梅若実・桜間左陣、それにつぐ金剛謹之輔、ワキ方に、三名人と併称される宝生金五郎及びそれらの人々以上の宝生新朔、狂言方に、山本東、・藤井芳松、・三宅庄市、野村与作、囃子方に、洲村又喜、・森本登喜、三須金吾、・狩野宗明、・山崎一道、・石井一斉、・勧世元規、その外名人上手が少なくなかったが何れも既に故人となり、それに次ぐ梅若万三郎、・宝生新もまた近く亡き数に入り、今では喜多六平太・野口兼資・梅若六郎・川崎九淵、少し年若いところで観世華雪・桜間弓川・幸祥光などが、最高級の元老である。

能楽の流派は、すでに世阿弥時代から唱えられていたらしく、

彼はその著術の中でしばしばその意味の文字を用いている。「一流の奥儀を伝えたりという」とか「世子一流はかくなし」とか「当流の奥儀子孫の庭訓」とかの例である。流派の別が厳然としてきたのは徳川幕府時代が、能楽を武家の式楽と定め、いわゆる四座一流―観世・金春・宝生・金剛・喜多―を認可確立したことに基くといわれている。

能には単式能と複式能とがある。前者は中入のないもの、後者は前後二場に分れ、前場が終って中入れとなるのであって、この中入れの繋ぎは狂言方が勤めるから、それを間狂言（あいきょうげん）或は能間（のうかん）といっている。然し、単式能でも複式能でも一番の能の中で、場面は幾つにも変わるのであって、例えば、ワキがどこそこに着きて、候とセリフをいって、ワキ座に着けば、それで舞台は一変するのであるが、そのため背景を取替えたり、大道具などを用うることはない。それは深い純一な情趣を主とし、写実の多様性を斥けるためから来ているのである。

能は、幽玄の情趣を生命とするものであるから、舞・歌を本体とする髷物（まげもの）も、物真似を主とする現在物も、すべて表現を節約簡素化する。そうしてこの簡素化は能のすべての面に施されているから、写実的な演劇に較べると、能はかなり退屈なものである。然し、簡素化といっても、それは強力な力を傾け注いだものであるから、それによって、観客は驚くべ

き迫力を感ずるのである。

また曲によっては、これという要所に、あっといわせるような美しい離れ業をすることもあり、また早くて変化の多い動きをする場合にも、美しさを害わず、姿勢に崩れを見せないことが肝要となっているのである。（この項は一部抜すい）。

〔謡　曲〕　歌謡。文学としての能の詞章ならびにその曲を指して呼ぶ名で比較的近時の称呼である。古来「うたい」といい、諷、謳をどの文字を用いた。謡曲は能の台本ではあるが、いわゆる戯曲とは異なる独特の形式を備えている。即ち、一曲の根幹となるシテ・ワキの対話は戯曲の台詞に当るが、地の文があってシテ・ワキの環境や心境、或はその動作を説述したりするところもあって、その点では語り物の性質も帯びている。而もまた地の文ではなく、シテ・ワキが自らを第三者として語る部分もある。その文章は曲により多少の相違はあるが、一般に次第（しだい）・名乗（なのり）・道行（みちゆき）・着（つき）セリフ・一声（いっせい）、歌・掛合（かけあい）・語り・地謡（じうたい）・クリ・クセ・ロンギ・待謡（まちうたい）・ワカ・キリ等の節から成り立っている。これは能の組織構成に基くもので、世阿弥がいうところの序一段・破三段・急一段のいわゆる序破急五段を基準とするものである。

また謡曲文は歌曲本来の性質から、謡って効果を発揮するように、語句を美しく飾ることに重点がおかれ、必ずしも内容と必然的な関係のないような美辞麗句を並列し、或は縁語を重ね、古文古歌にして人口に膾炙するものを引用点綴するなどして、文意不明なものが少なくないのも特色とされる。

古来謡曲文が錦のつづれといわれる所以である。これは古典に対して憧憬の念が強かった時代精神の表われと見ることが出来るが、このことは単に文章のみならず題材出典についてもいえるのであって、謡曲は、当代の世話巷説を脚色したもの以外は、殆んど前代の先行文芸から材を仰ぎ或はそれを一曲の興味の焦点として構成している。

謡曲作者は、観阿弥・世阿弥以前に、既に僧侶等により作られたものもあるが、世阿弥の能作書（のうさくしょ）によると、殆んど観・世父子の創作か、或は前代の作を二者により改作改訂したものが多いことが明らかで観・世以後も禅竹・観世小次郎等も作っており、殆んど能役者自身の手に成ったことは特筆さるべきである。

音曲としての謡曲は、声明（しょうみょう）をはじめ、前代の邸曲（えいきょく）・宴曲（えんきょく）・曲舞（くせまい）などの曲風がとり入れられて大成されたものというべく、邦楽中でも最も高度に洗錬された声楽だとされている。

現今では、能を離れて、謡曲は一般に趣味として稽古され、五

流＝観世、宝生、喜多、金春、金剛＝それぞれの流派を持ってかなりひろく世人に行なわれている。このことのために、古典として固定化した能が現在なお比較的盛んに開演される基盤となっているといえよう。

（河竹繁俊監修、演劇博物館編の「芸能辞典」から転載。一九五三年度版）。

「伯謡会の今昔」

能楽　古典芸能で日伯文化交流

鈴木　威　（伯謡会会長）

「伯謡会」が戦後再出発してから、この十月（十九八四年）で第百回の例会を催すこととなり、また、来年（一九八五）で二十五周年となる。

戦前の日本で発行された能楽の機関誌『宝生』昭和十六年（一九四一）三月号を見ると、私の父、暢幸が昭和十四年（一九三九）八月当地を訪れた時のことがのっている。

『南米ブラジルの謡』という題で。

南米ブラジルの謡

鈴木暢幸

明くれば一昨年になる。世界三大美港の一と言はれる南米ブラジルの首都リオ・デ・ジヤネイロの埠頭に着いたのは八月の十九日。

日本内地なら夏の暑い最中であるが、ブラジルは日本とは世界の反対側であり南半球に位置するのであるから、寒い最中と云ふべき季節であった。けれども亜熱帯圏に属する国の事とて決して寒くは無い。言はば一年中常夏の国と云ってもよい処である。殊に日本の冬に当る時分は彼の地の夏に当って暑さがきびしい。汗を拭ひながら御正月の年賀詞を申すといふ光景もあ



1940年当時の伯謡会々員

る。

ブラジルの中でもサンパウロ州と云ふのが一番気候のよい国であり、日本人の移住者の多いのも此の州にとどめを刺す。この州の主要都市をサンパウロと云ふ。人口が百万。日本人のこの都会近方に住む者は約二万もあるであろう。それ故に違い外国に居りながら、食物などは殆ど何でも日本にあるものは此処にあると云った有様で、肉、魚は云ふに及ばず、野菜でも豆腐、油揚、日本酒に至るまで間に合はない物は無いほどである。畳を敷いた日本料理屋も何軒かある。気候はよし物資は豊かであり、此処に居ては何不自由もなくして、言はば小極楽の観があると云へよう。

私の長く滞在したのも此のサンパウロ市で自然に恵まれ物質的には幸福であったが、さて人間と云ふものは、物質的を満足はあっても、それぱかりで幸福だとは云へるものではない。私が暫く此処に滞在して不満を感じたのは、趣味の充されないものがある点であった。絵画もあり彫刻もあり音楽もあり、勿論映画も盛にあって、娯楽を求めようとするには事を缺かない。明美な風光もあり適度な運動クラブむある。少し脱線したら特有の賭博もあって相当人気をわかして居るやうであったが、さて私にはそれで満足は得られなかった。それは外でも無い。日本人として日本的の趣味に充されをいと云ふ点に於てであった。数ヶ月にしか達しない滞在に於てでさへ、既にこの満されない

趣味の缺乏を感じたのであるから、長く彼の地に住む日本移民乃至商工家の人達は、如何に心中の淋しさを感じて居る事であろう。サンパウロの郊外に日本庭園の築造がある。時折りに和歌の同好者の会合もあると云ふが、一般の要求に対しては殆ど話にならない。茶の湯、活け花の催しもあるが大勢を制するに足りない。けれども有るは無きに勝る。数キロを遠しとせずして苔蒸す燈龍の傍に半日の清遊を試み、薄暗い日本倶楽部の二階で娘さん達の活花を眺める事も、命の延びる心地がしないでもなかった。

私は或日、謡をうたふ人などはあるまいねと尋ねて見た。洋館の並びに点在する日本人の家の中から、あのうなり声を聞く如きは、あり得ない事とは思ひながら、あまりの無趣味さに、せめて話でもと思って聴いて見たのであった。然るに答は意外であった。「ありますよ、誰は観世で彼は宝生で、何処の会合でこんなのを聴きました」など云ふ。「それなら一つ会を催して見たらどうだ」とそののかす。勧誘の結果、同市在住者で謡曲に趣味を持つ者誰彼と、例の日本倶楽部に集った老無慮十余人。時は昭和十四年十月二十二日、観世と宝生との二流を、椅子に腰をかけ、テーブルに向って数番謡ったのであった。これが地球の反対側にある南米伯剌西爾国に於て初めて催された謡曲の会合である。事小なりと雖も謡曲史上に於ける一普及事実たるを失はない。ただし其の巧拙は勿論問題外としてである。

これを期として同好者の会合が時々に行はれる。新聞社は祖国的な資料と心得て提灯を持って呉れる。之を聞いて馳せ参ずる者も段段に増す。十一月廿六日には、近く帰朝する私の為に送別の謡会を催して呉れるまでに油が乗って来た。其の席上、此の謡会は向後永遠に続行すべきにつき、生みの親である私に会名をつけて呉れよとの依頼であった。取敢えず伯刺西爾の謡曲会と云ふ意味で、伯謡会と命名したのであるが、とうとうそれに定まった。

謡曲はますます盛行と云ふものの、日本内地に於てさへ数を云へば比率が極めて低い。

まして外国にあっては数を以て論ずる事は決して当を得たものでは無いが、少数ながらも生粋な日本趣味として、無趣味若しくは悪趣味の間に健在する事それ自身だけで、非常に強い意義を持つのである。内地にあっては一草一木と雖も心を留めて見るならば日本固有の息吹を吾等にかけて呉れるが、全然さやうの事なき外国の天地に、この祖国の響を鼓吹するといふ事は思へば珍重すべき事である。

善い事をしたと今でも思ふ。最近の文通に依って昨年末に伯謡会創立一周年記念の会合を催した由の報告を受けた。

写真はその時の写真と寄書である。因に、伯謡会の八割までが宝生流で、二割弱が観世流である。生みの親の私が宝生流であるが為と云ふわけとも思はれない。恐らく偶然の自然とも云

ふべきであろう。但し騎兵中佐吉川順治氏と云ふがこの会中での先達であるから今後は更に宝生流が勢力を伸ばす事であろう。同氏は東京在住中。桐谷正治氏の門下であったと云ふ。（原文のまま）。



鈴木暢幸（前列右から四人目）を迎えての記念撮影。後列右端は筆者

暢幸、日本文化の発揚に力添える

一九三九年八月十九日にリオ港に着いた父暢幸は、外務省、文部省の派遣で来伯、当時青少年指導の中心とをっていた文化

普及会の斡旋でサンパウロ市は言うに及ばず、奥地主要植民地で講演し、日本文化の発揚に力を添えた。

野村忠三郎、木村義臣氏など普及会職員、古谷前公使、海野領事などの計らいでサンパウロ市文理科大学の講堂で父は講演、「仏教が日本文化に及ぼした影響」という題で。司会は当国の文豪、フェルナンド・アゼベード氏であった。小生がその通訳をした。来会者約三百名の盛会であり、当時日伯文化交流の最たるものであった。

ブラ拓最高幹部の加藤好之氏のキモ入りで父はオウリニョス地方でも講演、宿となったのは、若い橘富士雄という人の家であった。

同君は結婚したばかり、小さな家の一室に父と私は泊めてもらった。寝る前の一時間位が私にとって最も大切な時であった。父が日本から持参した謡曲本で「羽衣」や「紅葉狩」の練習である。多分、うたい声でやかましい夜であったことと思う。

時々南銀最高幹部、商工会議所会頭の橘氏と会うと、あのやかましかった新婚家庭の一室のことが話に出る。

第一回謡曲会は３９年１０月

戦前、第一回の謡曲会に集まった方々の写真がある。その時の参会者の名前を挙げれば

国井五郎、若月操、吉川順治、鈴木暢幸、黒石清作、伝田寛

一郎、丸山市松、菊地鉄弥、鈴木威、明慧蔵、笹原博夫、吉田信、田中伸一、円丸輝二、熊谷武夫、中山伴一郎の諸氏であり、会場はルア・リアシェイロ四二番の日本クラブであった（一九三九年十月二十二日）。

番組は、

素謡　一、竹生島（宝生流）
　　二、放下僧（観世流）
　　三、羽衣（宝生流）
　　四、紅葉狩（宝生流）
　　五、猩々（観世流）

独吟　弱法師　丸山市松（観世流）
　　実盛　吉川順治（宝生流）
　　藤戸　鈴木暢幸（宝生流）

第二回謡曲会は同じ三九年の十一月二十六日で、会場も日本クラブであった。番組は、

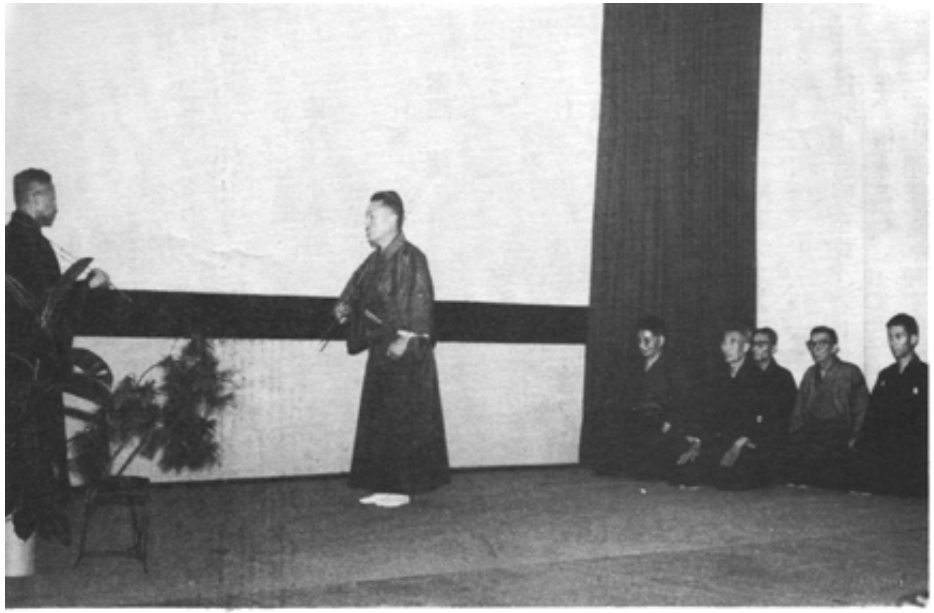
　　一　俊寛（宝生流）
　　二、鉢木（宝生流）
独吟　三、蝉丸　山崎芳蔵（観世流）
独吟　四、葵の上　鈴木暢幸（宝世流）
　　五、雲雀山（宝生流）

当日の参会者は、次の諸氏であった。

茂木清吾、丸山市松、笹原博夫、根本市五郎、鈴木威、若月操、

蜂谷専一、熊谷武夫、小栗義雄、吉川順治、千葉忠見、羽瀬作良、北村政吉、坂根準三、村井喜代巳、中野巌、野村忠三郎、原口七郎、福川薩然、石原桂造、高岡専太郎、池辺乙人、内島弾光、岩上斉助、加藤好之、翁長助成、香山六郎、西原栄、田川清一、田中伸一。

この会が父、暢幸の送別会となった。（なお、坂根準三氏は当時のサンパウロ総領事であった）。



ラテン・アメリカでの能「羽衣」の初公演は、一九六四年十月十五日、サンパウロ美術館講堂で行なわれた。写真は左から漁夫（平源）、白龍（鈴木威）、松田、菊池、笹原、石火矢、小林の諸氏。

父、暢幸の来伯の第二の目的は、小生の大学卒業後、設計及び監督で出来上がった日本病院の竣工式参加でもあった。目出度く出来上がったコロニアの大建築、これは天皇陛下の御内帑金と、全在留邦人の汗の賜物であり、私の生涯最初の名誉でもあった。

父は来伯の全目的を終え、一九三九年十二月サントス港から帰国の途に着いた。父の命名してくれた「伯謡会」は、本年（八四）で四十五年の歴史を持つこととなる。

第三回謡曲会は、私の設計・監督で出来上がった日本病院の講堂で開催した。一九四〇年一月二十八日、紀元二千六百年の奉祝謡曲会であった。番組は、

素謡　高　砂　ツレ　三浦兵助
　　シテ　鈴木　威
　　ワキ　吉田　信

独吟　鶴　亀　菊地鉄弥

　　弁慶　国井五郎

　羽　衣　岩上斉助

素謡　葵の上　ツレ　鈴木威　シテ　根本苔石　ワキ　吉川順治　ツキツレ吉田信

独吟　小袖曽我　明　慧蔵

　紅葉狩　若月　操

仕舞　高　砂　吉川順治

素謡　望　月　子方　三浦兵助　ツレ　根本苔石　シテ　吉田信　ツキ　鈴木威

仕舞　猩　々　　吉川順治

なお、来会者は次の諸氏。

原叱郎、千葉忠見、小栗義雄、石原桂造、大河内辰夫、赤間みちえ、加藤氏夫人、岩上氏夫人、山本氏夫人、笹原博夫、岡氏、小牧氏、菅井豊次郎、吉川順治、鈴木威、八木橋豊、吉田信、川名勝太郎、杉田萬里夫、菊地鉄弥、菅野重雄、若月操、岩上斉助、柴田青年、根本苔石。

第四回謡曲会　一九四〇年六月三十日、サン・ベルナルド菅氏別荘。

素謡　成陽宮　忠度　羽衣　紅葉狩　鞍馬

天狗　八島

仕舞　胡蝶　高砂

など、宝生流のみの番組であった。

第五回謡曲会　四〇年十一月三日　鈴木威宅。伯謡会創立一周年記念会。番組は、

素謡（宝）　竹生島　シテ　三浦　ツレ明

ワキ　菅野

上　ツキツレ　三浦

素謡（宝）　紅葉狩　ツレ　三浦　シテ　吉川　ワキ　鈴木　ツキツレ　明

〃　（観）　羽　衣　シテ　山崎　ワキ　八木橋
独吟　船弁慶＝菊地　羽衣＝菅野　桜川＝岩上　八島＝川名
小袖曽我＝明　熊野＝三浦　弱法師＝鈴木　竹生島＝千葉　盛久＝八木橋　鉢の木＝山崎
仕舞　鵜飼＝根本　雲雀山＝吉川　舟弁慶＝小栗
素謡　藤戸　シテ　鈴木　ワキ　吉川
〃　猩々　シテ　菊地　ワキ　三浦

41年7月、戦前最後の謡曲会

第六回謡曲会四一年七日二十日、サンパウロ裁縫女学校（赤間学院）。番組は、

素謡　加　茂　ツレ　山口　シテ　笹原、ワキ　岩上
〃　七騎落　立衆＝杉田　子方＝菊地、
シテ　若月　ツキ　川名
〃　松風　ツレ　三浦　シテ　根本　ワキ　吉田
〃　隅田川　ツレ　吉田　シテ　吉川　ワキ　鈴木　ツキ　ツレ　三浦
〃　鞍馬天狗　子方＝河野　シテ　明　ワキ　菅井
仕舞　田村＝吉川　安宅＝小栗
囃子　羽衣　シテ　根本　地謡＝大河内　長沢　長田　小鼓＝

鈴木威

太鼓＝吉川順治

当日の来会者は次の諸氏に赤間学院の先生方であった。

高岡専太郎、中西周甫、後藤武夫、三浦朝江、菅譲二、名沢、犬橋、神尾亮三、赤尾威秀、富岡喜太郎、千葉忠見、石川芳園、木田良蔵、吉川順治、吉田、明、三浦、鈴木威、若月操、小栗義雄、山口次三郎、岩上斉助、織田、長岡、根本苔石、大河内辰夫、長沢、川名勝太郎、杉田萬理夫、菊地鉄弥、河野、赤間みちえ。

この会が戦前の伯謡会の催の最後となるわけであるが、十二月八日のパール・ハーバーこの方、私らの表向きの会合は出来ないながら同好会はあちらこちらで小さな会合を持った。

先達者、吉川順治中佐を中心に、単に素謡のみならず、囃子に必要な地拍子、仕舞など小さな吉川氏宅で練習したものである。私のほか、加藤愛子さん（現・岩見綱夫人）も時時見えて「熊野」だとか「鶴亀」の仕舞でご一緒したこともあった。

東洋書店の岩上斉助さんは、日本から色々の謡曲に関する書籍を取寄せられているほか謡曲の音楽的方面に関することの研究に無心であられ、吉川さんから毎日のようにその指導を受けていた。吉川さんは、「拍子を知らぬ謡（うたい）は謡（うたい）でない」ということを盛に言われていたため、お弟子さん連中は、「吉川さんはリクツが多くて、とてもついて行けない」と、

少しずつ離れて行きあとに残ったのは岩上さんと私ぐらいのものとなった。

脇山大佐も少し謡曲をなされ、奥様も小鼓をやられたらしい。ある日、吉川中佐を通じて、「この小鼓、鈴木さんに上げて下さい」と私に届けられた。今日まで使わしてもらっている。

大東亜戦争中は、町で日本語を話しただけで警察に引張られた時代、謡曲会もヒッソリしたものであった。

終戦で会の前途に再び曙光

一九四五年八月十五日、戦争は済んだ。戦後の数年間は皆さまご承知のあの事件で、日系コロニアは蜂の巣を突いた有様であった。

脇山大佐は認識派、その仲のよい吉川中佐は戦勝組に担ぎ上げられ、その最高幹部と見なされていた。

戦勝組の血気の青年らの手によって、脇山大佐、野村忠三郎氏その他の方々が悲惨な死を遂げられたことを思い出す。

吉川さんはその後、僧姿となって毎日脇山大佐の霊を弔われていたと聞く。そして数年後に亡くなられた。

吉川さんのお息女二人は、ある日私の所へ来られ、長年愛用されていた大鼓を渡され、「父はこれを鈴木さんに贈り、私と思って使って下さいと申されました」とのことである。

現在、私たちの用いている小鼓は認識派脇山大佐の形見であ

り、大鼓は戦勝組吉川中佐の形見であること、この世の不思議の一つである。

６０年１月、戦後初の伯謡会例大会

一九六〇年一月三十日、戦後第一回の伯謡会例大会が木の香匂うイビラプエーラ公園内の新らしい日本館で開かれた。この会は戦後日本から来られた方々＝宮下衛夫妻、秋田金三郎さんのほか、当時総領事館の農林関係の住吉勇三領事など＝と計り開催したものであった。

日本館はお承知のように戦後の混沌としたコロニア社会を融和し、また、サンパウロ市創設四百年を記念した祭典への日系コロニアからの贈物であった。ブラジル日本文化協会なども、この祭典をきっかけで出来上がったわけである。

ルア・ダ・リベルダーデの小さな文化協会の会議室で私たち数人で戦後の伯謡会の練習をしたものである。藤井卓治事務局長、安達事務員なども時々、私たちと一緒に声を出したことを思い出す。

旧大正小学校が文化協会の事務所となり、こゝが観世、宝生両派の練習場となった。

では、第一回伯謡会例大会（戦後）の番組を見てみよう（午後二時開始）。

曲目は、竹生島、羽衣、熊野、鉢の木、三井寺などが見える。

参会者は、

宝生流　赤間みちえ、鈴木威、同英子、小栗未亡人、宮下衛、同治子、リカルド・ゴンサルヴェス、笠原博夫

観世流　堀禄吉、住吉勇三、石川忠三、山口兵三、木原知三郎、角田幸一郎、吉田門蔵、米沢伊三郎、高草木伊達、宮野義雄、桜井米三郎、高村栓太郎などの諸氏



ナショナル・クラブでの能「羽衣」、天・は鈴木英子、笛は出口（七〇年十月七日）

このほか、木村義臣（パウリスタ新聞編集長）の名も見えている。

第一回の伯謡会例大会開催の模様を、住吉勇三領事が日本の農林機関誌に寄稿された文が送られて来たので紹介する。

伯謡会と私

住吉勇三

またまたブラジルの話で恐縮です。

私が農業土木の代表として戦後初めて海外に駐在するようになりましたのは昭和三十四年（一九五九）で、もう二十五年も昔のこととなりました。

赴任の前、我々農林観世会の仲間で当時農地課におられた石原治良氏（現在・全拓連）が、丁度アメリカ出張から帰られて「住吉君芸は身を助けるよ」と、次のことを教えてくれました。

当時はまだ海外出張は珍らしく四発のプロペラ機でしたので、物すごい騒音がしました。

石原さんは旅のつれずれに謡いをうなっていたところ、奇しくも隣席の日系人が同好の士で親しくなり意気投合しました。おかげでアメリカ滞在中は、日系の同好者からひっぱりだこで、謡曲を謡いながら御馳走攻めに会ったとのことでした。

当時のこととて〃御馳走攻め〃に大きな魅力を感じたので

しょう。私も早速謡曲の本と扇、それに見台、紋付はかま等一式を赴任荷物に積め込みました。

サンパウロ総領事館には、農林省から初めての勤務でしたので、マンション探しから家具、寝具、炊事道具など生活環境の整備で、またたく間に月日は流れ去りました。

ようやく我に戻って、ブラジルの謡曲界？のことを調べましたところ、愛好者は相当おるらしいが、集りとしては宝生流の方が四、五人集っておられることが判りました。

早速お訪ねしましたところ鈴木威氏といわれるマッケンジー大学の建築の教授でした。



在ブラジル・伯謡会大会
会員は80名になり，観世が殆んどで，宝生が7，8名です。ブラジル人1名と二世の人も少しおります。毎週土曜日に20名位で稽古をしております。

鈴木威氏という方は中学生で移住され、独学でサンパウロ大学で建築士となられた日系第一号の方で、御尊父が著名な文学者で、さらに不思議なことに実兄の寿氏が昭和二年（一九二七）

東大卒で、埼玉県庁（先般亡くなられました）の技監をして居られた農業土木仲間ということで、とたんに百年の知己のようになりました。

ブラジルにきて「宝生流も観世流もないから一しよにやろう」ということで、しばらくは通ってみました。

しかし農林観世会の一員で立派な先生に師事していたという〃教養とプライド〃が邪魔してどうも流派がちがってはしっくり行きません。

埋もれた同好者を広く掘り出してみようということで、領事館の威光で三大邦字新開に広告を出してもらいました。

「日伯文化交流の一環として、日本の古典〃謡曲〃を愛好する者は、×月×日午前×時〃日本館〃、に来れ

サンパウロ総領事館　住吉領事」

さて当日は早朝から日本館におもむき、紋付はかまに身を正し受付台で待期しました。

〃小さな新聞広告が目に入るだろうか？〃

〃果してアメリカ移住者のように、ブラジルにも沢山おられるだろうか？〃

〃今日は何人位来られるだろうか？

〃全く「雲をつかむような気持ち」とはこのようなことを言うのでしょう。

初めての方が来られた時の感激！

夢中で住所、氏名、流派など書いてもらいました。

やがて定刻が近ずくにつれ、意外や意外！陸続と後を断たないではありませんか。

戦争中の抑留生活、敗戦国民という汚名。

それに勝組敗組の日系コロニア同志の相剋。

長年の逆境で目本文化に渇望した蟻が「謡曲」という砂糖に群がってきたのかも知れません。

百二十名位と記憶していますが、百名を越えたことは間違いありません。

小脇に抱えた風呂敷包みには、戦中戦後を宝物のように持ち歩いた ― 茶黄に変色し、雨水のシミがつき、虫喰いになった謡曲本が十冊、二十冊と骨とう品のように包まれていました。この一冊一冊には、血と汗でつづられた〝移民の歴史〟が克明に刻み込まれているようでした。

兎も角その日は鈴木氏や私などの謡曲を聞いていただき、これから毎週土曜日の午後、日本館に集って稽古をすることにしました。

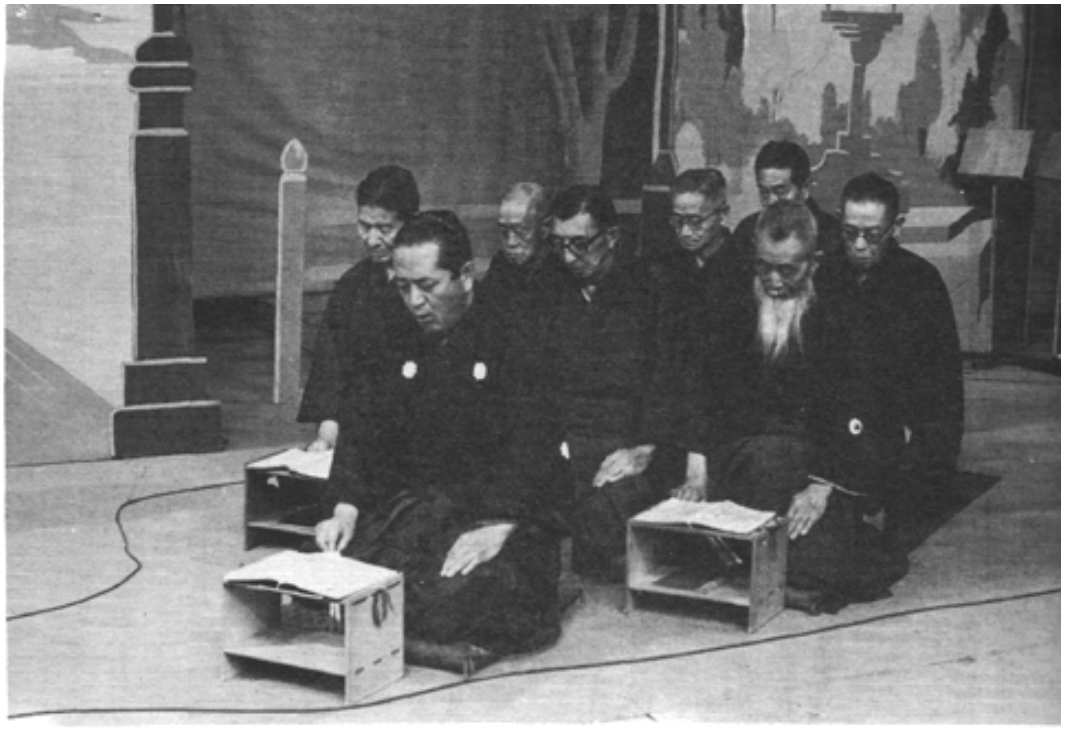
さて集まってみますと、観世、宝生、喜多、金剛と流派の違いは当然ながら、同じ流派でも各人各様全くの我流でとても同吟するような代物ではないのです。

しかも苦労人の一徹さで「わしの先生はこうだった」、「わしはこう習った」となかなかゆずらないので、文字どおりの烏合

の衆で全く無茶苦茶で手の付けようがありません。

止むなく一策を案じ、次回からは私の持参した家元のレコードを先ず聞くことにしました。もともと謡曲の心得があり、同好の方々ですので、二ケ月、三ケ月経つうちにだんだんとレコードに矯正されて統一されてきました。

それからは皆様の熱心さに追い回されて、私もゴルフ、マージャンどころでなく、帰国まで、欠かさずに出席させられました。



大口総領事（前列中央）と伯謡会々員は一九七一年八月七日、サンパウロのTV・BANDEIRANTESの特別番組に出演した

ブラジル人の親日家の会員も二人きました。

稽古を重ねる中に、だんだんと上達もし、またよく揃うようになりましたので、春夏秋冬と年四回は観世流・宝生流合同で、別会を催すことになりました。

前のほうの写真は日本館における別会のスナップですが、見台は私の持参したのをまねて作りましたので、両側に三日月とひょうたんの刻模様が入っております。

帰国しましてから後も、別会のプログラムと写真などを送っていただいていましたのでおそらく現在も相変らずに〃伯謡会〃の集いはつづいていることでしょう。

さてそれから八年後の昭和四十六年（一九七一）、私はリベイラ河流域農業開発調査団の団長として、再びブラジルの土を踏み機会に恵まれました。この時の感激は生涯忘れることができません。嬉しくてなつかしくて出発の前は毎晩ブラジルの夢を見ておちおち寝られないほどでした。

夢に見たサンパウロ郊外のコンゴニャス空港に到着しますと、何百人という出迎人で大混雑です。〃誰かえらい人が同乗しておられたのだろう〃と通関入国手続きをすまして、出てみると、その出迎人の大半が我々のためと知って、ビックリ仰天しました。

オ・エスタード新聞記者のインタービュー総領事館、各県人

会の方々へ挨拶などを済ませた後、〃伯謡会〃　の仲間と再会しましたが中でも八十を越えたTさんから「住吉さん、生きておったからまた逢えたね」の一言は、心臓に突きささったような感激を憶え、未だに鼓膜にハッキリとこびりついています。

当時サンパウロの総領事をしておられた大口信夫氏（現在、ブラジル大使）が宝生流の仲間でしたので、ブラジル滞在中の唯一の日曜日は、早朝から夜中まで大いに謡い、大いに語り、大いに飲みと楽しく過ごしました。

（原文のまま）

（赤間みちえ先生は、皆さんご存知の学院長で現在市内ビラ・マリアナ区に立派な学園を持たれ、何千人かの子女教育に当っておられる方。高草木伊達氏は、リオでプラント協会代表の方。宮下衛氏ご夫妻は、ジェトロ代表の方で、ご息女の英子さんは日本で宝生流宗家入門で活躍されていた方。米沢さんは鐘紡工場の主任技師。桜井米三郎氏は、ジャチク電気工業社長であられた方。山下量香氏は、電気医療器で大きな店を持っておられた方でその店が一時宝生流の練習場となっていた。

リカルド君は伯人だが、日本語は立派なもので橋弁慶、羽衣など無本で謡う程の熱心な青年。現在は仏教を専修し日本へも留学、当地のサンパウロ大学哲学部教授となっている）。

伯人間に「能」の研究広まる

第二回例大会は第一回と異り、午前九時からの盛り沢山の番組であった。六〇年五月一日、日本館で催された。

素謡（宝）鶴　亀　菊地鉄弥　松田徳太郎
〃（観）経　政　佐藤雄二郎　桜井邦雄
独吟（宝）鉢の木　R・ゴンサルヴエス
〃（観）弱法師　石川忠三
素謡（宝）紅葉狩　宮下治子　鈴木英子　秋田金三郎
素謡（観）天　鼓　片桐和助　石川忠三
独吟（宝）八　島　秋田金三郎
仕舞（観）鉄　輪　堀星桜
素謡（観）嵐　山　桜井米三郎　堀星桜
〃（宝）胡　蝶　宮下衛　秋田金三郎
独吟（観）蝉　丸　山口兵蔵
仕舞（宝）熊　野　宮下治子
素謡（観）小袖曽我　田中吉一　小原友三郎　山口兵蔵
連吟（宝）松　風　鈴木威　秋田銀三郎
独吟（観）芦　刈　片桐和助
〃　夜討曽我　小泉友三郎

素謡（宝）葵の上　宮下治子　秋田金三郎　鈴木威　宮下衛

この会の来会者は、芳名録によると次の諸氏。

石川孝三、堀清文、田中清子、下平尾数行、花田花、長谷川清、大沢武平。

これらの会と前後して、ブラジル人の間に「能」に関する研究が盛となり、私たち伯謡会として諸処で謡会を催し、仕舞、囃子などを演じてこれに応じた。サントス市技師協会で「日本古典の夕」が持たれ、次の番組で参加した。約二百名位の観衆で大盛会であった

一　能楽の解説（ポ語）　鈴木英子

二　松　風（連吟）　鈴木威　間宮逸雄

三　田　村（仕舞）　鈴木威

四　葵の上（能、抜萃）鈴木威　住吉勇三

なお地謡には、小林俊行、松田徳太郎、菊地鉄弥、平源、石火矢俊秀、山下量香ら。

また、サンベルナルド・ド・カンポの神学校での「世界芸術の夕」なるものにも参加した（ブラジル日本文化普及会の後援）。

一　仕　舞　鈴木威

二　素謡　羽　衣

出演者は、鈴木威、大塚順、菊地鉄弥、間宮逸雄、松田徳太郎、小林俊行、石火矢俊秀、平源、山口正司らの諸氏であった。

さらに、サンパウロ美術館の申込みで演能二回、その他サンパウロ大学のために数回の演能もなされている。

一九六九年頃、サンパウロ総領事館に浅山竜男領事が着任した。同領事は喜多流の仕舞に造詣深い方で、私などは宝生流の謡でお付合いしたものだ。日本館でシネマやテレビを撮影し、広くサンパウロで放送されたものである。市立劇場にも数回出演、日伯の文化交、流に役立ったことを喜ぶものである。

浅山領事とお付合いするうちに、新しく大に大きな活力を入れられた。大口総領事は日本で宝生流で有名な武田光雲師につかれた方。ご在任中は私たちの催しに何処へでも出られた。テレビに出演数回、ナショナル・クラブの演能と、観世、宝生を問わず色々と面倒を見られ、ご在任中は欠かさず三か月毎の伯謡会の例大会に出られていた。

同総領事はご在任中、テロ団の拉致（らち）事件があり、私たちにとって非常な心配ごとであったが、一週間位の監禁の後、無事に帰還されたのは本当に喜ばしいことであった。小さな窓もない一軒屋の一室で毎日うたいを謡って楽しく過ごされたこと、テロの連中に日本の政治、文化のことを話し、毎日フェジョアーダを食べていたとのお話。今になってみれば、面白い思い出話である。

大口さんの総領事時代、日本から大本教々主の出口京太郎氏が来聖した。世界エスペラント連盟の大会の出席を兼ね、文化

協会で森田流の「序の舞」の笛の独奏があった。同氏が滞在中、当市のナショナル・クラブで「世界芸能祭」があり、私たち伯謡会も協力、大口総領事、出口京太郎氏を加えて出演、「羽衣」と「舟弁慶」を出した（七〇年十月七日のことであった）。

能　羽衣　シテ鈴木英子　ワキ鈴木威
地謡＝大口信夫　外宝生流

一同

囃子　舟弁慶　シテ大口信夫　地謡＝同上
大鼓＝鈴木威　小鼓＝鈴木英子　笛＝出口京太郎

一九八二年、大本教の金剛流を主とした能楽団が来伯、ブラジリアで演能した。

日本文化紹介の一端を担う

伯謡会はその後、日本文化協会の毎年の芸能祭には特別番組として大会劈頭に祝言と囃子でご協力し、来年（八五）でもう二十回位出演している。それから毎年の春の靖国神社祭の奉祝として演能協力し、コロニアの最古典芸能としてお付合いしている。今後も日伯文化交流のほかに、日日文化交流としてお手伝いをさせていただくつもりである。

それから忘れてならないことは、私たちの宝生流とは別に、観世流で第一回からお参加の桜井米三郎氏。本年（八四）は八十

五才となられるが、後進のため今日までよくつとめられていること、頭が下がる思いがする。

次は田中吉一さん。同氏は第二回からの参加者、スザノ、モジ地方でお弟子さんをとられ今日まで来られている。梅若系の先生につかれたとのこと、よいお弟子があとから、あとからと参加されること、嬉しいことである。

第五十回前後（七二、三年頃）から参加されている吉田昇氏は、日本で当時観世流の中座であった観世寿夫氏と同窓の方。観世の方方には非常に良い存在であり、未だお若い方であるから、今後の同流発展のため貴重な方であると思う。



能「葵の上」、中央鬼女（鈴木英子）、横川の小聖（藤井清一）その他。一九七二年十月八日、文協サロン

六五、六年頃から参加された蓑毛龍介ご夫妻、謡曲の進境最たるものあり。夫君は在日中、私の父につかれたとのこと、非常な関心を持ってお付合いしたものである。お夫婦とも囃子の研究に熱心であり、特に夫君の大鼓は目を見張るものがあった。一寸としたつまらぬ誤解のため一時欠席されているが、第百回を期に再び参加されることを希望するものである。

和田隆司君も同じ頃入会、戦前の流友、川名勝太郎氏のお息女と結婚されている大橋憲太郎氏のお聟さん。大鼓の研究で非常な進歩振りを見せている方。

藤井清一氏お夫妻も六七、八年頃からの入会。今日まで毎週の練習に一回も欠かさずの精進振りの方、お囃子謡にいつもお協力。藤井、大橋、和田の諸氏は私たちの囃子謡に欠くことの出来ぬ存在である。

囃子謡のことが出ているが、伯謡会はサンパウロ美術館、ナショナル・クラブのほか、色々の所でブラジル人を対象に出演している。

先ず第一に挙げねばならぬことは、大口総領事ご在任中、各国領事団の組織する会合に協力、サンパウロ文化局講堂で出演、非常な好評であった。大口総領事がシテで、多分「舟弁慶」を出したと思う。

サンパウロ・ライオンズ・クラブでの演能を初めとし、サン・ジョゼー・ドス・カンポスの航空大学での演能（羽衣）、アシス

市文理大学での能の解説に次ぐ「羽衣」の演能と日本文化紹介にいくらかでもお役にたっていることに生き甲斐を持つものである。

七四年八月十日、宝生流宗家の中堅能楽師本間英孝氏を招聘、約一週間にわたって当地の愛好者諸氏の指導をされた。同氏は小生宅で起居され、毎日、能の型を私と息女に教えられた。吉川順治氏に三十年前に指導を受けた時以上の毎日であった。私たちの謡曲は日本でさえも、なかなか在り得ない正確なものであると言われ、本当に感激したものだ。今後ともますます精進、研究を誓った。それから二年後、家内及び息女を母国へ送り、能楽界を深く見聞させることにした。本間氏はじめ、大口総領事、浅山領事らのご協力は非常に有難いものであった。

七七年八月二十日、リオ州ペトロポリス市にてソ・ラマ会の招待で、サンタ・セシリア劇場にて上演、数百人の観衆を前にしての演能であった。番組は次のとおり。

一　仕舞　田村　鈴木威　地謡＝蓑毛龍介　藤井清一和田隆司　大橋憲太郎　山下量加　田中梅二　川口九市

二　居囃子　山姥　シテ鈴木威　地謡＝藤井清一　和田隆司　大橋憲太郎　田中梅二　川口九市

三　能　羽衣　シテ鈴木英子　ワキ鈴木威　地謡＝藤井清一　大橋憲太郎　田中梅二　川口九市　大鼓＝蓑毛龍介　小鼓＝同勇子　笛＝山下量加　後見＝藤井みき子

なお、矢島新一郎、同貞、高世虎雄、山下譲二の四氏は都合で欠席。

謡曲は老後の趣味として最高

一九七八年はブラジル日本移民七十年祭であり、皇太子ご夫妻がご来伯、全コロニアあげての祝典がその六月十八日、パカエンブー競技場で催された。小生、その祭典の施設委員長であったため、時を同じくして来伯した本間英孝氏を主とした宝生能楽団の当地演能にご協力出来なかったこと、私の最も遺憾とするところである。二日間にわたる市立劇場の演能を座席の一端で参観し、観能の本当の仕来りを知らぬ人々の劇中の拍手をじっと聞いていたものである。本間英孝、三川泉両師を囲んで私たち家族と、藤井夫妻、大橋、和田氏らと、ささやかな慰労の宴をしてあげたことがせめてもの心やすめであった。

サンパウロご在任三、四年して帰国された大口信夫氏は、その後ポルトガル及びサウジアラビアの大使としてご赴任になった。

サウジアラビアからのお手紙を受取った。

日本商社の駐在員が何百人も来ているが、謡曲をやる人が一人もいない。ブラジルが懐かしい。毎日、謡曲本を出して謡ったり、レコードを聞いている。何百人の日本人は酒も飲んでいけない。シネマも無い、皆無聊に悩んでいるが、私はただ一人

ではあるが皆とは異なった生き甲斐を感じる―とのお手紙であった。

その後、大口さんはブラジル大使として当地へ来られ、毎回の例大会には、はるばるブラジリアからご出聖、年四回の伯謡会に出席され、そしてこの二年程前にご帰国なされた。時々のお手紙があるが、最近のお手紙で、『私は昨年五月、四十余年勤めた外務省を退官し、この夏から二つの会社の顧問をしております。毎日出勤する必要はないので余暇を趣味の生活で大いに楽しんでおります。外務省の仲間の中には退官後無聊に苦んでいる者が少くないようですが、その点、趣味を持ち合せていることは幸福だと、つくづく思っています』とあった。

謡曲は老後の趣味の中で最も良い楽しみであること、大口さんのお手紙にあるとおり。

毎回、伯謡会例大会にご出席の年寄りの方々と顔を合せ、ともに励し合うのではあるが、時々思い出すことがある。

一九三六年、カーザ東山が当地に於て初めて清酒「東麒麟」を発売し、その披露会をリベルダーデ街の日本クラブで催した。その会の盛上がりの最高が日本古典の長唄の一席で池辺乙人名人の門下生一同の出演。高岡、蜂谷、後藤、杉本といった当時在留邦人の有名人ばかり、内畠夫人の弾く三味線で大サロン満員の客を前の大舞台であった。演題は「鞍馬天狗」と「勧進帳」。私も少し日本で長唄もかじり、「鞍馬天狗」や「勧進帳」は謡曲

から採ったもので良く知っていたから、面白く拝聴した。

あれからもう五十年近くなる。世の中がすっかり変り、当時この方面で活躍された最後の人、蜂谷さんも一昨年亡くなられ、コロニアの古典、長唄を謡う方が無くなった。

謡曲も長唄に先立つこと数世紀の古典、ローソクの火のように消えてしまったコロニアの長唄界を見て少しばかり考えさせられる。

当地の文化協会は毎年移民祭を祝って、コロニア芸能祭を催している。二、三年前に亡くなったニテロイ映画館主の田中義数さんは、文協の理事としてこの芸能委員長をしておられた（現委員長は水本毅さん）。私たちの伯謡会の宝生流はもう二十年近く能楽の囃子をもって芸能祭の第一陣を受承わっている。民謡、浪曲、団舞、詩吟、ジャズ、舞踊などと交じってのお付合いである。これは日本では考えられないことであるが、わが国の古典芸能の紹介の意味で出演さしてもらっているわけだ。

彼、田中氏曰く『鈴木さん、あなたはその古い日本古典にかじりついて今日まで来られているのに感心しますが、いつまでこれが続きますかね、長唄、常磐津などもうコロニアから消えています。伯謡会も先が見えていますね』と。本当に心配なことである。皆が年をとって謡う人が少くなることは自然であるが、つまらぬことを言ってモンチャクを起こしたり、それに同調したりしてことを荒立て

り宝生流の普及発展に尽力貢献された功績は極めて大きくここに深く感謝の意を表します

一九七五年九月

また、一九七九年に、宝生流の免状が大口大使を通じて送られて来た。

免　状

宝生宗家

此度当流指導を嘱託致します
依て一層の御研鑽御精進を希望します

昭和五十四年十二月

十八世宗家
宝生　英雄

鈴木　威殿

（一九八四年十二月記）

第6部

音楽

〝しじま〟に人生を聴く日本

〔音　楽〕　人が生きる環境に無限に存在する音。その音への知覚を各民族で磨きあげたのが〝音楽〟です。音の構築に文化による違いはあっても、耳へ響くのは民族の息づきそのものです。しかも風土の相違が独特な味わいとなり音楽に結晶しているからこそ、国境を越え人を魅きつけるのでしょう。

風土が磨く音の素顔…

音の素顔は風土で様々に異なります。その音は〝聴く〟という行為で生活と強く結びついています。たとえば中央アジアの牧畜民族は砂嵐の音で移動を決め、スリランカの森林地帯に生きる狩猟民族は枝の折れる音で動物を判断したことからも分か

ります。

このように環境からの音の知覚には風土独特の生き抜く知恵の反映がみられる反面、環境の変化は音色にも表われます。一般的に気候の温暖な東アジアなどの温潤地帯では、まるく柔らかな音を好み、アフリカや中東などの乾燥地帯では、かすれた音が親しまれています。

いずれにしても音は自然条件を基盤にしながら一定の基準で選ばれています。こうして長い年月を経て風土に磨かれた音は民族の共通の嗜好となり、儀礼や芸能に幅広く組み入れられ、言語をともない歌謡を生み、舞踊を発達させました。

民族の喜怒哀楽を映す多彩な響きは、一層の洗練を経て民族の心そのものを表現する音楽へと昇華され、今日まで受け継がれてきたのでしょう。

〃リズム〃に感性を刻む西洋

西洋のリズムと日本の間（ま）：

風土は音とともにリズムも生みます。その基礎は自然の運行や言語、労働、さらに思考形態とも広くかかわっています。ヨーロッパ音楽が理論化された拍節的リズム感をもっているのは、古代ギリシアの思想にその遠因がうかがえます。これは〃万物は数〃と説いたピタゴラスが音楽を〃学問〃（まてまた）の

一つに挙げ、音にも数学的要素を求めた事実からも分かります。

また、リズムの語源であるギリシア語の〝流れ〟を最もよく示しているのが舞踊です。

跳びはねて踊るのが西アジアやヨーロッパの牧畜民族、足裏をつけて舞うのが東アジアの稲作民族、そして水平に揺れるのがポリネシアやメラネシアなどの海洋民族です。

〝踊り〟が強弱を、〝舞い〟が前後を、〝揺れ〟が水平を重視している点をみるとき、風土とリズムとの接点が、明確になってきます。とくに牧畜民族が草原を騎馬で疾走する動きから速いリズムが生まれてきました。

一方、前進、後退の二拍子で耕作する稲作民族にとって重要なのは、手足をゆるやかに運ぶリズムでした。この対照的な相違は〝休止〟の概念にみられます。西洋のそれは次なる音を発生させるきっかけであり、いわば〝動的な休止〟です。日本の場合は〝間〟です。

これは音を節約し緊張をはりつめさせる無音の時、つまり〝静〟〝即〟しじま〟という点に日本独特の音への感性がみられます。

人工の音、自然の音…

間（ま）とともにヒラヒラ、ソヨソヨという自然の音などの

非楽音へ深い愛着を示すのが、日本の音の特徴です。それは演奏にも表われ〝尺八は音の禅〟という言葉に凝縮されています。一方、ヨーロッパの音楽は理論体系を整え、半音を基本単位にし記譜法を駆使し、音を客観的に追求してきました。

その一端はピアノの白鍵と黒鍵の関係に明瞭です。さらに西洋の声楽にソプラノ、アルトと決ったパートがあるのに対し、邦楽では高い声（甲＝かん）も低い声（呂＝ろ）も一人で発声します。音色の嗜好も西洋では透明な響きを尊ぶ一方、日本ではシブ味やサビのある声など非楽音を珍重します。

その典型は三味線の一の糸が発する〝さわり〟という濁った音にみられます。こうした非楽音への嗜好はインドの古典音楽やアフガニスタンの民俗楽器の奏法にも顕著です。こうした姿勢は、自然との合一を求める心情に他なりません。現在、クラシックやモダンなど多彩な音楽に囲まれていますが、鐘や水音の余韻に人生さえ感じているのが私たち日本人ではないでしょうか。

（日本アイ・ビー・エム㈱発行「心とかたち・東西南北」から転載。監修・国立民族学博物館教授　藤井知昭）

コロニアにおける
クラシック音楽の流れ

山川　健一　（山川健一音楽教室）

称賛したい先人の偉業

クラシック音楽のコロニアにおける動向といえば、やはり戦後に始まるといっても過言ではないと思う。戦前にも何人かの人々が音楽活動をしてはいたもののクラシック音楽の普及とか芸術的な高揚を目的としたというより、ともかく楽器を演奏して音楽をするということに精いっぱいであったろう。まず、音を出すところから始めているのだから当然のことだろう。

しかし、そのような状態にあったにせよ、開拓の苦労をしながら若者に楽器を教え音楽を奏したというのはとても大変なことでありコロニア音楽界にとっては素晴しいことであった。

子弟の情操教育に歌劇団

一九三〇年ころの日本は不況の波が押し寄せ、日本の将来に不安を感じた人達の多くが海外雄飛を考えるようになった。そして都市労働者や高等教育を受けた人達も渡航して来るようになった。このころの日本は市民文化が大いに繁栄しており、マンドリン合奏や浅草オペラの全盛期であった。そういう知識を

持った人達がブラジル各地の学校の先生になったり、文化的指導者となって歌や音楽を教え始めた。

戸山音楽学校軍楽隊でピストン（トランペット）を専攻、ロシアにオペラの勉強に行ったことのある小林勝喜知（一八九四年生まれ）は一九二六年モジアナ線のサン・シモン耕地へ入植、二八年にマリリア近くのサン・マヌエル耕地へ移ってから、子供達に日本語を教えなくては…、また、情操に役立たせる何かを…と考え、専門の音楽（歌）を教え始めた。子供達も非常に興味を示したので小林も張りが出て熱心に歌や踊りを教え始め、音楽劇を作って伴奏用にハーモニカを教えた。一種の歌劇団が出来上がったのであった。



小林歌劇団（1946年）

三〇年五月三十日、城間善吉の肝入りで、マリリアで公演を行ったところ、聖州新報の香山六郎が来合せ、バウルーに呼んでくれた。

ここでは浜口領事が感動して巡回公演を応援することになり、八月にリンス、アリアンサ、ゴヤンベー、プロミッソン、アラサツーハなどを巡演して大反響を起こした。三一年、中西周甫、揮旗深志などにすすめられサンパウロ、サントスなどで発表した。当時の名称は明星児童歌劇団。

その後、伴奏していたハーモニカの数も増え、また戦時中の四三年ころにはバイオリンを弾く者も出て来てバイオリン、ハーモニカ、ギター、アコーデォンなどのバンドが出来た。それが戦後の四六年には管楽器も加わり、リラ・オリエンタル楽団に発展した。池松、川口、芝、林、島、大谷、野中、橋富など十四～五名でマーチを得意としていた。

本格的編成のマンドリン合奏団

また、ゴヤンベーには一九二九年に鎌倉丸で渡伯した亀井哲夫（一九〇二年生まれ）が入植していた。彼は中学時代に熊本でタケイ・マンドリン合奏団の指導者、武井についてマンドリンを学び音楽に熱中していた。

それで、三〇年の正月の植民地の演奏会で腕前を披露、これ

をきっかけに青年達にマンドリンやギターを教え、マンドリン合奏団を作った。

メンバーは第一マンドリン＝亀井亘、広瀬正美、阿部寛一、古本利雄、杉本金夫、第二マンドリン＝三宅淳、川島昇、小西賢一、川崎三郎、亀井周一、ギター＝亀井祐次、徳納盛通、打楽器＝桜井嘉門―という編成でソチエタ・マンドリニスチカ・ゴヤンベーと名付け亀井が指揮、一年半の猛練習の後、三一年十月二十五日、リンスのシネ・オデオンで演奏会を行った。

この合奏団は本格的な編成であったが、残念なことにこの後



リラ・オリエンタル楽団のメンバー。向って右から小林勝喜知、林、池松、川口、芝、久保、府内、大谷、岩本、野中さんら（一九四六年）

は演奏会をやることがなかった。亀井がプロミッソンに移ってからは続けられず、メンバーも各地へ散ってしまった。

イグアツペに童夢クラブ

ちょうど同じころ、一九一三年から海興（海外興業株式会社の略）によって拓植されていた南聖海岸地帯のイグアッペ植民地に同志社大学を予科二年で中退しブラジルに来てアヅベンチスタ神学校で二年間学んでいた青年の松村俊明が、セッテ・バーラスの学校の先生としてやって来た。三二年のことである。

松村はそこで日本語とポ語を教えるとともに、同志社グリークラブで習っていたマンドリンを使って音楽を教え始めた。ここでも学校を中心に歌とマンドリン、ハーモニカ、ギター、バイオリンなどによる合奏団が出来上がっていった。

そして一年後には、池森春三、池森力、寺坂みのる、坂本武男、一色勉、松田政子、井上ゆきえ、寺坂みよ子、一色敏子など二十名ほどのメンバーによる「童夢クラブ」が結成された。

三五、六年には三十名を越えるメンバーとなっており、レジストロや近くのフェスタでは大歓迎を受けて演奏していた。

三九年、海興サンパウロ支店長・宮腰千葉太の全面的な援助でサンパウロ公演が行われた。五月五日、リラ・クラブ（現在の文協横隣の兵営）で入場料は五ミル。純益は傷病兵輸送機に献金された。この演奏会は伯字紙（コレイオ・パウリスターノ、

ジアリオ・ダ・ノイテ、フォーリャ・デ・サンパウロ）にも取り上げられ大成功であった。また、翌六日はコチア産組会館（二時）および大正小学校（七時）で無料公演、さらに夜十時五十分からはラジオ・ツピーで放送された。



一九三三年、発足当時の童夢クラブのメンバー。前列中央が松村俊明

こうして大成功を収めた童夢クラブも植民者の退植とともに衰退期を迎え、四一年には学校も閉鎖。しかたなく松村はクラブのメンバー七名とともに元海興牧場跡に「養正塾」を創立、塾を中心としてレジストロ植民地や桂植民地にまで足を伸ばし、日本語と音楽を教えた。これは五七年まで続いた。

エメボイ実習場でも音楽活動

いま一つ、サンパウロ近郊のエメボイ（現在のエンブ市）に海興のエメボイ実習場が一九三一年に開設され、その年の九月末には日本から三十四名の実習生が入り活動を始めたが、このなかにも音楽を愛するものがいた。

北海道帝大（札幌）出の井上哲郎は多芸多才でハーモニカ・バンドを編成、自ら指揮した。メンバーは豊田慶策を始め十数名



童夢クラブ員、リラ・クラブでの演奏会後の記念撮影

で、三二年六月二十六日の公式開場式では「カルメン」「オルフォイス」「ダニューブの漣」その他を演奏している。また、バイレの折には特別プログラムとして、ハーモニカ・バンドの演奏も行ったという。

第一期生の部長は保坂進司、第二期生は鈴木陸俶、第三期生は橘田昌利であった。三三年八月末に丸山昌彦が着伯、三四年より指揮をとった。ただ、このグループは場内における演奏が主であり、外部での演奏は行われなかった。

（注、エメボイ実習場史と渚七三年号による）。

合唱を通じて音楽にアプローチ

いままでとは異ったグループが結成された。ブラ拓商事の倉敷、宮地、泉田の三人が中心となり、加藤好之の後援を受けてブラ拓や各商社の人たちとともに創った「エオリアン・クラブ」がそれである。合唱を通じて音楽に直接アプローチしていく最初のグループであった。それだけに、当時の一般のコロニアとはやや遊離した感じであったことは否めない。

主なメンバーは、加藤（愛子）、伊藤（宮子）、金城、山田、高岡（以上女声）、宮地、泉田、加藤（清）、渡辺、竹内、山村、坂田、藤村など、約三十名の混声合唱団で指揮は倉敷達弥であっ

た。第一回の演奏会はリラ・クラブで三九年十二月四日に行われ、第二回も同所で翌四〇年十二月八日に行われた。しかし、四一年第二次世界大戦になると同時に社会情勢を考え中断された。

戦後の同クラブは、五三年ＯＳＫ（大阪商船）の赤坂が着任したことから始まる。赤坂は神戸大学グリーのキャプテンであった関係から「エオリアン・クラブ」再興の話が出て再び加藤好之の後援を得て、旧メンバー加藤兄妹、坂田などに坂口、島田、古屋その他を加えて練習を始めた。同年七月二十三日のシネ・ニテロイのイナウグラソンに出場している。五六年ころまで続いていたようだが、自主公演は無かった。



エオリアン・クラブ、シネ・ニテロイで演奏

３０年代後半に活躍した人々

その他、個人としては一九三〇年代後半にサンパウロに東京音楽学校（後の東京芸大）を出た菊地弥四郎がいたが、数名の生徒を教えたのみであまり公的な活動はなかったようである。

また、レジストロの童夢クラブがリラ・クラブで演奏会を行った際に協演した人々にピアノの中野美英子、伊藤宮子、ギターの宮腰由子の名が見える。

このころから幼くして移住して来た人々やブラジル生まれの人々の中からも音楽を学ぶ人が現われて来る。ようやく音楽芸術を学ぼうという気運が芽生えて来たのである。勿論先生はヨーロッパ系ブラジル人であった。そして、四一年からの第二次世界大戦に入ってからは、あまり大きな進展を見ないまゝ戦後のコロニアの混乱期に入って行く。彼らにとっては勉学に励む期間となった。

流行歌ブームと楽団の誕生

戦後は流行歌が盛んになり、くすぶっていた音楽熱はそちらに向って火を吹き出していた。丸山昌彦の指導するクリスタル楽団、脇山一郎のコンチネンタル楽団、小林勝喜知のリラ・オリエンタル楽団、少し後になって川口辰之助のリンス愛国管弦楽団などがある。

しかし、指導者たちは皆クラシックを志していたため特別に行う演奏会はセミ・クラシックの曲を中心にプログラムが作られている。

例えば、クリスタル楽団の第一回演奏会は四八年三月三日に行われ、「波濤を越えて」「結婚行進曲（メンデルスゾーン）」、「ダニユーブの漣」などがオーケストラで演奏されている。



クリスタル楽団の第一回コンサート。一九四八年三月三日、セントロ・ド・プロフェソラード・パウリスタで、指揮は丸山昌彦

また、五〇年五月二十七、八の二日間にわたって行われたサンパウロ音楽連盟の演奏会（丸山昌彦指揮）は殆んど全曲がクラシック音楽によって占められ、モーツアルトのアイネ・クライネ・ナハトムージクが弦楽四重奏で演奏されている。

戦後の新人群像

戦後数年して、戦時中に勉学にいそしんだ人々の中からオーケストラと協演したりリサイタルを開いたり、オペラに出演する人が現われてきた。ピアノでは伊藤正子、福島めぐみ、歌手では中川俊彦（パウロ森）、田村敏子、今井ジュリーなどで、こ



サンパウロ音楽連盟の第一回演奏会

のうち伊藤正子は前出の伊藤宮子の娘である。


伊藤正子さん

伊藤正子はショパン（ソウザ・リマ指揮）チャイコフスキー（ベラルデイ指揮）などの協奏曲を独奏、リサイタルも行い将来を嘱望され、五〇年にアメリカに留学した。また、福島めぐみもグアルニエリの指導を受けた後、五三年フランスに渡った。中川俊彦の活動も華々しく五〇年にニューヨークに行き一年ほどで帰伯、五五年に再びイタリアへ留学している。

同じ五五年、ソウザ・リマが市立劇場（サンパウロ）のオーケストラを指揮して日本の作品を演奏した　―　ブラジルにおいて日本人の作品が演奏された最辺であろう　―　。


田村敏子さん

今井ジュリーは山田耕作　作のボンノンコール（梵音響流）の独唱者としてバリトンのジョゼー・ダイネゼとともに共演して

いる。(他に箕作秋吉の小交響曲二長調、松平頼則のバストラールが演奏された)。

バイオリンでは福田芳為が五二年ソウザ・リマ指揮のサンパウロ州立交響楽団に入団したのがプロの最初だろう。伊藤正子の妹、直子もバイオリンだったが、姉正子のような華華しい活躍はなかったようだ。

だが、このころのコロニアにはまだこれからの人々の才能を育て花咲かせる力がなかった。

移住再開で音楽界に〝新風〟

一九五三年に移住が再開され、その後の最盛期に移り住んで来た人々の中には音楽の専門教育を受けた人々も何人かおり、また、クラシックの愛好者も多くなっていた。


田村敏子さん


福島みどりさん

こうした人々と準二世、三世の音楽の専門教育を受けた人たちがそれぞれ関わりを持ち五〇年代後半から音楽芸術への道が徐々に開けていった。戦後のピアノ教育の先頭に立った小野寺

七郎は五五年に着伯、多くの生徒を教えている宮田英一は五四年に（一年ほどで一度帰日したが七〇年に再来伯）、室内オーケストラと合唱団を組織した山川健一は五六年に着伯している。そして合唱運動に力を入れた宗像基（牧師）は五八年に着いた。

準二世、二世ではバイオリンの揮旗俊夫、武田寿男が技術をみがいており、また、後のブラジル日本移民五十年祭でコンチェルトを弾いた鈴木英子、ピアノ教育に力を注ぎ、日本で数回にわたりブラジルの曲を演奏、紹介した一色純子（現在・山川）の二人は五六年にコンセルバトーリオ・ドラマチカ・エ・ムジカル・デ・サンパウロを卒業している。少し若い世代では五七、八年に本田清章（ピアノ）と、一色明子（現在・井ノ口、バイオリン）などが演奏会で注目された。

四つの画期的な出来ごと

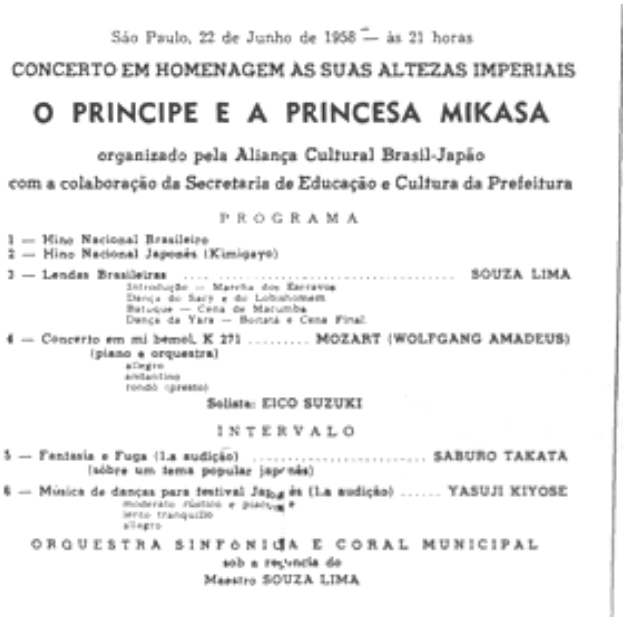
一九五八年にブラジル日本移民五十祭が行われたが、コロニアのクラシック音楽にとって四つの画期的を出来事があった。

第一は、三笠宮来伯記念の音楽会が日伯文化普及会によって市立劇場で催されたその音楽会ではソウザ・リマ指揮の市立劇場オーケストラが高田三郎の「日本民謡による幻想曲とフーガ」、清瀬保二の「日本曲」、また、モーツアルトのピアノ協奏曲第九番を鈴木英子が独奏した。（ただ残念なことに、鈴木英子はその後の音楽界に現われなかった）。

第二は、移民五十年祭のための作詩、作曲の募集。これには五十数編の応募があり実際に作曲らしいものは僅かなものであった。

しかし、入選曲「越えて来た幾山河よ」は、楽譜をレコードになって残った。作詩は丘秋北行路、作曲は小野寺七郎である。

第三は、合唱運動の高まりである。第四がクラシック音楽を専門とするオーケス器楽奏者の出現である。



São Paulo, 22 de Junho de 1958 — às 21 horas

CONCERTO EM HOMENAGEM AS SUAS ALTEZAS IMPERIAIS

O PRINCIPE E A PRINCESA MIKASA

organizado pela Aliança Cultural Brasil-Japão

com a colaboração da Secretaria de Educação e Cultura da Prefeitura

PROGRAMA

1 — Hino Nacional Brasileiro
2 — Hino Nacional Japonês (Kimigayo)
3 — Lendas Brasileiras ..... SOUZA LIMA
Introdução — Marcha dos Escravos
Dança do Sacy e do Lobishomem
Batuque — Cena do Maracatuba
Dança da Yara — Boiadá e Cena Final
4 — Concerto em mi bemol, K 271 ..... MOZART (WOLFGANG AMADEUS)
(piano e orquestra)
allegro
andantino
rondó (presto)
Solista: EICO SUZUKI

INTERVALO

5 — Fantasia e Fuga (1.a audição) ..... SABURO TAKATA
(sôbre um tema popular japonês)
6 — Música de danças para festival Japonês (1.a audição) ..... YASUJI KIYOSE
moderato rustico e pastoral
lento tranquilo
allegro

ORQUESTRA SINFONICA E CORAL MUNICIPAL
sob a regência do
Maestro SOUZA LIMA

合唱により本格的な動き

戦後コロニアの音楽界の本格的な動きは合唱によって幕が上げられたといっても過言ではないだろう。四七年に丸山昌彦によって始められた赤間女学院生徒のコーラスは五十年祭から佐

藤皓一に受けつがれていたが、この移民五十年祭の式典では重要な役割を担った。それが動機になったかのように、五八年後半「あしぶえ合唱団」が山川健一によって（室内オーケストラとともに）創立され、五九年十月十六日に第一回の発表会を行った。

同年には牧師の宗像基による「あすなろ合唱団」が生まれ、六〇年代はこの二つのグループが中心となって合唱の演奏活動が行われた。六〇年四月二十三日にはサンパウロ総合大学医学部講堂（ＡＶ・ＤＲ・アルナルド）において、あすなろ、赤間女学院（サンパウロ女学院）、あしぶえによる合同演奏会が行われた。

また、同年代には小野寺七郎の努力によって多くの日本語学校が情操教育の一端としてコーラスを取入れ、次第に輪が広がっていった。そして、いろいろな合唱団が出来たが、その中で特異なグループとしては小野寺の指導するエスペランサ婦人会があげられよう。

こうして六七年、サンパウロ日本文化協会（現・ブラジル日本文化協会＝以下文協と略す）とブラジル日本語普及会（現在は日伯文化連盟と合体）の共催で合唱祭が初められた。

第一回は同年十月一日で、昼が学校の部（参加校七）、夜が一般の部（参加団体十一）であった。昼の部の最後に山川健一指揮のサンパウロ音楽愛好者協会のオーケストラが「おもちゃの

交響曲」その他を演奏している。以後、毎年文化協会の講堂において多くの合唱団を集めて続けられている。八三年までの全回出場校および団体は、椎の実学園、エスペランサ婦人会、あしぶえ合唱団である。

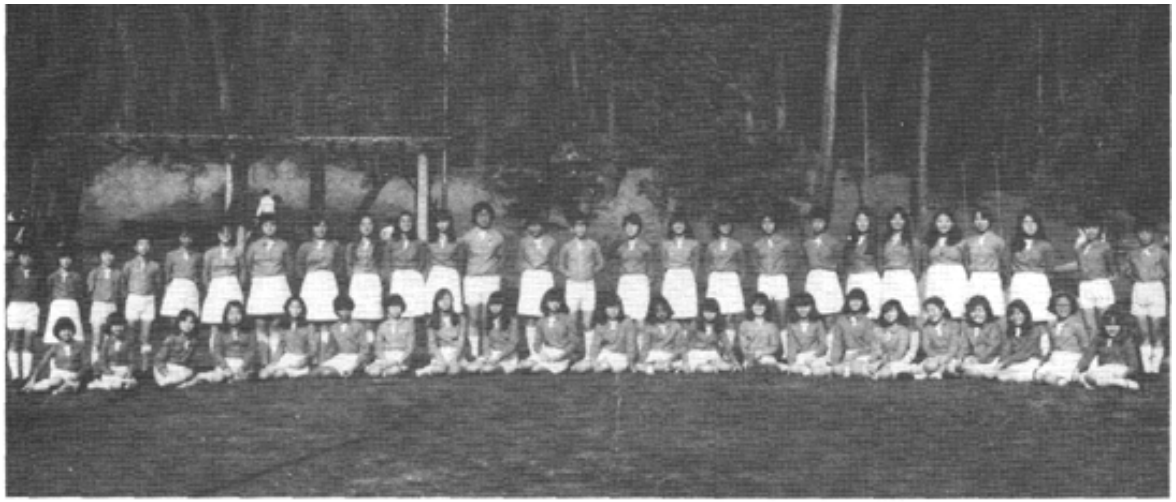
ここで特筆すべきは、この合唱祭で多くの日本の合唱曲が初演されていることである。

例えば「空、道、河」（福井文彦）、「マザーグースより」（林光）などをあすなろが、「白い季節」（石井歓）、「信濃の秋」（小山幸三）、「月光とピエロより」（清水修）などをあしぶえが、「道」（木塚光雄）を椎の実学園、「春夏秋冬」（斉藤六三郎）を松柏学園、「五つの若い愛の歌」（服部公一）をピラチニンガが歌っている。また、小野寺七郎の「サビア」「パイネイラ」、中出良一の「桜貝」「アヴェ・マリア」、山川健一の組曲「おかあさん」など、指揮者自身の作品も演奏されている。

一九六八年、少年少女合唱団のリットル・シンガーズが六五年に着伯した吉田輝男によって創立され、エコー合唱団と名は変ったがブラジルにおける数少ない少年少女合唱団として活躍を続けている。その活動はサンパウロ州にとどまらず、リオ、パラナ、南リオ・グランデ州、ブラジリアの各地に広がっている。六九、七〇、七一年の三回にわたりポルト・アレグレ市におけるパンアメリカン合唱祭に出演したのを初め、七八年にはサンパウロ州における最優秀合唱団として表彰され、八一年には州

立オーケストラとマーラーの交響曲シリーズで協演している。また、市立劇場オーケストラとは八二年にストラビンスキーのミサ曲を生誕百年記念コンサートで協演した。

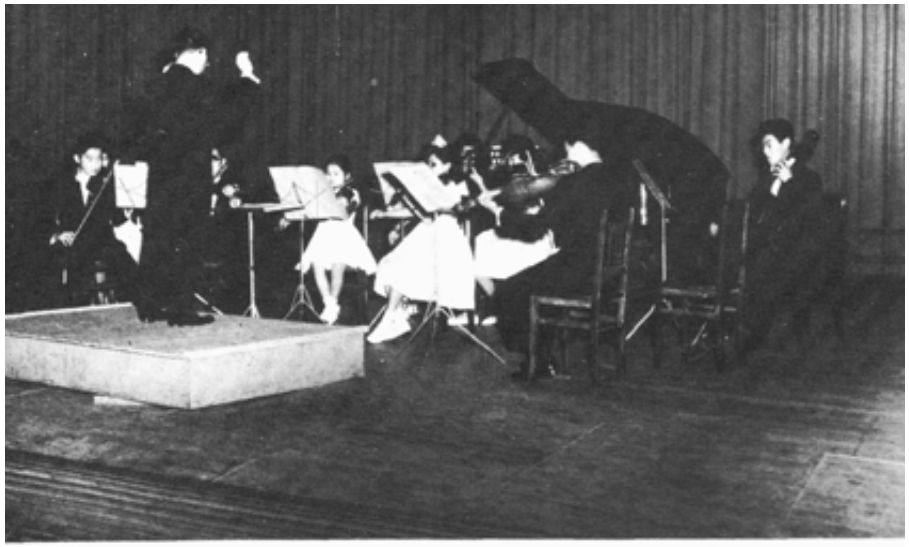
合唱界の活発化の背景には、五〇年代末から子供たちに楽器を習わせる家庭が少しずつ増え始め、加えて戦後移住者の中にいた専門家やブラジルの音楽学校卒業者の間で、指導、教育に携わる人が増えてきたことも見逃せない。



エコー合唱団のメンバー（1980年）

室内オーケストラの台頭

時代は再びさかのぼるが、一九五八年一月にサンパウロ劇場で文協主催のクラシック音楽会が行われ、日系人のみによる弦楽トリオ（武田寿男、揮旗俊夫、福田芳為）や、ギター・トリオ（鈴木メシアス、中村エレーナ、佐藤よしゆき）独奏などによる室内楽が演奏された。これを契機に室内オーケストラが、山川健一、福田芳為、武田寿男たちによって創立され、同年七月二十七日、山川健一指揮によりアルモニア学生寮において披露演奏会が催された。クラシック音楽専門のオーケストラはこれが初めてであろう。



子供のオーケストラ

そして数か月後に同じ山川健一によって創立されたあしぶえ合唱団とともに、サンパウロ音楽愛好者協会（ソシエダーデ・フィラルモニカ・デ・サンパウロ）が発足した。

第一回の演奏会は同年九月八日、サンパウロ女学院合唱団とともに行なわれ、ワルツ（ブラームス）、小交響曲（山川健一）、アイネ・クライネの第一楽章（モーツアルト）、セレナータ（ハイドン）、バイオリン協奏曲「春」（ビバルディ）が演奏された。

また、ブラジルでは初めてと思われる子供のオーケストラも組織、何回かの演奏会を行ない、Ａ・ＧＡＺＥＴＡ紙にも取り上げられた。

このオーケストラは、六三年二月三日市立劇場で行なわれていたコンセルト・マチナルに招かれ、あしぶえ合唱団とともに出演、ビバルディ、モーツアルトなどを演奏した。以後六五年に日本でギターの第一人者・小原安正と、六九年には世界的に活躍しているビオラの今井信子と協演している。七四年から七八年までは一時中断していたが（あしぶえ合唱団は続いていた）、七九年三月に創立二十周年記念演奏会を行ってからは、以後、毎年演奏会を開いている。八三年には第一回日本現代音楽週間に参加している。

公立オーケストラに多数の日系

プロのオーケストラに入って演奏した最初のバイオリニスト

は前述の福田芳為だが、その州立オーケストラは八か月で解散してしまい、福田はラジオ・レコルドに移って演奏を続けた（五三年以後）。


福田芳為さん

六五年、再び州立オーケストラがロチェラ指揮で開始されるや、そこに福田と武田寿男、井ノ口明子、西孟が参加、六六年からのオルケストラ・フィラモニカ、六八年からは市立劇場のオーケストラに福田、井ノ口に寺崎彬、揮旗俊夫などが名を連ねている。現在では市立劇場オーケストラ、州立オーケストラ、ＵＳＰオーケストラなどのすべてに多くの日系人が参加、活躍している。

７０年、文協コンサート始まる

文協も一九七〇年から文協コンサートを始め、日系の音楽家に演奏機会を提供してきたが、七五年からは新人育成のための新人コンサートと一般音楽家による文協コンサートに分けて毎年演奏会を行うようになった。第四回までと以後の文協コン

サートの出演者を列記する。

◇第一回＝七〇年八月十三日

本間潔美、坂田よしえ（以上ピアノ）、福田百合子（バイオリン）、森パウロ（テノール）。

◇第二回＝七一年十二月十七日　松本美樹子（ソプラノ）、斉藤エレーナ　ピアノ）、落合ゆうこ（ピアノ）、菊地啓（テノール）、斉藤忍（バイオリン）。

◇第三回＝七二年十二月十九日

清水カルロス（バリトン）、堂蒲クララ（ピアノ）、井ノ口明子（バイオリン）。

◇第四回＝七三年十月十八日

岩崎イレーネ、伊藤ソニア、高須美江（以上ピアノ）、上田真二（チェロ）。

◇七五年十一月十二日

安達千恵子（メゾソプラノ）、上田誠（コントラバス）。

◇七八年九月二十九日

安達千恵子（メゾソプラノ）、井ノ口明子（バイオリン）、サルバドール・マザノ（オーボエ）、花房央子（ソプラノ）。

◇七九年三月八日

宗像基送別リサイタル。

移住者の子弟による演奏会

同じく文協の主催で一九七四年からは移民祭当日に、その名にふさわしく移住者の子弟による演奏会を文協講堂において行っているが、七〇周年に当る七八年には特に日本から招いた指揮者・手塚幸紀が市立劇場オーケストラを指揮、日本の作曲家でブラジルを何度も訪れたことのある服部公一に委嘱した祝典序曲と日伯の作品による演奏会を皇太子殿下ご夫妻、州知事夫妻、市長夫妻などの臨席を得て盛大に行った。



あしぶえ合唱団（1959年）



服部公一氏

なお、移住者の子弟による演奏会の年度別出演者は次のとおりである。

◇七四年＝具志堅エルザ（ピアノ）。

◇七五年＝ベイガ・嘉手納良子（ピアノ）。

◇七六年＝山川純子（ピアノ）。

◇七七年＝日本音楽の夕＝石見梅旭、小林梅洗（以上尺八）小倉祐子（琴）、安達千恵子（メゾソプラノ）、猪木友井（琴）、クリスチャン・ベンダ（チェロ）。

◇七八年＝七〇周年記念（於・市立劇場）

市立劇場オーケストラ。指揮・手塚幸紀、

独奏・黒沼百合子（バイオリン）。

曲目は祝典序曲（服部公一）、トリプティーク（芥川也寸志）、ファンタジア・デ・モビメントス・ミストス（ビラローボス）、交響譚詩（伊福部昭）、管弦楽のための木挽歌（小山清茂）。

◇七九年＝サンパウロ音楽愛好者協会、室内オーケストラおよび、あしぶえ合唱団

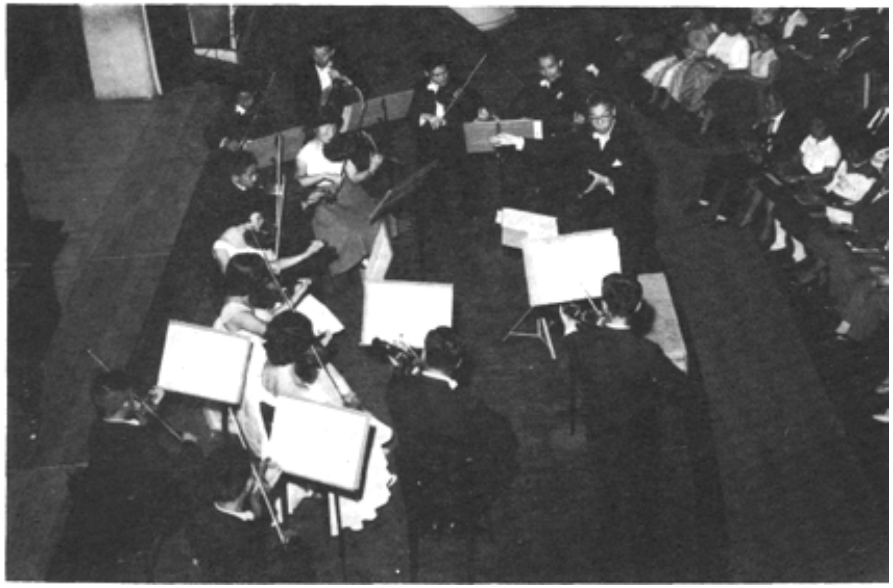
指揮・山川健一、独奏・井ノ口明子（バイオリン）、サルバドール・マザノ（オーボエ）、山川純子（ピアノ）

◇八〇年＝福田百合子（バイオリン）。

◇八一年＝エコー少年少女合唱団、指揮　吉田輝男。

◇八二年＝民谷恵子（ピアノ）、出雲井祐美（エレクトーン）、原田博子（メゾソプラノ）、岡部文子（アルト）。

◇八三年＝小松エミ（ピアノ）。
◇八四年＝井ノ口明子（バイオリン）。



サンパウロ音楽愛好者協会、室内オーケストラは一九六三年二月三日午前十時から市立劇場での「コンセルト・マチナール」で演奏した。指揮は山川健一

音楽活動に花を添えた人たち

一九七〇年代に入りしばらくして、少数ではあるが日本でも活動していた演奏家が来伯、オーケストラや独奏会で活躍するようになる。

特にチェロ（上田真二）、ビオラ（橘高たけし）、コントラバス（上田誠）、サキソフォンなど、打楽器といった特殊な楽器の分野で活躍する人が来たことが特筆されよう。ただ残念なこと

にこれらの人々は八〇年初めに橘高を除きすべて帰国してしまった。また、駐在員の夫人で音楽を専門にしている人たちもおり、総領事館の後援でリサイタルなどがしばしば催されるようになり、日系人の音楽活動に花を添えている。


日本での山川純子さん

日系子弟の活動華やかに

勿論、二世、三世の動きも大いに活発となり、前述のオーケストラで活躍中の弦楽器奏者たちを初め、種々の分野でその存在を見せている。特に、福田百合子（福田芳為の娘＝バイオリン）は五二年生まれだが、七二年からスイスに留学、八〇年ころからブラジルで独奏者としてリサイタルやコンチェルトに活躍している。

ピアノでは、具志堅エルザ和子（四五年生まれ）が、矢張りヨーロッパ留学後、ブラジリア総合大学で教鞭をとっている。

本間潔美（五一年生まれ）も、ＵＳＰでピアノ、作曲、声楽などを学び、卒業後サンパウロやブルメナウ（サンタ・カタリーナ州）の音楽学校で教えていた。

変ったところでは、前出のピアノの山川純子が再三訪日し、ブラジル音楽を演奏、紹介している（七四年＝上野文化会館小ホールおよびＦＭ愛知、七六年＝上野文化会館小ホール、八一年＝東京ＡＢＣ会館ホール）。



戦後生まれでは、ブラジル人のコーラス・グループを指揮するもの、音楽学校で教えるもの、リサイタルを行うもの、州立オーケストラのジョーベン・ソリスタに入賞し協演するもの、各地のコンクールの入賞者など多くの二、三世が活躍している

が、まだ多くが〝将来を期待されている〟と云うところであろう。同様にピアノやバイオリンを習わせる家庭が増え、それに駐在員の子女も日本から引続き勉強する場に不自由することなく、一九五〇年代には考えられなかったほどに学習者が増えている。

作曲界に新人の出現を期待

最後に作曲の分野だが、僅かに数人日本で勉強してきた人が仲間同志で発表会を行ったり、勉強会をしている程度である。

文協も七三年に作品発表の音楽会を主催した（十一月二十九日＝山川健一、中出良一、石見綱）が、残念なことにそれを続ける機会を得なかった。

自主公演としては七八年十一月九日、ＭＡＳＰ（サンパウロ美術館）で石見綱、山川健一、バスコンセーロス・コレイアが「三人の作曲家」のタイトルで作品発表を行ったのが唯一であろう。この時に演奏された石見綱の「ピアノのための三つの詩」は出版、レコード化されている。現在でも、まだ作曲界は未開拓の分野である。＝文中敬称略＝

（了）

脇山一郎と軽音楽界

草創期から先駆者的役割り

生田目善助（元コンチネンタール楽団員）

ハーモニカ・バンドを結成

コロニアにおける各軽音楽部門の草創期ともいえる、一九三〇年から四〇年代の全般にかけての脇山一郎の秀いでた先駆者的な足跡は、コロニアの音楽史に永遠に記録されるべきものであろう。

脇山一郎が一家とともに農業移民として渡伯したのは一九三〇年（昭五）八月、二十歳の年だった。父は一九四六年六月二日、終戦直後のカチ組マケ組の紛擾に巻き込まれ、過激派青年



の「ピアノのための三つの詩」は出版、レコード化されている。現在でも、まだ作曲界は未開拓の分野である。（文中敬称略）

の錯誤の凶弾の犠牲者として果てた脇山甚作元陸軍大佐だった。一郎は脇山甚作夫妻のひとり息子だった。



バストス楽団（ブラス・バンド）

一九三〇年というと、日本は硝煙のくすぶりのまったくない軍縮時代であった（満州事変の開始は翌三一年九月十八日）。脇山元大佐はサーベルを鍬にかえるべく佐賀県の故郷をあとに、子息一郎らと渡伯直後にノロエステ線のグァランタン耕地に配

耕され、義務農年を済ました段階で、日本より持参した資金で、ブラジル拓植組合（ブラ拓）の最初の経営地バストス移住地に入植した。そこはウニオン第二区だった。日本政府のお声がかりの国策移住地なので曲りなりにもひととおりの文化施設は揃っていた。

一郎の音楽の資性は幼少から閃きをみせ、特にハーモニカの吹奏では中学時代、学校でも定評があった。一郎はバストス入植後、農耕の余暇に、同好の友を募ってハーモニカ・バンドを結成して練習したり、演奏活動も続けていた。

当時、日本で古賀政男の歌曲がヒット・メロディーとして爆発的人気を呼ぶと、その曲はその年のうちに、各移住地でも歌われた。

一郎は陰影と情緒な歌曲を特に好んだ。彼はハーモニカでは飽き足らず、ギターを購入し練習書を手に学んだ。素質に恵まれている彼は瞬く間に上達して周辺の人らを驚ろかした。

一郎の縁戚関係にある親しかった初野と結婚したのはその頃だった。

一九三七年、バストスは入植開始以来の八年目、一千戸の入植家族で市街地は賑わっていた。市の中央商工会は文化都市の名のもとに吹奏楽団を創設すべく吹奏楽器一式を購入した。楽器の種名と数はクラリネット（三）トランペット（二）、コルネット（一）、アルト（一）、バリトン（二）、バルプトロンボン（二）、

スライドトロンボン（　一）、サックステノール（一）、バスツーバ（一）他にドラム・ケース・シンバルなどであった。

約二十名の楽団参加の希望者を募りバストス吹奏楽団（ブラスバンド）の陣容は一応は揃ったが、それぞれが生まれて初めて手にする楽器だけに、どのようにして音を出すのか皆目見当がつかなかった。

当時、楽団員の最年長者は四十二歳だったが、その大半は三十と二十歳代、特に二十歳代の若者によって結成されていた。また、団員のうちの四、五人はウニオン、エスペランサ、カスカッタ各区から四キロ余の道程を徒歩で時季ともなればプリマヴェイラやパイネイラの美しく花が満開の中央小学校に日曜日ごとに通い、熱心に練習に励んだのである。

また、当時の団員名は次のとおり。

本田正男、脇山一郎、今泉達助、松本恵、崎田良雄、朝日勝一、山中慶三、贋吠角善志、下出幸二、朝日正男、二木槙、小田敏男、高橋通夫、内田弘治、山中正夫、川崎真一、森田よしひさ、本田清、生田目善助、ジョアキン。

当時、マリリア市を根城に童謡児童劇団をおこし、巡回公演していた、陸軍戸山学校で作曲、編曲科を専攻された元軍楽隊の小林勝喜知（コルネット奏者）がいた。その小林に指導を仰いで練習を続けた。一応、ブラスバンドとして聴けるようになった段階で、一郎が楽団の編曲、指揮することになった。こ

の頃、一郎はバストス市では、こと音楽に関しては抜きんでた存在として頭角を現していた。

当時、日本は満州事変に続いての支那事変たけなわで、相次ぐ戦勝に沸きかえっている時期でもあり、勇壮な軍艦マーチ、君が代マーチに新曲の軍歌が次々に生まれ、バストス市の吹奏楽団もそうしたマーチを入植記念日や学校の運動会にと、ちょうどその頃だった沢田節蔵全権大使をバストス市に迎えたのも、勿論、大使を歓迎のマーチがバストス市の空に響きわたった。



バストス楽団のジャズ・バンド部（1940年、田中サロンで）

ジャズ・バンドを編成

やがて、吹奏楽曲だけでは満足できず、楽団のなかにジャズバンド部が編成されて、これも一郎が指揮をとった。これは好評を博した。



バストス楽団、ウニオン第一、第二区、フアルツーラ区の合同楽団による演奏会（一九四一年九月七日）

バストス市大通の田中商会の大サロンで一郎指揮のジャズバンドで親睦社交ダンス・パーティーが再三催ようされ、カルナバールの季節がくるとバイレが夜を徹して催され、当時、流行の「ア・ジャルジネイラ」の歌声がサロンいっぱいに流れた。

一九四一年、日米両国が戦端を開いたのは十二月八日。その年はブラジル当局により邦字新聞が相次いで廃刊をやむなくされる（七月末から八月末にかけ）など、邦人社会はその戦機の到来を予想しているその九月七日の独立記念日に、バストス移住地では再び小林勝喜知を招き、彼の指導によって中央女子青年会、中央楽団、ウニオン、第一、第二、ファルツーラの各区、一郎指揮のセッソンの楽団と合同演奏によって、移住地あげての歌劇「浦島」が市内の産組会館において大々的に公演された。これには驚く程の観客を動員した独立記念日の祝賀行事だった。その三か月後に日本の大戦突入によって、戦前の音楽演奏による邦人の行事はこれが最後となった。

大戦は激烈を極め、日本はブラジルの敵性国家と宣言され、邦人社会への監視を加え始めた。その頃、一郎の妻初野が幼ない子らを置いて、数百キロ離れたマンチケイラ山脈のカンポス・ド・ジョルドンの高原療養所に病気治療のため入院する悲運に見舞われる。災厄は相次いで来るというが、次は父脇山甚作が日本陸軍の予備役大佐の経歴がたたって、ブラジル官憲の疑惑の眼は厳しく、州社会政治警察（ＤＯＰＳ）に召喚され、一時

は保釈の身になるが、いついかなることになるか予想はつかなかった。一郎は幼ない子らを抱え、自分の力の及ばない世界で起きる次々の災厄に、身の不運をかこつだけであった。

妻の初野を高原療養所に遠路を再々見舞うが、病ははかばかしくなく、一郎の気特は暗鬱なものであった。一郎はそんな心



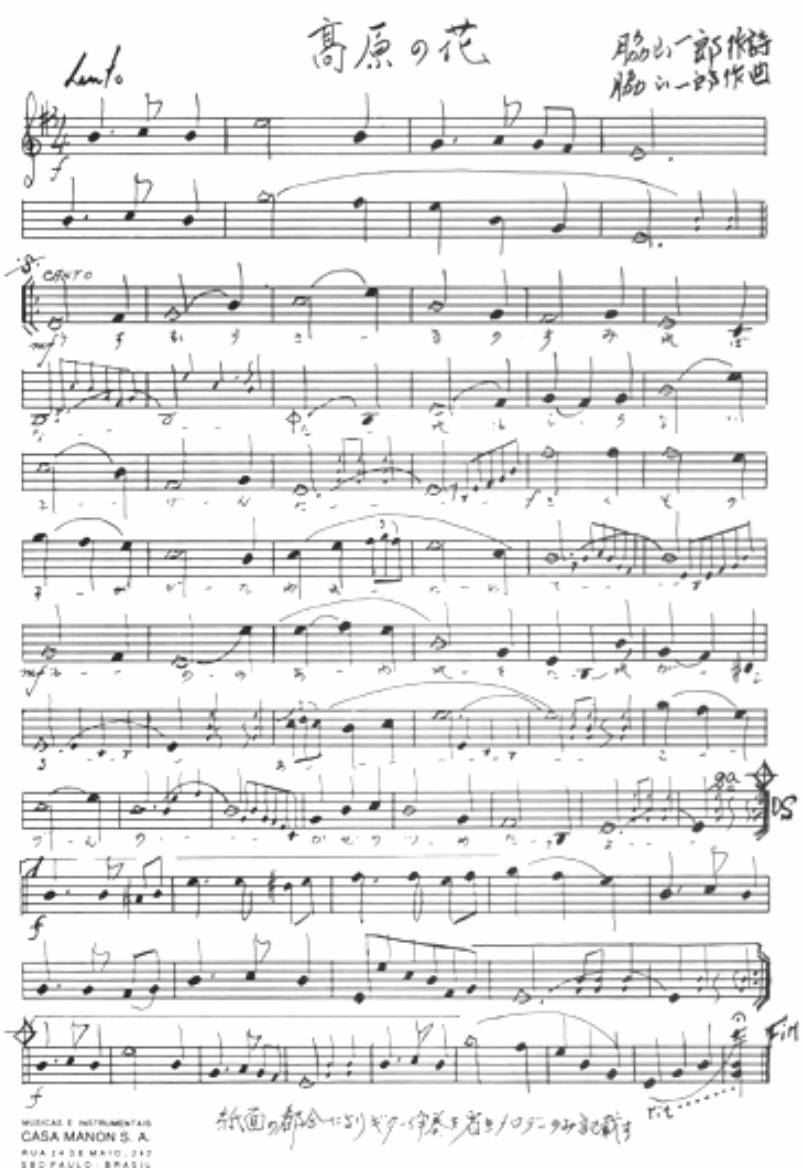
バストス中央女子青年会、歌劇「浦島」の出演者ら（1941年9月7日）

情の境涯のなかから作詩、作曲によって生まれだされた歌曲が「高原の花」であった。



脇山一郎氏

一郎は高原の冷めたい風の吹きすさぶ、野原に咲く菫（すみれ）の花にあやかり、うたったその歌曲は陰影と叙情にいろどられ、後年、コロニアが生んだ名歌曲として、ヒット・メロディーとなった。



一郎は炎暑厳しいバストス移住地より、当時は空気も清澄だった高原都市サンパウロ市内の住居もまばらだった、ボスケ・ダ・サウーデの小高い丘に転居した。それは初野のしいての願いであった。初野はカンポス・ド・ジョルドンの高原療養所を出て、嬉しげに丘の上の棲家で療養生活にはいるが、快方に向うことなく、四五年、日本敗戦の年の七月に初野は終焉を迎える。一郎は初野の死を覚悟していたが、残された幼ない子らを思うと痛哭極まりない毎日のその頃だった。

歌謡曲レコードを吹込む

元日伯新聞社総支配人の竹内秀一が、一郎のもとに日本の歌謡曲のレコード製作の企画を持込んだ。内紛に暗いコロニアに明るい新風を入れるには、コロニア唯一の娯楽である歌謡曲のレコードを売り出すことであるというのである。竹内のこの企画は時宜に適したものと一郎は乗気になった。

歌謡曲のレコードは日本との国交はとだえてるため輸入できず、戦前に着荷したレコードから版を起こしてもレコードは製作できるが、日本のレコードを無断でコピーしては道義に反するし、版権的に違法であるため、コロニア版レコードの製作の企画となった。そのために竹内は、コロニアのトップ・クラスの音楽人の動員が必須となった。

一郎は竹内に企画を持ちかけられるが、レコード吹込みについ

ての操作技術など皆目未知の世界のため、根が良心的な一郎は一応申し出を断った。しかし、竹内は執拗だった。



「高原の花」の第一回吹込み（1946年6月2日夜）

一郎の出場なしに、この企画製作は成就できないと再び一郎を口説いた。一郎は戦前のバストス楽団仲間の生田目（なまたけ）善助と内田弘治がサンパウロ市におり交流があったので、相談をもちかけた。生田目と内田はその企画に意欲を示した。レコードの製作会社は当時のコンチネンタル・レコード会社だっ

た。吹込みの操作技術は三人が指導書を手に入れて研究した。その頃のレコードはエボナイト製の片面三分もので、ＬＰ盤はずっと後年のものである。作詩、作曲、編曲はいけるとしても片面三分以内に前奏、歌曲、後奏をストップウオッチをにらんでの録音は大変な作業である。失敗をくり返しながら吹込みのメドがついた段階で各部門の奏者および歌手を集めた。

音楽練習は毎日曜日、竹内秀一宅に集合して続けられ、吹込み録音は月一回コンチネンタル・レコード会社で録音することになり、それぞれが職業を持っているため夜間に行なわれることになった。

当時、ソロカバナ駅前の通りでイタリア人のオペラ男性歌手トビアス・プレフェッチが教習所を持って教えていた。そこで習っていたのが田村敏子、渡辺美栄子、渡辺六郎、菊地啓、渡辺喜四郎らであった。レコード吹込みにはそれらの歌手に依頼することになった。



田村敏子さん（現姓・石川）

しかし、難点があった。オペラ歌手の指導のもとで学んだ歌い手だったので、みなクラシック歌曲のうたい方のため軽音楽の流行歌調にならず、音楽指揮の一郎は大変な難渋を極めた。

それでも当初からの目標だった月三枚、両面六歌曲の作詩、作曲それに基いた楽団の演奏と歌手の歌唱が軌道に乗って、スタートできるメドがついたのは五月の末だった。第一回目のレコード吹込みは、コンチネンタル社のスタジオで六月二日の夜間と決った。楽団から歌手と猛練習のあとだけに、多少のくり返しはあったがレコーディングは成功といえた。コロニアの音楽人の協力によって歌謡曲のレコードが誕生した画期的な瞬間だった。

奇しくも、その同じ日のその夜、ボスケ・ダ・サウデの脇山家に訪問客として顔をみせたカチ組のテロリストの兇弾によって、脇山甚作元大佐は倒れるのである。（一九四六年）。元大佐の死後の容貌は軍人としての毅然たるその奥に、死に場所を得た満足そうな明るさがあった、と語り伝えられている。

「高原の花」がヒット曲に

一郎は総てを忘れようと音楽一途に投入していった。その頃である。コロニアから生まれたメロディーがコロニアに愛唱されたのは、それは一郎作詩、作曲の「高原の花」であった。オペラ歌手修業中のソプラノの田村敏子が歌ったが、これを軽音

楽調に歌唱を指導する一郎が苦心の末のレコーディングだった。この「高原の花」は売出すとともに、コロニアのヒット・メロディーとなったのである。

当時の楽団のスタッフと歌手は、次のとおりであった。

▼楽団　竹内和子＝ピアノ、脇山一郎＝クラリネット、サックス・テノール、稲垣健吉＝バイオリン、ピアノ、生田目善助＝マンドリン、トランペット、内田弘治＝パンジョ・テノール、トロンボン、丸山富蔵＝バイオリン、森茂夫＝ギター、清水久尚＝マンドリン、檜下良一＝バイオリン、トランペット、小田敏夫＝ギター、西＝アコデオン、竹内直次＝セロ、他にコントラバス、打楽器など、

▼歌手　渡辺喜四郎、渡辺六郎、浅霞春夫、菊地啓、難波勝美、高橋健造、田村敏子、渡辺美栄子、田村景子、松下美代子、粟飯原紀美子、他に童謡盤のための童謡歌手として大槻玲子、薬師神オルガなどであった。

変ったところでは活弁のベテラン野村北秋がいた。野村北秋は久米正雄原作の松竹映画「沈丁花」（この作品は一九四〇年三月、現ロンドリーナ在住の尾形義雄の協力により野村北秋が輸入、各地での巡回映写に当っては北秋自身が解説したが、それは戦前の無声映画の最後を飾るにふさわしい〝名調子〟であったといわれている）を自ら脚色、映画説明「沈丁花」をレコードに吹込んだ。解説は野村北秋、映画説明の中に歌が入り、

音楽指揮は脇山一郎で連続四盤のものを作った。一枚目の歌手は田村敏子、二枚目は松下美代子、三枚目は渡辺六郎と粟販原紀美子、四枚目は渡辺美栄子だった。



一九四六年十一月、コンチネンタール楽団はラジオ・アメリカに出演した。戦後初のコロニア楽団員による放送風景

当時、売り出されたコンチネンタル・レコードの一部をあげてみると、君待つ宵＝渡辺美栄子、佐渡おけさ＝渡辺六郎、面

影いずこ＝田村敏子、いとしの花＝渡辺美栄子、娘ごころ＝松下美代子、花言葉＝難波勝美、母恋鳥＝田村敏子、夜のサンパウロ＝渡辺六郎、空は青空＝渡辺六郎、呼んでみたとて＝松下美代子、夢のあと＝難波勝美、高原の花＝田村敏子などがある。

これらのレコードはコンチネンタル・レコード会社で製作され、発売元は羽瀬商会だった。

コロニアのレコード製作も期間として五か月の短かいものだった。松竹が終戦直後に製作した第一作目の娯楽映画「そよ風」（佐野周二、並木路子主演）の主題歌、並木路子の「リンゴの歌」が爆発的にヒットし、その「リンゴの歌」が翌年の四六年にアメリカで売り出され、それがブラジルにも来るようになったのでコロニアのレコード製作のスタッフを解散した。

一郎指揮のコンチネンタル楽団は、レコード製作と関係なく演奏活動は続けることになった。戦後もその頃になると邦字新聞が相次いで発刊され、明るさが戻ってサンパウロ市内に邦人の数も増えて来た。そのためか、一郎主宰のコンチネンタル楽団に歌手希望の若い入団者が多くなった。

その頃だった。サンパウロ市内の商業放送局ラジオ・アメリカより、コンチネンタル楽団に要請があった。というのは異国情緒たっぷりの日本の歌謡曲を電波に乗せて放送したいから演奏してくれというのである。時間は夜の七時から七時三〇分までのゴールデン・アワーの三〇分だった。別に拒むこともない

ので一郎指揮で同放送局のスタジオで演奏した。この日本調メロディーの初放送が聴取者に大好評だった。局側は好評に力を得たのかこれを連続番組に組込んで、日本語による広告宣伝を入れて、継続的なプログラムを発足させようと申し入れて来た。しかし、楽団員はそれぞれに職業を持つ集団であるため、局側の企画に添うことは出来かねて、ラジオ放送は一回だけだった。それから数年後、コロニアによる日本音楽を主とした商業放送局の乱立時代が来るのである。



コンチネンタール・レコード第一回吹込みを記念して、ツクルビーのクラブで撮影。右より生田目幸助、竹内直次、松下順一、松本恵、一人おいて内田弘治、そのうしろ右が竹内秀一、渡辺六郎、脇山一郎、田村敏子の父親、一郎氏の妻（二度目）、渡辺美栄子、難波勝美、一郎氏の母親・静江、田村敏子さんら（一九四六年九月）

「新日本の歌」を力強く演奏

翌四七年三月二十九日に元海興支店長の宮腰千葉太宅に同志が集まって母国戦災者の救援運動を起こす組織を作ることになり、ブラジル赤十字社の許可のもとに「日本戦災同胞救援会」が誕生した。活動は四月より始まりその年の十月十日に当局の許可のもとに、戦後邦人の第一回慈善ショーがセントロ・プロフェソラード・パウリスタ会館で大々的に催された。当時は法令で邦人の集会は許されない時節だったので、異例なことだった。コンチネンタル楽団（脇山一郎指揮）、クリスタル楽団（丸山昌彦指揮）の外に、邦楽と日本舞踊の家元らによるショーが、舞台いっぱいに展開され、最後に両楽団によって、戦後の日本で作詩、作曲された「新日本の歌」が力強く演奏されると、満場の観衆は再生の母国を偲んで館内は感動と興奮のるつぼと化した。この演奏会には、竹内秀一は息女和子を伴って参加した。

このショーを契機としてコンチネンタル楽団とクリスタル楽団は合体して、サンパウロ音楽連盟が設立された。会長・稲垣健吉、・副会長・秋山宏治、指揮は脇山一郎、丸山昌彦となった。

四九年九月十、十一の両日、シネ・サンパウロにおいてサンパウロ音楽連盟演奏による初の全伯（邦人）音楽コンクール大会が催された。これは市内は勿論、ピンダモニャンガーバ、ビリグイ、ジュキア、オザスコ、ツパン、タウバテー、カンピー

ナス、ルセリアなどからはるばる出場者が参加し、熱気あふれるコンクールが展開するとともに、特別出演として稲垣健吉指揮によって石坂、岩崎両夫人の三味線二部合奏が、オーケストラ伴奏による「鶴亀」の演奏、それに加えて赤間女学院合唱団の三部合唱「浦の明暮」が佐藤浩一指揮で歌われるなど、コロニアにおける音楽芸能の指標ともいえる、画期的な音楽の祭典だった。大会が終幕し客席の観客がいなくなった、暗い客席から感激深げに舞台をみつめていたのが脇山一郎だった、と語るひとがいた。

その脇山一郎も翌年六月五日、前年の全伯音楽コンクール大会のサンパウロ音楽連盟の楽団指揮を最後に、不慮の交通事故で急逝するのである。行年四十歳の若さだった。移民の子として渡伯し、農業のかたわら恵まれた音楽的資性をもとに、コロニア音楽界の草創期からパイオニアとして、音楽活動に専心、身辺の逆運とたたかい、コロニアと哀歓を分ちながら続けてき、大きな業蹟を残し、コロニア音楽がようやく花を結ぼうとする直前の彼の死に、コロニア音楽に関係するもの総てが粛然として哀悼の意を捧げた。

その年八月十二日、クリスタル楽団とコンチネンタル楽団の外、音楽、バレエ関係者多数の出演によって、彼の想い出深いセントロ・プロフェソラード・パウリスタ会館において追悼音楽会が開かれ、その際、演奏された陰影と叙情の名曲「高原の

花」は脇山一郎への讃歌であり、鎮魂歌であった。

（文中敬称略、一九八五年四月記）

古典にゆかしい音色

＝三好夫人ら、真摯にはげむ＝

宮下　芳山

初公演は一九三一年五月

コロニアにおける邦楽の起源は、一九二八年前後と思う。当時、池辺乙人氏が主になり高岡専太郎ご夫妻、蜂谷専一ご夫妻、有山ご夫妻、杉本芳之助、後藤武夫、江越、石原桂造氏など、並びにご夫人方では内畑、成富、村上、長谷川夫人などのメンバーで、主として、唄は池辺乙人氏が指導して、三味線（裏方）は内畠夫人と前記のご夫人方であった。

最初は月に一回位の集会であったが、徐々に熱が上がり、二回が三回になり、しまいに二葉会（ふたばかい）を結成して、一九三一年五月十五日、当時のサンパウロ市日本クラブにおいて初公演を行なった。

その後、池辺氏が四五年四月に他界されてから、一時中断さ

れていたが、それに先立っての三六年十一月に市毛総領事夫人が、サンパウロ駐在の各国外交団を招待して「日本の夕」を催され、その時に依頼を受けて出演したのが三好美和夫人で、現在の日本音楽研究会の代表者である。

一九三九年に、三好ご夫妻により日本音楽研究会が創立され、同年十一月五日に第一回大会をサンパウロ市のリラ・クラブで開催、第二回大会を四〇年、第三回大会は四一年十二月八日に同クラブで開催中、日米戦争が始まった。以後、終戦迄各家庭において練習したもので、終戦と同時にサン・フランシスコ教会のボニファシオ神父の計らいで、サン・フランシスコ劇場において次の如く公演。第四回、第五回、第六回と毎年続けて公演、第七回大会は各邦字新聞社、サンパウロ学生会後援のもとに前回と同じくサン・フランシスコ劇場において開催した。さらに五一年十一月十一日の第八回大会、五二年十二月十三、十四の第九回大会、五四年十二月五、六日の第十一回大会は、ブラジル芸能文化連盟の後援を得て南米劇場において開催、五五年九月十日、十一日の両日の第十二回大会、五六年十二月一、二日の第十三回大会はシネ東京で開催した。

次いで、六〇年一月九、十の両日、サンパウロ市テアトロ・ムニシパールにおいて日本音楽研究会創立満二十周年大会を開催したが同大会にはサンパウロ日本文化協会、花柳流金竜会、都山流ブラジル楽友会（尺八楽会）の後援を受けることにより、記

念大会にふさわしい好評を得ることができた。また、創立満二十二周年記念大会も同劇場において六二年五月二十七日に催した。

日本音楽研究会創立満二十七周年記念および、都山流尺八楽会ブラジル支部開設記念大会は、六七年四月十六日、テアトロ・シネ日活（シネ東京の後身）で開催した。

以後、七一年五月二十三日には都山流尺八楽会ブラジル支部との共催による大会を日本文化協会の記念講堂において開催した。

また、七二年五月十四日には、文化協会の記念講堂において財団法人都山流尺八楽会ブラジル支部主催による三好寿山師五周忌追悼演奏会を開催、七七年十二月四日にも同じく三好寿山師の十周忌追悼演奏会を文協の記念講堂で行なった。

琴、尺八界でも新人が活躍

一九五六年、日本で、生田流等曲の名手で新日本音楽の創始者である宮城道雄氏に師事した林田祐子さんが帰聖、琴の先生として数多くの弟子たちの指導に当った。祐子さんは、その間に三曲若葉会を結成、一般向け公演も五回位は行なっている。その後結婚（現姓・小倉）、現在はサンパウロ市ピニエイロス区に宮城会を設立、後進者の指導に当っている。

一方、五七年にご子息の石見梅旭師（琴古流尺八家元）と来

伯の石見登美井先生は、山田流琴曲を通じて幾多の名手をおくり出したが、惜しくも七一年二月に他界された。現在は先生の一番弟子・猪木友井が後を継いで門弟の養成に努めている。

現在、日本音楽研究会では、代表者の三好美和夫人と補佐の宮下夫人の両人が、三味線音楽を主として教授している。

また、都山流尺八楽会ブラジル支部の宮下芳山支部長が、都山流尺八を、毎月定期的に希望者に教授している。

（都山流尺八楽会、一九八四年九月・記）

常磐津の響（ひびき）よ、いつまでも

兼三喜　師匠　老いにめげず意気さかん

隈下　順子　（日舞、京藤間流名取）

無形文化財的存在の方…

「先生、お稽古お願いいたします。」一年近くもの空白期間の後、私は再び常磐津の門をくぐり、はからずも、師匠の前に両手をついていた。さながら、どこか知らない異国へ、長い間、旅してきた子供が、帰宅して母親に、「ただいま。」と、なつかしげに声をかける如く。　―



一九七五、六年ころの常磐津兼三喜師匠（イビラブエーラ公園内の日本館で）

私は実に、きままでのんきな弟子である。が、なぜか何度もこうやって、いつしか又、舞いもどってきてしまう。

常磐津兼三喜（ときわずかねみき）師匠。

サンパウロ広しといえども、常磐津を唸る（語る）人は、おそらくこの人をおいて外にはない。コロニアでは、それこそ〝知る人で知る〟かくれた無形文化財的存在の方がこの人である。

明治四十二年（一九〇九）名取となり、東京の京橋八丁堀にて教授し、昭和十年（一九三五）に渡伯されて以来、レコードさえも不自由な時代、コロニア日本舞踊界の方々とともに、数々の舞台を踏み、その素晴しいのどを披露されてきた。

京藤間流日本舞踊初代家元とともに踏まれた舞台での『うつぼ猿』は、特に圧巻であるとの評判を博した。殺される運命に

ある小猿を思い、世の無常をなげき悲しむくだりの猿ひきの心持ちを、常磐津の実にせつない旋律にのせて、ひしひしと人の心を打って。今でもお稽古の時、いっしょに歌い（語り）、聞きほれては、ホロリとさせられる、にくい部分である。



一九八一年、「邦楽趣味の会」で。左から　常磐津兼三喜師匠、隈下順子（筆者）、島田あや子、水谷てる子さんら。同日、兼三喜師匠は常磐津「積恋雪関扇」と「三保松富士晨明」を語ってひいた（文協貴賓室）

兼三喜師匠は、明治二十六年（一八九三）生まれ、おん年九十一歳の現在でもなお、若若しいお声で、三味線をお取りになり、語られる。いたってご健康で、病気のことなど、皆目無知でいらっしゃる。

「私を見たら、病気のほうが、こんなのにくっついちゃ大変だ。　―と、逃げちゃうよ。」と、笑われる。

パキパキの江戸っ子で、発音には非常にきびしい。口の中で、もの言おうものなら、

「さっぱり解らないねえ。」と、一喝される。

中途半端はおきらいな性格らしく、ものごとは、はっきりとおっしゃる。

子供の頃、私が仲間などにいじめられて、べそかいたら、師匠に、

「順子ちゃん、おとなしくて、いくじないから…。あんなのは、ひっぱたいてやりなさいよ。」と、言われたのには、びっくりして涙もいっぺんにかわいてしまった。

お稽古が、いつしか井戸端会議に転じて、どこどこのだれそれが、どこどこのだれそれと、くっついたの離れたのという、世間一般の、おとなのうわさばなしに、こともなげにあっさりと、

「へエ。この腐ったような都会にも、そんな粋（いき）な話があるのかねえ。」と、おっしゃり、現代っ子で鳴らしていると内心自負する、私の度肝を、ものの見事に、抜く。実にさわやか

にしてあっぱれである。

三味線をひきあって楽しむ師匠

生前の蜂谷専一氏に、米寿の祝いなどに、さそわれては、水田さん、島田さんなど、三味線仲間とともに、四人で、お祝いに、『子宝三番叟』（こだからさんばんそう）などを披露した。

その蜂谷氏に、一九八一年、

「死ぬ前に一つパアーッと、はでにやろうかと思いましてね。」

と、さそわれてやった「邦楽趣味の会」で、『積恋雪関扉』（つもるこいゆきせきのと）と『三保松富士晨明』（みほのまつふじのあけぼの）を披露したのが、楽しい思い出の一つである。

カラオケ、民謡が盛んな昨今、まさに風前のともしびの様相を呈している常磐津を思う時、私は胸がしめつけられ、自分自身の腑甲斐無さを、いまさらのように、せめる気持ちになる。

『矢切の渡し』も『ささんかの宿』も、確かにいいことはいい。しかし、一方、『関取千両幟』（せきとりせんりょうのぼり）、『恩愛ひとめの関守』（おんあいひとめのせきもり）など、常磐津という名の、日本古典音楽が持つ、荘厳なひびきをいかにして捨てることができよう。このひびきこそ、私のねむる魂を、日日のつまらぬ、枯れはてたマンネリズムからよびさまし、再びこの門をくぐらせる張本人にほかならないのだ。

私は常磐津兼三善師匠のもと・で、この人生の幾年かをとも

に常磐津にひたり、そしてかつそれを讃美したことを、こよなく喜ばしく、

又、ほこりにも思う。

常磐津を歌う（語る）兼三善師匠。

私はこれが大好きであり、慕う心つきない。

毎年、年始には、長唄の稀音家六立美（きねやろくたつみ）師匠と、その門下の方々とともに、三味線をひきあって楽しむ師匠である私は師匠が、これからの余生をますますお元気に過され、末長く常磐津を歌われん（語られん）ことを、心より願う者の一人である。

（一九八四年十一月・記）



日本音楽研究会々員による演奏会。尺八は右から鈴木鈴山（故）、宮下芳山、三好舞山（故）ら。五一年十一月十一日（サン・フランシスコ劇場、一四〇ページの記事参照）

第7部

ラジオ
テレビ

〔ラジオ〕ＲＡＤＩＯ　元来放射、幅射を意味するラテン語。受信機、番組を指していう場合もあるが、現在では無線放送を意味する用語として世界的に普遍。放射された電流が空間のあらゆる方向に伝播され、受信勢力が受信機の多少に影響されないという放送機能の意味では、ブロードキャスティング、ラジオキャストなどの用語も用いられる。

沿革　一八九五年ラジオの根源をなす無線電信を発明したのはイタリアのマルコーニ、一九〇四年イギリス、ケンブリッジ大学のフレミング教授が二極真空管を発明、これにヒントを得て、〇六年にアメリカのド・フォレー博士が三極真空管を発明、現在のラジオの生れる初めとなった。三極真空管とは二極真空管の陽極と陰極との間に、格子状または網状をなす第三の極を入

れたもので、電波を起す発振作用、電波や音響を大きくする増幅作用、電波を音になおす検波作用などに非常に有効な働きをし、二〇世紀初頭が〈真空管文明〉と名づけられるほど、無線科学界に画期的革命をもたらした。二〇年アメリカのビッツバークに世界最初の放送局ＫＤＫＡが誕生、初めてレコード音楽などを放送したが、日本では二五年（大正十四年）八月一日、ようやく最初の放送局が発足した。（注＝ブラジルで最初のラジオ放送は二四年、リオ、サンパウロ、レシフェの三市からであった）。

電波の種類　ラジオ電波の周波数は電流によって異なるが、その範囲は非常に広く、これを適当に区分して長波、中波、短波などと呼ぶ。国際的に決定されている電波の種類は

▽長波　周波数一〇〇以下、波長三・〇〇〇以上。▽中波　周波数一〇〇～一・五〇〇波長三・〇〇〇～二〇〇。▽中短波　周波数一・五〇〇～六・〇〇〇、波長二〇〇～五〇。▽短波　周波数六・〇〇〇～三〇・〇〇〇、波長五〇～一〇。▽超短波　周波数三〇・〇〇〇～三〇〇・〇〇〇、波長一〇～一。極超短波　周波数三〇〇・〇〇〇以上、波長一以下（注＝周波数はキロサイクル、波長はメートル）など広範囲にわたるので、各国がこれをかってに使っては互に妨害を生じ、ラジオの真価が発揮できないので、全周波数の割当は国際会議で申し合せている。このため国内放送用の放送局は原則として五〇～一・五〇

〇ＫＣまでの中波を使用、その他の電波もその特徴に応じて長波は気象通信、短波は国際間の放送、超短波はテレヴィジョン放送に用いられている。

〔テレヴィジョン〕ＴＥＬＥＶＩＳＩＯＮ

古来、千里眼というのは人類の大きな夢であったが、テレヴィジョンが出現し、進歩発進するにつれて遂にこの夢が実現した。ラジオとともにマスコミュニケーションの強力な手段ともなり、社会、文化などに及ぼす影響も甚だ大きい。視覚と聴覚を結合し、電波という即時性と広範性を兼ね備えた近代科学と技術の生み出した最新のこの革命児は、好むと好まざるにかかわらず、今や急速に我々の生活に接近している。

テレヴィジョン（以下テレビと略）今日のように発達するまでには実に数十年の間、多くの科学者や技術者のたゆまぬ研究、開発があった。英人ベアードがロンドンで世界初の公開実験を行ったのは一九二六年である。彼はこの年初めて動く物体の映像、即ち人間の手の形を送受信することに成功した。その翌年アメリカでベル研究所が三〇マイルを隔てて、アメリカ最初のテレビ実験を公開した。

かくて三三年、ＲＣＡのツウォルキンが、アイコノスコープというそれまでにあった同種のものに比べて著しく感度の好い撮像管を発明するに至り、今日実際の放送に使用している方式と

同じ装置が完成され、ここにテレビは初めて本格的な実用性を持つに至った。

日本では二七年（昭和二）頃から浜松高工次いで早稲田大学で研究が始められ、三〇年ＮＨＫ五同年記念ラジオ展覧会に初めて浜松と早大の公開実験が行われ、翌年にはＮＨＫ技術研究所でテレビの研究が開始された。三九年には初めて試験放送が行われ、翌春には世田谷の技術研究所実験用スタジオから日本初のテレビ・ドラマが試験放送されたが、太平洋戦争のため、実用化の一歩手前で研究が中絶した。

当時、イギリスではすでに世界にさきがけて、三七年来ＢＢＣがロンドン放送局からテレビの正式放送を開始していた。走査線四〇五本、毎秒像数二五、当時としては実に画期的なものであった。またアメリカでは、ＮＢＣがＲＣＡのテレビ装置をニューヨークに設置して三九年から走査線四四一本、毎秒像数三〇で実験放送を開始していた。しかし、第二次大戦中は各国とも発達が一時止まった。

戦後、いち早く正式放送を開始したのはアメリカであるが、四六年四月ニューヨークを初め計六局で放送を行い、受像総数七千台と推定されていたのが、四八年には局数二七、受像機数三十五万台となり、五〇年には放送局数六二都市で一〇六局、受像機約九百万台と驚異的普及をとげた。現在ではマイクロウエーブ中継網の急速な進歩により、全米至る所中継可能となっ

ているところから、ニューヨークのショーは忽ち全米のテレビで中継される盛況さである。

日本では五三年（昭和二八）二月ＮＨＫにより正式放送が開始された（ブラジルでの正式放送も日本とほぼ同じ頃で、五四年の受像機数は約十二万台であった）。

――――　◇　――――

走査、走査線　テレビの原理は色の濃淡を電流の大小に変換することで、画面の濃淡を網目のように縦横に細分すると、網目の一つ一つはある濃度の色で代表される。これが絵素である。一つの画面は無数の絵素からなっている。テレビで絵素に分解するのが走査線であり、走査線が多いほど良質な映像となる。

走査線は横文字を読むように左から右へ順次に右下まで走査し、被写体の模様を電流の変化に換えて行く。この映像電流を電波にして家庭の受像機に送ると、受像機はテレビ・カメラと同様の走査をなし、映像電流を逆に光の変化にして映像を再現する。走査線数は各国で異なり、日本では電波法により五二五本に定められている。従って約三十六万個の絵素に分解されていることになる。

（白水社発行の「演劇、映画放送、舞踊オペラ辞典」から転載）

華やかだった日語放送

芸能、スポーツ面でも活躍

内　海　博

〔ＡＬＦＡＮＩＰ通信　有限会社、営業部長〕

ある朝突然、野菜相場が…

一九四一年の十二月八日に日本が太平洋戦争に突入してから間もない翌四二年二月初めから終戦の四五年八月十五日まで、ブラジル政府は国内全土にわたって屋外での日本語使用を禁止した。うっかり仲間と日本語で話をしていた、あるいは、話をしていなくとも「話をしていた…」と疑われて警察署に連行されたなど、にがにがしい思いをした人々は少なくなかった。

終戦、再び平和がよみがえった五二年のある日、ラジオから日本の歌謡曲、日本語による野菜相場などが流れ出し、コロニアで大きな話題となった。

戦前中には誰もが予想だにしなかった『ラジオ日本語放送』という、時代の最先端を担うグルッポの誕生である。日を経るに従って業者が州内で激増したが、いったい誰が最初に〝手をつけた〟という点になると、はっきりしたことは分からない。

岩根友一（故人）がアラサツーバで、三ノ宮がグアララペスで手掛けたのが五一年下半期、あるいは植村マリオ、佐藤千枝

子のコンビがサンパウロ市内のピラチニンガ放送局を使っての野菜相場放送が岩根、三ノ宮より早かった…とか、話はまちまちである。


「桜の国のメロディー」の菊地啓（右）

このような中で、唯ひとつはっきりしているのは、ミクロ・プロパガンダ（岩上進）によるバンディランテスからの放送が五二年六月から始められたことである。岩上は、既成の日語放送番組より一段高い水準の内容を目指し、奥原康栄の賛同を得た後、毎朝五時からの一時間「桜の国のメロディー」を電波に乗せた。古野菊生によるニュース解説も好評で、菊地啓が翌五三年五月からアナウンサーを担当した。コロニア日語放送の〝夜明け〟、いわゆる神代の時代である。

五三年に入るとともに、今井英三、吹本義雄、奥原康栄、上杉清司などが岩上に次ぎ業界入りした。勿論、ブラジル人経営

の放送局から一時間内外を買って始めたわけだが、乏しい資材にもかかわらず、それぞれアイデアを駆使しての番組は評判が良かった。五五年には「わかもと」の中久保社長が今井からジフゾーラ放送局の日語放送権を手に入れるとともに、日本からの新録音テープを流し始めた。各自がこれに倣ったのは当然で、これにより番組の内容は一段と飛躍した。番組の編成に各自が熱意を持って当るようになったわけである。



アンドラジーナ市放送局での歌謡番組出演者ら（1955年）

特筆したいのは、各局の放送時間延長である。五六年を例にとると、長・短波のクルツーラ、長波のピラチニンガ、サンパウロ、パナメリカーナ、ジフゾーラ、ノーヴェ・デ・ジュリオ

などを加えると十指に余る目語放送の延時間は、一日十三時間であった。毎日午前五時から夜十時過ぎまでダイヤルを回すとどこかでの日語放送が聞えてくる。まさに日語放送にとっての〝黄金時代〟であった。

これに刺激されてか、プレシデンテ・プルデンテ、バウルー、アラサツーバ、グアララペス、マリリア、アダマンチーナのほかサンパウロ近郊のコロニア集団地に次々と日語放送が続出した。その中でもブラジル広報社（奥原康栄、プブリブラスの前身）の活動は素晴しかった。日本の業界での動きに心を配るとともに、〝これはいける〟となると、強引に取り入れる。新テープによる番組はバラエティーに富んだもので、パナアメリカーナ、次いでサンパウロ、サント・アマーロなどを通じコロニアに娯楽を提供したことは忘れることができない。七〇年、惜しくも交通事故で亡くなった。

クルツーラ系の合同によるブラジル毎日放送会社は吹本悠紀男、上杉清司が現地側、岩田某が日本側代表として大阪毎日放送と提携したのも確か五六年だった。娯楽、教養番組を通じて業界に新風を吹込んだ。同社によるとすべてが大型プロジェクトであったため、多大な犠牲を強いられたという。



クルツーラ日語放送のメンバー。前列右より今泉千代、二人おいて羽田宗義、樋口猪之助、後列同じく大村吉信、津野丘陽、島田正一、内海博、指田益太郎、山崎哲ら（58年）



第十三回全伯歌謡コンクールでの民謡の部上位入賞者ら、右端は司会の内海博（65年、シネ・パラマウントで）

公開録音、のど自慢はやる

日語放送による娯楽、教養番組の増大に伴ない、コロニアでの芸能活動が目立ってきたのも事実である。歌謡曲、民謡、童謡、舞踊曲など、好きなものが居ながらにして聞けるとともに、練習もできる。さらに公開録音に参加しての〃のど自慢〃など、こんにちイマージュンス・ド・ジャポン、ジャパン・ポップ・

ショーのＴＶ番組に見る歌謡大会へと発展した。また、「お知らせ時間」などは、地方の人々に非常に喜ばれたものである。

公開録音といえば、五五年から五九年まで市内サン・ジュオン通にあったクルツーラはブラジル平凡友の会（定兼勤）のサクラ・クラブ平凡バンドに常にスタジオを提供していた。この公開録音の普及は新楽団の誕生、新人の発掘に貢献している。

ところが、クルツーラがスマレ区に移転すると、公開録音の場所は市内各区の広場である。毎週土曜日夜、内容は日本で流行した「三つの唄」や「ピヨピヨ大学」のモノマネ、その他であったが、一般にとってテレビは高嶺の花の時代だったので、非常に喜ばれた。

しかし、アシ、アゴ代は自費、その上、録音は翌日の日曜朝に番組として流すので、その整理や修正に追われ、いつも家に帰るのは真夜中過ぎという有様。さらに資金難、公開録音は遂に各区から撤退した。

その後、各局によって日曜朝の八時から十一時までの公開録音がシネ・ジョイアやニッポンなどで行なわれた。一種の〝客集め〟を狙ってのものだが、一般には好評だった。現在、作家として活動している醍醐麻沙夫がジョイアでピアノ判奏、島田正市がアコオデオン、司会では大村吉信、内海博などが常連だった。いま司会者として名の通っている藤瀬圭子はデビュー前、三宅ローザはセーラ服の女学生で、お姉さん達が舞台を踏

んでいた。

野球、陸上競技を実況放送

このように日語放送の最盛期は、芸能界との関係が強かったが、その一方、野球試合の実況放送などによりスポーツ界との交流も活発になった。この分野で活躍したのは岩根友一、南俊夫、松井春波（いずれも故人）などで、それぞれが特色ずけた取材と放送で好評だった。このうち南は、市営ボン・レチーロ球場での野球試合と、チエテ・クラブでの全伯陸上競技大会の実況を同時に放送する…という〝立体放送〟の実現に成功、コロニアに話題を提供した。



野球の実況放送。内海（右）と熊谷＝ロンドリーナ球場



ラジオ・クルツーラの実況放送スタッフ

野球の実況放送における〝トップ・バッタア〟は佐藤アルマンド。五六年、オール・ブラジル軍のアルゼンチン遠征に同行、ブエノスからオール・アルゼンチン軍との試合を実況放送した。また、この年、マリリアでの日毎主催、地方選抜大会を手がけたのも佐藤であったように思う。

五七年の地方選抜はプ・プルデンテが会場で、内海博は横田守正、高野芳久、大原友重などの側面協力の下に実況を電波に乗せた。

これらが切掛けとなり、他の日語放送もこの分野への進出を開始した。確を年は忘れたが球連主催の全伯大会（九月）がツパンで行なわれた時にはクルツーラ（内海）、サント・アマーロとピラチニンガ（岩根）など三局による実況放送となった。決勝戦はサンパウロ代表のジガンテと、北パ代表のバンディランテス。ゲームは初回から熱を帯びたものであったが、三回戦に入ると間もなく大雨の襲来で試合は一時中止、その後も降ったりやんだりで球審の西徹（のちバストス市長）は「神よ、いま暫らく…」と云ったかどうかは知らないが、天を仰いで呆然の態。まだ午後二時ちょっと過ぎ、岩根は早々にも試合は中止と一方的に中止と決めて送信器のスイッチを切ったが、クルツーラは午後五時までの時間をスポンサーに提供しているので午前中の試合のダイジェスト、グラウンドの排水に取組んでいる人々の動きなどを約一時間半にわたって放送した。後日、スポ

ンサーから「最高の努力を認める」とほめられ、てれて雨のため破れたスクラップ・ブックの表紙を撫ででいたこともある。

その後、ロンドリーナでの地方選抜には四局が競って同時に実況放送ということもあったが、外国語でのラジオ放送禁止という当局の指令で、スポーツ実況放送の電波は空の彼方へと消えて行った。



ラジオ・クルツーラのアナウンサーら。右より中鉢照子、波多野涼子、浅井八重子、関清子、内海博、淘山甫（一九六一年一月）

多彩だったアナウンサーら

次に、今でも思い出に残るアナウンサー（同業者）らの活躍、その他を紹介したい。

一見、その動きは余り派手ではなかったが根強いファン層を握ってじっくり仕事をしたのはサンパウロの菊地啓。自ら若月一郎のペン・ネームでドラマの脚本をものにし、約十名ぐらいの声優を擁して毎週短篇を発表するかたわら、三十回連続の長篇も手掛けていたのは立派だった。脚本、演出、擬音効果、音楽など、すべてが〝自作自演〟。菊地は戦前から戦時中にかけ、当時リベルダーデ街（ファグンデス街に近い所）にあったカルロス・ゴーメス音楽々院の声楽科に席を置いていた本格的な音楽家。それだけに仕事に対しては熱心であるとともに厳しく、その仕上げには常に最善を目指し、予算不足の場合は身銭を切っても万全を期すなど、第三者にはちょっと理解されない点で陰の苦労人でもあった。



菊地啓（写真右端）によるラジオ・ドラマの声優ら（ラジオ・サンパウロで）

菊地はその後、次々と職場を変えたが、日語放送については情熱を燃やし続けた。しかし、日語放送の禁止はどうにもならず、五二年からの活動は七四年に至って〝休止符〟を打つことを強いられた。菊地によると、約二十年間にわたって集めた放送用の資料、レコード、脚本、文献、書籍類などはすべて当局によって押収され、こんにちに至っている。

日語放送のアナウンサーとしてマイクの前に立ったものは、わずか二、三か月の短かい人から二十数年にわたる菊地を加えると、おそらく百名以上になるであろう。このうちには日本で正規のアナウンサーとしての教育、または放送劇団などに籍を置いて勉強していたのは石崎則之、花岡カヤ、畑勝喜などではなかろうか。先の菊地啓、岩根友一、松井春波などのように映画解説者（活弁）、日語教師からの転向者もあった。しかし、なんといっても一番多かったのは、地方からサンパウロに出て来たが、日本語以外はまったく駄目で適当な仕事には就けなかったが、他に較べてちょっとだけ喋るのがうまい……というものだった。また、女性アナウンサーの場合は専業は少なくてアルバイトが大半。なかにはマイクを握るのが楽しいからとか、自分の名前が出るので……なんていう人もあった。

なお、最後になったが、目語放送と併行して歌謡曲の流行があった。カーザ水本主催の第一回素人のど自慢大会（五三年正月、シネオデオン）を皮切りに各地での〝のど自慢大会〟の続

出がこれを裏書している。また、カーザ水本は、当初こそ店の宣伝に重点をおいて日語放送に乗出したが、その発展に傾けた努力、後身への職場解放に尽した功績も忘れることが出来をいものの一つである。

すべては、もうひと昔前の話。当局による制限とテレビの普及により日本語放送は二十数年にわたる活動に幕を閉じたが、まったく全廃されたわけでもない。現にサンパウロの近郊都市に二、三あるが、それは五九年から六一、二年にかけての盛況さを偲ぶなにものもない。

（文中敬称略）

（一九八五年一月・記）



右から南俊夫、菊地啓、田谷

さながら〃雨後の筍〃

日語放送、世にはびこる

サンパウロ市内に１３局

電波という公共物に日本語を乗せるようになったのは第二次大戦後の現象である。初めは地方局がまれに日本語のレコードをかけたり、歌番組に日本人が飛入りしたりということだったが、アラサツーバ市の岩根友一が中心になって週一回、日語アナの入った公開の歌番組を一九四七年に始めた。その後、岩根はサンパウロに移り、五〇年にピラチニンガ局の日語放送を受け持った。（その前年に同局では日語アナなしの日本のレコードだけの放送はしていた）朝五時から五時半まで、スポンサーはバンディランテスとコチアの両組合で、その日の農産物市況を報じて、日本の歌謡曲や童謡のレコードをかけた。アナウンサーは岩根友一と三条道子で、いわば農家向けのお早よう番組であり、これが以後の日語放送の基本的なタイプの一つとなった。それをきっかけにして、日語放送の番組は急激に増え五六年の記録ではサンパウロ州に四十以上、サンパウロ市だけで十三となっている。これらは、民放の時間を十五分から一時間半程買って、番組制作者が広告をとりレコードをかければ成立する番組なので急増したのだが、局が増えるにしたがって、ブラ

ジル広報社（ラジオ・サンパウロ）は連続放送劇。ラジオ・クルツーラではアベック歌合戦、ニュース速報。ラジオ・エセルシオルから生長の家、マイク探訪などと各番組が特色を出すようになり夕方の時間帯もとるようになった。



木暮実千代と日語放送アナウンサーら

五五年のサンパウロ市における日語放送の時間帯は早朝番組の他に、午前七時半～八時（クルツーラ局、クイズ、お好み演芸）、午前七時～八時（ジフゾーラ局、主婦、子供）午前八時半～九時半（ピラチニンガ局、料理、平凡アワー）、午前八時～九時（サンパウロ局、内外ニュース、婦人講睦）。午後の番組としては二一時半～二二時（ＡＢＣ局、教養）、二二時三〇分～二三時一〇分（サンパウロ局、連続放送劇）、二〇時～二〇時四〇分（ニュース）などとなっている。

野球放送、実況や速報も

その後、クイズ、公開番組などが人気を呼ぶようになり、岩根友一が初めてクイズ出題を（パナメリカーナ局）したときは、二千通以上の応募があったという。全伯のど自慢大会の中継をしたり、野球放送をしたり、実況や速報も手がけるようになった。公開番組は各局とも、日曜日の午前に空いている映画館を借りて行なった。

いずれにせよ、公開番組、連続放送劇などの好調からブラジル広報社（奥原康栄、マリオ）はサント・アマーロ放送局を買いとり自社の局を持つまでになった。その後はＴＶに進出し、現在は奥原プロダクションとなっている。

六六年六月以後、外国語放送が禁止された影響もあり（歌および短かいアナウンスは認められている）、現在は日語放送はずっと少なくなり、サンパウロ市で数局、ラジオ・カシッキの朝九時から十時まで、グァルーリョスの局で朝五時から七時まで、ラジオ・ムリェールの日曜朝八時から一〇時半までなどで、アナウンサーもアルベルト・村田などの二世たちで、日本紹介アワーなど主に二、三世の女性聴取者を対象とした番組になっている。

（ブラジル日本文化協会、一九八〇年八月　十五日発行、「ブラジル日本移民七〇年史」　から転載）。



シネ・パラマウントで「大津美子ショー」司会は内海博（右端）、一九五八年



クルツーラでの歌合戦優勝者、藤沢サトミ（右端）にトロフィイ、菊地、伊藤、大谷ら

ＴＶ界に確固たる地位

松田プロ　奥原プロ　好敵手、鎬を削る

山口　春海　（奥原プロ特別企画部長）

番組編成に意欲的な奥原プロ

一九七〇年十月、奥原プロダクション（奥原マリオ社長）が過去のラジオ、芸能社、テレビ宣伝などの経験を生かして、テレビ番組「イマージュンス・ド・ジャポン」をＴＶ・ＴＵＰＩ（カナール４）から放送を開始した。

ブラジルにおいて初めて日系人経営のテレビ番組である。それだけに日系コロニアの期待は予想以上に大きく、一般大衆の好奇な眼が向けられた。

司会者は、女性アナウンサアの本田レイミで、それまでＴＶ・ＴＵＰＩのタレントとして活躍していたのを奥原社長が抜擢、テレビ番組に初の日系司会者として登場させた。



Ｍ・奥原プロダクションの最大のヒット美空ひばりショー」のスナップ

難しい放送規定や放送局の時間問題、スタッフの移動など、種々な難関が待っていたが奥原社長はブラジルにおける日系テレビ番組のパイオニアとして、常に斬新（ざんしん）的な番組をブラジル大衆に伝えることに専念し、ＮＨＫ、テレビ朝日、その他日本のテレビ局と事業提携を結び、ニュース、歌謡、スポーツ、その他の番組を取寄せて放映し、ことし（一九八四年）創

立十四周年を迎えた。


故・奥原康栄前社長

その間、ＴＶ・ＴＵＰＩ、ＴＶ・ＲＥＣＯＲＤ、ＴＶ・ＢＡＮＤＥＩＲＡＮＴＥＳ、再びＴＶ・ＲＥＣＯＲＤに移り、現在はＴＶ・ＧＡＺＥＴＡ（カナール１１）で毎週日曜日正午から午後三時半まで、三時間半の放映を続けているが、ブラジルのテレビ放映は開局から僅かに三十三年の歴史の中で継続十四年の番組は国内で五指の一つに数えられる偉業である。

最初の司会者、本田レイミは一年余りで引退したが、その頃日系歌手でテレビにデビュウした三宅ローザがその跡を受けて現在に至り、人気司会者の座を守っている。

「イマージェンス・ド・ジャポン」のテレビ番組は、情報、娯楽、教養をスロオガンに、積極的に日本とブラジルの相互理解と両国の文化交流の推進のために終始努力を重ねて来た。ブラジルの日系総人口八十万人余を対象にしているだけではなく、今日は広く一般ブラジル人大衆にも愛される番組として、高い視聴率を占めている。

後進・頑張る松田プロ

一九七三年十一月、奥原プロダクションの「イマージュンス・ド・ジャポン」に遅れること三年、松田プロダクション（松田ネルソン社長）の「ジャパン・ポップ・ショー」が発足した。

松田社長は放送事業に着手するに当り、まず一年余り奥原プロダクションの「イマージュンス・ド・ジャポン」で番組構成や司会の修業を積んだ後、同志とともにＴＶ・ＢＡＮＤＥＩＲＡＮＴＥＳ（カナール１３）から自ら司会に立ち、歌謡番組中心の「ジャパン・ポップ・ショー」を開始した。


松田スザーナとネルソン

先の「イマージュンス・ド・ジャポン」とは一味違った番組として、これも再三にわたって放送局は替ったが、現在まで十一年間も継続している努力は並々でない。現在、カナール１３のＲＥＤＥ・ＢＡＮＤＥＩＲＡＮＴＥＳから毎日曜日の朝六時から四十分の放映である。

「イマージェンス・ド・ジャポン」と、「ジャパン・ポップ・ショー」との大きな共通点は、司会者がともにそれぞれの社長夫人であることだ。「イマージュンス・ド・ジャポン」のローザ三宅、「ジャポン・ポップ・ショー」の松田スザーナ。両者とも十年余りのキャリアで押しも押されもせぬ名司会者ぶりを発揮しているのは頼もしい。

テレビ番組で視聴者を引きつけるのには、なんといっても司会者が誘導性のうまさと、好感の持てる品性を保つことだ。それには天性もあるが司会者自身がたゆまぬ努力で、急転する時代をキャッチしていなければならない。

日系テレビ番組の数少ない司会者の中で、以前に「イマージェンス・ド・ジャポン」でローザ三宅とともに六、七年勤めたアルベルト村田も印象に残る人である。彼は自身共営する宣伝会社の事務繁多のため引退したが、フアンの惜しむ声がしきりであった。

「沖縄スペシアール」

一九八〇年、サント・アンドレ市の上地プブリシダーデ社が、TV・GAZETA（カナール11）から毎日曜日の夜、「沖縄スペシアール」と銘打ってテレビ番組を開始した。

当時ボクシングの世界選手権保持者、具志堅用高のタイトル防衛戦や、沖縄民謡などを紹介して好評を得たが、一か年を経ず

して番組を中止したのは残念だ。とは云え、日系人でテレビ放送に携わった三者ともに沖縄県出身者の二世達であることは、偶然といおうか、報道機関の先端を行くテレビ放送事業に着眼して取組んだということは、ブラジルに移住した同県人の進取の血が共通しているからというようにうかがえる。



松田プロの「JUDY ONG SHOW」1981年

日系テレビの主な番組

「イマージェンス・ド・ジャポン」放送開始当時から現在まで

① 日本文化紹介（風俗、習慣、活花、茶道その他）

② 日本の武芸（柔道、剣道、空手、その他）

③ 日本語講座

④ 子供番組（ちびっこのど自慢、絵画コンクール、児童劇団その他）

⑤スポーツ番組　（日本大相撲本場所ダイジェスト、ブラジル青少年野球大会実況放送その他）

⑥ＮＨＫ思い出のメロディイ

⑦歌のチャンピォン　（優勝者には空路による日本旅行、乗用車などの豪華賞品）

⑧ブラジル紅白歌合戦（ラジオ・サント・アマーロ時代から継続して主催）

⑨天皇ご誕生の日特別番組



Homenagem à data natalícia do imperador Hirohito.　天皇誕生日特別番組



Homenagem ao "Dia das Mães".　（母の日特別番組）



Apresentação da cultura tradicional japonesa — Dança de Nô.　（日本伝統文化の紹介）



Festival da Canção Popular Japonesa do Brasil.　（ブラジル紅白歌合戦）

⑩ふるさとの歌まつり　（ＮＨＫ）

⑪日本の歌　（テレビ朝日）

⑫物識り合戦　（大学校対大学校、クラブ対クラブ）

⑬国際ルポ　（ガイゼル大統領訪日その他）

⑭日本週間ニュース　（テレビ朝日）

⑮歌謡ベスト３０（テレビ朝日）
⑯ブラジルなつかしのメロディイ
⑰ブラジル・ミス二世美人コンテスト（ミス当選者には日本製トロフィイと副賞として乗用車、訪日旅行の特典を贈与）
⑱ＮＨＫ紅白歌合戦
⑲美空ひばり芸能生活三十周年
⑳ＮＨＫ歌のグランドショオ
⑪日本芸能人の招聘

「イマージェンス・ド・ジャポン」

現在の（一九八四年九月現在）番組

①ＮＨＫ歌謡ホール
②若人の歌
⑨ＪＩＪニュース
④ＮＨＫ週間ニュース
⑤プロレスリング
⑥日本大相撲本場所ダイジェスト
⑦ＮＨＫ週間スポーツ・ニュース
⑧歌のチャンピオン

⑨ミス二世美人コンテスト
⑲プロゴルフ・マッチプレエ
⑪日本芸能人の招聘など。


松田プロ制作の主な番組

「ジャパン・ポップ・ショー」（松田プロ）の主な番組

①学童ギンカーナ　（日語学校生徒）
②週間ヒットパレード（歌謡ショー）
③ジャパン・ポップ歌合戦
④ポップのど自慢大会（素人のど自慢）
⑤日本武道の紹介　（柔・剣道、空手）
⑥日本の週間ニュース
⑦クラブ対抗ギンカーナ
⑧ミス・コロニア・コンクール
⑨日本芸能人の招聘など。

紅白歌合戦の宇宙衛星中継

このように二つの日系テレビの多彩な番組の中で、最も奇抜でかつテレビ番組の面目を躍如とさせたものは、一九七五年十二日三十一日、「イマージェンス・ド・ジャポン」によるＮＨＫ紅白歌合戦の実況を宇宙衛星中継で日本と同時放映したことだ。それまで、この番組は、フイルムに録画されたものがＮＨＫから奥原プロダクションに送付され、年が明けてからの二、三月頃に放映されていたものであるが、進取の気性に富む奥原マリオ社長の英断の下に、莫大な費用をも省りみず、ＮＨＫの優れた技術とタイアップして決行されたものである。

当日はリベルダーデ商工会の好意によりプラッサ・リベルダーデに数台のテレビ受像器が設置され、半信半疑の大衆フアンの集る中の午前九時十分〝アロン　アロン・テレエスペクタドーレス・ド・ブラジル〟と、ローザ三宅アナウンサーの声とともに鮮明なカラー画像が放映された時には、視聴者の全てが味わった感激を大げさに表現すれば、人類が衛星で初の月面踏査成功の報に接した時と同じくするものであったとか。

以来、ＮＨＫ紅白歌合戦の番組は「イマージェンス・ド・ジャポン」の目玉商品として日本国内と同時にブラジルで放映されており、ブラジル・テレビ界初まって以来の大掛りな宇宙衛星中継放送として、業界はもとより一般の注目を浴びている。

「イマージエンス・ド・ジヤポン」「ジャパン・ポップ・ショオ」はともに日本のニュースと歌謡番組、芸能番組を主としていることに変りなく、常にフアンの要望に応えてフレッシュな企画の下で未来へ挑戦し、日本とブラジルの距離を締めることに専念して、日本をブラジル大衆に結びつけている。

日系テレビと芸能人の招聘

日本から芸能人の来伯は、戦後間もなくの一九五一年一月、日伯毎日新聞社が東海林太郎、小唄勝太郎、三味線豊吉、浪曲の篠田実と房信父子の五人を招聘したのに始まり、次いで日系シネマ関係者、サンパウロに支社を持つ松竹、東宝、日活や各提携会社が自社専属の男女俳優、歌手らを招いてフアンにサービスした。

圧巻は美空ひばりの聖市公演

こうした各シネマ関係者の芸能人招聘の動きよりも活発であったのが、現在のテレビ番組「イマージェンス・ド・ジャポン」の前身ともいえる「ラジオ・サント・アマーロ」（故・奥原康栄社長）であった。故社長は同郷の歌手・仲曽根美樹に始まり、当時の人気歌手を次々と招聘したが、その圧巻は一九七〇年、日本歌謡界不世出の天才女性歌手・美空ひばりを招き、イ

ビラプエラ室内体育館の大鉄傘の下に三日間で四万に余る観客を集めたことだ。



美空ひばり



金田たつえ



小林幸子

奥原康栄社長は不幸にしてこの大勝負の二日目、帰宅の途次の自動車事故によって他界する。故社長はコロニア社会における大興行師のみならず、放送業界の英雄として見るに価する傑物であった。冥福を祈る。

「ラジオ・サント・アマーロ」の奥原康栄社長の亡き後、副社長の奥原マリオ氏（康栄氏の令弟）は長年の放送事業の経験から来る〈感〉と、旺盛な進取の気性を発揮して敢然とテレビ番組放送に取組んだのであった。

奥原ＴＶプロダクション「イマージェンス・ド・ジャポン」と銘打って……。その道は多難であったことは云うまでもない。それはさておき、奥原プロダクションがテレビ番組放送以外に芸能人招聘にも力を入れたことは、人気番組である「日本の歌謡曲」の有名歌手の〝生の声〟に接する機会を要望するファンの期待に応えるため、利益を度外視しての出血サービスと聞く。それは「ジャパン・ポップ・ショオ」（松田ネルソン社長）にも云えることで、双方とも毎年日本の一級スターを迎えて鎬（しのぎ）を削るの感がある。

一方が、五木ひろしを迎えてイビラプエラ室内体育館でのショーで人気を呼べば、片や八代亜紀で、アニエンビーのコンヴェンソン・ホールで巻き返すなど、実に日本に居てもそのコンサートの入場券はたやすく手に入りにくいといわれるほどの有名タレントを次々と招いたことは天晴（あっぱ）れである。

興行に要求される緻密な計算

有名タレントのショーで高額の入場料を取って、興行師はさぞ儲ったかと思えばそうでも無いらしい。物凄いブラジルのイ

ンフレでは通貨クルゼイロの価値感の標準を合せることが難しい。この時のタレントの出演料は米ドルか円建である。人気タレントの場合は日本でも少なくとも一年前からスケジュールがびっしり決っているそうだ。そこで、半年、あるいは一年も前に招聘契約を結ぶ場合、よほど緻密な計算を要するが、クルゼイロの暴落（対米ドル）が一番怖い。

それに、人気タレントほど日本からの楽団員や付添人の数も多い。ブラジル音楽家協会の規定により、外国からの演奏者の数に比例してブラジルの楽士を起用せねばならず（この場合、ブラジル側楽団のギャラは一日幾らではなく、ワンステージ一日幾らである）。

日本から来伯する人々の往復航空料金、宿泊料、食費、国内での交通費、加えて、おみやげ代などなど。さらにショー開催に欠かすことのできない舞台装置、音響と照明効果などにも莫大な金が必要である。また、会場の案内・整理に当る臨時使用人の手当や、新聞、ラジオ、テレビなどによる宣伝費などを数え上げれば大変な出費であろうことがうなずける。よほど時期的に恵まれぬ場合、欠損はまぬかれないのが当然だ。

日系コロニアの経済的向上にともない、各文化団体や県人会の組織の強化によるそれぞれの〝催し物〟が洗練されつつある昨今、日本からの芸能人招聘はよほど慎重に時期を選ばねばならぬということだ。

おもな芸能人の特別ショー

奥原プロダクション（TV、イマジェンス・ド・ジャポン）が一九七八年九月から昨八四年五目までの間に日本から招いた芸能人によるサンパウロでの特別ショーのおもなものは、次のとおりである。

▽一九七八年九月二十一日から二十六日＝「田端義夫芸能生活四十周年記念チャリティーショー」、文協記念講堂。歌い続けてすでに四十年！、苦労人〃バタヤン〃　の面目躍如とした好ステージで観客を魅了した。田畑は六八年に当時のラジオ・サント・アマーロの招聘以来、二回目のブラジル公演であった。



田端義夫

▽七九年九月七日から九日＝「田畑義夫同邦慰問チャリティーショー」文協記念講堂。

田畑にとって第三回目のブラジル公演、人生の哀しさを淡々

と歌い土げる　〃田畑節〃　は観客に大満足を与えた。

▽「三船敏郎ゴールデン・ショー」＝八一年十月、文協記念講堂。

ヴアリグ航空がブラジル、日本で放映のコマーシャル・フイルム撮影のために招いた三船敏郎は十月一日、文協のステージからコロニアのファンに挨拶、お得意の〃殺陣〃の型などを披露、観客を沸かせた。



三船敏郎

▽「ロス・インディオス・ゴールデン・ショー」＝八二年一月十、十一日。アニェンビー・コンベンション・ホール。

清楚可憐な美貌歌手シルビアを加えたロス・インディオスの洗練されたラテンアメリカ調の同ショーは、コロニア一般のほ

か、若年層に大好評だった。

▽「金田たつえゴールデン・ショー」＝八二年四月十六、十七、十八日。シネ松竹。

デビュー以来苦節十数年、『花街の母』で一躍歌謡界のスターダムにのし上がった金田たつえ。ブラジル公演に先立つ数か月前からイマジェンス・ド・ジャポン番組内での宣伝とあいまって、観客収容数に欠けるシネ松竹の客席は三日間とも超満員に盛況であった。

▽「八代亜紀ブラジル公演」＝八三年三月二十五、二十六、二十七日。アニェンビー・コンベンション・ホール。

現在、歌謡界で五木ひろしと人気を二分する八代亜紀。彼女の人気はさしもの大会場を満員にして余りがあり、演歌の女王としての貫録充分のステージに観客は陶酔の極に引き込まれたようだった。



八代亜紀

▽「小林幸子ビッグ・ショー」＝八三年五月二十七、二十八、二十九日。文協記念講堂。

観客に優しく語りかける小林の演歌、デビュー以来二十年のキャリアはさすが。先々三月の八代亜紀ショーの直後にもかかわらず、多数の観客を吸収、成績を上げた。



小林幸子

▽「青江三奈ゴールデン・ショー」＝八四年五月十一、十二、十三日。文協記念講堂。

青江の華麗なデビュー曲である『恍惚のブルース』に始まり、数々のヒット曲、ブルース・メドレーや瀬戸内順の歌謡声帯模写などのバラエティーに富んだプログラムは〝ブルースの名花〟青江三奈のブラジルにおける声価をさらに一段と高めた。





（文中敬称略）

（奥原プロダクション特別企画部長、一九八五年一月・記）。



青江三奈

第8部

郷土芸能

日本では神への奉仕。

〔郷土芸能〕（祭）　提燈の光に照らされ山車や神輿がねり歩き、笛や太鼓の響きで大人を興奮の渦へ巻きこむ祭り。ヨーロッパでも四季折々、ブラスバンドも賑やかに仮面が登場したり、花で飾ったフロートがパレードします。東西南北で祭りの〝形〟は違っても一つのシンボルのもとに集い、豊饒と招福を祈る人の〝心〟は一つです。

祭りの語源は神に仕え、神を奉る…

人は太古から農耕を支配する大地、水、太陽を神格化し、穀霊を崇拝してきました。私たち稲作民族は土地神へ御酒（みき）、御食（みけ）を献じ、苗代祭り、田植え祭りなどを行ないました。

こうした一連の収穫儀礼はアジア全域で同様にみられます。一方、ヨーロッパでも収穫を祈る儀礼は多彩でした。ローマで

は二月は潔めと償いの月のため、光とローソクで農具を潔め、スイスやドイツでは豊饒の象徴＝女性が農夫や鋤に水をかけ祝福しました。北ヨーロッパとくにアルプスを中心にした出岳地帯では、春間近に開く謝肉祭はファスナハト（ＦＡＳＮＡＣＨＴ）と呼ばれています。「ＦＡＳＥＮ」は「成長する、栄える」の意味をもち、「ＮＡＣＨＴ」は「夜」を示していることをみても、謝肉祭は来るべき春の恵みを祈る聖夜でした。自然のリズムで暮らしていた人々にとって〝神に仕え、神を奉（たてまつ）る心〟は不可欠で、ここから日本の〝祭り〟の語源も由来しています。

西洋では神との祝宴。

シンボルにこめた豊饒への祈り…

神に仕える心は柱、火、仮面などの〝依り代〟（よりしろ）に凝縮されています。正月の門松、神社の幟、鉾などがその表われです。

また、ヨーロッパでのそれは五月一日の「五月の柱」（メイ・ポール＝樹）であり、クリスマスツリーの樅の木です。

火の神聖視は火祭りにみられ、ヨーロッパの復活祭では丘で火を燃やし、家畜の無事、畑の豊饒を願いました。これは日本のねぶた祭り、竿燈祭、ドンド焼（若火）と同様です。

また、一般にカーニバルと呼ばれる謝肉祭には仮面が登場します。冬の悪霊を退け、農業神をたたえるためで、ちなみに英語の「ＭＡＳＫ」は、ドイツ語の「ＭＡＳＣＨＥ」（綱目）と同系語で元来は死者を包む網の意でした。ちょうどエジプト人がミイラにマスクを付け、死からの復活を信じたのと同じように祖霊信仰と結びつき仮面は豊饒儀礼の聖具となったのです。

一方、日本の仮面は中央アジアの土俗信仰にギリシアやインドの影響が加わって、伎楽面、舞楽面として天平期に渡来しました。獅子頭はその代表で悪霊扱いと豊饒信仰がこめられています。仮面に東西の共通点を認めても、ヨーロッパの祭り「ＦＥＳＴＩＶＡＬ」は本来〝楽しさ〟を意味するラテン語「ＦＥＳＴＵＳ」から発しているように、祝祭の賑やかな場になったのです。これに対し日本では、神座を設け神を招き、人と神とが交歓する〝神楽〟（かぐら）に表徴される形にまで発展したのです。

神と人とが交歓する空間…

祭りは地域を守る神の加護を集団で祈る機会でもあります。日本では獅子舞いや神輿が村中をねり歩く姿がみられます。スイスでも一月六日に子供たちが新年の神をたたえ家々を訪ねたり、村人が着飾り仮装し歌いながらパレードしました。

一方、個人も清浄な心で、祭りに臨みました。平安期、田へ神

を迎えるため恋を慎んだ五月（さつき）の御精進（みそうじ）もその一つ。これはキリスト教徒が復活祭の前に、肉を断ったのと同じです。また、神と人との一体化は共通、共同を意味する「ＣＯＭＵＮＩＯＮ」（聖体拝領）に顕著です。さらに日本でも月の一定日に神を招き、囃し舞い、酒肴を共にする儀礼がありました。

この神のそばにはべり、もてなす心が歌舞音曲に彩られ数々の芸能を生み、現在に脈々と受け継がれています。このように非日常（ハレ）の敬虔な空間である祭りで、遠い阻先へつながる〃心の故郷〃を今も見出しているのが、私たち日本人といえるのではないでしょうか。

（日本アイ・ビ・エム㈱発行「心とかたち東西南北」から転載。監修・広島大学教授　谷口幸男）。

神楽で文化交流と親善

保存会設立から本格的活動へ

井原　爾一　（広島神楽保存会）

神楽団誕生は新聞記書がきっかけ

一九七二年二月、訪日中の小生は何気無く見た某紙の

「盛んな浄土真宗の地、湯来町神楽団、高宮町山根神楽団に胸打たれる」

と云う記事に関心を持ち、これを切取ってブラジルに持ち帰ったのが、ブラジルにおける神楽団誕生の切掛けとなった。

たまたま日本の家族会より細川照男氏の厳父が来伯の際、孫の昌博君への土産にと鬼の面を持参した。これを見た小生は細川氏に、これで神楽をやろうじゃないかと誘った。同氏は、神楽は見たことはあるが、舞ったことはない…とのことだったが、二人はなんとかなるだろうと、神楽団の発起会を作ることになった。

その後、菅原米秋氏を加えた三人で数回にわたって話合い、団長には小生の同郷である西本茂氏にお願けすることを決め、同氏にこれをお願いし、その了承を得た。

一九七三年一月、神楽団設立に本格的に取組むため、拙宅で大太鼓、小太鼓、横笛、調子鐘などの作製を始めた。大太鼓、小

太鼓に必要な樽（一〇〇と二〇リットル）は、さくら醤油の中矢末吉氏から、また皮は天理教々会長梶山氏からそれぞれ寄贈された。太鼓は大小とも高さ七〇センチに切り、皮はなめしてから張付け、しめ木を掛けて乾かしたのち鋲を打つ。調子鐘は鋼鉄でフィゴを使って作った。また面は細川氏夫妻、道管武保氏、小生などにより石膏製の、人倫の鬼の面（二）ばあさんの面、女面各一個をものにした。こう書くと簡単なようだが、それぞれを汗水を流しての作業だった。

一九七三年二月、待望の広島神楽保存会が誕生した。おもな顔ぶれは（敬称略）

顧問＝延満三五郎、中沢源一郎、池森春三（故）。

推進委員会＝委員長・沖桝春登、副、上西政市（故）、委員・定常大二郎、塙川暢夫（故）、阿鷹富夫、押岩隆男。

会長・西本茂、副・菅原米秋、井原爾一、会計・藤浦孝登、監査・則貞登、吉田政敵、渉外、細川照男、会員・中野晃治、上岡忠則、大田典之、大田忠之、大田義之、滝野柳市、井原幸雄、道管武保、細川昌博、古田川秀雄、古田川猛、井原正則、菅原龍夫、江藤ジョルジ、江藤ジャイメ。

などであった。

神楽保存会設立に伴い、こんどは衣裳作りである。同年二月からの毎日曜日、皆が拙宅に集っての仕事だが、会には資金面で余裕が無く、着物柄、衣裳類の裏地は、苦しかったが小生が

すべて負担した。

また、西本会長宅に毎晩練習に通い十二時一時ころまで五行の舞の基本を覚えるまで一生懸命であった。その間、家族の方々に夜食を出して貰う。さらにロージャ朝日の店の中を片付けては練習をさせていただいたり、両氏のご家族に感謝したい。

神楽の由来

まず神楽の由来を申しますと、平安中期（一〇〇二年ころ）に入って宮中の御神楽となり宮神楽として本格化したものである。今からおよそ一千百年前のことで、昔から日本では神様の行事には必ず神楽を奏楽する。小生たちの広島地方には今から約七百年前に島根から伝わり、秋の氏神祭には必ず神殿で、この神楽を舞っている。日本の歴史を神楽舞に仕組んであり、五穀豊穣、家内安全、国を豊に、世界を平和にと祈願する舞である。

ブラジルにおいても、この無形文化財級の神楽を日伯文化交流と親善に多少なりとも貢献できることを非常に喜びとするものであるとともに、この種の古典芸術の無形文化財がブラジルにもできることを望むものである。

無我夢中だった〃初舞台〃？

神楽保存会の〃初舞台〃は七三年五月、ビラ・カロン文化体育協会主催の家族慰安演芸大会であった。神楽に接するのは初

めて…という人が多く、そのうえ諸道具は不揃い、また舞う人も初めて…というので、皆々がただ茫然とその成行を見守るのみであった。見る人、舞う人、双方とも無我夢中だったのではなかろうか。

〝初舞台〟に続く第二回目は、同年八月のサント・アマーロ区カーザ・グランデ文化協会々館落成祝いの当日だった。出演希望者が無く、小生が二役を演じるという有様で、失敗の連続に終わったことは、招待者側に対して誠に済まなく思っている。

だが〝失敗は成功の母〟とやら、同年十月にはサンパウロ文化協会主催の第三回国際民族舞踊大会（二十一、二の両日）には、日本代表としてわれわれ広島神楽保存会による「八幡」（男山清水八幡宮に関係するもので、舞台は現在の静岡、天から来るという魔王を武勇に優れた宇佐八幡フンダ和気尊が討つ物語）を奏楽、同大会の掉尾を飾った。

七四年を迎えるとともに、広島神楽の奏楽に各方面から〝口〟が掛かるようになった。まったく予期していをかったことだが、われわれは出来る限りこれに応じた。

◇七四年二月　広島県人会定期総会終了後日ごろ猛練習の成果を披露し好評を博す。

◇同年六月　ブラジル日本移民六十六年祭の特別記念番組（イマージュン・ド・ジャポン）に出演。

◇同六月二十二日　文協主催芸能祭に出演した。あるお年寄から、「子供の時、村の鎮守様のお祭りで見た懐しい神楽を五十年振りで目の前に見られることが出来、こんなに嬉しかったことは、ブラジルに来てから初めてだ」と、涙を流しながら喜ばれたことを、いまだに覚えている。次いで八月にはカッポン・ポニート文協会館での県人会支部慰安大会に、さらに十二月には憩の園で、鐘旭八幡を舞って、お年寄たちから喜ばれた。

広島神楽への関心高まる

広島神楽保存会が、われわれ同好者によって設立されてから僅か二年足らずにもかかわらず、その活動は七五年を境として一段と飛躍した。次に神楽保存会が参加出演した主な行事を列挙しよう。

◇七五年一月一日　ピラチニンガ文化体育協会の新年遥拝式＝五穀豊穣、家内安全、世界平和を祈念するため八幡、人倫を奏楽。

一月二十五、六および二月一、二日　サンパウロ市庁公共土木局主催の第二回緑の週間（於・イビラプエラ公園）＝日本代表。大太鼓、小太鼓、横笛、調子鐘から流れる妙なる調べにつられての豪華な舞、時には優雅な舞であり、また、ある時はサンバの如く激しいリズムに乗っての舞に、舞台正面にいた多くのブラジル人は、その素晴しさに心を打たれてか溜息をもらし

ていた。日本伝統芸能の醍醐味が満喫されたのであろう。

三月　リンス広島県人会支部主催家族慰安大会、オザスコおよびラッパ敬老会、モジ・ダス・クルーゼス桃祭り。

六月十八日　リベルダーデ区東洋街の第二期点燈工事完成祝午後七時からリベルダーデ広場特設の舞台で鐘旭、羅生門、八幡を奏楽。京藤間勘輝師門下生による日舞が花を添える。

◇七六年五月　広島県人会マリリア支部家族慰安大会、八月にオザスコの生長の家、九月はスザノ老人クラブの慰安演芸大会。十二月八日は大東亜生存者会の記念祭典など。

◇七七年四月　靖国講招魂祭、六月　オザスコ・コンチネンタールの敬老会、八月　カーザ・グランデ文化体育協会々館落成式。なお、同年二月の役員改選で、小生が第二代目会長に選ばれた。

◇七八年三月　ブラジル広島神楽保存会は在伯広島県人会（会長・池森春三氏）の文化部に組入れられた。これを好期とし県人会有志の寄付により引幕、衣裳などを製作した。

四月三十日　衣裳、幕開きの後に祝宴。同県人多数出席、費用全額は神楽団の負担。細川照男、滝野柳市、角田良登諸氏から鬼、狐道代などの面の寄贈があった。

九月　神楽をブラジルに定着させ、日本の心を伝えようと数年前に発足、活躍しているブラジル広島神楽保存会々長・井原爾一（サンパウロ市在住）は、本場の神楽視察のため単身広島

を訪問、約二か月間滞在。その間、県内の神楽団を歴訪、衣裳の寄贈方を要請、また、同月三十日に県内山県郡加計町で開催された第三十一回西中国選抜神楽競演大会に出席、各神楽団よりの衣裳類（約三〇点）の贈呈式に臨み、これを受領した。この衣裳類は同年三月、当保存会の世話役であるとともに、ブラジル広島県人会の理事である沖桝春登氏が広島を訪問した際、ブラジル保存会では衣裳、道具類の不足から活動が思うにまかせない…と実情を説明、その寄贈方を依頼していた。幸い加計町観光協会・久保事務局長の奔走によりこれが実現したもので、皆々様方に深甚の敬意を表するものである。

◇七九年二月　サンパウロ市のカルナバル・サンバ行進に参加。ブラジル日本移民七〇年をテーマにフロール・ダ・ペニャ日系人が初参加。サンバのリズムに乗って笠戸丸と広島神楽を市民に紹介したもので、二十四日午後八時からチラデンテス大通にはカミニオンにセットされた笠戸丸（長さ一〇メートル、巾三メートル八〇）の山車が出た。チームの先頭に立ったのは笠戸丸船長・浜崎健一氏（美仁着物社長）、機関長・山口美貴男氏（カーザ水本支配人）、事務長・菅原米秋氏（広島県人会）たちで、それぞれ白の高級船員服を着用した。そして笠戸丸の船尾では広島神楽の奏楽、続いてチームの約八百人がサンバの熱演など、実物さながら煙突から煙を吐いて進む笠戸丸とともに、観客は惜しみなく拍手をもってこれを迎えた。

七月　レジストロ日会、同市役所共催の緑の週間に出演。

◇八〇年四月二十六日　井原爾一の還歴祝に出演（アリカンヅーバ生長の家会館）。

五月　母県から宮沢弘知事ご夫妻来聖、持参の神楽衣裳を受額。歓迎会々場でアトラクションとして神楽を奏楽。

八月　イタペチニンガ交友会に出演。

◇八一年六月　リベルダーデ商工会主催の七夕祭に出演。

七月　憩の園を慰問。

十月　厚生ホーム慰問。これは日伯援護協会、エスッレーラ・



神楽「八幡のおろち」

デ・オウロ協会共催の〝えびす祭〟のため、サントスを訪れたもの。

◇八二年四月　憩の園慰問。八月六日　原爆犠牲者慰霊祭に出演（イタケーラの広島中学校）。十月　サントスの〝えびす祭〟出演。

◇八三年四月　オザスコ文協主催の同市創設記念祭。十一月シダーデ・ヴアルガス文化体育協会主催の敬老会に出演。

◇八四年三月　オザスコ市政二十一周年祭に山車、神楽を奏楽（同市庁と日会の共催）六月九日　サントス厚生ホーム十周年記念祝典に出演（援協主催）。六月二十三日　第十九回コロニア芸能祭に出演。八四年七月・記

（広島神楽保存会々長）

神楽の本源　天照大神が御弟素戔嗚尊の悪戯をお怒りになって天岩屋へお入りになった時その前で天宇受売命が大神の再現出戸を願う手段として真栄（まさき）を鬘（かつら）とし蘿（ひかげ）襷にかけ小竹葉を手草にゆいて、宇気伏せて踏みとどろかして舞うたとあるかの古事記の物語に発したとしている。さらにまた、その精神は秋の氏神祭に当って新穀を感謝し祖霊を祭りこれを慰める手段として氏子の真心を捧げる意味のものが神楽の本義であり見るべきものではなく神への饗応奉仕

であると信ぜられている。

このことは現代人としては決して間違いではなく一理あると思われるが、さらに深く掘り下げて見ると昔の人々が踊ったこと、特に天宇受売命のように、ほこらのある木を伏せてそれを踏み鳴らして踊るということは、そのことによって大地にひそむ霊魂を誘発してその霊威を体中に宿りつかそうとある鎮魂の一義たるたまぶりたる外来魂の信仰と、また遊離せんとする魂を体中に鎮めようとする鎮魂祭の呪術、そうしたものが神楽の本源であろう。

（井原）

親善、友好の実を上げる

ブラジル花笠会の活動史

山形花笠協議会　ブラジル本部

伴淳が手土産に花笠２０枚

花笠踊の出所は奥羽山脈の麓、全国第二の雪の里である山形県尾花沢市がその発祥の地であり、戦後、花柳衛優師匠の正調花笠踊が発表されるに及び、郷土舞踊普及開発のための「山形花笠協議会」の誕生となり、その主催の下に毎年八月六、七、八日の三日間にわたって華麗な夏祭りとして山形市で挙行され東

北四大祭の一つとして全国的に、果ては海外にまでその名声を博するに至っている。

花の山形、紅葉の天童　雪を眺むる尾花沢この花笠踊がブラジルに斎らされたのは一九七一年八月「あゆみの箱」チャーリティー・ショー開催の折、郷土愛に燃えた熱血漢「伴淳」こと故伴淳三郎氏がわざわざ郷土の花笠二十枚を手土産に山形県人会を訪問、花笠踊の普及発展に協力方を力説されたことに始じまる。

県人会としてはその熱意にほだされるとともに、郷土舞踊の普及に痛く意欲を燃やしたのであるが、適当な指導者なきまま時日を経過、二年後の一九七三年偶々会員堀江八郎氏の姉に当たる藤本たえ女史の来伯があり、その指導を受けたのを切掛けに同年十二月二十日、県人会役員諸氏の賛同と協力を得て、「ブラジル花笠会」の結成を見るに至り、初代会長としては時の県人会長寒河江三郎氏が就任、堀江八郎氏夫妻がその指導的役割を担うこととして発会の運びに至ったものである。

爾来、堀江氏ならびに伊達武治氏がそれぞれ会長、副会長を歴任することとなって運営されて来たのであるが、ガルボン・ブエーノ街、所謂（いわゆる）東洋街に於ける花笠踊の披露がサンパウロに於ける「団体行進舞踊」の嚆矢として広く日伯人間の共感を呼び、日伯親善、文化交流運動として唯に県人のみならず他県人の参加をも広く歓迎したことにより、発会当時十

五、六名であった花笠会は年とともに充実してサンパウロ東南支部、聖北支部、カロン支部の参加となり、会員数も五百余名を数えるまでに発展するに至った。

好奇と賛嘆の的にも…

斯くて花笠踊は東洋街に於ける年中行事の一つとして定着するとともに、その華麗優美なる民俗舞踊はブラジル人間の好奇と賛嘆の的となり、ブラジル国の祭典、軍隊、各官庁学校、テレビ、果ては民間団体の行事などへの参加申込みを受けることとなり、親善友好の実を上げるに至った。

一九八三年十月、創立満十周年を迎えるまで同会活動概要は次のとおり。

一、国際民族舞踊日本代表として三十回。

二、軍隊、各官庁、学校よりの出演依頼四十七回。

三、テレビ及び各種民間団体招待百十四回

右　合計　百九十一回

参加出演延会員数一万四千六百四十三名

これらの出演に際しては、それぞれ同会の誇りとするもの多々あるが、その一つは一九七六年三月、カルナバル祭に於ける国際民族舞踊コンクールに於て堂々サン・ジョオン大通りを練り踊り、美事に最優秀賞を獲得したことであり、さらに特筆

すべきは一九七八年六月十八日の日本移民七十周年祭に日系コロニア代表として一千一百名の婦女子を動員、式典会場たるパカエンブー競技場に於て花笠踊の一大豪華絵巻を繰り広げて九万の観衆を魅了、感涙にむせばせ、万雷の拍手をもって絶讃された盛事で、日本移民史の一ページを飾るものとしてその最たるものであった。



日本移民70周年祭典を飾る1200名参加の花笠音頭おどり
1978年6月18日＝パカエンブー競技場に於て

斯かる盛況を見るに至った花笠会活動の陰には、真摯な指導層の熱意と強力なねぼりがよく十か年余にわたって維持し得た因であると同時に、全会員が心からの理解と撓ゆまざる努力の成果であるのは疑問の余地なく、これに母県当局の絶大なる関心と支援、また県人会の陰ながらの協力あったればこそ映えある活動が行われたもので、斯かるが故に山形花笠協議会より一九七六年十月三十一日付けをもって、海外に於ける唯一の花笠会として「山形花笠協議会ブラジル本部」の認定を受けるとともに、正調花笠踊の指導員として花柳衛優ならびに若柳由美香



創立十周年記念祭典（1983年10月31日、文協記念講堂）

二師匠の派遣に浴し、より一層の成果を発揮、親善友好の実を上げるに至ったと言える。

母県の大祭典にも参加

こうした母県の好意に応える意もあって一九七六年七月には堀江会長を団長に第一回花笠文化使節団を組織、さらに一九八〇年七月には伊達副会長を団長に第二回使節団を組織して、山形花笠祭大祭典にそれぞれ参加。在伯日系コロニアのため大いに気を吐き、驚異的歓迎を甘受したものである。

しかしながら、創立満十周年を目前に控えた一九八二年の会長選挙に至り、残念ながら会長、副会長の二派に分れるという不祥事が発生、選挙管理委員会の調停も空しく、ここに委員会裁定に基き、これまでの県人会付属団体としての存在を脱皮することとなって同年六月八日、正式に「社団法人ブラジル花笠会」として登録することとなった。

その後、両派の歩みよりについて調停案が試みられたのであるが、ようやく同年十月、県人会の長老、林茂夫氏を新会長に仰ぐことによって両派役員間の諒解が成立、合同決議が可決されることとなった。

斯くして一九八三年十月三十一日、ブラジル花笠会創立満十周年記念祭典が無事に日本文化協会講堂に於て挙行の運びとなった。これには母県知事、県会議長、花笠協議会々長よりの

メッセージ、また、コロニア著名団体よりのメッセージを戴くとともに、記念大演芸会にはコロニア一流の芸能団体である藤間流、花柳流、京藤間流、池芝流、松代流、瑞英アトリエ、上田舞踊団、鶴風合、伯国民謡同志会、伯国日本民謡会、リベルダーデ商工会演芸部などの特別友情出演によって稀れに見る盛大な記念式典となった。これは、ブラジル花笠会がコロニアに於ける芸能普及団体としての将来の発展を約束する存在であることを示す証左であるとも言えよう。

（山形花笠協議会ブラジル本部）



住民の喜怒哀楽織込む

正調「鶴崎踊り」の由来

牧　政治

（「鶴崎踊り」保存会　ブラジル支部、副会長）

「鶴崎踊り」は、大分県鶴崎を母体に、その地方住民の喜怒哀楽を織り込んで育ち上った郷土芸能でありまして、その起源は遠く永禄三年（一五六〇）頃と云われております。

当時、豊後の国守大友宗麟が若かった頃、一寸酒色にふけり、粗暴の振舞いが多く、政治を省りみず、重臣戸沢伯耆守が非常に心配し如何にしてお止め申そうかと、日々登城したけれども、御簾の内のことに打つ手が無く最後に一計を案じ、京都より容貌麗しき踊り子を多く招き下し、御居間の近くまで、日に夜をついで、三つ拍子と云う踊りを踊らせたので、当屋形宗麟が是を聞かれ、あの月見、花見、酒宴、乱舞などを嫌う伯耆守がこのように踊らすことを不審に思われ、多分それがしへの馳走であろうと見物に出られたので、ご機嫌の良い折を見すまし、恐れ多いことではあるが、どうか殿の不行跡をおやめになって、政治に専念して下さい。領民全部が大変心配しておりますからと、涙ながらに諫言申し上げたので、殿は目をさまされ、ああ余が悪かったと改心され、その翌日の七夕の儀式の折、諸士登城の席にてお礼を述べられたので、豊後国中が明君の誉（ほまれ）を称えて喜びに湧き立ち、殿はその後政治に専念、善政を布かれたとのことであります。

当時の三つ拍子踊りが、四百余年の間に現今の如き「鶴崎踊り」に変貌して来たのでありまして、その優雅さと假装の柔かさは他に類を見ないのであります。また、その口説（こうせつ）

はその時代時代の世相人情などを指して歌われたのであって、現在の口説は明治三十年代（一八九七）より歌われたものが多く、鶴崎を中心にした人情風俗、行事など鶴崎礼讃の歌で占められております。



東洋祭りでの正調「鶴崎踊り」

その囃子（はやし）は全国稀に見る華麗なもので、太鼓、三味線、笛（明笛）、尺八、胡弓などによる合奏の妙律はその名も高いのであります。

大正十二年（一九二三）、良子女皇殿下（現皇后）並びに久弥宮お来県の折、大分県民芸代表としてお見せし、大変な好評を得て全国にその名を知られ、この機会に、伝統ある正しい「鶴崎踊り」を長く後世に伝承するために保存会が結成されました。

◇昭和八年（一九三三）、今上天皇御即位御大典記念にＮＨＫの招待により出演、全国にラジオ放送されたため、なお一層その名が知られるようになりました。

◇昭和九年（一九三四）、東京三越本店において大分県物産展開催の折、「鶴崎踊り」を披露好評を得る。

◇昭和二十一年（一九四六）、別府市駐留の米軍に招待され、キャンプ場にて大分県代表として「鶴崎踊り」を披露。

◇昭和二十七年（一九五二）、本物「鶴崎踊り」のレコードが出来る。

◇昭和二十八年（一九五三）、明治神宮外苑日本青年会館にて、文部省主催の全国郷土芸能大会に県代表として出演、好評を博す。

◇昭和二十九年（一九五四）、竹田市にて滝廉太郎音楽祭に招待され、記念出演する。

◇昭和三十一年（一九五六）、大阪市大丸デパート屋上で、大分県物産展に県代表として「鶴崎踊り」を披露、踊り子センベイが売り出される。

◇昭和三十二年（一九五七）、郷土民芸品として踊り子人形が売り出される。

◇昭和四十五年（一九七〇）、大阪市で開催された世界万博のお祭り広場に全国代表として出演。

◇昭和五十二年（一九七七）、大阪市商店街

にての九条踊り大会に招請され、出演大好評。

同年、鶴崎駅前広場に鶴崎のシンボル「鶴崎踊り」のブロンズ像二体建立。

◇昭和五十三年（一九七八）、文化の日に文化賞受賞。

◇昭和五十四年（一九七九）、無形文化財（大分県の）に指定される。同年、大分市との姉妹都市、ポルトガル国アベイロ市に民間友好親善使節団として四十四名が訪問、「鶴崎踊り」を披露。

◇昭和五十五年（一九八〇）、博多駅祭りに大分県代表として出演、好評を得る。

◇昭和五十七年（一九八二）、在伯大分県人会創立三十周年を記念して、十月一日、在留県人の要望に応えて「鶴崎踊り」ブラジル公演が実現、平松大分県知事を先頭に、百三十名の大型使節団がサンパウロ市のリベルダーデ広場にて「鶴崎踊り」を披露。一か月前に派遣された指導員三名により指導された現地の踊り子を加えて約六百名の「鶴崎踊り大会」が未曽有の盛大さにて披露された。同じく十月二日、正調鶴崎踊り保存会ブラジル支部が誕生、保存会旗が授与さる。

◇昭和五十八年（一九八三）、無形文化財として国の指定を申請、遠からず実現するものと思う。

現在、保存会は「鶴崎踊り」伯国定着、ブラジルの生活の中の「鶴崎踊り」に仕上げるべく大奮闘中であります。　以上

（文責・牧政治）

昭和五十九年（一九八四）九月三十日　なお、同ブラジル支部の役員は次のとおり　会長＝音成次男、副及指導員＝牧政治、理事＝高橋利智、指導員＝牧ユキ。



東洋祭りでの「鶴崎踊り」参加者ら（一九八三年十二月十日、リベルダーデ広場で）



サンパウロの七夕まつり

日本の情緒、そのまま再現

大橋　鉄雄

（七夕祭実行委員会委員長）

実現へ執念燃やして母県と交渉

私達が郷土―宮城県―の紙の芸術、仙台七夕をサンパウロ市で展示し、更に七夕まつりを開きたいと思ったのは一九七五年で、当時県人会長であった私が県人会の事業として挙行し継続したい意向より、理事会へ幾度もはかり同年八月それを議決した。勿論、これは県人会のみで成立するものではなく、海外協会を窓口とする母県と交渉打診の結果であった。

しかし理事会で決定したことではあったがその後数度にわたる検討の結果、七夕まつりは県人会の事業として枠を越えるものでありこれを強行すれば県人会自体の運営に支障を来すことになるという結論に達し、私としては県人会と関連をもちつつ別にサンパウロ七夕祭実行委員会を結成して、七夕まつりの推進の基本体とし、七八年三月県人会長を辞し、一意七夕まつりへ専心したのである。郷土の文化の誇入が一つの大きな誇りであり、母県とブラジル国の交流に益すること大なりと信じた。

県人会創立二十五周年、敬老金交付制度七周年記念行事の一

環として七夕まつりを挙行することを県人会の路線と決定し、会長辞任直後三年来準備してあった、宮城県人会移住七十周年記念訪日団員五十名の団長として、七八年四月訪県することになった。

山本知事をはじめ母県の要路の方々による歓迎会の席上、熊谷新県人会長の五十四年（七九）五月、県人会の記念行事に訪伯懇請のメッセージを朗読披露、訪日団より百万円を県の厚生福祉機関へ寄付したのであった。

今、このことを想起し記するのは、本年（七九）六月の県人会式典に知事夫妻をはじめ、県議、実業家、仙台市長の諸氏約百名も来られたことや、これまでも私達在伯県人にそそがれて来た他県も驚く、いわゆる愛情ある施策が更に強化されることが、このときすでに生れたと思うからである。

サンパウロ七夕まつりの分家移住に対する懇切なる指導や、七夕製作のため講師も派遣されたこと、当方の要望した資材の送付なども、それはサンパウロ七夕まつりが内外を問わず宮城県の名誉にかけて、成功せしめねばならぬという熱意ある施策の一つであると思うし、私達のたちがたき父なるもの、母なるものの愛情をひしひしと感ずるものである。

七八年九月、仙台市の鳴海夫妻の九日間のサンパウロ市で七夕製作講習後、目的達成のためには七夕製作講習を希望する所へ出張講習すべきであることを痛感し、新聞広告による希望個

所へ私達夫婦、また時にスザノの登坂女史とサンパウロ市近郊は勿論のこと、遠くは七百キロメートルの第三アリアンサ、東はタウバテ、西はパラナ州のカストロなど、竹龍、用紙、木輪、針金、糊など資材一切を車に積み出張講習したのだが、その講習個所は七十五を越えた。また、この七夕製作講習以前より、七七年の七夕製作研修の時に撮影した8ミリフイルムを編集、日語説明の録音済み五十分ものと仙台七夕宣伝のため訪歴した所を加えると百個所を越え、この行動距離は一万五千キロメートルにもなる。

講習の対象は日語学校、女子青年会、文化協会が主で、受講者の八割は二、三世、あと二割は一世の婦人方。県籍は意識しなかった。



七夕祭実行委員会設立を決めた時、サンパウロ七夕は宮城県という地域的な観念より飛躍せねばならないと思った。七夕ま

つりは日本古来の祭りで、奈良の大仏様が出来た時からの日本全国の歴史的な祭りである。織姫や索牛の愛の星祭りの物語りや短冊の願いごとなど平易に面白い。しかし、美しい優雅を七夕まつりへの推進は、ただ楽しいロマン的なことばかりでなく、当然ながら労苦もひととおりでなかった。

この七夕製作講習が基礎的な第一の仕事とすれば、第二はコロニア諸団体との交渉であった。リベルダーデ商工会との間における具体的企画構成の会合。文協、県連、援協、事業団、国際交流基金との賛助と七夕飾付け審査の依頼、留学生会との交渉。また、市や州当局との交渉援助依頼、月一回四百部の〃七夕だより〃の発送、青竹の調査と交付の交渉などであった。一方、セー区行政官のヴィトル氏は青竹を埋め込む鉄パイプ使用を許可するとともに、七夕踊りその他のパレードのため、リベルダーデ広場とガルボン・ブエーノ街を新しく舗装してくれたことに対して感謝するものである。

二日間に亘る七夕祭りの概況

七九年五月三十日　青竹伐り、大阪橋の飾付けも考慮し百二十本を用意。午後豪雨、竹の整備意の如くならず。

同三十一日　五十年来の大降霜。青竹の整備と車道までの運搬。午後三時着聖の知事夫妻出迎えに空港へ

六月一日　午前零時より、リベルダーデ広場で青竹の小枝に

短冊を結び鉄パイプへ埋め込む作業。約二十五名が参加。同五時飾付け準備ＯＫ、忽然、街路の中に竹林が出現。

六月二日（七夕まつり第一日）午前零時より九時までに各地からの飾付け完了、七色の七夕が微風にゆれる。

幸いに天候も回復、七夕まつりの二日、三日は雲一つない日本晴れ（ブラジル晴れ）であった。「事計るに人あり、事を成す天にあり」と諸葛孔明が言ったが、晴天であったことが実に七夕まつり成功の第一要因で、天運に恵まれていたというべきであろう。

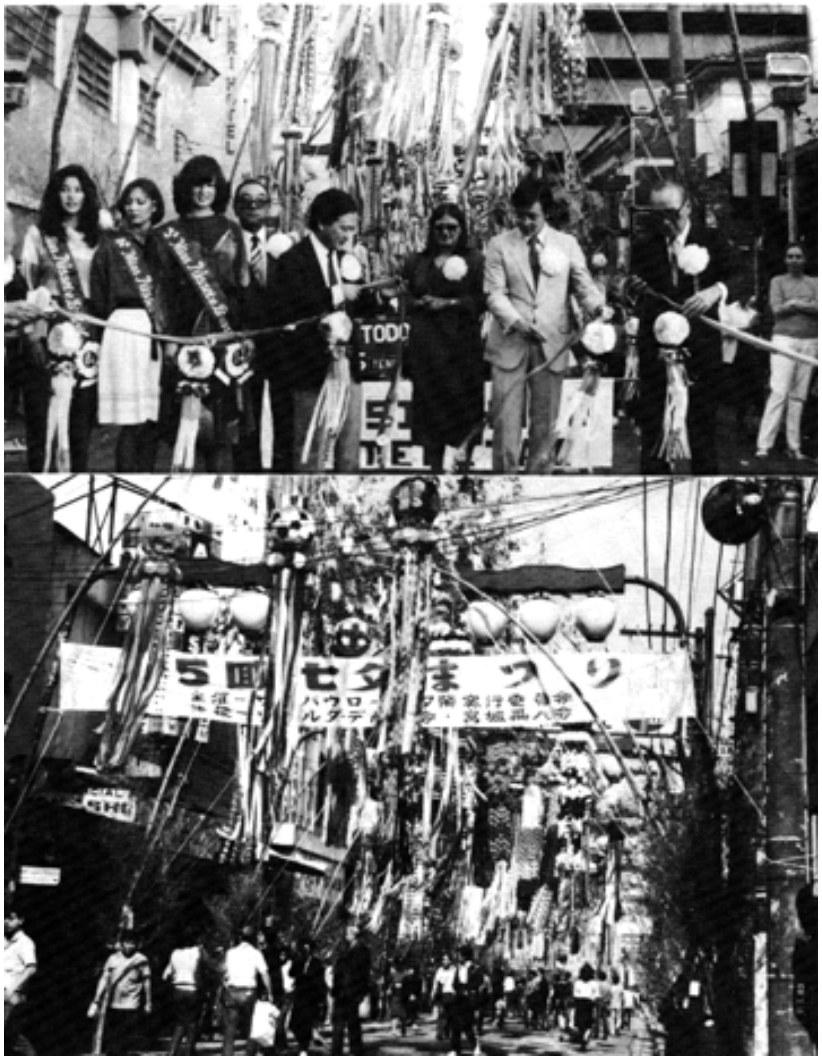
午後三時頃から観衆が次第に集まり、四時になるや特別設置の観覧席も満員、ガルボン・ブエーノ街も観衆でいっぱいになった。五時半テープカット。実行委より贈られたサンパウロ七夕まつりのハッピーを着た山本知事夫妻、島野仙台市長、桜井団長、長一力河北新報社長、藤崎社長、浅野副団長その他の南米親善訪問団の代表が、サンパウロ側の代表とともに欣然とテープを断つ。そして、数万の観衆の歓迎に莞爾と手を挙げて応え、ステージに登る。やがてミス・サンパウロ七夕を先導に鼓笛隊、五百名による七夕踊りなど、九つのパレードが七夕飾付けの下で華やかに展開されていく。

月は無かった、暗夜にきらめく無数の星。

あるかなしかの風に揺れる七夕飾付けが街燈に七色にひらめ

く。笹竹に内外人の手で結ばれた無数の短冊が花の如く見える。それは日本の情緒そのものであった。

誰がサンパウロで、この華麗な七夕まつりを期待したであろうか、誰がこの盛況な日本の祭りの再現を夢みた人があったであろうか。



私達とは別に、百名近い母県の訪問親善団員が日本より一番遠いこのサンパウロ市で、誇り高く堂々と内外人が渾然、七夕まつりが繰り広げたことに特別な感激と感慨があったことと思う。

七夕踊り手五百名が母県から贈られた団扇を持ち、手拭を首

にして波の如く踊っていく時、山本知事にその一団体を指して「知事さん、この婦人方はここから五百㌔メートル奥のビリグイという所より参加しているのですよ」といった時、知事は両手で私の手を握り感涙を浮べて「感謝します、感謝します」と言うのであった。

また、見知らぬ婆ちゃんが私の前に来て、ありがとう、仙台七夕は聞いたことはありますが見たのは初めてです。このブナジルでこんな美しい七夕を見るとは夢にも思いませんでした。どうぞ体を大切にして、また来年もやって下さいね。来年は家族は勿論、知合いを連れて参りますからね、と言って幾度も頭を下げるのであった。勿論、感謝と激励の挨拶は七夕まつり終了後も数知れぬ人々から受けたし、書信でも数十通受けた。そうしたことより私達の七夕まつりは成功した、という実感をもったのであった。

六月三日　七夕まつり第二日　晴天

この日、日曜市もあって観衆は空前の十五万とも言われた。当然パレードは無かったが晴天に七色に揺れる七夕飾付けに内外人とも驚嘆賛辞で、この人々によって短冊が更に多く結ばれたのであった。七夕飾付けの下を子供を連れたブラジル人の家族達、恋人を抱き短冊を読みほがらかに散策する若い人達。

午後十一時、飾付け取りかたづけ。この美しさと好奇心より

数多くの飾付けが盗られたハプニングもあったが、十二時竹の葉一つなく清掃。私は七夕だより第十二号に左の如く記した。

「今思い出してみると、私達のサンパウロ七夕は　―　東洋街を七色に彩った七夕は、それは青空に懸る虹ではなかったのか。二日、三日と二十万の観衆を喜ばせ、嘆声をはなたしめ、そしてあとかたもなく塵一つ残さず消えた虹ではなかったか、」と。

―――　◇　―――

七夕の分家移住

七夕の分家移（・）住（・）という字句は、確か私が母県（海外協会）と交渉の段階で使ったと思うが、サンパウロ七夕が具体化するに従い、当然ではあるが母県も呼応する如く七夕実現とその高揚からこの移（・）住（・）という字句を使用し、県人会も七夕移住を強調して来た。私達は七夕祭り定着のため十年一期の覚悟で心血を注いでいくが、七夕祭りの定着には母県七夕分家移住への理解ある強力なる援助協力が無い限り自信は持てない。

サンパウロ七夕まつりは、どこから生れて来たのであろうか。不可能事と言われ、至難事とされた七夕を強力に推進し、実現せしめたその根本理念はなんであったろうか。

いみじくも、七夕飾付け指導のため派伯された仙台青年会議所理事の佐々木博氏が、日伯文化交流サンパウロ七夕まつり実

施報告書に「一人の戦前移住者の実現への執念は、裏を返せば遠い日本のふるさとに対する強い郷愁であったことを意味している」と発表しているが、私達はその郷愁という懐古的を脆弱な情緒より生れたというよりも、強力熾烈な県人意識であったと思う。即ち、移住者として郷土に安住する人々の想像を越えるところの心底に燃える愛郷心が対外的に発揮され実現されたものが七夕まつりであったのである。

換言すれば強力な県人意識が地域的な殻を抜けて対外的に発露され昇華されたもので、言うなれば大衆的な県人意識の発揚の結晶であったのである。

――――　◇　――――

注＝サンパウロ七夕まつりは、毎年、雨の少ない六月に催されている。だが、一九六二年の第四回七夕まつりは、雨のためパレードを中止した。ことし（八四年）で第六回サンパウロ七夕まつりを催した。

勇壮、玄妙な「鬼剣舞」

岩手に伝わる　盛岡山車、さんさ踊など

及川也周平
（岩手県人会理事、同芸能部長）

古くから岩手県に伝わる郷土芸能のひとつである民俗舞踊の「鬼剣舞」（由来は後述）が初めてブラジルに紹介されたのは、一九六八年六月、ブラジル日本文化協会（以下、文協と略す）主催の第三回コロニア芸能祭のときであった。その後、「鬼剣舞」は次のように各種催しにも積極的に参加し、日伯文化交流の促進に微力ながら協力を目差している（カッコ内は出演者名）。

六八年六日。文協主催、第三回コロニア芸能祭（及川也周平、高橋勘之助、千田安美、及川秀義）

七二年九月十六、七日。文協主催、第一回国際民族舞踊大会、参加十一か国（及川也周平、高橋勘之助、長野武由、千田安美、及川秀義、茂木庄三郎）。各国大使、総領事のほか連議、州議、市議、名士多数が参観、好評を博す。

七三年九月二十二、二十四日。サンパウロ市観光局主催、民族舞踊大会、コンソラソン広場（及川也周平、高橋勘之助、長野武由、茂木庄三郎、千田安美、及川秀義）

七三年十月二十日。岩手県人会創立二十五周年記念祭、文協記念講堂（前記と同じ）

七四年一月二十五日。サンパウロ市創立記念祭、市観光局主催、ルース広場（及川也周平、高橋勘之助、長野武由、茂木庄三郎、千田安美、及川秀義）。なお、同記念祭に出演参加したのはブラジル、日本、ポルトガルの三国代表のみだった。また、記念祭の実況はＴＶ・ＢＡＮＤＥＩＲＡＮＴＥＳにより全国向け放映された。

七九年六月。七夕祭りパレードと武者行列に参加後、リベルダーデ広場で一般に披露（前記と同じ）





八二年六月六日。七夕祭りに参加（県人会の理事連）　八三年七月二十三日。七夕祭りに参加（前記と同じ）

〔剣舞（鬼剣舞＝おにけんまい＝）〕

の由来を伝説によって簡単に説明しよう。

牛若丸がまだ鞍馬寺にいた時、奥州平泉の金売り吉治信高の手によって時の鎮守府将軍藤原秀衛公のもとに参り、元服して九郎義経と名乗って天晴れ一人前の武士となる。

ところが、兄頼朝が父の仇を討つため伊豆に起ったので加勢に参じ、勝敗がついたのち兄頼朝と仲が悪くなったので吉野から隠れ忍んで再び平泉に来た。これを称して〝義経の東下り〟と云う。

鎌倉幕府頼朝は、義経が平泉にいることを知り、これを討てと藤原秀衛公に命じたが秀衛公は応じなかった。秀衛公の死後、その子泰衛が義経を衣河の高舘に攻め妻子とともに自刃せしめた。

その後、義経公主従の亡魂が毎夜毎夜、高館の城壁に現れたり、また猪間が淵に出て鎌倉幕府の探偵や腰抜け武士などを脅かしたため、泰衛公もそのまま打捨てておく訳にもゆかず、中尊寺一山の和尚に申し付けて亡魂の退散を祈らせた。

一山の和尚が大勢山王様に集って御釈迦様に念じたので、七日七晩目に何処からともなく一匹の猿が猪間が淵に現れ拍子面白く阿修羅の踊りを踊ると亡魂共に踊り出し、この猿こそ御釈迦様の化身だったので、共に踊るうち知らず知らずの間に御済度した。

剣舞なるものは、この亡魂者の形を作ったものであり、のち天王寺の和尚がこれを仏教に結び付け〃阿修羅舞〃だと、立派な名を付けたと云われる。

一方、永徳三年七月に高館の住人で剣舞の先生弥左エ門が剣舞を中興し、さらに高舘駄一郎なる人物がこれを南部の立花、盛岡の中津、胆沢の永岡に伝えたのが明応三年六月と記録に残っている。

その他、剣舞装束の事、剣舞の事、四方儀の事、剣舞和護念仏唱名の事などもあるが省略する。

なお、この剣舞の出演者は次のような構成からなる。

庭元（一）、師匠（三）、笛吹き（二）、太鼓（二）、どどり（二）、はねこ（九）、計十九人。



第三回コロニア芸能祭での「鬼剣舞」。及川、高橋、千田および及川秀義、一九六八年六月、文協ホール）

盛岡の山車

由　緒

八幡宮は、東奥鎮護の神としてこの地方の古社と崇められている。

南部初代の光行公は建久二年には三戸（青森県）に居城し、南部の荘（山梨県）より糖別郡（青森県）へ八幡大明神を遷座した（現櫛引八幡宮）。南部第二十六代目の信貴公は不来方城の築城をその子の利真公に命じ、文禄二年三月工を起こした。その頃、不来方城内にこの地方の豪族日戸氏が代々崇敬してきた鳩森八幡社があり、これを産土神（うぶすな）と尊び、崇敬奉祀も鄭重を極め信仰も殊に厚かった。

南部氏は清和源氏の末裔で、先祖代々八幡大神を氏神と仰ぎ崇尊の念厚くして領内鎮護の神と斉祀（いつまま）ったのである。しかして鳩森八幡社は城内深く鎮座して一般庶民がこれを参詣することが出来なかった。寛文十一年二月、第二十九代目の重信公は志家の地（現在地）に新八幡の工を起こし、延宝八年に本殿、拝殿、神輿殿が完成した。県下第一の大社として崇敬されている。

山　車

盛岡八幡神社祭り、東奥鎮護八幡宮祭りには十台より十五台も仕立てて盛岡市内に繰出す。宝永六年（一七〇九）から伝承された芸能と云うから二百七十余年の伝統を持っている。

サンパウロでの盛岡の山車

「盛岡の山車」は、サンパウロ市その他でおよそ次のような催しに参加した。

一九八〇年八月九日。盛岡山車推進会（藤村益次郎会長）一行十六名、中村県知事一行八名、南米柘植農業視察団一行三十六名などによる山車持参により、文協、リベルダーデ商工会、岩手県人会共催による岩手祭りに花を添えた。母県からの一行もこれに合流、同日午後六時よりガルボン・ブエーノ街に繰出したもの。なお、盛岡山車推進会は七九年に米国ロスアンジェルスのディズニーランドに山車を持ち込み好評を得ている。サンパウロの場合は海外進出第二号。

八〇年九月七日。ブラジル独立記念日のパレードに州政府の要請により参加。同パレードは午前十時より市内チラデンテス大通で盛大に催された。

八〇年九月二十一日。市内イビラプエーラ公園内での県連主催第二回開拓先亡者慰霊大会に参加。

民俗舞踊「さんさ踊り」

一九八一年八月二十日、盛岡市より「さんさ踊り」の指導員として赤坂松之助、赤坂源太郎、竹沢俊雄の三氏が来聖、山形

県人会館で希望者への教授に当る。

八三年十月二十三日、岩手県人会創立二十五周年祭。母県より岡上泉副知事一行、南米拓植農業視察団（小関和一団長）一行を県人会新会館に迎えて盛大に祝う。当日は県人会理事連と婦人会員、さらに花笠合ご婦人方の協力を得、席上サンパウロでは初ての「さんさ踊り」を一般に披露した。同祭に出席の県連、一般有志、会員らの好評を得て村松吉次郎会長は面目をほどこした。なお同祭は、スザノ在住の熊原治三郎氏（太鼓の打ち方指導者）、藤堂勝次氏父子、及川也周平、その他一般会員の協力によって予期以上の成果を得ることが出来たことを追記する。

なおまた、岩手県の民俗舞踊としては「さんさ踊り」のほか、鹿踊り、念仏踊り、田植踊り、ひな子剣舞、剣舞みこしなどがあり、県内各地方で盛大に催されている。敬称略。

（一九八四年十一月・記）



絢爛たる花が咲く

沖縄の古典芸能

屋比久孟清
（元在伯沖縄県人会々長）

古典舞踊は女踊りが粋の最上

沖縄の歴史を繙いてみると、さまざまな条件下で常に生活の苦渋と厳しさを背負って展開している。しかし、その沖縄が生活の苦悩を柔（やわ）らげ、沖縄人としての誇りを持ち続けるに至ったのは、沖縄人自身の長年にわたって創り上げた「芸術の力」であったのではないかと思う。美術・工芸・芸能などいろいろの分野において独自の花を咲せて来た事実が、あの不毛の貧しい瑚珊礁の島に見ることができる。美術工芸もさることながら特に芸能文化の素晴らしさは瞠目に値し、舞台芸術として絢爛たる花が咲いたのが「沖縄舞踊」だと思う。

しからば、あの苛酷な逞しい自然と人間によって培われた沖縄の芸能は、どのようにして創造されたか、ちょっと覗いてみよう。

その大昔、生活（くらし）とつながる祈りと豊饒を祈願する祭式が手拍子で身振り、手振りしながら円陣を作って〃輪舞〃

し、『オモロ』を歌いながら祈った。この祭式舞踊が「沖縄舞踊」の始りであるようだ。苦しいと云いっつ歌い、祈り、嬉しいと云っては舞うなど、人間生活の喜怒哀楽を表現されているのも、そこから来ているのではなかろうか。

沖縄の舞踊は音楽が基礎になって出来上った。一四〇〇年代に楽器である三味線の伝来があり、その音調に合うよう三十文字の琉歌が作られ、それに曲が付され、踊りが振付けられたということになる。古典芸能の誕生である。即ち、古典音楽に振付けられた古典舞踊だ。


サクラと琉球絣の乙女

この芸能を王朝時代は国王の代替り毎に（即位してから二、三年後）祝賀使節として渡来する中国の冊封使を饗宴するために演ぜられた舞踊が『お冠船踊り』といって、半年以上も長期滞在するこれら使節の歓待の宴が『諭祭の宴』『冊封の宴』『仲秋の宴』『重陽の宴』『餞別の宴』『拝辞の宴』『望舟の宴』を催し、宴毎に音楽舞踊が演ぜられたという。

そのために国家的仕組の中に組込まれ、踊奉行という役人を置き、士族の芸として厳しい修練をやらせて宮廷芸能として発達して来たので、内面的な深みの追求が行なわれ「国劇」としての品位と格調を持つに至ったといわれている。

玉城朝薫の「冠船舞踊」が定着

一七〇〇年代に「劇聖」といわれた玉城朝薫という人が踊奉行になり、数多くの芸能を創作したこの人は日本にも何回か使いして、能や歌舞伎などの日本芸能を見、それを参考にし、中国や東南アジア諸国の芸能も取入れて、沖縄のものとして集大成し、本格的な「冠船舞踊」として定着させた人だといわれている。

古典舞踊は女踊りが粋（すい）の最上たるものであるが、若衆踊りがあり、組踊りがある。この組踊りは一七一九年の冠船舞台で初めて演ぜられたという。舞踊の構成は出羽・中踊り・入羽からなり、二曲あるいは三曲の音楽の組合せは、振りと美しく融け合って幽玄の世界を作ってゆくのである。

貴族社会で育った沖縄芸能は明治維新の廃藩置県によって、一般民衆の中へ流れ込んでいった。農村の村芝居と合流して大衆化したのであった。王朝時代の芸能人は職を失い生活の糧を求めるために仮小屋で踊りや芝居を演じ、門賃を取って見世物にした。同じ出し物では見物人も飽きが来るので、庶民大衆の

生活に題材を求めて雑踊り、喜悲歌劇が次々と創作発表された。宮廷舞踊として保護育成された琉球芸能は、時代の移り変りとともに歩み、庶民芸能として普及発展して来ているのである。また、生活や愛情を歌い上げた民謡も次から次へと作詩・作曲されて大流行し民衆に親しまれた。

三味線を家宝として床の間に

音楽には湛水流、安富祖流、野村流の三流五派があり、普偏性に富んだ野村流が盛んである。舞踊は玉城盛重という大家が出て、この人の流儀が最もいいということで、殆どが玉城派である。その中に玉扇会、真境名本流親扇会、紫の会、宮城流、真踊流の分派になり、名人が出現するとその人々が松岔流、柳清会、貞扇会、啓扇会、渡嘉敷流、冠船流と名乗っている。

東支那海と太平洋を距だって、九州の南端から台湾近くまでに六十有余の島々が点在しているのが「琉球諸島」と呼ばれている。どの島にも歌と踊りが満ち溢れている。孤島苦を歌うことに、踊ることによって払いのけた歴史的事実がある。これらの島々が芸能の宝庫として、世人の注目を浴びるようになったのは、今次大戦によってアメリカに占領され二十七年間の異民族支配を受けてからである。

異民族支配は伝統文化の再認識を高揚し自覚を促（うな）がし、慰安を求める、物資も豊富になり豊かな生活が出来るよう

になると勢い芸能をたしなむことになる。それは平和を願うからである。芸能は平和のシンボルと沖縄ではいわれている。中国は「文字の国」だから硯、日本は「武の国」だから刀剣、沖縄は「芸能の国」だから三味線を家宝として床の間に飾る。この習慣は今も連綿として続いている。大ざっぱな「沖縄芸能」の解説を試みたのは、ブラジルにおける「沖縄芸能」を語るに必要と思ったからである。


沖縄の中部、中城々址

それでは「沖縄芸能」はいつブラジルに渡って来たかというと、それは第一回笠戸移民（一九〇八年六月十八日サントス着）の皆さんが持って来たということになる。楽器である三味線を携えて来たことがそれを証明するからである。

移民のなかには村芝居の体験者とか、芸達者の人々がおり、なにかのお祝いの時には持ち前の〝十八番〟（おはこ、得意の

芸）を演じて宴席を賑わしたという。沖縄移民の集団するところ必ず三味線の音声が聞えたということである。

沖縄人のお祝いの宴席で三味線の音声が聞えないとお祝いらしくないとは一般の人々の言である。また、日中の労働を終えて、夕食後、独り弾奏して楽しむ人々も多かったと思う。

戦前の沖縄移民の社会では、この位のことが精一杯で、慰安とお祝いの芸能だったとしかいいようがない。

全伯琉球音楽舞踊保存会

戦後になって新移民の移住が始まり、現地沖縄での芸能文化の興隆が伝えられ、研修した音楽家や舞踊家が移住して来たので、戦前移民の中の同好者と一緒になって故里の古典芸能を本格的に研修しようという気運が高まり、時、あたかまよし、琉球古典音楽研究家の山内盛彬氏がアメリカの大学からの招聘で渡米し、南米まで足を延され、一九五二年三月に来伯、サンパウロ市において琉球音楽の五線譜による演奏や、ブラジル人の声楽家による琉歌の独唱、かつ琉球楽器を交じえたオーケストラを演奏発表したのが同年の九月十四日だった。

地方の県人集団地でも催して在留県人や内外人に大きな感銘を与えた。当時、ブラジルでは未だ戦争の〃勝敗け〃騒動が止まずくすぶっていたので、山内氏のこの音楽行脚は時局融和に大きな役割を果したことだった。

山内氏の来伯を機に、サンパウロ市中央市場を中心にして、新里敏助、宮城長次、新城清助、花城清安の諸氏などが世話役になって五三年三月二十九日に全伯琉球音楽舞踊保存会が創立されて、芸能活動が初まったのがブラジルにおけるこの種団体の嚆矢である。

野村流音楽協会が発足

一九五四年八月十五日から二十二日までの八日間、『第七回国際民族音楽会議』がサンパウロ市創設四百年祭記念行事の一つとしてサンパウロ市において催された。この会議に日本代表として金井喜久子女史が参加した。



右から山本喜誉司氏、金井喜久子女史、アーテン・雅子夫人、山本夫人

その頃アルゼンチンに行っておられた山内氏も再度来伯してこの音楽会議に参加し、研究発表を行なった。金井さん自身が発行した「五線譜の楽譜」も持参され、琉球音楽の優秀なことを一般に知らしめた。

そのような刺戟もあって、同年十一月十一日に宮里松吉、仲村渠喜進、長堂尚松、国吉正元、金井清幸などの諸氏が中心になって在伯野村流音楽協会が発足した。



野村流音楽協会（現・野村流音楽協会ブラジル支部）の〝産婆役〟、金井喜久子女史（二列目中央）を囲んで当時中央メルカード近くにあった「三味会」による歓迎音楽会のスナップ（一九五四年九月）

同流のこの両団体は対立した格好になった　が、実技面では互いに相練磨し合って向上していったのは確かだ。

当間美恵蔵という舞踊家の来伯も五六年で各種の演芸会に出演して古典舞踊の真髄を披露し、一般の関心を高め、勢をあおった。

古典音楽の研鑽に情熱を…

野村流音楽協会では一九五六年に佐久田仁牛、和字慶朝幸両教師の来伯によって、実技面の好指導者を得て、会の発展と音楽の普及に目覚しい活動があった（佐久田氏は間もなくペルーへ去った）。また、沖縄音楽の理論的研究に意欲的だった長嶺顕弘、後継者の育成に熱心さの和字慶朝幸、仲本魁作などの諸氏も、ブラジル野村流音楽界では忘れてはならない存在である。教本である「エエ四」（くんくんしー）も立派な楽譜として完成し、一般善及に拍車をかけた。

沖縄の古典音楽は前に記したように三流五派になっているが、ブラジルでは野村流の二派だけが普及している。この同流の二派の音楽団体が各々百五十名から二百名内外の会員を擁し、地方にも支部を設けて研鑽に情熱を傾けている。沖縄にある本部のブラジル支部の名称にし、緊密な連絡によって彼我相呼応し、伝統芸能文化の普及発展に努めている。

二琴曲会が春秋に合同演奏会

この両音楽団体にはそれぞれ琴の団体も付随していて、その音楽協会には琴曲興陽会、音楽保存会には琴曲保存会があって、琴瑟相合（きんしつあいわ）している。この両琴曲会の会員は各々教師、師範に師事し、研修稽古に励げみ、毎年春秋二回の合同演奏会を催している。なお、各団体の周年記念の演芸会などに協力し、自己の周年祝賀演芸会を大々的に催して会の発展を視っている。



琉球舞踊「天川」

舞踊の主流は玉城流

沖縄の舞踊は玉城盛重翁の舞踊の型を継いだ玉城流だけだと云ってもいいと思うが、その中にも家元が玉扇会で真境名本流、親扇会紫の会、宮城流、真踊流があり、その他にも松岔流、柳

清会、貞清会、啓扇会、渡慶敷流冠船流と呼称して活動している。これは名人になり一流派を開いたということである。

著名人来伯で豪華な芸能祭

前にもちょっと触れたとおり戦前は移民芸能の域を脱せなかったが、戦後に本格的な古典芸能を学び習得するようになったのは、一流舞踊家（芸能人）の来伯による公演を見てからのことである。

それでは、来伯芸能人とその公演日などを記してみると次のとおりである。

▽一九七一年八月二十一、二十二日＝援協主催の「あゆみの箱」の一流俳優によるチャリティ・ショーがイビラプエーラの体育館で昼夜二回ずつ開催された。一行の一員として冠船流の川田礼子、功子、公子が参加して『みやびら太鼓、花風、天川』を演じたのが最初であった。

▽七二年四月二十一日＝渡慶敷守章が率いる舞踊団で比嘉正義、松田正二郎、親泊元清、北村三郎、金城朝子、兼城道子、糸数カメなどの団員で、沖縄文化センターと奥原プロダクションの共催でブリガデイロ劇場で公演した。

▽七三年八月十七、十八、十九日＝再び「あゆみの箱」チャ

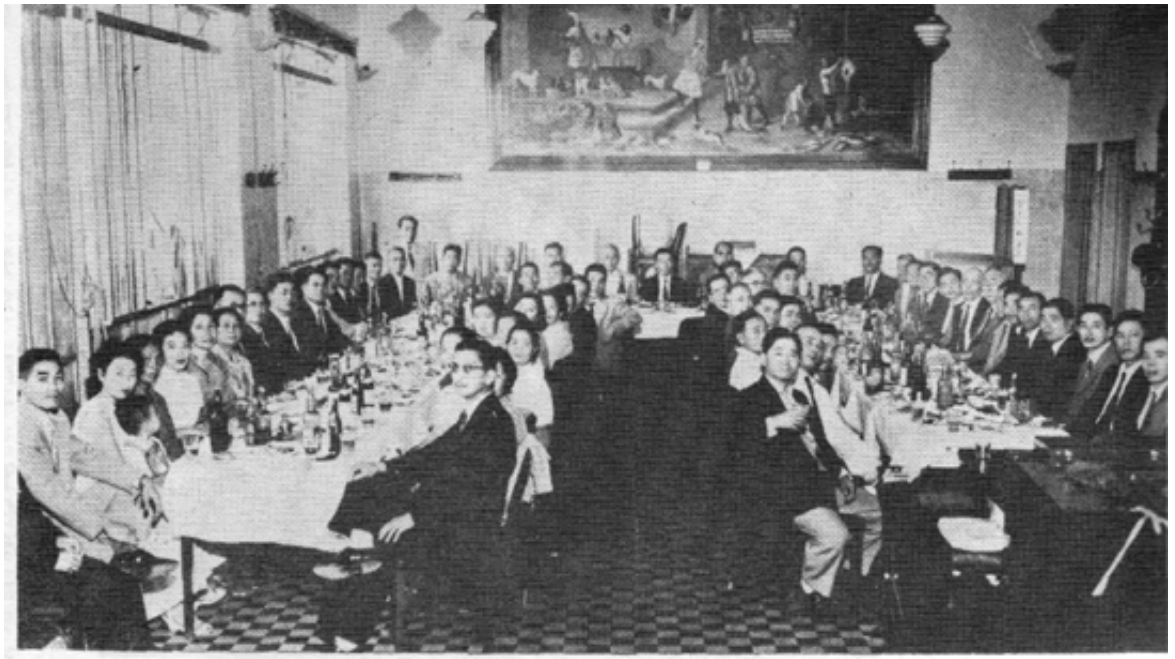
リティー・ショーがイビラプエーラの体育館で催された。この時も川田礼子、朝子、功子、公子の四姉妹が参加した。

▽七四年十日＝大宜味小太郎団長、大宜味静子、松茂良興栄、八木正雄、玉那覇照子、前田文子、渡慶敷栄子団員一行で来伯、芝居と舞踊を文協講堂で公演した。

▽七五年四月十二、十三日＝国際交流基金派遣の沖縄歌舞団が来伯。団長宮城美能留、平田行正、平良進、仲嶺真永、赤嶺正一、比嘉真治、古謝弘子、仲村愛子、兼城米子、伊地睦子、奥間圭子、金城保子、新垣美枝子など団員で、舞踊のほかに『太陽の燃える島』をサンパウロ美術館ホールで公演し大好評を博した。

▽七七年四月二、三日＝野村流古典音楽保存会派遣で来伯。団長安富祖竹久、副団長玉城政尚、団員は棚原忠徳、大山一雄、比嘉米三、当間一郎、上地源照、島袋光史、大城政子、玉城節子、金城美枝子、佐藤太圭子、谷田嘉子、安田慶善、新里文英、新垣稲豊、宮城文、根路銘ノブ、当間正和、島袋光尋、喜舎場盛勝、照屋昌子、池原勝子、又吉静枝、玉城千枝子、畠袋君子、山内孝子、座喜味正子、比嘉美好、安次嶺律子、赤嶺紀美子、名嘉和代、玉城美千枝などの沖縄芸能海外公演団の大一座を迎えて、在伯沖縄県人会主催、文協、援協の後援で『ふるさとの歌と踊り』のキャッチフレエズのもとに県人会館ホールで一大公演を繰り広げ大成功裡に終わった。

▽七八年十一月二十一、二十二日＝野村流音楽協会と沖縄歌舞団によるブラジル日本移民七十周年、在伯沖縄県人会二十五周年、同会館落成慶視使節団が来伯、新装成った会館大ホールで古典音楽の演奏、舞踊、組踊りなどを演じ、『蓬来島沖縄』でフィナーレを飾った一大豪華な芸能祭だった。一行のメンバーは次のとおり。



佐久田仁牛先生の送別会と和宇慶朝幸先生の歓迎会（1956年６月）

顧問・琉球新報社長長嶺彦昌、団長・野村流音楽協会長島袋正雄、副・沖縄歌舞団長宮城美能留、団員・松田健八、富川盛良、比嘉常俊、平川善書、玉城宗吉、古謝進良、新垣万善、小浜剛、運天政宜、中村一雄、知花元盛、椰原靖子、知念三津子、宜保菊子、古謝弘子、渡久地美代子、宮城豊子、平良進、仲嶺真永、玉城健一、具志堅朝賢、高安護、宮城早苗、宮城園美、宮城須賀子、山田やえ、嘉数紀美子、仲宗根貴子、古堅宗一郎、知花幸重、与都嶺定、宜保栄治郎。

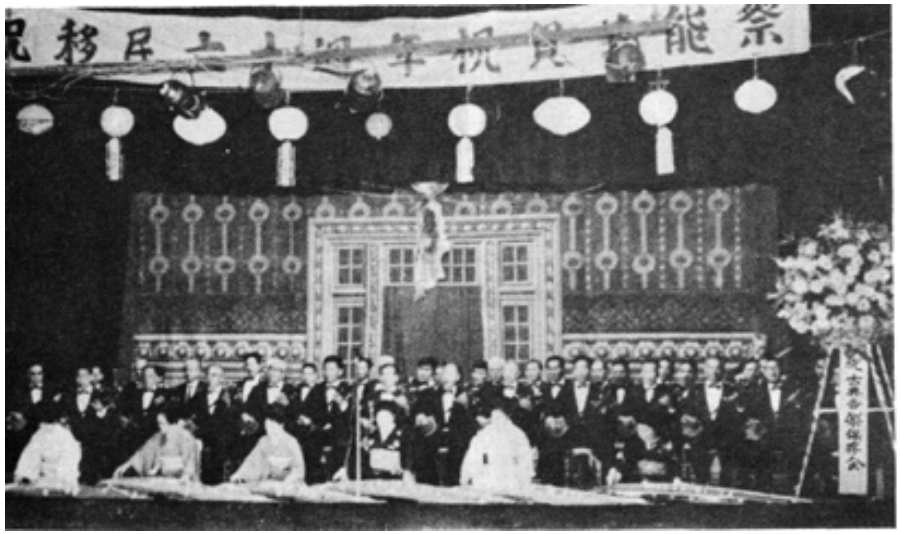
▽七九年六月九、十日＝冠船流川田舞踊団来伯。ブラジル特別慈善公演を県人会主催、援協、救済会後援、県人会館大ホールで数々の舞踊を演じ、大好評を得、感謝された。

▽八一年八月二十二日＝沖縄県庁派遣の芸能団来伯。団長県観光部長金城作一、文化課長照屋寛裕、主査仲本栄三などが引率、県人会館大ホールで舞踊の慰安公演を行い、在留県人を大満足させた。メンバーは安里直子、大城和子、大城節子、大城武夫、兼城米子、具志堅朝賢、島袋綾子、玉城静江、高江洲清勝、玉城千枝子、知名文子、又吉敏子、山田多津子、山城洋子、桑江浩司、玉城正治、西江喜春、比嘉常俊、伊良波幸善、根路銘ノブ大湾清之などであった。

▽八二年一月三十、三十一日＝北島角子の独り芝居『島口説』日伯毎日新聞社主催で県人会館大ホールで催された。

▽八二年八月二十四日＝大伸座の来伯。座長・大宜味小太郎、

座員・大宜味静子、与座朝惟、石川均、八木正吉、真栄田文子、玉那覇照子、平良とき子、島袋正雄、比嘉憲司、友寄朝英、比嘉憲尚などによる芝居と舞踊が県人会館大ホールで公演された。



在伯沖縄協会主催の移民六十周年祝賀芸能祭のスナップ（一九六八年六月二十一日、モッカ劇場）

沖縄への誇りと愛着を芸能に

以上、沖縄の一流芸能人が来伯して公演したことは、当地在住の芸能に嗜（たしな）みのある人々や一般県人に大きな感銘を与え、習ってみたい、一層研修したいと刺激剤となった。

外国に在る人々にとって故里の歌や踊りは単なるノスタル

ジャーではない。沖縄にいるよりも沖縄への誇り、愛着といったものを芸能に強く感じる。その上、沖縄の芸能人との交流も頻繁になったことによって当ブラジルでも芸能活動が盛んになって、前にも書いたとおり二つの音楽団体が出来、日夜懸命に研鑽に励げんでいるし、上原舞踊研究所や玉扇会新崎琉舞道場、石川琉舞研究所などが出来て後身の指導に当って、研究会、公演会を催している。

在伯沖縄県人会では毎年古典および民謡、舞踊のコンクールを開催し、普及と実技の向上発展に寄与している。

そのほかに琉球民謡協会ブラジル支部が一九七六年一月十六日に中野貞彦、長堂庄松、島袋善英などの奔走で設立され、毎年民謡大会を催している。文字どおり僚原の火の如く普及し愛好者が一番多いようだ。

一九六二年十月に演劇愛好者と音楽愛好者で協和劇団を結成、年に一、二回公演し、地方公演などもしていたが六七年に解散、六八年の暮になって浦崎直彦、山田義秀、新崎政希、小橋川典好、大城清宝などの芝居好きの連中が協和座として再建したがこれも長続きせず、七五年で閉幕となっている。それで現在は聖市沖縄演劇保存研究会として浦崎直秀、山田義秀、知念良信、知花真勲などが沖縄演劇の保存研究に起ち上って一九八三年以来、年一回公演してその成果を問うている。

さらにカーザ・ヴェルデ謡舞劇研究会が一九七九年（月日は

失念）に安慶名信夫、安里徳正が中心になって結成され、現在、赤嶺情事会長の下で活発な活動をやっている。


現代喜劇「嫁と姑」の場面
沖縄演劇保存会による協力出演

一九八一年三月二十九日に県人会館大ホールで、仲本魅作師範の第一回古典音楽発表会が催された。

同年六月二十八日には県人会館大ホールで上原辰江師匠の舞踊発表会があった。

一九八三年六月二十六日には同じく県人会館大ホールで玉城流玉扇会の家元・玉城静子、静江両師匠の来伯を得て、新崎つる子琉舞道場の第一回発表会が開催された。いずれも大盛会、殊に玉城静子、静江、新崎つる子、金城節子などが古典『七踊り』の披露は素晴しかった。

優れた音楽、舞踊家が多数輩出

在伯沖縄県人会主催のコンクールや各種の演芸会、演奏会のお陰で優秀な音楽家や舞踊家が育って、今やブラジルにおける沖縄芸能界は、花の匂う春のように全盛時代だといっても過言ではない。

経済生活が安定して来たことも一因には違いないと思うが、平和を謳歌（おうか）する心情の現れと言えないこともない。おきな、おみな、母ちゃん嬢ちゃんの老いの花、若い花が道場いっぱいに競って練習している有様は壮観である。

次に、ブラジルでこれまで育って来た音楽家、舞踊家を記すことにしよう。



石川スエ子舞踊研究所島袋カズ子さんの〝鳩間節〟



上原辰江舞踊研究所員志摩洋子さんの〝護身の舞〟



新崎舞踊道場与那嶺妙子さんの〝泡くり節〟

◇舞踊家＝教師・上原辰江、新崎つる子、石川末子。最高賞受賞者・金城節子、栄野川美代子、当山繁子、古我地百合子、知

花千恵子、上間良子、小橋川照子、島袋順子、与都嶺妙子、当間洋子、金城良治、具志堅洋子、伊豆味文子、具志堅しげ子、城間和江。



野村流音楽協会ブラジル支部創立三〇周年記念演芸大会

◇音楽家＝音楽協会師範・和宇慶朝幸、仲村渠喜進（故人）、仲本魁作、大城盛忠、小浜藤松、仲村善亮（故人）、宮平源善、国吉正元、仲井真盛長、和宇慶朝六、与都嶺盛達、仲尾福寿、与郡嶺孝信、山口栄三。教師・安良城亀千、呉屋盛順、呉屋清昌、国吉真栄、金城正義、宮城正人、比嘉喜昌、小波津平昌、玉城松吉、福地信久、天願意松、仲松弥賢、平良福春、上地徳仁、呉屋永和、仲宗根繁雄、島田房文、仲宗限正通、知念勝栄、名嘉十蔵、仲村渠仁午、新垣繁雄、（以下はいずれも故人）与儀清、名幸方起、与那城忠三、長嶺顕弘、我喜屋良助、宮里嘉登、具

志堅永昌、名城政永、新垣俊光。

◇琴曲興陽会＝師範・島袋香代、米須朝子。

教師・桑江千代子、比嘉フジ、具志堅カメ、大城敏子、仲松シズ、大域フミ、阿嘉嶺信子、高良タケ、長嶺房子（故人）。

◇音楽保存会＝師範・新里敏助（故人）、渡名喜庸栄、嶺井松次郎、呉屋正昌、知念良信。

教師・小福川蒲助、上田幸次郎、山田義秀、山里亀全、古謝紹栄、真栄里樽、与那覇朝典、仲本昌源、比嘉徳太郎・神谷繁知、知花真勲、島田房雄、桝川寛俊。

◇琴曲保存会＝師酪・大城利予子。教師・古謝タケ、真栄里タマ、仲村渠サメ、宮城ヨシ、山田春枝、米須カメ、伊集トミ、小浜末子、上田スミエ、古我知百合子、米須敏子。

◇琉球民謡協会＝師範・仲本昌原。教師・島袋善栄、仲村渠喜盛、与都嶺清吉、津波久徳、親川世松、与那嶺禎信、国吉真正、安慶名信夫、福地信久、島袋忠吉、金城安貞。

◇演劇役者＝浦崎直秀、山田義秀、知念良信、新崎政希、安慶名信夫、安里徳昌、城田一郎、天願貞順、山城清一、大城清宝、知花功繁。

◇太鼓＝赤嶺勇作、普天間朝政、天願憲松。

（文中敬称略、一九八五年六月・記）

野村流音楽協会ブラジル支部

☆支部の生いたち

野村流音楽協会ブラジル支部の発足は、全伯沖縄海外協会が結成されて一年後のことで正しくは一九五四年十一月のことである。

この年は、サンパウロ市の市制四百年祭典を迎えていた関係から、それを記念して、世界各国の「民族音楽大会」が開催されたのであるが、はからずもこの大会へ、沖縄出身の金井喜久子女史が日本代表として参加され、大会の席上、琉球音楽の数々を発表された。

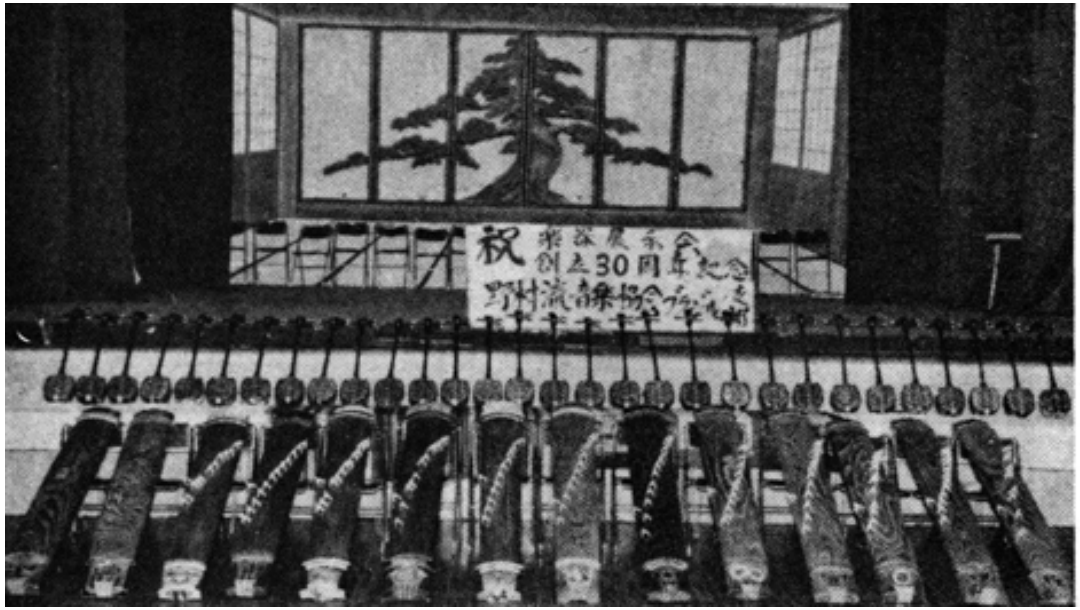
ちょうどその折、時の琉球政府主席・比嘉秀平氏と、野村流







音楽協会長の池宮喜輝氏、並びに琉球海外協会長の稲嶺一郎氏から、時の全伯沖縄海外協会長の花城清安氏に宛て、それぞれ金井女史の便宜供与の依頼文書がきたことから、花城氏の肝入りで当時の協会役員とサンパウロ在住の音楽愛好者との共催で金井女史の歓迎音楽会を催している。そしてその折、金井女史は、池宮・野村流音楽協会長依頼の「野村流音楽協会支部」の組織づくりを強調され、愛好者たちとの意見交換なども行なわれている。



☆　サ　ン　シ　ン　展

野村流音楽協会ブラジル支部では一九八四年四月二十九日、同協会ブラジル支部創立三十周年を記念して盛大に式典（演芸大会）を催したが、その前日の二十八日、会場の在伯沖縄県人会舘の大ホールで琴、三味線展を開いた。ブラジル国内の三味線は二千挺、という推定数と比べて、琴は約二百七十台、といささか淋しいとの声もあったが、しかし、目的は数の多寡ではなく、出品された所持者の、心意気とその光景は、沖縄の伝統文化への敬愛の念が示されていて、典雅な風情を漂わせていた。（写真上）

そのようなこともあって、金井女史は早速本部の池宮会長へブラジル側の意向を伝え、それが動機となって名実ともに野村流音楽協会の支部として認められている。

もっとも、全伯沖縄海外協会ができたころは、サンパウロ市の中央メルカード（カンタレイラ街）を中心に、すでに野村エエ四を教本にした三味線グループの〝会〟ができていた。・発起人の宮里松吉、長堂庄松の両氏が中心となり、音楽指導は仲村渠喜進氏が当っていた。もちろんその当時は、組織主導の会ではなく、いうなれば愛好者の集りにすぎなかった。

が、しかし、ここで特筆しておきたいことは金井女史との約束を守り、支部発足の歩を進めた前記の三味線会グループ（三

線会）こそ当支部の母体であり、同時に金井女史こそ当支部の産婆役を果した、ということである。

☆　創　立　総　会

創立総会は前記した発企人の主宰でバロン・デ・ゾプラード街からヴィンテ・シンコ・デ・マルソ街に抜ける通称スージグァの小通りにあったトルコ人経営のレスタウランテで開催され、初代支部長に宮里松吉氏を推し、以来、月一回の研修会がもたれている。

ちなみに、創立当時の会員は次のとおり、

宮里松吉、長堂庄松、仲村渠喜進、仲村渠善亮、国吉正元、波久地正雄、大城新行、仲宗根清、知念勝栄、親川世松、喜屋武久信、宮城ヨシ、安里菊江（以上一世）、石原昌淳、石原昌清、喜屋武ジョアキン、金城清幸、池原パウロ、仲宗根清行（以上二世）の全員十九名であった。

（第８部　終り　　第９部以降は（２）に収録）

コロニア芸能史編さん委員会

委員長　水本　毅

民謡　開田　五郎
　　佐々木重夫
　　及川也周平
　　猪狩　親一
　　松崎　松蔵
　　米谷　信一
　　内山　良文
　　桐生　照義

浪曲　沢田　多策
　　花中軒水月
　　笠井　貞雄
　　中川　芳則
　　今野　吉郎
　　樋口　公若

演劇　丹下セツ子
　　土井　公男
　　山元　貞義

山口　春海
小泉　照男
広田　義秋
映　画　平田　公泰
押田真佐男
野村　清博
田中アウグスト
古典音楽　宮下　良作
音　楽　丸山　昌彦
宮本　忠治
川口辰之助
小野寺七郎
山川　健一
村上二三男
能楽・謡　鈴木　威
バレエ　大谷　康夫
小原　明子
戸塚　マリ
奇　術　森政　又彦
津野　豪信
ラジオ　奥原マリオ
菊地　啓

テレビ　上杉　清司
松田ネルソン
日本舞踊　京藤間勘輝
倉岡　房枝
下川八重子
花柳　金龍
藤間芳之亟
池芝　緑
（順不同）

コロニア芸能史
１９８６年５月１０日発行
編さん　コロニア芸能史編さん委員会
発行者　コロニア芸能史編さん委員会
Ｃ／Ａ　ＣＡＳＡ　ＭＩＺＵＭＯＴＯ
Ｒ．Ｇａｌｖａｏ　Ｂｕｅｎｏ，４５　Ｓ．Ｐａｕｌｏ　Ｂｒａｓｉｌ
印　刷　トッパンプレス印刷出版（有）
ＥＤＩＴＯＲＡ　ＧＲＡＦＩＣＡ　ＴＯＰＡＮ．　ＰＲＥＳＳ　ＬＴＤＡ．
Ｒｕａ　Ｍｕｎｉｚ　ｄｅ　Ｓｏｕｚａ，６４５　Ｓ．Ｐａｕｌｏ